HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二言語作文のためのプレライティング・ディスカッションにおける母語の活用とその効果 ： バイリンガル・アプローチの見地から
Author(s)	佐野, 愛子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13829号
Issue Date	2019-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13829
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76702
Type	doctoral thesis
File Information	Aiko_Sano.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院　国際広報メディア・観光学院

博　士　学　位　論　文

令和元年 12 月

第二言語作文のためのプレライティング・ディスカッション における母語の活用とその効果 ―バイリンガル・アプローチの見地から―

佐　野　愛　子

目　次

第１章　はじめに 1

第２章　本研究の意義 8

2.1 ライティング教育の重要性の高まり 8

2.2　L2 教育におけるライティング指導の重要性 10

2.3 日本の英語教育におけるライティング指導の少なさ 11

2.4 日本の英語教育におけるプロセス・アプローチによるライティング指導の重要性 12

2.5 日本の英語教育におけるライティング指導での協働学習の重要性 14

2.6 第二言語教育における母語活用の果たすべき役割 15

2.7 トランス・ランゲージングとその教育的意義 17

2.8 本研究の目的と期待される成果 19

2.9 本論文の構成 21

第３章　先行研究 22

3.1 プレライティング活動の効果に関わる先行研究 22

3.2 プレライティングにおける協働学習活動の効果に関わる先行研究 22

3.3 バイリンガル・アプローチの理論 24

3.4　L2 作文における L1 使用に関する先行研究 25

第４章　研究１ 29

4.1 研究課題 29

4.2 研究の方法 30

4.2.1 研究の参加者 30

4.2.2 データ収集の方法 30

4.2.3 データ分析の方法 31
4.3 研究の結果 31
4.4 考察 32
4.4.1 よく知らない話題についての作文における PWD の役割 33
4.4.2 PWD-E におけるコミュニケーション・ブレイクダウンの例 33
4.4.3 PWD-TL の様々な機能 35
4.5 研究１のまとめ 38

第５章 研究２ 40
5.1 研究課題 40
5.2 研究の方法 42
5.2.1 研究の参加者 42
5.2.2 データ収集の方法 44
5.2.2.1 意見文の構成に関わる共通理解 44
5.2.2.2 PWD なしでの作文 44
5.2.2.3 PWD をしたのちの作文 44
5.2.3 データ分析の方法 46
5.2.3.1 研究課題１に関わる分析 47
5.2.3.2 研究課題２に関わる分析 53
5.2.3.3 研究課題３に関わる分析 55
5.2.3.4 研究課題４に関わる分析 58
5.2.3.5 研究課題５に関わる分析 58
5.3 研究の結果 59
5.3.1 研究課題１に関わる結果：PWD のタイプ 59
5.3.1.1 それぞれの条件下における熟議型及び非熟議型エピソードの長さ 62
5.3.1.2 それぞれの条件下で産出されたエピソードの種類 62

5.3.2 研究課題２に関わる結果：産出された作文への PWD の活用度 64
5.3.3 研究課題３に関わる結果：産出された作文.....65
5.3.4 研究課題４に関わる結果：PWD の質と PWD 活用度及び作文の質.....69
5.3.4.1 熟議型エピソードの長さと PWD 活用度及び作文の質 69
5.3.4.2 PWD における各種エピソードの長さと作文の評価及び作文における PWD の活用度 70
5.3.5 研究課題５に関わる結果：学習者要因.....71
5.3.5.1 学習者の英語運用能力と熟議型エピソードの長さ 71
5.3.5.2 学習者の英語運用能力と PWD 活用度.....72
5.3.5.3 学習者の英語運用能力と産出された作文.....73
5.3.5.4 協働学習への志向性と熟議型エピソードの長さ及び PWD 活用度.....74
5.4 結果の考察.....75
5.4.1 研究課題１に関わる考察：PWD のタイプ.....75
5.4.1.1 それぞれの条件下における熟議型及び非熟議型エピソードの長さ 75
5.4.1.1.1 PWD-J における熟議型エピソード 75
5.4.1.1.2 PWD-E における非熟議型エピソード 77
5.4.1.1.3 PWD-TL における熟議型エピソード（１） 78
5.4.1.1.4 PWD-TL における熟議型エピソード（２） 82
5.4.1.1.5 PWD-TL における非熟議型エピソード 84
5.4.1.2 それぞれの条件下で産出されたエピソードの種類.....87
5.4.2 研究課題２に対する考察：産出された作文への PWD の活用度 88
5.4.3 研究課題３に対する考察：産出された作文.....89
5.4.4 研究課題４に対する考察：熟議型エピソードの長さと PWD 活用度及び作文の質 .90
5.4.5 研究課題５に対する考察：学習者要因.....91
5.4.5.1 学習者の英語運用能力と熟議型エピソードの長さ 92

5.4.5.2 学習者の英語運用能力と PWD 活用度 93
5.4.5.3 学習者の英語運用能力と産出された作文 99
5.4.5.4 協働学習への志向性と熟議型エピソードの長さ及び PWD 活用度 102
5.5 研究２のまとめ 102

第６章　総合考察 105
6.1 本研究の要約 105
6.2 考察 106
6.2.1 日本の英語教育におけるライティング指導への示唆 106
6.2.2 トランス・ランゲージングの活用の場の拡張 107
6.3 本研究の限界と今後の課題 107
謝辞 110
参考文献 112
付録１　研究１に関する転載許可 125
付録２　承諾書 126
付録３　意見文の構成に関わる共通理解を図るために使用したワークシート 128
付録４　アンケート調査に使用した質問紙 130
付録５　書き起こした PWD の発話とそのコーディング結果例 136
付録６　各 PWD のエピソード内容、種類、及びその秒数 155
付録７　産出された作文 175

第１章 はじめに

平成 30 年度に告示された学習指導要領（文部科学省, 2018a）は、前学習指導要領（文部科学省, 2009）が目指した「生きる力」の育成という基本方針を踏襲しつつ、その目標とするところをより具体化し、「主体的・対話的で深い学び」を目指している。ここでは、こうした学びを実現する授業改善のための３つの視点が以下のように説明されている。

> **① 学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しをもって粘り強く取り組み，自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。**
> **② 子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。**
> **③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。**
>
> **（高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）解説・総則編 p. 118）**

こうした学びを支える上で、前学習指導要領に引き続き重視されているのが教科横断的な視点に立った言語能力の育成である。言語について、総則の解説では「生徒の学習活動を支える重要な役割を果たすものであり，言語能力は全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである」（文部科学省, 2018b, p. 121）と位置付けたうえで「言語能力を育成する中核的な教科である国語科を要として各教科等において言語活動の充実を図ること」（文部科学省, 2018b, p. 122）としている。

こうした言語能力の育成についての切迫感は、今回の学習指導要領全体に通底しているとみることができよう。特にそれが端的に表れているのは、国語科の共通必履修科目における「話すこと・聞くこと」,「書くこと」の授業時数の増加であり、また、選択科目としておかれた「論理国語」では 50 から 60 時間、そして同じく選択科目の「国語表現」では 40～50 時間を「話すこと・聞くこと」に、90～100 時間を「書くこと」に使うこととされるなど、「話合いや 論述などの「話すこと・聞くこと」,「書くこと」の領域の学習が十分に行われていない」とする中央教育審議会答申第 197 号（p.127）に指摘された課題への対応が明確に打ち出されている。

さらに、総則の解説では、国語科を中心としつつ、すべての教科で横断的にこうした言語能力を育成する点が強調され、「言語能力を育成するとともに，各教科等の指導を通して育

成を目指す資質・能力を身に付けるために充実を図るべき学習活動」（文部科学省, 2018b, p.123）として、各教科で取り組まれるべきものが例示されている。その一例を以下に示す。

> 社会的な見方・考え方を働かせることをより一層重視する観点に立って，社会的事象等の意味や意義，事象の特色や事象間の関連，現実社会に見られる課題などについて，考察したことや構想したことを論理的に説明したり，立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習を一層重視すること（公民科）

> 問題を見いだし観察，実験などを計画する学習活動，観察，実験などの結果を分析し解釈する学習活動，科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動などが充実するようにすること（理科）

> 言語能力を育成する言語活動を重視し，筋道を立てて練習や作戦について話し合ったり身振りや身体を使って動きの修正を図る活動や，個人及び社会生活における健康の保持増進や回復について話し合う活動などを通して，コミュニケーション能力や論理的な思考力の育成を促し，自主的な学習活動の充実を図ること（保健体育科）

これらの例に端的に示されるように、新学習指導要領では実技系の科目を含め、あらゆる教科でその教科の特性に応じた言語活動の重要性が指摘され、学習の場面で実現されるべく具体的な例が挙げられている。しかしここで興味深いのは、他のすべての教科について、その特質に応じた言語活動が例示されている中で、外国語については、以下のように追記されるにとどまっている点である。

> また，外国語科においては，外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して，情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す。
>
> （高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）解説・総則編 p. 123）

この部分に、今回の学習指導要領における外国語の位置づけのあいまいさが見て取れる。「言語能力の育成」という課題が重視され、しかもその育成に当たっては教科横断的な取り組みをするべきである、という重要方針が提示されるのであれば、まさに外国語教育こそ、国語科との連携を強力に行って「主体的・対話的で深い学び」を支えていくべきはずである。実際、国語科の学習指導要領解説（文部科学省, 2018c）では、次のようにその重要性が指摘

されている。

> なお，外国語科においては，「英語コミュニケーションⅠ」の〔思考力，判断力，表現力等〕の（3）「② 言語の働きに関する事項」において，「言語活動を行うに当たり，例えば，次に示すような言語の使用場面や言語の働きの中から，五つの領域別の目標を達成するためにふさわしいものを取り上げ，有機的に組み合わせて活用するようにする。」として「コミュニケーションを円滑にする」，「気持ちを伝える」，「事実・情報を伝える」，「考えや意図を伝える」，「相手の行動を促す」といった言語の働きの例を示している。このことを踏まえ，指導に当たっては，外国語科における指導との関連を図り，相互に指導の効果を高めることが考えられる。
>
> （高等学校指導要領（平成 30 年告示）解説　国語編　p. 30，強調筆者）

また、外国語の指導要領解説（文部科学省, 2018d）においても同様の記述は見られる。

> 国語教育と英語教育は，学習の対象となる言語は異なるが，共に言語能力の向上を目指すものであるため，共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。各学校において指導内容や指導方法等を適切に連携させることによって，英語教育を通して日本語の特徴に気付いたり，国語教育を通して英語の特徴に気付いたりするなど，日本語と英語の言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促すことにより，言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。例えば，国語科との連携については，「自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動」，「話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動」などについて国語科で学習し，外国語科でのスピーチやディベート，ディスカッションなどの活動に生かすなど，同じ種類の言語活動を通して指導することが考えられる。（中略）このように，国語科及び外国語科の連携を図りながら，コミュニケーションを図る資質・能力が自然にかつ効果的に培われるようにすることが重要である。
>
> （高等学校指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　pp. 128-9，強調筆者）

言語能力の育成は、単に国語科のみの課題ではなく、すべての教科で横断的に取り組まれるべきものであること、とりわけ、対象とする言語こそ違え、同じく言語能力の育成をその柱とする外国語教育とは緊密な連携をとるべきものであること、という指摘は極めて重要である。しかし残念なことに、実際には、国語科の指導要領で展開される言語観と外国語科の指導要領で展開される言語観にはほとんど一体性がみられない。

例えば「論理的な文章や実用的な文章を書く活動」は国語科では「現代の国語」（必修科

目)、「論理国語」「国語表現」（ともに選択科目）で取り扱うことになっている。国語科の指導要領解説ではこの活動について、①題材の設定, 情報の収集, 内容の検討、②構成の検討、③考えの形成，記述、④推敲，共有という４つの項目に分けて詳しく説明されており、例えば、「論理国語」の「書くこと」の指導では、「文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方」や「文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式」さらに「主張とその前提や反証などの情報と情報との関係」「情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法」「推論の仕方」など、細かな項目を挙げて、論理的な文章を書くことの指導の上で重視すべき内容が提示されている。

外国語においても、論理性に注意して書く活動は重視されており、例えば「英語コミュニケーションI」では次のような活動が提示されている（文部科学省, 2018d, pp.52-53)。

> **（ア）身近な出来事や家庭生活などの日常的な話題について，使用する語句や文，文章例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で，情報や考え，気持ちなどを理由や根拠とともに伝える段落を書く活動。また，書いた内容を読み合い，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。**
>
> **（イ）社会的な話題について，使用する語句や文，文章例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で，対話や説明などを聞いたり読んだりして，情報や考え，気持ちなどを理由や根拠とともに伝える段落を書く活動。また，書いた内容を読み合い，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。**

英語コミュニケーションII、IIIと学習が進むにつれ、事前準備における支援が少なくなったり、話題がより日常生活から離れ、高度化していったりするなどの変化が見られはするものの、書くことについての基本的な構成は変わらず、論理英語の各科目においてもほぼ同様の活動が提示されている。こうした活動で求められている言語活動は、実質的には国語科に挙げられる「論理的な文章や実用的な文章を書く活動」となんらかわるものではない。にもかかわらず、外国語科の「書くこと」の指導に関しては国語科ほどの説明はなされず、段落の構成などについて段階的に指導するために「段落のつながりを示す語句などを取り上げ，序論・本論・結論を，豊富なモデルを活用しながら書くことができるようになるよう指導する」（英語コミュニケーションII：文部科学省, 2018d, p. 72）や、「論理の一貫性に注意するだけではなく，理由や根拠の適切さや，どのように述べれば説得力が高まるかなどについて考え，論理性を高めるための工夫をしながら，理由や根拠などを詳細に説明する」（英語コミュニケーションIII：文部科学省, 2018d, p.79）などのような簡単な解説にとどまっている。もちろん、外国語教育は母語である国語教育とは異なり、語彙や文法などを含んだ、外国語

習得のための指導が必要であることは言うまでもない。しかし、「内容の取扱いに当たっての配慮事項」の冒頭で「単に英語を日本語に，又は日本語を英語に置き換えるような指導とならないよう（中略）言語材料については，意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して指導すること。」（文部科学省, 2018d, p.217）と強調するように、実際の言語活動を重視することに主眼があり、しかもその言語活動には論理的な文章を書いたり、ディベートを行ったりするなど高度な認知活動を想定している。つまり、その目指すところは国語科で目指す言語活動と大きく変わらないはずである。であるとすれば、国語科で培う言語能力を大いに活用すべく、国語科と外国語科の記述に一体性が求められるべきではないだろうか。

国語科と外国語科の間に存在すべき結びつきの不在は、外国語教育における日本語の扱いについての態度にも表れているといえるだろう。前回の学習指導要領で注目された「授業は英語で行うことを基本とする」点については、今回の改定でもその基本姿勢を踏襲され、次のように述べられている。

> **「授業は英語で行うことを基本とする」のポイントは，（中略）「英語に触れる機会」と「実際のコミュニケーションの場面」であり，そうした趣旨の授業展開であれば，必要に応じて補助的に日本語を用いることも考えられる。その際，生徒の苦手意識を減らそうとする余り，教師が英語による自分の発話の直後に日本語の意味を付け加えるなどの安易な日本語の使用は，逆に生徒から，真の意味での「英語に触れる機会」や「実際のコミュニケーションの場面」を奪い，いつまでも英語の苦手意識から抜け出すことができず，自律的な学習者としての成長を阻害する原因を作る可能性があることに十分留意する必要がある。**
>
> **（高等学校指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　p. 127，強調筆者）**

外国語の授業の大半が日本語で行われるような、旧態依然とした文法訳読式の授業は当然否定されるべきアプローチであるだろう。その意味で、ここでの指摘にはある程度の妥当性がある。しかし、日本語の使用が単に「安易」で、せいぜい「補助的」な意味合いしか持ちえない、という前提には違和感を禁じ得ない。外国語学習の特質上、学習者は必然的に活用しうる言語資源をもっており、その有効的な活用を通じてこそ、真に「主体的・対話的で深い学び」を外国語教育で行いうると考えるからである。

言語教育を本質的に深め、批判的な思考力が求められるような高次の学びのレベルにまで高めたい、という改革の流れと、第二言語教育においては徹底的に母語の活用を排除したい、という Native speakerism の流れは、日本の言語教育を形作る二つの大きな流れのようである。この、奇妙な二つの流れは互いに混ざり合うことなく、それでいながら一本の川として存在しており、その一つの発現を上述の通り国語科と英語科の学習指導要領の間に見ることができる。

第二言語を学ぶ上で、母語を排除しようとする流れは、英語教育にのみ見られるものではない。グローバル化の波とともに、年を追って急増する日本語指導を必要とする児童・生徒（CLD 児）[1]の指導の場面においても、多くの場合、母語を活用した指導が行われることはなく、日本語の指導と日本語を用いた教科学習指導の支援に終始している[2]。こうした支援においては、母語は日本語習得を妨げるものとして、なるべく使用を控えるべきであるとされることも少なくない。オストハイダ（2017）は日本における言語教育政策の問題点を指摘して次のように述べている。

> **…在住国の公用語だけではなく、移民の第一言語（継承語）も言語政策の重要な課題となる。しかし、日本の公立学校では、一部のボランティアによる指導を除けば、ニューカマーの児童生徒への第一言語教育が行われていない。（中略）「『生活者としての外国人』に関する総合的対応策」[3]の中には、移民の言語を考慮した取り組みとして「行政・生活情報の多言語化」はあるが、移民の言語を対象とした教育政策は、一切見当たらない（p. 119）。**

同様に、日本語とは全く異なる固有の言語である日本手話[4]を日常的に使用するろう児が学ぶろう学校においても、彼らにとっては第二言語である日本語でのリテラシーを獲得するうえで、日本手話が積極的に活用されることは極めてまれであるのが現状だ。佐々木（2017）はこの現状を次のように描写する。

> **…言語学をはじめとする学問の世界では、手話は言語として認められている。しかし、学問の世界はろう教育の現場に届かない。ろう学校（特別支援学校）には、手話は身ぶりのようなもので、身ぶりではしっかりした教育内容は伝えられないと考える聴者教員が依然として多い（pp. 13–14）。**

CLD 児童の日本語習得支援の文脈と同様、ろう教育の文脈においても、修得すべき目標言語（この場合音声言語及びそれを基盤にする書記言語としての日本語）を効率よく修得するためにはその言語のインプット・アウトプットのみが重要であって、ろう児が随意に使用

---

1 日本語を母語としない子どもたちの呼称は「外国人児童生徒」や、「外国にルーツを持つ子ども」、「JSL 児童生徒」など様々なものが使用されているが、国籍や日本語の運用能力に焦点を当てるのではなく、その文化的言語的に多様な背景を肯定的にとらえる用語として “Culturally and Linguistically Diverse Chidren”というカミンズ（2011）の提案した用語を使用することが増えている。

2 こうした日本における CLD 児の母語保持を保証しつつ日本語教育における支援も行う、革新的な取り組みについては真嶋（2019）に詳しい。

3 内閣官房（2006）。

4 一般に「手話」と呼ばれるものには、日本のろう者が用いてきた自然言語である日本手話と、日本語の構造に手話の単語を当てはめている日本語対応手話（「手指日本語」という呼称を使用するよう木村（2011）などが提唱している）がある。このうち、言語としての複層性を持ち、児童・生徒の学習の基盤となり得るのは日本手話であることを佐々木（2008）など多くの研究者が指摘している。

できる日本手話の役割は全く顧みられていないか、あるいはごく補助的な役割しか与えられていないのである[5]。

このように、言語教育の様々な場面において根強く存在する母語使用に対する不信感に満ちた教育実践に強い違和感を持つところから本研究はスタートした。第二言語の学習において、とりわけ認知的に高度な言語活動の場面において学習者はどのように母語を学習資源として活用できるのか。本研究はライティング指導に焦点を当てながら、この課題について考えるものである。

第 1 章を締めくくるにあたり、本論文の言語形式について触れておく。

本研究は日本語を母語とする英語学習者のライティング教育に資することを目的にしたもので、バイリンガル・アプローチをとり、第２章及び第３章で提示するトランス・ランゲージングをそのフレームワークとして採用するものである。

トランス・ランゲージングは比較的新しい概念であって、バイリンガルの学習者のライティング教育の文脈への応用の例は現時点では極めて少ない。Canagarajah はその2011年の論文でトランス・ランゲージングを用いた文章産出の可能性を探っている。この研究は、バイリンガルの書き手が自らの表現の可能性を最大限追及する場合にできることを示す野心的なものであり、非常に示唆に富むものではあるが、二つの言語を自由に行き来しながら書くスタイルは現時点では斬新なもの、革新的なものであるとみなされ、例えば読み手が誤解する可能性を最大限排除しようとすべきアカデミック・ライティングの世界で広く受け入れられているとは言えない。

アカデミック・ライティング教育の文脈でいえば、産出される文章そのものにトランス・ランゲージングの実践を応用するよりも、二つの言語を活用しながら最終的には一方の言語で文章を産出させるような教育手法として活用するほうが現時点ではより実践的な意味をもつだろう。本研究はまさにその可能性を追求するものである。

しかしながら、本論文を執筆するにあたり、アカデミック・ライティングのコンテクストで許容されうる範囲内でトランス・ランゲージングの可能性を模索したいと考えた。そこで、本論文の想定される読者は日本語の読み書きに堪能な英語教育研究者または実践者であり、日英両方の言語に堪能であるだろうことを念頭に、本文中の引用部分の英語には和訳をつけないこととした。これは、García（2009）などが論じるバイリンガルが日常的・一般的に行うコミュニケーションのあり方としてのトランス・ランゲージングとは比べ物にならないほどささやかな試みではあるが、アカデミックな著述において、想定される読者が当然バイリンガルであることを想定することが可能かつ自然な場合もあることを明確化するために試みるものである。

[5] その極めてまれな例外として、私立明晴学園と北海道札幌聾学校の取り組みがある。

第２章 本研究の意義

第 1 章で述べた通り、本研究は外国語教育（英語）のライティング指導における有効な母語の活用とはどのようなものか考察することを目的としている。第２章では、なぜ英語教育の中でもとりわけライティング指導に焦点をあてるのかその意義を論じ、さらにプロセス・アプローチによるライティング指導の重要性を指摘したうえで、特にプレライティングの段階に焦点を当てる意義について論ずる。プレライティング活動の中でも学習者同士の協働的アプローチの重要性について述べ、外国語学習における母語活用の意義について論じて本研究の意義をまとめる。

2.1　ライティング教育の重要性の高まり

平成 25 年 6 月 14 日に閣議決定された「日本再興戦略-JAPAN is BACK」の中で、政府は「人材こそが日本が世界に誇る最大の資源である（p.4）。」として、産業構造の劇的な変化に対応するための人材育成の重要性を強調している。その中で、「グローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成」に関し、国際バカロレア（以下 IB）認定校等の大幅な増加を目指すことを提案した（p.38）。これは、一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入を想定しながら、国内でバカロレア資格を取得できる学校を 2018 年までに 200 校まで増やす、という数値目標を含むもので、教育界に大きな衝撃を与えた。

しかしながら、文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムによれば、令和元年 7 月 24 日現在、学校教育法第 1 条に規定されている学校で IB の資格を取得できるプログラムを持つと認定されている学校（DP 校）はわずか 29 校、一条校以外のインターナショナルスクールなどを含んでも国内の DP 校は 46 校である[6]ことからしても、前述の数値目標にはかなり無理があったといえるだろう。ただし、この数値目標の設定の是非はともかく、日本の教育改革における方向性を示すものとして、ひとつの理想モデルとして IB を想定したことには一定の意義があったと考えられる。

IB のプログラムは、「探求する人」、「知識のある人」、「考える人」、「コミュニケーションができる人」、「信念を持つ人」、「心を開く人」、「思いやりのある人」、「挑戦する人」、「バランスの取れた人」、そして「振り返りができる人」、という 10 の学習者像を掲げ、その育成を目標としている。そして、その目標を達成するため、「探究を基盤とした指導」、「概念理解に重点を置いた指導」、「地域的な文脈とグローバルな文脈において展開される指導」、「効果的なチームワークと協働を重視する指導」、「学習への障壁を取り除くデザイン」、及び「評価を取り入れた指導」の 6 つを「指導のアプローチ」として示している（International Baccalaureate Organization, 2017）。

こうした IB の理念は、平成 30 年度に告示された学習指導要領（以下、新学習指導要領）

[6] （https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/authorization/, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

の改訂にあたっても少なくない影響を与えている。この点は、文部科学省自身が、「国際バカロレアの趣旨のカリキュラムは、思考力・判断力・表現力等の育成をはじめ学習指導要領が目指す「生きる力」の育成や、「日本再生戦略」（平成 24 年 7 月 31 日閣議決定）が掲げる課題発見・解決能力や論理的思考力、コミュニケーション能力等重要能力・スキルの確実な修得に資するもの」である、としている[7]ことからも明らかである。

そうした学習の重要な基盤たる言語能力の育成を図るにあたっては、高等学校学習指導要領の冒頭で「国語科を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて，生徒の言語活動を充実すること。」（p.17）とし、ディスカッションやライティングなどのような言語活動の重要性が教科を問わずに強調されている点が今回の改定の重要な特徴であるといえるだろう。

大学入試について言えば、選択式の問題で生徒の学力を一律的に測定することの問題点はこれまでつとに指摘されてきたとおりであるが、その最大の弊害は、多くの教育現場において、受験対策の効率化のため、ライティングを伴う深い学びをしている時間を減らさざるを得なくなったことではないだろうか。薄井（2015）の人文系の大学 2 年生 92 名を対象とした高校の国語の授業に関するアンケート調査によれば、高校の 3 年間で「〈読む〉指導を受けた」という実感をもっている学生は 73%いたが、「〈書く〉指導を受けた」という実感をもっている学生は 26%にすぎなかったというが、こうした調査にもこうした傾向を見て取ることができる。

同様に、日米仏の 3 か国の国語教育、とりわけ作文教育のあり方の違いを分析した渡辺（2007）も、アメリカの Language Arts の授業では「書く」ことに力点が置かれているのに対し、日本の国語教育では「読む」ことが重視されていると指摘する。実際、カナダを含む北米では多くの州で作文の統一試験が課せられているし、フランスでも大学入学資格試験に当たるバカロレアにおいて作文は極めて重要な位置を占めている。しかし、日本で行われてきたセンター試験は長らく選択式の読解に特化した試験であったし、これに代わるものとして 2021 年度から運用される予定で準備が進められている大学入学共通テスト記述式の問題においても、最大で 120 字程度の記述問題が加えられるのみであって、諸外国で行われている論述式の試験との書く分量の差は桁違いといえる。山本（2010, 2012）はイギリスの国語教育について詳細に報告する中で、「話す・聞く」「読む」「書く」の領域すべてが統合的に行われる点を強調しているが、そのそれぞれの領域の指導において、圧倒的な時間と労力をかけていることを報告している。

イギリスで過ごし、国際バカロレアのプログラムで学んだ自分自身の高校生活を振り返っても、その 2 年間の課程においてはほぼ毎週のようにレポートの提出が求められた。その後日本の高校の教員となった時、教科を問わず、自分の生徒たちに課されているレポートの少なさに愕然とした経験がある。日本の教育におけるこうしたライティング経験の少なさは 15 歳の生徒を対象とする OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）の結果にも如実にあらわれ、2009 年調査（読解力）で出題された自由記述形式問題 36 題のうち，16 題が無

[7] （http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoiku_kenkyu/index.htm, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

答率 20%以上であり、また、理由を書くことを求める問題への無答率はいずれも OECD 平均より高く３割に近かったことなどから、日本の中学生は他国の中学生に比べ、自分の考えを書くことに消極的であるという指摘がなされている（国立教育政策研究所, 2010）。

こうした状況を踏まえれば、日本の教育改革においては、「主体的・対話的で深い学び」と、その学びにおける言語技術の涵養が喫緊の課題であるといえよう。

2.2 L2 教育におけるライティング指導の重要性

前項では、特に日本の教育において求められている「主体的・対話的で深い学び」における言語技術の重要性について概観し、ライティングの指導の重要性がこれからさらに増していくだろうことを指摘した。以下では、英語教育の領域におけるライティング指導について考える。Freedman, Pringle and Yalden（1996）が “the neglected child in the family of the four skills: listening, speaking, reading, and writing (p.186)”と呼んだように、L2 ライティングの研究は第二言語習得（SLA）研究の中でも、その発展が遅れてきた分野である。しかし、Cumming（1990） や Swain and Lapkin （1995）が think-aloud の手法を用いて L2 ライティングに取り組む学習者の内観を観察した研究などから、ライティング中の学習者の気づきが、アウトプットの内容を変容させることが明らかにされ、Swain （1985, 1995）のアウトプット仮説に昇華されたことで第二言語習得におけるアウトプットの重要性は広く認識されるようになった。Swain（1995）では第二言語習得におけるアウトプットの機能について次の 3 つを挙げている：１）「気づき」の機能－アウトプット活動に取り組む中で学習者は自らの言語知識の「穴」に気づく。２）仮説検証の機能－アウトプットにおけるフィードバックによって学習者は自らの L2 に関する仮説を検証する。３）メタ言語機能－学習者は自らが学んだ言語について振り返り、その知識を内在化させる。このように、アウトプット活動を行うことは第二言語習得において重要な役割を果たすと考えられている。アウトプット活動の中でも特にライティングの重要性について、Cumming （1990） は次のように指摘する。

> [C]omposition writing might function broadly as a psycholinguistic output condition wherein learners analyze and consolidate second language knowledge that they have previously (but not yet fully) acquired… Composition writing elicits attention to form-meaning relations that may prompt learners to refine their linguistic expression-and hence their control over their linguistic knowledge-so that it is more accurately representative of their thoughts and of standard usage. This process appears to be facilitated by the natural disjuncture between written text and the mental processes of generating and assessing it. (Cumming, 1990, p. 483).

第二言語習得におけるライティングの重要性は、認知論的な立場のみならず、社会文化論の立場からも支持されている。個々の学びは問題解決タスクに協働的に取り組んでいる中で社会的に構成されていく、という Vygotsky 的な視点にたつ Swain （2006）の研究は、

Languaging というコンセプトを用いて分析されている。Languaging とは、 “the process of making meaning and shaping knowledge and experience through language”（Swain, 2006, p.98）と定義され、ライティング課題で直面する言語に関わる問題について学習者の注意を促し、解決策を正当化するためのツールとして機能することにより第二言語学習を促進すると考えられている。

Cumming や Swain らの流れを受け継ぎ、Manchón （2011） は第二言語学習者の学びにおいて、ライティングのスキルを習得することの重要性（Learning-to-write）に加え、書くことによって学びが深められる側面（Writing-to-learn）があることを強調する。しかし、この二つの概念は互いに対立する項目ではなく、むしろ相互に作用しあうものであると考えられるだろう。この点について、Byrnes（2011）は次のように指摘する。

> [L]earning to write and writing to learn are fundamentally inseparable because educational knowing itself occurs at the intersection of language, learning, and knowledge. (Byrnes, 2011, p.147)

第二言語でのライティングの効果的な指導を模索することと、ライティングによって学習者の第二言語習得を促すことは不可分に結びついている、というこの指摘は、コンテクストを問わず言語教育全般に重要な示唆をもたらすといえるだろう。

2.3　日本の英語教育におけるライティング指導の少なさ

ここまで、これからの日本の教育における言語技術指導の重要性と、第二言語習得の観点からの英語教育におけるライティング指導の重要性についてみてきた。しかし、国語教育同様、またはそれ以上に、日本の英語教育におけるライティング指導は不十分な状態にあるといえる。繰り返す文法中心の英語教育に対する批判にも関わらず文法指導に偏重する日本の英語教育におけるライティング指導のありかたは、中学・高校で用いられる検定教科書の中で扱われるライティングタスクのタイプに見て取ることができる。

Kobayakawa（2011）の報告によれば、教科書で扱われているライティング活動タスクのうち、自由作文の形式をとるものはわずか５％に満たず、ほとんどのタスクが文法項目の習得を強く志向する制限付き作文の形式であったという。2015 年にベネッセが全国の中学校・高校の校長（N=717+435）および英語教員（N=1801+2134）から回収したアンケート調査の結果（ベネッセ教育総合研究所, 2016）でも中・高の英語指導においては「音読」「発音練習」「文法の説明」が多く、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く・話す」「英語で教科書本文の要約を話す・書く」などの活動の実施率は依然として低いままであることが明らかになっている。

こうした教育現場におけるライティング学習の機会の少なさは、英語学習者のライティング力の低さに直接影響を与えている。全国の高校 3 年生（国公立高校在籍者約 8.1 万人）

を対象に平成 27 年に文部科学省が行った調査では、4 技能全てにおいて課題があるとともに、特に「書くこと」「話すこと」について課題が大きい、ということが明らかになっている。このうち、情報要約問題と意見展開問題の 2 問（約 25 分）からなるライティング課題では、18.1%の生徒が無回答または 0 点のため採点対象から除外されている。採点対象となった答案のうち、82.1%が CEFR の A1 レベル[8]と判定され、17.2%が A2 レベル、1.0%が B1 レベルであり、B2 レベルに達した回答はわずか 6 件であった。大多数を占める A1 レベルの生徒のうち、「意見」をかけているものはわずかに 23.9%で、「与えられたテーマについて自分の意見や理由を適切に書くことに課題がある（p. 74）。」とこの報告書は指摘する。平成 27 年度の調査結果は、旧学習指導要領下で学んだ平成 26 年度の高校 3 年生を対象にした調査よりも改善が見られるものの、依然として課題は多いと言わざるを得ない。

2.4　日本の英語教育におけるプロセス・アプローチによるライティング指導の重要性

ここまで、日本におけるライティング教育、とりわけ英語におけるライティング指導の強化が求められていることを見てきた。特に英語教育では、依然として文法指導の延長線上でのライティング指導が多く、望ましい成果をあげていないことを指摘した。今求められているのは、文レベルでの正確さの向上に重点を置く従来型の指導から脱却し、一つのまとまった文章を、コミュニケーション上の目的に合わせて効果的に書くことができるような力を涵養するための指導である。そうした目的からすれば今の日本の英語教育でもっと活用されるべきなのはプロセス・アプローチによる作文指導であるだろう。

実際、学習指導要領においても、ライティング指導におけるプロセス・アプローチの有効性が強調されており、例えば英語コミュニケーションIの「言語活動に関する事項」のうち「書くこと」について、の一点目では以下のように述べられている。

> **（ア）　身近な出来事や家庭生活などの日常的な話題について，使用する語句や文，文章例が十分に示されたり，準備のための多くの時間が確保されたりする状況で，情報や考え，気持ちなどを理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動。また，書いた内容を読み合い，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。**
>
> **（高等学校指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　p. 52，強調筆者）**

[8] CEFR：(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment：外国語の学習、教授、評価 のためのヨーロッパ共通参照枠）に示されている 6 段階の共通参照レベルの最低レベルで、「具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる」レベル。B2 は「自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる」レベル。(文部科学省, 2019)。

ここでは、書く前の準備（プレライティング）や書いた後のフィードバック（ピアレビュー）の重要性が強調されており、この点は英語コミュニケーションⅠのみならず他のすべての科目におけるライティング指導に共通する部分である。とくにプレライティングの部分については、「解説」においても次のように詳しく説明され、その重要性が際立っている。

> **…論理性に注意して文章を書いて伝えるための準備として，実際に書く活動に入る前に，関連する話題について自分自身やペア，グループでアイディアを出して内容や構想を膨らませた後，取捨選択をして内容の構成を練り，アウトラインを書く活動を行うことなどが考えられる。ここでの準備のための多くの時間が確保されるとは，そのような活動のための時間が十分確保されることを意味している。**
>
> **（高等学校指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　pp. 52）**

作文過程をプレライティング、ライティング、推敲、校正、発表の５つの段階に分け、それぞれの段階における指導を試みるプロセス・アプローチの研究は、英語を母語とする学習者の作文過程を観察した Emig（1971）の研究に始まる。この観察を通じて Emig は作文指導を従来のプロダクト中心のものからプロセス中心のものへと転換すべきであると指摘した。Emig の研究に触発されて始まったプロセス・アプローチのライティング研究は、英語圏の L1 作文指導でまず花開き、その後 L2 としての英語教育においても目覚ましい進歩を遂げてきた（Perl, 1994 参照）。しかし翻って見るに日本の英語教育におけるライティング指導の現場ではこのようなプロセス・アプローチが浸透しているとは依然として言い難く、Zamel（1982）によるほぼ 35 年前の慨嘆は、今日の日本の英語教育におけるライティング指導にそのまま当てはめることができる。Zamel （1982）は言う：

> …for the most part, writing assignments are made for the sole purpose of testing the mastery of specific grammatical structures and …few involve invention techniques or prewriting strategies (p.196).

プロセス・アプローチの研究は、特にプレライティングと推敲の段階にその中心をおく。これは、これまでのプロダクト重視の作文指導において、もっとも多く行われてきた教師からのフィードバックが文法や語彙・スペリングなどに関わるものであり、プロセス・アプローチでいうところの校正に関するものであったことに対する反省に基づくものであるだろう。このうち、推敲の効果的な指導については、多くの研究が積み重ねられてきている。しかし、プレライティングについてはいまだに研究の蓄積は浅く、日本の英語教育におけるプレライティングの指導についてはほとんど見当たらない現状である。

しかしその一方で、Tompkins （2001） が、ライティングの時間全体の 70%はプレライ

ティングに費やされるべきであるとしていることに象徴的に示される通り、プレライティングの指導はライティング指導において極めて重要な意味もつ。特に作文を苦手とする学習者が書き出すまでに長い時間紙面をにらんで動き出せずにいることは多くのライティングの教師に共通する経験であるだろう。ミステリー作家の Stephen King が その著書 “On Writing”で “The scariest moment is always just before you start（p.325）.”と述べるように、文章を書くことを生業とする作家にあっても、書き出すときの難しさは格別であるらしい。日本語であってもライティングによる課題に慣れていない日本の学習者に第二言語としての英語でのライティング指導を行うにあたって、プレライティング段階の指導の必要性は極めて高いといえるだろう。

2.5　日本の英語教育におけるライティング指導での協働学習の重要性

日本における英語教育、もしくは教育全体に求められているもう一つ大きな転換は、教育及び学習における教員の役割に関するパラダイムシフトであるだろう。伝達すべき知識をもつ権威的な存在から、学習者の学びを支え、方向づけるファシリテーターとしての教員への役割転換の必要性は、「主体的・対話的で深い学び」をめざす新学習指導要領の改訂の方針にも色濃く反映されている。この転換は、学習者同士の学び合いを活性化させる協働学習の取り組みへの志向性を必然的に包含する。言語発達と認知発達は物理的社会及び他者とのかかわりの中でおこる、とする Vygotsky （1978） の理解にたてば、教育の中でもとりわけ言語教育においては、協働学習の促進は極めて妥当性が高い取り組みであるということができる。Weissberg （1994）もその立場から、文章産出の最大の難しさは、ダイアローグモードからモノローグモードへのシフトである、と指摘する。だとすれば、ライティングの指導における協働学習の必要性は際立っていると考えることができるだろう。この観点に立ち、L2 ライティングの指導においてもピア・レビュー研究と協働作文（collaborative writing）の研究、及びプレライティング活動における協働学習、という３つの領域で学習者同士の協働活動の効果について研究が進められている。

こうした視点は、ライティングが個人の孤独な活動であるという従来の認識を否定し、その社会的側面に注目したパラダイムシフトとも呼応する。Cooper（1986）はこの点について次のようにまとめている。

> [L]anguage and texts are not simply the means by which individuals discover and communicate information, but are essentially social activities, dependent on social structures and processes not only in their interpretative but also in their constructive phases (Cooper, 1986, p. 367).

Cooper はここで、文章を書くというプロセスは書き手が個人として考えを見出し、まとめ、それを他者に伝えようとする手段であるばかりでなく、社会的なプロセスであることを

指摘している。

文章産出が社会的プロセスであることに着目した教育手法には、プレライティングの段階での協働活動、ライティングの段階での協働活動、レビュー段階での協働活動の３つが考えられる。そのうち、最も早期から研究がすすめられたのはピア・レビューに関する研究である。第二言語作文におけるピア・レビューに関する研究としては、Ferris（2003）、Lockhart and Ng（1995）、Nelson and Carson（1998）、 Villamil and de Guerrero（1996）などがあり、特に Lockhart and Ng（1995） 以下の 3 本はピア・レビューにおいて学習者は語や文のレベルの誤用に注目しがちで、テクスト全体の推敲を行うに至らないことを報告するなど、ピア・レビューの重要性とともにその難しさについても浮き彫りにしている。

続いて盛んにおこなわれるようになってきたのは、ライティングの段階での協働活動、すなわち協働作文の研究である。DiCamilla and Anton （1997）, Dobao （2012）, Elola and Oskoz （2010）, Gutiérrez （2008）, Kuiken and Vedder （2002, 2005）, Storch （2002, 2003, 2005）, Storch and Wigglesworth （2007）, Wigglesworth and Storch （2009, 2012）などを概観すると、協働作文活動において学習者は作文の内容・構成、または文法や語彙などの言語的側面についてお互いに意味のある scaffolding（Collective Scaffolding: Donato, 1994）を行い、その結果としてより優れた L2 作文を産出することができることが明らかにされており、こうした協働学習は L2 ライティングの発達に資する可能性が高いということができる。しかしその一方で、こうした活動は個別の作文活動に比べて時間がかかること（Storch, 2005）、また協働で産出された作文に対しグループごとの評価をすることの不適切さ（Kagan, 1995）や難しさ（Strauss & U, 2007）などが指摘され、授業への導入は容易ではないと考えられる。

一方で前項でも述べた通り、ピア・レビューや協働作文に関わる研究に比して、プレライティング時のディスカッションにおける協働学習の効果について検討した研究はまだごくわずかである。こうした状況を踏まえ、日本における英語学習者のためのライティング活動において、協働学習の形でのプレライティング活動の効果を確認することは意義があると考えた。

同時に、プレライティング・ディスカッションの分析は、プレライティングの段階における書き手の内省（reflection）の働きを明らかにすることを目的とした研究の手法としても魅力的である。書き手の内面で起こる reflection の観察のために用いられる手法には Think-aloud や Stimulated Recall などの手法が考案され研究に応用されているが、学習者の自然な行為ではない think-aloud の手法に比べ、ディスカッションによる観察は、より自然なアプローチである（Higgins, Flower & Petraglia, 1992）からである。

2.6　第二言語教育における母語活用の果たすべき役割

プロセス・アプローチの研究を概観した 2.4 でも見たように、L2 としての英語ライティングの教育実践及び研究は L1 としての英語のライティング指導の実践または研究にその多くを依拠してきた。確かに、L2 ライティングと L1 ライティングには共通する部分も

多く、L1 ライティング研究に学ぶべき点は少なくない。しかし、L2 学習者のライティングが母語話者のライティングと決定的に異なるのは、Ferris and Hedgcock（2005）が指摘したとおり、母語による知識の活用ができるかどうかという点である。L2 ライティングにおける母語の影響は、これまで主に語彙や文法上の負の転移という視点から、正確さを損ねる要因としてとらえられることが多かった。しかし同時に、L2 学習者は母語で培った、文章を書くということ自体に対する知識・経験を活用することもできる。実際、Baker and Wright（2017）は Bialystok（2007, 2013）、 Edwards（2017）、 及び Krashen（2004, 2006）などのバイリテラシー研究を概括して、L2 学習者のライティングにおける L1 からの正の転移を認めている。特に文レベルの正確さを重視した従前の指導法から脱却し、文章全体の構成や論理の一貫性などを高めていくことが求められるより高次のライティング力育成を目指す指導においては、この視点にたって、L2 学習者の持つ言語資源を最大限に活用することこそが求められるといえるだろう。

文部科学省が「英語に関する学科の各科目については，その特質にかんがみ，生徒が英語に触れる機会を充実するとともに，授業を実際のコミュニケーションの場面とするため，授業は英語で行うことを基本とすること。」と高等学校学習指導要領（p.92）に明示したのは前改定時の平成 21 年 3 月のことである。その後この基本方針に対しては賛否両論多くの議論が起こったが、その多くは英語運用能力が低い学習者の理解度の低下に関する懸念と、教員の英語運能力に対する疑念に端を発するものだった。しかしこれらの議論はいずれも言語をコミュニケーションのツールとして浅くとらえる見方によるものである。他方、言語を思考のツールとして捉える Vygotsky 的な視点に立てば、学習者は既存の知識の上に新しい知識を構築していくのであって、第二言語学習者にとってはその既存知識は母語によって培われたものであることも多く、より高次な論理展開を求めるような学習内容においては、母語の活用は不可欠といえるだろう。

ここでの主張は、「外国語学習にはやはり文法の習得は大事だ」「文法の学習はしっかりわかる日本語で行うのが一番良い」というようなこれまでの英語教育の反省を全く無視するような議論とは明確に異なる。すべての第二言語学習者を、（バイリンガル・コンティニュアムのどのポイントにいるかは別として）バイリンガルとみなし、それぞれのもつ言語資源を最大限に活用しながらより弱いほうの言語をさら強くしていくような教育的枠組みを作り上げていくべきであるというこの主張は、言語能力を誤用の少なさのみで評価するような皮相的な認識には立っておらず、むしろ、Horner, Lu, Royster, and Trimbur（2011）が Translingual approach と呼ぶアプローチに呼応するものである。Horner らはこのアプローチを次のように説明する。

> This approach sees difference in language not as a barrier to overcome as a problem to manage, but as a resource for producing nuances in writing, speaking, reading, and listening（p. 303).

第二言語学習者をすべてバイリンガルとみなす、という捉え方には、批判もあるかもしれない。日本の英語教育は EFL（English as a foreign language）環境であって ESL（English as a second language）環境におけるそれとは区別して考えるべきだという言説はいまだに日本の英語教育には多く見られるからである。しかし現実には、社会の国際化に伴い、CLIL[9]アプローチの流れを汲む、英語で開講される大学での講義の数は増加傾向にあり、特に大学院のレベルでは使用する教科書や議論の土台となる論文が英語で書かれたものであることはごく日常的にみられる光景になっている。こうした講義では日本語母語話者と留学生が英語を媒介言語としてともに学ぶ状況も頻繁に起こるようになってきている（日本の学校現場の多文化・多民族化については佐久間（2015）に詳しい）し、学童期を海外で過ごすなど、継承語として日本語を学んだ学生が日本の大学に進学してくるケースも珍しくない。同時に公立小学校や中学校において日本語を母語としない児童・生徒がいる教室も年々増えてきている[10]。また、数は少ないとはいえ、特別支援教育の枠組みではなく、日本手話と日本語とのバイリンガル教育としてろう教育を捉える試みも少しずつその認知度を上げてきている。しかし、にもかかわらず日本の教育現場が複言語使用のコンテクストであるという認識はさほど広がっているとはいえない。むしろ、小学校における英語教育導入に対する反対論に多く見られる、「小学校教育というのは日本文化や日本語の基盤をきちんと整備すべき期間であって、中途半端に英語を導入することは根無し草状態の子どもを生み出してしまう危険性」がある、というような議論（大津, 2013, p.75）や、「日本人のアイデンティティの健全な成長のために重要なのが日本語である」（大津, 2009, p.130）のような議論が一定の支持を得られることにも象徴される通り、社会全体として複数言語使用に関する懐疑的な態度は依然として非常に強い。

2.7　トランス・ランゲージングとその教育的意義

前項で指摘したような、複数言語使用に関する懐疑的な態度が依然として強く残る社会的状況にあって、バイリンガル・マルチリンガルの教育を第二言語習得の観点のみに矮小化することなく総体として考えていくうえで極めて重要な示唆を与えてくれるのが García（2009）に提示された Translanguaging（以下、トランス・ランゲージング）の概念である。

Ruíz（1984）はバイリンガル教育における母語の扱いについて、言語政策の見地から、1）問題としての母語、2）権利としての母語、3）資源としての母語、の３つのタイプに分類している。一つ目は、母語を第二言語習得における障壁また誤用の源とのみ見なし、できる限りその接触を減らそうとするアプローチを指す。2）は母語・継承語のもつ文化的な側面に注目し、言語が個人のアイデンティティを不可分に結びついていることを重視して、言語

[9] CLIL（Content and Language Integrated Learning）

[10]文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 28 年度）」によれば日本語指導が必要な外国籍の児童生徒は 34,335 人で、2 年前の前回調査より 17.6%の増加、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒は 9,612 人で、前回調査より 21.7%の増加であった。

的マイノリティにも自らの言語を保持・伝承する権利が当然あることを確認する態度を指すものである。3）はこうした否定的・または消極的な母語への態度とは一線を画し、言語マイノリティの母語を肯定的・積極的に評価し、それが個人にとっても、またそうした個人を受け入れる社会にとっても重要な資源であると見なす態度である。この３つ目の態度を教育の場において実践するのが教育手法としてのトランス・ランゲージングであるといえるだろう。

Baker（2001）によればトランス・ランゲージング（translanguaging）という語はウェールズ語と英語でのバイリンガル教育における教育手法を紹介するために Williams が 1994 年に発表した論文の中で用いた *trawsieithu* という語にその起源をもつという。この教育実践では、学習者の二言語の発達を支えるため、インプットの言語とアウトプットの言語を意図的に変える手法が用いられていた。この実践は、それまで主流だった二つの言語を厳密に切り離して行う言語教育[11]からシナジーの言語教育（Lewis, Jones, & Baker, 2012）への大きな転換点として大きく注目されることになった。こうしてトランス・ランゲージングは、バイリンガル教育の一つの実践から、教育アプローチへと昇華され、「マルチリンガルがもつすべての言語資源を、言語の境界線を超越して一つのつながったレパートリーとしてとらえた概念」（加納, 2016, p.3）として結実するに至ったのである。

トランス・ランゲージングという概念が特に近年注目されるもう一つの理由は、Swanwick（2017）が指摘するように、トランス・ランゲージングが本質的に対話的（dialogic）であると同時にバイリンガル・マルチリンガルの学習者がいるコンテクストにおいては対話的な指導はトランス・ランゲージングによってこそ支えられ得る、つまり対話的指導と TL は相互依存的な関係にあることにある。人間の発達が元来社会的なものであり、それが次第に個人的なものへと内化していく過程を認知発達と捉える Vygotsky 的な理解にたつとき、学びにおける対話性は極めて重要であるばかりか必要不可欠であるといえる。Blackledge and Creese（2017）は 21 世紀の社会を理解するには人間の移動について理解しなければならず、人間の移動について理解するには言語的あるいはそのほかの記号論的資源について考察することが不可欠であると指摘している（p.31）。加速度的にグローバル化する今日の社会においては、多言語環境での学びはもはや例外的なコンテクストではなくなっているが、そうした文脈での対話的な学びについて考える上でこのトランス・ランゲージングの概念は極めて重要なものである。

こうした背景のもと、トランス・ランゲージングに関わる論文は 2010 年前後を境に急激に増加しており、García and Li Wei（2014）をはじめとする概念の整理及び教授法の提案（例 Celic & Seltzer, 2013）やトランス・ランゲージングが起きている学習コンテクストの観察などが活発に行われている。特にトランス・ランゲージング環境の観察に関わる論文としては、García（2009）をはじめとする北米の学校教育のみならず、イギリスの継承語教育の現場における観察（Creese & Blackledge, 2010）や、香港における広東語話者の学習者と教師の英語

[11] Cummins（2007, 2008）はこうしたタイプの教育を “Two Solitudes” assumption と呼んで批判している。

を学習言語とする授業の観察（Luk & Lin , 2015）など、地理的な広がりを見せるだけでなく、Swanwick（2017）や佐野・田中（2019）のように手話言語と音声言語のバイリンガル教育を行うろう教育の実践にも応用されるなど、この分野の研究の厚みは急速に増している。

ただし、García and Li Wei（2014）でも強調されるように、とりわけ教育手法としてのトランス・ランゲージングは、単に手当たり次第に複数の言語を使用することを礼賛しているわけではない。この点についてバイリンガルろう教育研究を牽引する Swanwick（2017）は次のように述べる。

> The open and hospitable nature of this approach does not suggest that “anything goes” in terms of classroom language use. Using translanguaging to facilitate dialogic teaching requires informed and careful planning (p.156).

ろう教育の文脈においては、これまでにも表面上トランス・ランゲージングに似た教育手法であるトータル・コミュニケーションというアプローチが存在した。これは、ろう児の理解を助けるために、聴者の教員が音声・読唇・指文字・キュードスピーチ[12]・Sign Supported English[13]または Manually Coded English[14] などあらゆるモードを用いて指導する教育手法であるが、子どもたちの学力の向上という点で期待されたような効果には結びつかなかった（玉田, 2012）。Allard and Pichler（2018）はトータル・コミュニケーションの失敗を、その無批判な音声言語と手話の混在に帰す。教育的な意図なしに聴の教師が音声言語と手話を混用させた場合、必ず音声言語の構造に引っ張られる。その場合、様々なモードを活用するこのアプローチは、教師のためにのみ作用しているのであって、ろう児の理解を深めるために資するものではなくなってしまうのだ。これは、トータル・コミュニケーションが、そもそも社会のマジョリティ言語である音声言語の習得を促すことを目的としており、その手段として手話というモダリティを使用したのであって、手話言語を使用するろう児のバイリンガル発達を目指すものではなかったという点にも起因する、と彼らは指摘する。

この指摘は、ろう教育のみにとどまらず、すべてのバイリンガル教育にとって重要な示唆を持つ。バイリンガルが自在に自らのもつ様々な言語資源を活用しながら意味を構成し、学んでいくことを自然で正統的な教育・学習アプローチと積極的に評価しつつ、それが単なる無秩序な複数言語使用とは一線を画した効果的なバイリンガル教育のアプローチとして確立していくためには、トランス・ランゲージングが明確な教育的意図のもとに行われる必要があることをトータル・コミュニケーションの失敗は警告している。

2.8 本研究の目的と期待される成果

[12] 「口型に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの」（玉田, 2012）p.65
[13] British Sign Language より手話単語を借用し、英語の文法でコミュニケーションをするもの。言語体系的には手話言語ではなく、音声言語がベースとなっており、自然言語とはみなされない。
[14] Sign Supported English と同様に、American Sign Language の手話単語を借用し、英語の文法でコミュニケーションをするもの。

本研究は、よりよい第二言語作文の産出に資するプレライティング・ディスカッションのためには、学習者がどのように母語及び目標言語を使用すべきか検討するため、以下の二つの研究を行う。

研究１：日本語を母語とする２名の学習者が英語・日本語・およびトランス・ランゲージングの条件でのプレライティング・ディスカッションをどのように行うか観察するとともに、それがどのように産出された英語の作文に反映されているか、質的に分析する。

研究２：研究１の観察を踏まえつつ、20 名の学習者を対象とする研究に拡大して、英語の運用能力による差異について量的な分析と質的な検討を行う。

本研究は、バイリンガル研究でその有効性が議論されている教育手法としてのトランス・ランゲージングを、外国語教育としての英語教育、とりわけその作文の指導への応用の有効性の観点より議論することを目的とするものである。具体的には、プロセス・ライティングアプローチでの作文指導において、そのプレライティングの段階で、学生の母語である日本語で行う場合と、作文産出の目標言語である英語で行う場合、さらに、基本的には英語を用いながらも必要に応じて積極的に母語を活用することを奨励するトランス・ランゲージングで行う場合のそれぞれについて、そこでの議論がどの程度内容的に深まりを見せるのか、そしてそこで話し合われた内容がどの程度産出される作文に反映されるのか、さらにこうしたプレライティング・ディスカッションはより質の高い作文の産出にどのように貢献するのか、検討することをめざす。

研究１は研究２のパイロットスタディとして、1 組の学習者の様々な条件でのプレライティング・ディスカッションを観察しながら質的に検討する。研究２では研究１の成果をふまえ、トランス・ランゲージングや母語活用の利点を予測しつつ、目標言語の運用能力の違いがどのように影響するのか量的及び質的に考察する。

本研究に期待される成果には教育実践に関わるものと教育研究に関わるもの２点が挙げられる。2.3 に指摘した通り、日本の英語教育において作文に関わる指導は最も実践が遅れている分野であるが、本研究で具体的な手法としてのプレライティング・ディスカッションのあり方を検討することにより、教育現場に直接的に還元できる英語作文指導の実践に貢献することを目指したい。分析の中で必要となる作文の評価の方法についても、日本の英語教育の文脈において活用しうる形を提示することで、ライティング指導の実践に資するものとなることが期待される。加えてこの研究は、英語教育における作文指導の一手法を提言するばかりでなく、近年その重要性が指摘されている協働的な学びを促進するという観点からも、また、英語教育における母語の役割を明確化するという観点からも、英語教育全般に示唆を与えることが期待される。

同時に、これまで主に第二言語環境での学習について用いられてきた概念を、外国語学習環境に応用することで、トランス・ランゲージングの概念そのものの有効性とその限界をより明確化することが教育研究に関わる点での貢献として期待される。これまで外国語としての英語教育とバイリンガル教育の実践研究は別々の文脈で語られることが多かったが、加速度的にグローバル化する今日の社会においては、この二つは対立軸としてよりもむしろ、コンティニュアムで捉えられるべき概念となってきている。そうした中、第二言語習得研究の知見とバイリンガル教育研究の知見を総体的にとらえ、その接点を見いだしていくことの研究上の意義は大きいと考える。

2.9　本論文の構成

本論文の主な構成を以下に述べる。第３章では、まず、第二言語の作文指導におけるプレライティング活動の重要性について先行研究を概観し、そのうえで特に協働学習を活用したプレライティング活動の効果についてまとめる。さらに、バイリンガル・アプローチの理論について整理し、それを踏まえたうえで、第二言語作文における母語使用の効果を検証した先行研究をレビューする。とりわけ、本研究に大きな示唆を与えた先行研究であるNewmann and McDonough（2015）については詳しく報告する。そのうえで、これまでの先行研究で明らかになっていること、また、いまだ研究が求められている点について整理する。

第３章での先行研究のレビューを踏まえ、第４章では２名の日本人大学生が日本語・英語及びトランス・ランゲージングの条件下で行ったプレライティングを観察し、それがどのように産出された作文に反映されたのか、質的に検討する（研究１）。

第５章では、研究１を拡大して20名の日本人大学生を対象に、質的及び量的な分析を行う（研究２）。質的な分析では、プレライティング・ディスカッションとそれを受けて産出された作文に加えて事後のアンケート調査の自由記述欄に書かれた学習者本人のコメントを加味して、英語・日本語・およびトランス・ランゲージングを用いたプレライティング・ディスカッションの効果について考察する。

まとめの章となる第６章では、本研究から得られた研究成果を改めて整理し、本研究の教育的及び理論上の意義を示すとともに、本研究の限界や今後の課題について言及する。

第３章 先行研究

前節でまとめたように、本研究では英語教育のライティング指導において、とりわけそのプレライティング段階におけるディスカッションにおいて、どのように学習者の母語を活用しうるのか、考察する。本節では、先行する研究についてレビューし、現時点で明らかになっていること、および解決されていない課題について整理する。

3.1 プレライティング活動の効果に関わる先行研究

2.4 項にも指摘したように、1970 年代より始まったプロセス・アプローチの視点に立つ研究によって、プレライティングの活動の重要性が確認されてきた。これらの研究はまず、リテラシーを獲得する年少の段階にある母語話者の学習者を対象にして始められたが、その後、第二言語ライティングの領域に応用されるようになってきた（Raimes, 1987 など）。日本語を母語とする英語学習者の L2 ライティングにおけるプレライティングの効果を扱った Hirose and Sasaki（1994）の研究では、より L2 ライティングに習熟した学習者はそうでない学習者に比べてより多くのプレライティングを行うことが示され、特に構成に関するプレライティングにおいてその傾向は顕著である（Sasaki, 2000; Sasaki & Hirose, 1996）ことが示されている。

これらの研究では、特定の方法でのプレライティングをさせるための介入はなく、それぞれの学習者が個人的に行った活動だった。しかし、2.5 項で指摘したように、ライティングという活動を社会的活動であるとの認識にたち、他者との協働において学びを捉える Vygotsky 的な学習観にたてば、どのように協働的なプレライティングを行うのが効果的であるか考える必要が生まれる。次項では、この点に関わる先行研究を概観する。

3.2 プレライティングにおける協働学習活動の効果に関わる先行研究

ライティング指導でのプレライティングにおける協働学習活動の効果に関わる研究は、ライティング研究全般と同様にまず母語におけるライティング指導の研究のコンテクストで始められた。Higgins, Flower, and Petraglia （1992）はその研究で L1 での作文指導においてそのプランニング段階（本論文でいうプレライティング段階）でのグループディスカッションが効果的であることを示し、また Sweigart （1991）は産出された L1 作文の質への影響を直接的に検証している。

その一方で、L2としての英語ライティング指導でのプレライティングにおける協働学習活動の効果に関わる研究は、まだ数が多いとは言えない。ペアまたは3人のグループによるディスカッションをプレライティング活動として行うことの有効性についてFreeman and Freeman （2001）や Dobao（2012）などで指摘されてはいるものの、直接的にその効果を検証したものとしては、管見の限りわずかにShi（1998）の研究とNewman and McDonough （2015）

があるのみである。

Shi（1998）は L2 学習者によるプレライティング・ディスカッション（prewriting discussion: 以下 PWD）が L2 作文に与える効果を検証した研究のうちもっとも初期の研究にあたる。この研究では、教師主導のディスカッション、学習者同士のディスカッション、及びディスカッションなしの３つの条件下で産出された L2 作文の質が比較されたが、統計的に有意な差を確認するには至らなかった。

L2 ライティング学習のコンテクストで、学習者同士の PWD の質とそれが産出された L2 作文の質に直接的に与えた効果を検証しているのはこれまでのところ Newmann and McDonough（2015）のみである。この研究は本研究にとって重要な意味を持つため以下に詳しくまとめる。

この研究は２つの研究から構成されている。パイロットスタディにあたる研究１は、大学の EAP（English for Academic Purposes）のクラスに在籍する学習者を対象に、13 週間にわたって英語によるライティングの前に行われた PWD を記録し、その中から協働的（Collaborative）な PWD と判定されたもののみを抽出して詳しく分析したものである。PWD は内容エピソードごとに熟議型[15]か、非熟議型か、また、内容に関わるものか構成に関わるものかという観点で 4 つに分類された。全体で 105 の内容エピソードが特定されたが、そのすべてが内容に関わるもので、構成に関わるものはなかった。また、熟議型と判定されたエピソードは 21 だった。先行研究の Higgins et al.（1992） および Shi（1998）同様、学習者は内容に関するコメントを産出することはできても、特別な介入なしには構成に関わるコメントを出すことは難しいこと、また、お互いのコメントに対してさらに深めるような熟議型のコメントを出し合うことは難しいことが確認された。

これを踏まえた研究２では、同じコースの別の学習者を対象に、より形式化された PWD を行い、より熟議型のコメントが増えるのか、また、そうした PWD はそのあと産出される L2 作文とどのような関係にあるのか検証している。研究２では合計 489 の内容エピソードが抽出され、そのうち 126 が熟議型と判定されている。この 126 のエピソードのうち、98 が内容に関するもので、残りの 28 が構成に関するものだった。スピアマンの ρ で求められた内容に関する熟議型エピソードの数と作文の内容の評定は、6 つの作文課題のうち 2 つについて、中程度の相関が確認されたにとどまった。構成に関する熟議型エピソードについてはその数自体が少なかったために計算されていない。

Newmann and McDonough（2015）のこの研究では、英語学習者同士が熟議型のコメントを含むディスカッションを行うことが確認された一方で、それが直接的に産出された文章の質につながっているわけではなく、協働学習に対する学習者の態度やディスカッションの質、作文課題など様々な要因が指摘されている。また、L2 の運用能力が比較的高いと考え

---

[15] Newmann and McDonough （2015）では reflective episode と呼んでいる。reflective の語は教育研究では「内省的」と訳されることが多いが、「内省的エピソード」と名付けた場合自己省察を喚起するようなイメージがあり、対話的な性質をうまくとらえられない恐れがあることから、ここでは「熟議型」とした。

られる EAP プログラムの学習者ばかりでなく、EFL 環境など異なるコンテクストでの同様の研究の必要性も指摘された。

Newmann and McDonough（2015）の研究は PWD の質に注目しながらどのような PWD が産出される作文に良い効果をもたらすのか検証するための方法を提示しているため、本研究にとって参考になるものである。しかし、極めて多様な言語的背景を持つ学習者がいる ESL 環境で行われた研究であったためか PWD で学習者がどの程度母語を活用できたのか、またはしたのか、という点に関する言及は特にない。しかし、L2 ライティングが母語によるライティングと決定的に異なる点が学習者の母語の活用にある（Ferris & Hedgecock, 2005）という点を踏まえれば、PWD における母語の活用がどのように産出される作文に影響を与えるのか吟味する必要があるといえるだろう。そうした必要性は、母語を共有する学習者が多数存在する外国語教育の文脈においては特に高く、この点について考察することは日本の英語教育を考えるうえで重要であるといえるだろう。

3.3 バイリンガル・アプローチの理論

伝統的な第二言語習得研究においては母語の役割は負の干渉という視点から研究されることが一般的であったことを反映し、従来のL2ライティングの研究においても、母語についての言及は比較言語学的な手法を用いた誤用分析の文脈でなされることが一般的だった。しかし、Grosjean（1989）が “Neurolinguists, beware! The bilingual is not two monolinguals in one person”と題した論文でバイリンガルの言語能力をモノリンガル的に捉えることを批判し、Cummins（2007, 2008）がバイリンガル児童・生徒の教育における言語分離を徹底する手法を “Two solitudes” と批判するなど、バイリンガル教育研究の立場から母語の積極的な活用を求める動きが強まってきた。こうした主張は Cumminsが1981年の論文で提示した言語的相互依存仮説をその基盤とする。Cummins はこの仮説を以下のようにまとめている。

> To the extent that instruction in Lx is effective in promoting proficiency in Lx, transfer of this proficiency to Ly will occur provided there is adequate exposure to Ly (either in school or environment) and adequate motivation to learn Ly (1981, p.29).

さらに Cumminsはバイリンガルの言語能力について、二つの言語に関わる能力が個別に存在しているのではなく、二つの言語の基盤を支える共通基底能力（Common Underlying Proficiency）があることを想定し、この能力をしっかりと育てることが二言語両方の発達について肯定的な結果をもたらすことを提示している。Cumminsのこうした理論は様々な言語の組み合わせによって実証的に検証されており（日本語と英語の組み合わせに関しては、Cummins, Swain, Nakajima, Handscombe, Green & Tran, 1984; Sano, Nakajima, Ikuta, Thomson, Nakano, & Fukukawa, 2014など）、第二言語習得のみに焦点を当てるのではなくバ

イリンガルの児童・生徒が継承語を失うことなく第二言語を習得させようというカナダのバイリンガル教育（加算的バイリンガリズム）アプローチの基盤となってきた。

こうしたバイリンガル教育の視点をさらに強力に支える理論的枠組みが García（2009）などが提唱するトランス・ランゲージングである。この概念は、もともとウェールズで行われていた英語とウェールズ語のバイリンガル教育の手法を説明するものとしてCen Williamsが用いた*trawsieithu*というウェールズ語に端を発するという（Baker, 2001）。英語とウェールズ語のバイリンガル教育の中で行われていた、受容言語と産出言語を意識的に変える取り組みをさすこの言葉をBaker（2001）が*translanguaging*と英語に翻訳し概念化したのである。

García（2009）はさらにこの概念を深化させ、"*multiple discursive practices* in which bilinguals engage in order to *make sense of their bilingual worlds*"（García, 2009, p. 45, emphasis in original）とし、バイリンガルがもつ言語資源を自由に活用することは、その言語使用としては極めて自然なものであることを指摘し、その教育的価値に正統性を見出した。バイリンガル教育全体に極めて大きな示唆をもたらしたこの概念は、移民の子弟の教育のような、いわゆる伝統的なバイリンガル教育の現場以外においても非常に重要な意味をもつ。それは、トランス・ランゲージングが単なる第二言語習得のツールとしてではなく、学習者の自律的な学びをその根幹で支えるものであるからだ。この点についてGarcía and Li Wei（2014）は次のように述べている。

> Translanguaging refers to the flexibility of bilingual learners to take control of their own learning, to self-regulate when and how to language, depending on the context in which they're being asked to perform (p.80).

加えてトランス・ランゲージングは教員の側からの意識的な働きかけとしても重要な役割を果たす。García and Li Wei（2014）は言う：

> [I]t (translanguaging) is a way of differentiating instruction to ensure that all students are being cognitively, socially and creatively challenged, while receiving the appropriate linguistic input and producing the adequate linguistic output in meaningful interactions and collaborative dialogue (p. 92).

学習者が、認知的にレベルが高く、創造性を持つようなタスクを第二言語で行うことを保証し、同時に充分に言語的なサポートが与えられることを保証することが教育的手法としてのトランス・ランゲージングの強みであるといえよう。

3.4 L2 作文における L1 使用に関する先行研究

伝統的に母語を第二言語習得において克服されるべき障壁としてみなしてきた心理言語学的アプローチの第二言語作文研究からも、特に実践の現場から、母語活用の可能性を指摘する研究が生まれてきた。特に Zamel はその研究（1982、1983）で、バイリンガル児童がL1とL2の作文において同様のライティングプロセスを活用していることを明らかにし、Jones and Tetroe（1987）、Hirose and Sasaki（1994）やArmengol-Castells（2001）などの研究ではプレライティングは、量はともかくとして、その質についてはL1とL2で共通することが明らかにされた。また、バイリンガル児童・生徒が作文を行うにあたっては、書こうとする内容に関わる経験をした時点で使用していた言語を用いてプレライティングをさせたほうがより優れた第二言語作文の産出につながるとする Friedlander（1990）の研究も、状況と目的に応じて柔軟に使用言語を変え得るバイリンガルの特性を活用したアプローチとして興味深い。こうしたパラダイムシフトとも呼ぶべき母語の捉え方に関わる変化をRaimes（1987）は次のようにまとめている：

> Second language writers, then, can be viewed not only as bringing L1 problems to the writing class, but as bringing to the act of composing the additional and beneficial dimension of linguistic and perhaps rhetorical knowledge of another language, along with some knowledge of strategies for L1 composing…In sum, the research has found that the difficulties of ESL writers appear to stem less from the contrasts between L1 and L2 than from the constraints of the act of composing itself (pp. 441-442).

このパラダイムシフトをさらに精緻化させ、第二言語ライティングの一定のフレームワークとして定式化したのが Cumming（1989, 1990）の研究である。この研究によってCummingは第二言語ライティングにおける学習者の課題には、第二言語の習得に関わる部分と、書くことそのものの習得（Writing expertise）に関わる部分が関連しつつも別個のコンストラクトとして存在することを明らかにしている。この知見は、それ以降の第二言語ライティング教育に大きな影響を与えている。

この後、第二言語学習者がそのライティングプロセスにおいてどのように母語を活用するのか、Think-Aloud Protocol 法や Retrospective Interviews の手法を用いた心理言語学的アプローチによる研究が進められた。これらの研究には、母語で書いたものを翻訳した場合と直接L２で書いた作文の質を比較した Kobayashi and Rinnert（1992）、プランニングの段階における母語の活用について研究したWang and Wen（2002）及び Wang（2003）、バックトラッキングについての Manchón, Roca de Larios, and Murphy（2000）、L1におけるライティングストラテジーがどの程度L2作文において用いられているかを研究したWolfersberger（2003）などがあげられる。

母語活用の重要性は、社会文化論的枠組みによる研究からも指摘がなされている。学習はまず社会的な文脈の中ではじまり、その後個人の内面へと深化してゆくとするVygotsky

（1978）の立場からみると、知識は個人に内面化する前にインターパーソナルな文脈で獲得されるのであり、言語はそうした学びにおいて、学習者と彼らをとりまく周りの世界の関係を確立するうえでの精神活動の主要な道具としての意味をもつ。従って、学習者の母語は課題解決や、タスクマネージメントにおける重要なスキャフォルディングのストラテジーとみなし得るからである。

Brooks and Donato（1994）及びBrooks, Donato and McGlone（1997）の研究はこの視点から、外国語学習者がどのように母語によるメタトーク（トークに関するトーク）やメタ認知（タスクに関するトーク）および内言のつぶやきをその学びに活用し、自らの学びをコントロールするか描き出し、Anton and DiCamilla（1998）も同様の母語の働きについての観察をもとに母語が間主観性（intersubjectivity）の構築に不可欠であることを示している。同様に Swain and Lapkin（2000） はフレンチ・イマージョンの学生がどのように母語を活用して語彙や文法に注意を払いながら課題を解決するか示し、Villamil and DeGuerrero（1996）及び DeGuerrero and Villamil（2000）は、ピア・レビューの活動のなかで、学習者がどのように母語を活用して学習仲間とインタラクションを行うか、そしてStorch and Wiggleworth（2003）はCollaborative Writingにおいて学習者がどのようにL1を活用するか描いている。

社会文化的アプローチをとる近年の研究の中で、バイリンガル教育研究の流れを色濃く反映したものにVelasco and García（2014）とGarcía and Kano（2014）がある。Velasco and García（2014）はバイリンガル児童がどのようにその言語レパートリーすべてを駆使して作文を産出しているか観察した研究である。その観察をまとめて彼らは次のように述べる：

> In emergent bilinguals, TL (translanguaging) can function as a self-regulatory mechanism that expedites the process of language learning (p.12).

García and Kano（2014）はアメリカで学ぶ10名の日本語を母語とする高校生にトランス・ランゲージングのアプローチを用いて英語作文の指導を行い、その過程を stimulated recallの手法を用いて観察したものである。指導では、日英両方の資料を読んでから日本語でディスカッションを行い、その後英語で作文を書くという流れをとった。この研究で Kano は、経験の浅いバイリンガルが必要に迫られて母語を使用する（dependent use of translanguaging）のに対し、より経験のあるバイリンガルはトランス・ランゲージングを意識的かつ統制的に活用（independent use of translanguaging）することを示し、トランス・ランゲージングをバイリンガル教育の手法として活用することでより強いほうの言語に依存しすぎることを防ぎ、第二言語習得に結び付けていくことが可能であることを示している。

総合してみるに、これらの研究からはバイリンガルの学習者はトランス・ランゲージングを作文産出のストラテジーとして活用していることが観察されている。しかしながら、トラ

ンス・ランゲージングをプレライティング・ディスカッションの中で積極的に活用して作文産出を促した場合の効果についての検証は管見の限り現時点でほぼ皆無で、その研究上の要請に応えるため、小規模な観察として行われたのが、佐野・増谷・阿部（2018）である。

この研究は日本語と日本手話[16]というモダリティの異なる言語のバイリンガル[17]が、第二言語作文課題の前に自ら随意に使用できる言語を活用してディスカッションする活動の有効性を確認したものである。この研究では、５名のろう児を対象として、書記日本語における作文指導の中で日本手話の使用が果たしうる役割について観察した。具体的には、PWDなしでまず作文（冬休みの思い出）を書いてもらい（作文１）、その後、日本手話によるクラスディスカッションを経て個人による日本手話でのスピーチを行ってもらった。その後、撮影した手話スピーチを見ながら書記日本語による作文を行い（作文２）、作文１との比較を行った。分析の結果、作文２のほうが作文１よりも語数・異なり語数及びアイディア・ユニット数において増加を見せることが確認された。加えて、質的な分析からも日本手話によるスピーチやクラスディスカッションによって、より豊かな心情的表現が含まれるようになったことなどが確認された。このことから、手話言語と音声言語に基づく書記言語の作文のように、モダリティの異なる二言語にあっても、随意に用いることのできる言語によるプレライティング・ディスカッションをすることが異なる言語での作文の産出にとって効果的なアプローチたり得ることが示唆された。しかしこの研究では、手話の活用の程度と状況には大きな個人差があることも見出された。加えて、研究に参加した児童の聴覚活用の度合い、手話への接触の程度などのような言語的背景は極めて多様であったことからも、より確定的な結論に至るためには、さらに多くの参加者を対象とした研究が必要となると考えられる。

佐野・増谷・阿部（2018）の研究は、トランス・ランゲージングをプレライティング・ディスカッションの中で積極的に活用する、という第二言語作文指導上のアプローチの有効性を一定程度示した点で、実践的な意義が大きいものだったと考える。しかしこの研究の対象は日本手話と日本語のバイリンガル児童であり、手話言語と音声言語というモダリティをまたぐバイリンガリズムを対象に扱ったものであるため、音声言語同士のバイリンガリズムとはまた異なる面も多いことが考えられ、本研究で取り上げる日本人英語学習者の第二言語としての英語作文の指導において、直接的な示唆を持つとはいいがたい。また、トランス・ランゲージングの有効性を示し理論的な発展を支えるためには、限られた人数を対象とした観察のみでなく、様々な条件にある学習者を対象とした量的な分析を含む考察が求められる。本研究はこうした研究上の要請に応えることを目指すものである。

---

16 体系的な語彙構造及び文法構造を持つ自然言語で、音声言語の日本語とは全く異なる言語。一方、手指日本語（日本語対応手話）は音声言語の日本語を手と指で示したもので、手話言語ではない（日本学術会議, 2017）。

17 この研究はろう教育を聴覚に障害をもつ児童・生徒のための特別支援教育と捉えるアプローチとは異なり、日本手話というマイノリティ言語を主として使用する児童・生徒が第二言語としての日本語のリテラシーを獲得するのを支える、バイリンガル教育のアプローチで進められたものである。

第４章　研究１[18]

第３章ではプレライティング活動の効果に関わる先行研究、プレライティングにおける協働学習活動の効果に関わる先行研究、バイリンガル・アプローチの理論、およびＬ２作文における L1 使用に関わる先行研究を概観した。その結果をまとめると、プレライティング活動の効果及びプレライティングにおける協働学習活動の効果については、母語教育及び第二言語教育の文脈で多くの研究によって確認されているものの、直接的にその効果を検証したものはわずかに Shi（1998）及び Newmann and McDonough（2015）が確認されたのみである。このうち、Newmann and McDnough（2015）は、Shi（1998）をさらに精緻化させ、そのプレライティング･ディスカッションの質を分析対象とした点で画期的である。しかし、この研究には学習者の母語を活用する視点は含まれていなかった。

第３章ではさらにバイリンガルの言語能力を、モノリンガルの規範に照らしてその未発達な部分を強調するのではなく、二言語の能力を総体としてとらえるバイリンガル･アプローチの理論を概観し、バイリンガルの言語資源を最大限に活用する教育的アプローチとしてのトランス・ランゲージングに着目した。その視点に立ったうえで、母語の活用が第二言語作文にどのような効果があるか検討した先行研究を概観し、バイリンガルの学習者が、トランス・ランゲージングを第二言語作文産出のストラテジーとして活用していることを確認した。

これらの先行研究では、学習者はプレライティング活動、とりわけ協働的なプレライティング活動を活用して第二言語による作文を行っていること、また、そうした作文においてはトランス・ランゲージングを資源として活用していることが見えてきた。しかしこれらの研究では、Newmann and McDounough（2015）及び佐野・増谷・阿部（2018）を例外として、教育的アプローチとして意図的に行われた実践の有効性を確認してはおらず、この点がまさに研究課題として残されていることも明らかになった。さらに、母語によるプレライティング・ディスカッションと、目標言語によるもの、およびトランス・ランゲージングの条件で行うものを比較検討した研究は現時点ではなく、その研究上の要請に応えるために本研究を設定する。

4.1　研究課題

まず、本研究の対象とする日本語を母語とする英語学習者が、どのように日本語・英語・及びトランス・ランゲージングでのプレライティング・ディスカッションを行い、それをどのように作文に活用するのか観察することを目的に研究１を行う。

---

[18]本章は Sano（2018）で発表した内容に基づいており、その分析・考察については Sano（2018）の抜粋である。この論文の著作権を有する全国語学教育学会より許可をいただきここに掲載するものである（書面による転載許可については付録１を参照）。なお、当該論文は英語で執筆したものであったが、本論文に転載するにあたって当学会の許可を得て日本語に改変してある。ただし、データ及びその考察は掲載論文と変わるところはない。

母語である日本語でプレライティング・ディスカッションを行った場合と、目標言語である英語で行った場合、及びトランス・ランゲージングで行った場合では英語の作文に書くべきアイディアの創出にどのような差が見られるか。

4.2　研究の方法

研究１では、研究２の手がかりとして、３つの異なる条件で行うプレライティング・ディスカッションを学習者はどのように活用するのか観察することを目的としているため、質的な分析を中心に行う。そのため、研究の対象は１組２名の学習者とし、そのプレライティング・ディスカッションの機能を詳細に分析する。以下にその研究の方法を述べる。

4.2.1　研究の参加者

この研究の参加者は、２人の日本人大学生サクラとケンタ（いずれも仮名）である。サクラとケンタはいずれも英語を主専攻とする学生で、日本語を母語とし、英語は CEFR　B1 程度のレベルである。サクラは大学在籍中に 1 年間カナダへ留学して ESL（English as a second language）のプログラムに参加したのちワーキング・ホリディの活動をした経験がある。ケンタはオーストラリアでの 1 ヶ月間の英語学習集中プログラムに参加した経験がある。

4.2.2　データ収集の方法

２名の参加者にプレライティング・ディスカッションなし（No-PWD）、日本語によるプレライティング・ディスカッションあり（PWD-J）、英語によるプレライティング・ディスカッションあり（PWD-E）、およびトランス・ランゲージングでのプレライティング・ディスカッションあり（PWD-TL）の 4 つの条件下で英語の作文を産出してもらった。作文の課題としては IELTS の公式教材及び公式ウェブサイトより選んだものを使用した。これは、４つの異なる条件で用いられる作文課題のレベルをなるべく同等に保つためである。同時に、これらの学生が学部の講義内で学習した課題に極めて類似した課題である IELTS の問題を使用することは、本研究の参加者の力を十分に引き出す上で好ましいと考えた。どの課題も、肯定・否定両方の見方が可能なトピックについて、自らの立場を明確にしながらその理由を述べるタイプの意見文である。PWD-E の条件下で書かれた作文課題を例として以下に提示する。

> The first car appeared on British roads in 1888. By the year 2000 there may be as many as 29 million vehicles on British roads. Alternative forms of transport should be encouraged and international laws introduced to control car ownership and use. To what extent do you agree or disagree?
>
> (IELTS Partners, 2019)

建設的なディスカッションを促すため、参加者は自分の意見にかかわらず、肯定側・否定側両方の意見を吟味しながら話し合うよう求められた。PWD-Jではプレライティング・ディスカッションを日本語のみで行い、PWD-Eでは英語のみで行う。PWD-TLにおいては、できる限り英語でのディスカッションをする努力をしつつ、必要に応じて自由に日本語を使用するように求められている。２名の参加者は20分のプレライティング・ディスカッションのあと40分間個別に作文課題に取り組んだ（No-PWDの場合にはプレライティング・ディスカッションなしで作文を書いている)。プレライティング・ディスカッションはすべて参加者の同意のもと録音・書き起こしされている。作文に際しては使い慣れたPCを利用してタイピングする形で行われ、スペルチェッカー及び辞書の使用は認められていた。

4.2.3　データ分析の方法

産出された作文のどの部分がプレライティング・ディスカッションに基づいているものであるか特定するために、参加者は作文直後に録音されたプレライティング・ディスカッションを聞きながら、関連して産出したと自分が思う部分に下線を引いた。

こうして特定されたPWDに基づいて産出された部分の内容語について、その語数及び異なり語数を数え、テクスト全体の内容語の語数及び異なり語数に対する割合を計算した。語数及び異なり語数のカウントに当たっては*vocabprofile*[19]というオンラインソフトウェアを使用した。分析対象を内容語に限定したのは、ひとつには、本研究の参加者は英語学習者として文法上の誤用を含むテクストを産出しており、こうした文法的誤用は機能語に多く見られたためである。加えて、本研究の主題はPWDによって惹起されるアイディアにあるため、PWDで触れられた概念がどれだけ作文に反映されているか見る指標としては内容語が重要な意味を持つと考えられたためである。

また、それぞれの条件におけるプレライティング・ディスカッションは、参加者の同意のもと録音・書き起こしされ、PWDの機能にかかわる質的な分析の対象となった。これらの分析については、研究者による考察のあと参加者に提示され、その妥当性を吟味してもらった。

4.3　研究の結果

それぞれの条件下で産出されたテクスト全体及びPWDに基づいて産出された部分における内容語の語数を表4-1に示す。

[19] Cobb, T. Web Vocabprofile [accessed August 2019 from http://www.lextutor.ca/vp/], an adapation of Heatley, Nation and Coxhead's (2002) Range.

表 4-1
それぞれの条件下で産出されたテクスト全体及びPWDに基づいて産出された部分における内容語の語数

		テクスト全体における語数		テクスト全体における内容語の語数		PWDに基づいて産出された部分における内容語の語数	
		サクラ	ケンタ	サクラ	ケンタ	サクラ	ケンタ
No PWD	語数	288	163	164	85	-	-
	異なり語数	118	81	83	56	-	-
PWD-E	語数	266	267	128	115	47 (36.7%)	53 (46.1%)
	異なり語数	110	105	79	65	38 (48.1%)	33 (50.8%)
PWD-J	語数	168	164	91	80	72 (79.1%)	42 (52.5%)
	異なり語数	99	76	62	46	55 (88.7%)	31 (67.4%)
PWD-TL	語数	272	250	145	122	86 (59.3%)	76 (62.3%)
	異なり語数	120	113	80	76	61 (76.3%)	46 (60.5%)

注:カッコ内の数字はテクスト全体の内容語の語数に対するPWD関連部分の内容語の割合を示す。

表4-1に示されるように、総語数で見るとサクラはNo-PWDの条件で最も長い作文を産出し、最も短い作文はPWD-Jの条件で産出した。ケンタはNo-PWDやPWD-Jの条件よりもPWD-EやPWD-TLの条件下でより長い作文を産出している。この傾向は、テクスト全体の内容語の語数で見た場合も同様であった。

PWDに基づいて産出された部分の内容語（異なり語数）がテクスト全体の内容語（異なり語数）に占める割合に目を向けると、サクラもケンタも日本語でのPWDを最も活用したことがわかる。それに続くのがTLのPWDで、最も活用度が低かったのは英語によるPWDであった。日本語でのPWDのあと産出されたサクラの作文は、実にその内容語（異なり語数ベース）の88.7%がPWDで話された内容に関わるものであり、PWD-TLではその数は76.3%、PWD-Eでは48.1%となっている。ケンタの作文でも同様に、PWD-Jの場合全体の内容語の67.4％ がPWDに基づいて産出されたものとされ、PWD-TLでは60.5% 、PWD-Eでは50.8% となっている。

4.4 考察

これらの作文課題では250語以上書くことをおおよその目安として設定していたが、PWDなしの状態でサクラは288語、ケンタは163語の英作文を時間内に書いていることから、二人の学習者はどちらも自力で書く力をある程度以上持っていることが見て取れる。そうした学習者にとってPWDはどのような効果をもたらすのか、以下に考察する。

4.4.1　よく知らない話題についての作文におけるPWDの役割

サクラもケンタも、PWD-Jの条件下で書いた英語の作文が最も短かった。PWD-Jの課題は、原子力の是非を問うもので、原子力の使用における利点はその問題点を凌駕するか否か、というものだったが、作文の後で二人ともこの課題が最も難しかったと述べている。特にサクラはこの課題についての作文では実に90%ほどの内容語（異なり語数ベース）がPWDに関連するものだった。普段から新聞を読み、社会的・政治的な話題に明るいケンタに比べサクラは原子力の利用の是非についてあまり知識をもっていなかった。そのため、ケンタとのディスカッションの中で学んだ内容について積極的に活用することである程度の長さの作文を書いたのである。

4.4.2　PWD-Eにおけるコミュニケーション・ブレイクダウンの例

テクスト全体における内容語の割合でみた場合、PWD-E はもっとも効果が薄いPWDであった。これはひとつにはコミュニケーション・ブレイクダウンによる部分があると考えられるだろう。コミュニケーション・ブレイクダウンとは、ここでは一方が相手が自分の発話を理解していないと認識しつつも、意味交渉（Long, 1996; Pica, 1996）によってその状態を改善できない状態を指して言う。PWD-Eの課題は、車以外の「代替的交通手段 “alternative forms of transport” 」が奨励されるべきか、そして車の所有についての国際法が制定されるべきかどうかについて議論するものだった。サクラとケンタは二人で “alternative” という語を辞書で確認し、この文脈においてはバスや電車、自転車などを指す、という点で合意したうえで議論を始めた。ケンタは交通渋滞問題を解決するためにも車の所有は制限されるべきだと主張する。それに対してサクラは、ケンタの主張にに半ば同意しながらもより環境問題としてこの問題を議論し、排気ガスが地球温暖化をさらに進めてしまう危険性について指摘する。ケンタは自分の議論を進めながら、電気自動車であっても交通渋滞の問題を解決することにはならないことを指摘し、サクラは電気自動車や電車であっても発電の際に温室効果ガスが産出されることに気づきながら自分の議論の穴について考え始める。そんな中、ケンタが議論をさらに進めようとするとき、二人は混乱して行き詰まってしまう（表4-2）。この場面でケンタは車の所有を制限する国際法の制定には反対の立場で議論をしていたつもりであったのに対し、サクラはケンタが賛成の立場で議論していたと思っていたのである。こうした致命的な誤解は、不自由な第二言語のみでPWDを行う上での欠点を明示するものである。実際、この場面では、英語のみを使用するように要請されていたPWD-Eであるにも関わらず、二人は結局日本語に頼らざるを得なくなっている。ここからも、学習者にとって、こうした場面で母語に頼ることは極めて自然なことであることが明らかである。

表4-2 場面1【PWD-E 12:32-13:29】

ターン	発話者	発話内容
1	ケンタ	How about….well, whatever. I think it's good point. About discuss. Well…
2	サクラ	How about parts of "Disagree"?
3	ケンタ	ん？Did we discuss about "Agree"?
4	サクラ	え？ちがうの？
5	ケンタ	Really? It's quite disagreeing, right?
6	サクラ	For this one?
7	ケンタ	うん。
8	サクラ	Huh?
9	ケンタ	Anyway, what about "Disagree"?
10	サクラ	（笑い） How about "Disagree"?

注：タイトル中のカッコ内は録音の分：秒を示す。以下同様。

このPWDではもう一か所コミュニケーション・ブレイクダウンの場面が見られた。このPWDの初期段階で、二人は "alternative forms of transport" がこの文脈で指すものについて共通理解を図り、バス、電車あるいは自転車のようなものを指す、という合意をしている。しかし15分ほど議論が経過した後でケンタがこの理解そのものに疑義を提示する。

表4-3 場面2【PWD-E 15:14-17:52】

ターン	発話者	発話内容
1	ケンタ	What is 'alternative'? 'Alternative form of transport'?
2	サクラ	What is?
3	ケンタ	Hum. What is?
4	サクラ	Like a bus or train or bicycle or…
5	ケンタ	Really? Is that? I don't think it's alternative forms, I think, because the car is very useful and like if I get out the house and just get on the car I can go anywhere if I want. What about bicycle? Can I go to the Niseko[20]? But if I get on the car I can get to the Niseko, if I want. The bicycle is not alternative forms for me in case like this.
6	サクラ	'Alternative forms'? Hmm?
7	ケンタ	Train is not very useful for me, because I live in a rural area and it's too far to go to the station and I need to move from my house to station in the other way.
8	サクラ	I understand but え? 'Alternative form of transport' mean…
9	ケンタ	I am saying it's not, it shouldn't be encouraged at the point of disagree. Did you understand what I am saying?
10	サクラ	No, I am panicking. え?

この場面ではケンタは先に二人で合意した "alternative forms of transport" の理解について、批判的な視点から考え直そうとしている。ここで彼が提示しようとしているのは、車の方がはるかに利便性が高いことから自転車を車と同列に扱うことはできず、従って自転車を車の「代替手段」とみなすことが適切なのか、という点に関する疑義である。しかし、ターン6, 8, 10に明らかなようにサクラはなぜケンタが、すでに合意済みの "alternative forms of

[20] このディスカッションが行われた場所から 120km ほど離れた場所にあるスキーリゾート。

transport” の理解について今更のように話し始めたか理解できずに混乱する。混乱するサクラを前にケンタもL2運用能力の限界のために自分の抽象的な論点を明確化できないまま、単純な疑問文を繰り返すのみになってしまい、サクラの混乱を解消することができない。

4.4.3 PWD-TLの様々な機能

PWD-TLの条件下では学習者は必要に応じて母語を活用することが奨励されていたため、PWD-Eの条件下で見られたようなコミュニケーション・ブレイクダウンを回避できていた。本研究では以下に示す５つのタイプのトランス・ランゲージングの働きを観察した。

1. 語彙に関連する支援を相手に求める
2. 母語を活用しながらL2語彙を思い出す、または辞書を使って母語の語彙をL2語彙に変換する
3. L2語彙の探索をせずに母語の語彙で代替させたまま議論を進める
4. メタ言語的ディスコースを議論されている内容から区別するために母語を活用する
5. 母語を活用して議論の論点を整理する

学習者が必要とする語彙をL2において持っていない場合にL1で代替する現象についてはこれまでにも多く指摘されてきているが、本研究のPWDにおいてもそうしたトランス・ランゲージングが観察された。次の場面では、サクラが口まで出かかった “quit”という単語を探している。何度か試みた後、ターン3でケンタに助けを求め、ケンタに教えてもらうことで議論を前に進めている。

表4-4 場面３【PWD-TL 5:28-6:22】

ターン	発話者	発話内容
1	サクラ	Like a 無期懲役 （辞書を確認する）, life imprisonment I think life imprisonment and death penalty is like similar because we didn’t do the death penalty, we did do the death penalty like a two or three people in a year, right?
2	ケンタ	そうなの？
3	サクラ	うん。So it’s…what’s the difference between death penalty and life imprisonment? I think like a if we finish? We quite? やめる？ We stop the death penalty,
4	ケンタ	Quit?
5	サクラ	Quit? But we still have life imprisonment; it’s fine.

サクラはまた、ケンタに助けを求める以外にも、辞書利用という形で母語を活用してL2語彙を探索することもしている。次の場面はサクラが自分で辞書を確認して「囚人」にあたる語彙を探すものである。

表4-5　場面4【PWD-TL 8:35-7:09】

ターン	発話者	発話内容
1	サクラ	But we…even though we have death penalty, like it's I searched before like a in a class, in a なんだっけ囚人（辞書を確認する）prisoner, it's a many prisoner to do death penalty and we pay tax to…

また、単に日本語の単語を声に出して言うことで英語の単語を思い出すことに成功する場面も見られた。

表4-6　場面5【PWD-TL 7:59-8:10】

ターン	発話者	発話内容
1	サクラ	But even though we have death penalty this なんだっけ？犯罪 crime didn't decrease… Right?

インタビューの中でサクラはこの場面について、高校での単語帳を利用した学習のおかげで日本語の単語を言うだけで英語の単語を思い出すことも多い、と説明している。思い出せないL2語彙探索の手がかりとしての母語の活用がここでは見られる。

学習者が議論の中身に集中するあまりわからないL2語彙を探索しない、という選択をする場面も見られた。次の場面はその好例である。

表4-7 場面6【PWD-TL 7:30-7:57】

ターン	発話者	発話内容
1	ケンタ	I think some people say it's not 人道的？人道的じゃないから。
2	サクラ	They didn't do the death penalty?
3	ケンタ	They don't want to do that.
4	サクラ	But we HAVE death penalty. If we have death penalty, we SHOULD do that.

注：大文字は強調された発話であることを示す。

ここでの課題は、社会における暴力をコントロールするために死刑は必要であるのか否か、というものだった。上の場面でケンタは「死刑は人道的でないため廃止されるべきだ」という死刑反対論者の論拠を提示しようとしている。サクラが英語の語彙を探そうとしていた前述の場面３-５とは異なり、この場面では辞書を使って「人道的」に当たる英語を調べるために議論を一時中止することなく、またお互いに尋ね合うこともないまま、従って求める英単語は不明のまま議論が進められていく。この場面で二人は死刑の是非という内容そのものに関わる議論に熱中しているのである。その熱中ぶりをサクラの強調された発話に見ることができるだろう。

また、このPWDでは、課題に関わる議論と、メタ言語的なコメントを切り離すためにトランス・ランゲージングを活用する場面も見られた。その顕著な例を場面７に示す。

表4-8 場面7【PWD-TL 16:00-16:55】

ターン	発話者	発話内容
1	サクラ	Disadvantage… What's…we just do capital punishment in a two or three people... two or three people in a year, and I saw like in the internet, and just many prisoner, just prisoner, なんだっけ、死刑囚になるけど、it's not happen, so just we should pay tax for them.
2	ケンタ	we have to でしょ。
3	サクラ	そう, we have to. We have to pay tax for them. And just people increase. It's problem で、見た。

この場面でのトランス・ランゲージングには二つの機能があったと考えることができる。一つ目は、場面 6 同様、議論を先に進めるための機能である。ターン1でサクラは死刑囚を抱えることのコストについて指摘するうえで、おそらく「死刑執行」に当たる語を探していると思われる。これに当たる言葉を日本語で見つけようとして「なんだっけ、死刑囚になるけど」としたあと、 “it’s not happen”, と目的となる表現を回避して議論を進めている。

この場面におけるトランス・ランゲージングの二つ目の機能は、日本語を活用することでメタ言語的なコメントを議論の中身から切り離すというものである。ターン1でサクラは死刑囚の生活を支えるために税金を使うのは無駄であるという視点を提示するが、その際 “we have to pay tax for them” というべきところを誤って “we should pay tax for them” と言ってしまう。この文法上の誤用についてケンタが 「 “we have to”でしょ。」 とコメントする。ここですべてを英語の発話にして “You mean ‘we have to’, right?” などとすることも可能ではあるが、ケンタはここをトランス・ランゲージングして、 “we have to” 以外を日本語で言うことで、これが文法的なコメントであることを際立たせている。ターン3でサクラがすぐにそのコメントをアップテイクしていることからもこのケンタのコメントの意図が明確に伝えられたことが見て取れる。

本研究のPWD-TLのデータの中で最も日本語が活用されていたのは議論の論点の整理の場面であった。次の場面は、PWD-Eにおけるコミュニケーション・ブレイクダウンの場面に酷似しているが、トランス・ランゲージングにより論点の整理に成功している場面である。

表4-9 場面8【PWD-TL 18:30-20:13】

ターン	発話者	発話内容
1	サクラ	For me. Maybe not disadvantage…what do you think? About capital punishment, disadvantage
2	ケンタ	Disadvantage...we have to pay the tax more longer than in death penalty,
3	サクラ	じゃあアドバンテージにしよ。
4	ケンタ	disadvantage 死刑を廃止しなかったら、
5	サクラ	あ、廃止しなかったら、のほうね、OK。
6	ケンタ	廃止したら…？
7	サクラ	廃止したら…ってことね、OKOKOK。
8	ケンタ	廃止したら…税金を払わなけりゃいけない、で、さっき言ったみたいに執行人の気持ちでしょ disadvantage。

表4-9 場面8【PWD-TL 18:30-20:13】（続き）

ターン	発話者	発話内容
9	サクラ	執行人の気持ちは…？
10	ケンタ	Disadvantage じゃない？
11	サクラ	え？あれ？廃止しなかったら？
12	ケンタ	廃止…廃止…
13	サクラ	廃止したら、
14	ケンタ	廃止しなかったら…やり続けなきゃいけないしょ。
15	サクラ	廃止しなかったら執行人の気持ちでしょ。うん、でも Tax の longer は…
16	ケンタ	廃止したら、だね。
17	サクラ	廃止したら、のほうじゃない？
18	ケンタ	まざっちゃった。
19	サクラ	まぜないでよ、もう、わけわかんなくなるから。

この場面ではどちらの学習者も社会における暴力をコントロールする上での死刑の利点を認めながらも、指示された通り両方の側面から議論を行おうとしている。サクラがターン1において“advantage”という言葉を用いながらも、死刑を存続させる上での利点について述べたのか死刑を廃止する上での利点について述べたのかを明確にしなかったためケンタが混乱する場面である。ターン2においてケンタは死刑が廃止された場合、無期懲役の囚人の収容のコストが税金で賄われることを指摘し、死刑廃止の欠点について論じている。それに続くターン3でサクラは、自分が意図したのは死刑存続に関する欠点であって死刑廃止の欠点ではないことを指摘する代わりに、死刑存続の利点について議論する、と方針転換することでケンタの議論に合わせようとする。この、“advantage”と“disadvantage”に関する二人の混乱はターン10まで続くが、ターン11でサクラが死刑廃止の欠点と死刑存続の欠点について同時に話していたがために起きた混乱であることに気づく。その後、何回かのやり取りを経て二人は「死刑執行人の心理的な負担」が死刑存続の大きな欠点であり、「無期懲役の囚人の収容のための税金の無駄遣い」が死刑廃止の大きな欠点であるという議論の整理に至る。

4.5 研究１のまとめ

研究１では目標言語のみ使用できるという制限のある状態でのプレライティング・ディスカッションを行った場合に生じ得る難しさについて観察するとともに、トランス・ランゲージングを活用した場合のプレライティング・ディスカッションの様々な働きについて観察した。PWD-TLにおいて本研究の参加者は、L2語彙を探したり、あえてL1の語彙で代替することで議論を進めることを選んだり、メタ言語的なコメントをしたり、抽象的な議論の整理をするなどのために母語を活用していることが確認された。これは、日本人大学生の英語学習というコンテクストにおいても、トランス・ランゲージングの活用が有効に働きうることを示した点で、本研究にとって重要な意味を持つものである。

また、PWDがどの程度その後産出される作文に貢献したか、という点の検討のために、産出された作文のPWDにかかわる部分を特定したうえでその部分の語数（内容語）を数え、作文全体の語数（内容語）に対する割合として分析するという手法についても、意味のある分析方法であることが確認できた。

ただし、研究１では参加者の数が２名だったため、作文評価のためのルブリックを作成することはしなかった。このため、PWDが良い作文産出にどれだけ貢献するかという点については検討を行っていない。これを受けて、研究２ではより多くの参加者を対象に、量的な分析を加えてPWDの質、PWDの作文への活用度、および産出された作文の評価について考察を深めることととする。

第５章　研究２

第４章では日本語を母語とする学習者が英語での作文のために行うプレライティング・ディスカッションにおいて、学習者の母語である日本語で行った場合、目標言語である英語で行った場合、そして基本的に目標言語である英語を使用しつつ必要に応じて日本語を使うことを奨励するトランス・ランゲージングの場合、およびプレライティング・ディスカッションがない場合に学習者がどのように英語の作文を産出するのか、２名の学習者を対象に観察した研究１について報告した。その観察から、目標言語のみで行われるプレライティング・ディスカッションの限界が浮き彫りになると同時に、トランス・ランゲージングの様々な機能が観察された。この研究を受けて、研究２ではより多くの学習者を対象にした研究を行い、さらに研究の項目を PWD の質、PWD の作文への活用度、および産出された作文の評価へと拡大し、量的な分析を加えて考察を深める。

5.1　研究課題

研究２では、第二言語としての英語学習者が英語の作文を産出するための準備段階としてのプレライティング・ディスカッション（以下 PWD）を行うにあたり、最適な使用言語は目標言語である英語であるのか、学習者の母語であるのか、または、学習者の持ち合わせる言語資源を自在に使用するトランス・ランゲージング（以下 TL)の状態なのか考察することを目指す。より具体的な研究課題として以下の５点を設定する。

RQ1: 英語による PWD（PWD-E)、学生の母語である日本語による PWD（PWD-J)、TL 状況下における PWD（PWD-TL）のどの条件における PWD がもっとも多く熟議型エピソードを引き出しうるか。またこれらの PWD で熟議型エピソードが見られるとするならば、内容に関わるものと文章の構成に関わるもののどちらが多く見られるか。

RQ2: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も学習者の L2 作文に活用されるのか。

RQ3: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も優れた L2 作文につながるか。

RQ4: PWD における熟議型エピソードの多少は、学習者による L2 作文への PWD の反映に影響するか。また、産出された L2 作文の質に影響するか。

RQ5: 学習者の協働的な学びに対する態度及び英語の運用能力はRQ1〜3の結果にどのように影響するか。

研究１ではプレライティング・ディスカッションの効果について、産出された作文のうち、プレライティング・ディスカッションに基づいて産出された部分の内容語の全体に占める割合、という形で全体的に検討した。これは、プレライティング・ディスカッションの第一義的な機能は、書くべき内容についてのブレインストーミングにあると考えたためである。しかし、観察されたデータの中には、コミュニケーション・ブレイクダウンの場面も見受けられ、より優れた作文の産出に資する部分とそうでない部分が混在していることが示唆されている。そのため、研究２ではより分析を精緻化するために、Newmann and McDonough（2015）に倣い、プレライティング・ディスカッションをより小さな単位（エピソード）に切り分けたうえで協働的なエピソードを熟議型、そうでないものを非熟議型として分類して、どのタイプのプレライティング・ディスカッションが熟議型のエピソードを多く引き出すのか検討したいと考え、RQ１を設定した。

同時に、研究１の、特にトランス・ランゲージングを用いたプレライティング・ディスカッションの中に、文法に関わるメタ言語的なやり取りや、論点の整理など、メタディスコース的なやりとりなど、さまざまな機能をもつやりとりが見られたことを受けて、どのタイプのエピソードが熟議型エピソードの中に多く見られるのか確認したいと考えた。

RQ2及びRQ3は、研究１ではできなかった量的な分析を通じて、母語・目標言語・およびトランス・ランゲージングいずれの条件で行われるプレライティング・ディスカッションがその後産出される作文に反映されやすいのか、さらにより優れた作文の産出につながりやすいのか検討するために設置する課題である。プレライティング・ディスカッションの価値はその定義上、作文への貢献度、及び産出された作文の評価で測られるべきものであるからだ。

RQ2及びRQ3の課題を、RQ1の課題とつなげて総合的に検討するのがRQ4の課題である。この課題では、そもそも本研究においては熟議型エピソードの多少で定義される質の高いPWDがより作文に活用されるのか、また、そうしたPWDはより評価の高い作文の産出につながるのか、という点について検討するものである。

また、プレライティング・ディスカッションは定義上、協働的な学びの形をとるが、学習者の中にはそうした学びの形態を好むものとそうでないものがいる。Newmann and McDonough（2015）は、協働的な学習の意義を認める学習者とそうでない学習者によってPWDの効果が変わり得る点について、次のように指摘している。

> The varying degrees of engagement observed in this study might be at least partially explained by differences in students' beliefs about how beneficial these prewriting discussions are for their own writing. Students who believe that collaborative prewriting discussions are useful may be in a position to exploit the learning opportunities they provide and benefit from them. However, if students do not see how collaborative discussions can improve their individual writing skills, they may be less inclined to participate actively (p.99).

これを受けて、本研究でも協働的な学習に対し肯定的な態度を持っているか、そうでないか、確認し、そのタイプ別の検討が必要であると考えた。同時に、目標言語におけるディスカッションとそうでないディスカッションとの比較を含むこれらの課題の結果には、学習者の目標言語の運用能力が大きく影響することが予測されるため、RQ5 の課題を設定し検討することとした。

5.2　研究の方法

この節では研究２の方法について、研究の参加者、データ収集の方法、およびその分析方法について詳しく述べる。

5.2.1　研究の参加者

本研究に参加したのは、私立大学の国際言語学科の 3 年及び 4 年に在籍し、英語を中心的に学ぶ日本語を母語とする学生 20 名である。研究参加者を 20 名としたのは、最も主要な先行研究である Newmann and McDonough（2015） をほぼ踏襲したものである。Newmann and McDnough （2015）では 19 名（Study1）及び 23 名（Study 2）の参加者を対象に分析している。この数は、ある程度の量的分析を可能にする最低限度の数でありつつ、ディスカッションや産出された作文の詳細な分析が可能な範囲であると同時に、実際の語学のクラスサイズにもほぼ合致している点から本研究にとっても最適のサイズと考えた。

参加者の英語の運用能力は様々で、英語の教員を志望しているものや留学経験を持つものなど、かなり高い運用能力を持つものから、英語に対する学習意欲は持ちつつも、あまり運用能力が高いとは言えない学生まで幅広く参加している。これは、現実の教室環境をなるべく再現することでなるべく教育的示唆に富む結果を導けるよう意図したものである。ただ、本研究は学生の空き時間を利用する形で行われ、講義とは別に時間を割いてくれたものが対象となっているため、すべて英作文に拒否感はなく、自発的に学習することを厭わない、学習意欲の高い学生であったという点で、実際の教室とは異なる。

参加者は研究者の所属大学の研究倫理審査を経てから掲示板で募集し、実際に行うデータ収集のプロセスについて説明会を行ったうえで、書面で同意したものである（北海道文教大学　研究倫理承認番号　30002 : 承諾書の書式は付録２参照のこと）。当初参加を承諾した

学生は 22 名だったが、このうち 2 名はすべてのデータ収集に参加できなかったため、以下の分析では 20 名を対象として行った。

20 名がそれぞれ自発的にペアを組み、そのペアを固定して PWD を行ってもらった。第二言語学習におけるペアの組み合わせについては、第二言語の運用能力が高い者同士、低い者同士で組ませる方が効果が期待できるとする研究や（Kowal & Swain, 1994）高いものと低いもので組ませた方が学習の効果があったとする研究（Storch, 2001）などがあり、研究者の見解は分かれている。本研究ではペアを組むにあたり考慮されるべき最も重要な点は学習者の第二言語運用能力ではなく、学習者同士のインタラクションのありようだ、とする Watanabe（2008）の研究を受け、PWD がスムーズに行えることが最重要であると判断し、英語の運用能力よりも本人同士の相性を優先した。これらの学生には研究の最初の段階で TOEIC の S & W テストを受験してもらい、ライティングとスピーキングの運用能力を確認した。これらの参加者のプロフィールを表 5-1 に示す。ペアの組み方は参加者の自主性にまかせた。結果として、ほとんどの参加者が英語の運用能力が似通ったもの同士で組んだ。例外的なのがグループ 6 で、このペアだけは英語の運用能力が高い学生とかなり低い学生がペアとなっている。また、11-1 はスピーキング力とライティング力が著しく乖離しているという点で例外的な存在である。

表 5-1
研究参加者のプロフィール

ID	グループ	性別	年齢 2018 年 4 月	スピーキング スコア	ライティング スコア	英語圏への留学経験
1-1	1	男	22	50	70	
1-2	1	男	20	70	80	
2-1	2	男	20	90	130	1 ヶ月
2-2	2	男	20	50	120	1 ヶ月
3-1	3	男	20	60	70	
3-2	3	男	20	50	50	
4-1	4	男	23	140	130	1 ヶ月
4-2	4	男	21	130	150	1 ヶ月＋6 ヶ月
5-1	5	男	20	100	100	1 ヶ月
5-2	5	男	20	100	130	1 ヶ月
6-1	6	女	20	120	150	1 ヶ月
6-2	6	女	20	60	10	1 ヶ月
7-1	7	男	22	130	150	1 年間
7-2	7	女	22	130	140	1 年間
9-1	9	男	23	120	150	1 年間
9-2	9	男	20	100	150	1 ヶ月
10-1	10	男	20	110	140	1 ヶ月
10-2	10	男	20	130	140	小学生＋1 ヶ月
11-1	11	女	20	20	150	1 ヶ月
11-2	11	女	20	80	120	1 ヶ月

注：ID の最初の数字はグループ名を示す。グループ 8 は途中で参加を取りやめた。

5.2.2 データ収集の方法

この節ではデータの収集の流れ及びその方法について詳述する。

5.2.2.1 意見文の構成に関わる共通理解

参加者に TOEIC の S & W テストを受験してもらったのち、講義形式で意見文の書き方について確認した。ID 番号 4-1、4-2、7-1、7-2 及び 9-1 以外は所属する大学の新しいカリキュラムでアカデミック・ライティングの講義を必修として受講しており、その中で全員意見文の書き方について経験している。旧カリキュラム生である 4-1、4-2、7-1、7-2 及び 9-1 の学生たちは、必修ではなかったが、自発的に新カリ学生に交じって講義を受講したり、教職課程の中で同様の講義を受けたりしたことがあった。しかし、意見文というジャンルについて全員が同じ理解に立つことを保障するため、また、講義から時間が経過して忘れてしまっている懸念を払しょくするため、1 時間講義を行った。ここでは、基本的にイントロダクションで自分の立場を明らかにし、次に反対意見の論者が持ちうる意見について概要を説明し、それについての明確で強力な反駁を行い、結論部分でまとめる、という、意見文における典型的な構成について共通理解を図った（使用したワークシートについては付録３を参照)。

5.2.2.2 PWD なしでの作文

賛成または反対の立場をとりうる議題を２つ用意し、最初にデータを収集するペアに議論しやすそうなほうを選んでもらった。そのうえで、PWD なしの状態で 40 分間で英語の作文を書いてもらった。作文は PC を使用し、辞書やオンラインツールの使用も認めた。

5.2.2.3 PWD をしたのちの作文

賛成または反対の立場をとりうる議題を二つ用意し、最初にデータを収集するペアに議論しやすそうなほうを選んでもらった。そのうえで、PWD に関する注意事項を与えた後、日本語を用いた PWD をペアで 20 分程度行い、それを録音した。その後 40 分間で英語の作文を書いてもらった。PWD なしの作文同様、作文には PC を使用し、辞書やオンラインツールの使用も許可した。同様の流れで、英語による PWD をしたのちの作文及び TL による PWD をしたのちの作文を書いてもらった。TL による PWD については、先行研究で学習者の慣れが必要であることが示されていたことを受け、事前に 1 度 TL の練習を行った。この練習では、TL とは何か簡単に説明した後、それまでに使用した 3 つの論題を材料に、できる限り英語での PWD を試みつつ、なんらかの困難を感じた場合に母語に切り替えることで議論をし続ける、という形でのディスカッションを行った。母語での議論が進んでいるペアには英語でのディスカッションに戻るよう促し、効果的に TL を使っていると思われるペアには積極的に肯定的なフィードバックをした。学習者自身が TL についてある程度慣れた、という状態になったのち、これまで使用していなかった議題で TL による PWD を練習して

もらった。

データ収集の流れを図式化したものを図 5-1 に提示する。

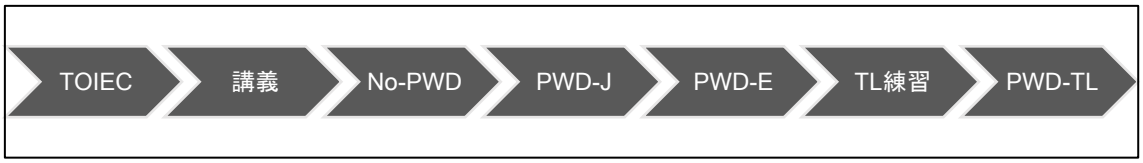


図 5-1
データ収集の流れ

各段階の間には基本的に 1 週間のインターバルを置き、学習者の疲労や慣れなどによって条件ごとに違いが生まれないように配慮しつつ、全体の調査機関が長期にわたることによって学習者の調査以外での場面による学習の効果が研究に影響する可能性をなるべく小さくするよう配慮した。ただし、参加者の事情によって、インターバルが 1 週間以上あいた場合もある。

ライティングの課題については、学習者が最も慣れている形式を用いることとし、賛成・反対の意見が分かれやすいトピックを題材に、自らの意見を根拠を挙げて述べる形式のものとした。これは学習者が在籍する大学のアカデミック・ライティングの講義でも取り上げられる形式であり、かつ、IELTS や TOEFL など多くの検定試験でも用いられている形式である。トピックを選ぶにあたっては、背景知識の多少が産出される作文の出来・不出来に影響を与えることを最小限にとどめるため、なるべく学生の日常生活に関わる題材を選んだ。また本研究のパイロットとして行った Sano（2018）の研究からも、研究者が同程度の難易度と考えて提示した課題であっても、学習者にとっては難しいと感じることがあったことを踏まえ、なるべく学習者の意見を取り入れられるよう、最初に課題を行うグループに 2 つの課題を提示して、どちらか書きやすいほうを選んでもらう方式をとった。最終的に使用されたライティングのプロンプトを以下に示す。

1. Some people argue that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools as a required subject, as well as English. Do you agree or disagree? Use specific reasons and examples to support your response.（以下、Chinese と表記）

2. Some people argue that age limit should be set so that elderly people over a certain age are not allowed to drive. Do you agree or disagree? Use specific reasons and examples to support your response.（以下、Age Limit と表記）

3. Some people argue that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects. Do you agree or disagree? Use specific reasons and examples to support your

response.（以下、SNS と表記）

4. In many countries students have much longer holidays than the ones students in Japan get. Do you think Japanese students should get longer holidays as well? Use specific reasons and examples to support your response.（以下、Holidays と表記）

さらに、課題間の差が研究の結果に与える影響を軽減するため、学習者を二つのグループにわけ、どの条件下でどの課題を行うかという組み合わせを変えた。それぞれの学習者が実際に取り組んだ課題とその条件を表 5-2 に示す。

表 5-2
各グループが取り組んだ課題とその条件

グループ	No-PWD	PWD-J	PWD-E	PWD-TL
1	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays
2	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays
3	Age Limit	Chinese	Holidays	SNS
4	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays
5	Age Limit	Chinese	Holidays	SNS
6	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays
7	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays
9	Age Limit	Chinese	Holidays	SNS
10	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays
11	Chinese	Age Limit	SNS	Holidays

注）グループ 8 はすべてのデータ収集に参加できなかったためデータより除外。当初はグループ 8 及び、最終的に参加を取りやめたもう一つのグループもグループ３と同じ順番で作文を書く予定だった。

また、すべてのデータ収集が終わったのち、協働的な学習に対する志向性を確認するため質問紙を用いたアンケートを行った。これは、先行研究の Newmann and McDonough（2015）において、協働的な学習を好むものと個別の学習を好むものとではその結果に差が出ていることを踏まえたものである。質問紙は Newmann and McDonough（2015）を踏襲しつつ、本研究のために若干の変更を加え、9 件法（1=役に立たない、９＝とても役立つ）のリッカート尺度による 5 つの質問（タスク理解、メインアイディアに関わるブレインストーミング、サポートに入れる内容生成、アイディアの吟味、アイディアの構成、の 5 つのライティングプロセスにおける段階で、どの程度ピアとの協働学習が効果的だったと感じたか）と、3 つの選択式の質問（ 3 つの PWD うち、英語の作文産出において最も有効だったのはどれか、有効性を感じなかったものはどれか、協働的な学習と個人による学習のどちらをより好むか）とその理由に関わる自由記述という構成のものである（実際に使用した質問紙については付録４を参照のこと）。

5.2.3　データ分析の方法

本節では前節で説明した手続きで得られたデータの分析の方法について説明する。

5.2.3.1　研究課題 1 に関わる分析

RQ1: 英語による PWD（PWD-E)、学生の母語である日本語による PWD（PWD-J)、TL 状況下における PWD（PWD-TL）のどの条件における PWD がもっとも多く熟議型エピソードを引き出しうるか。またこれらの PWD で熟議型エピソードが見られるとするならば、内容に関わるものと文章の構成に関わるもののどちらが多く見られるか。

この研究課題に応えるために、まず、3 つの条件下における PWD を内容エピソードごとに区切り、それぞれの内容エピソードが熟議型か非熟議型かについて判定した。

内容エピソード（content episode: 以下 CE）は、Newmann and McDonough （2015）にならって「主たるアイディアとその理由またはサポートからなる学習者のインタラクション」と定義した。具体的には、「あとなんだろうなぁ」や「難しいなぁ」といった、一つの内容についての話がある程度収束し、次の話題に移るための発話が見られたところや、話し合った事柄についてメモを取るためなどのため、5 秒以上の長いポーズがあるところで CE の区切りとした。ただし、5 秒以上のポーズがあっても、ポーズの前と同じ内容について補足を始めている場合などは区切らずに、ひとつの CE とみなした。

さらにこれらの CE を熟議型エピソード（reflective episode）と非熟議型エピソード（non-reflective episode）に分類した。Newmann and McDonough （2015）では熟議型エピソードに、明示的な評価（explicit evaluation)、代替案の検討（consideration of alternatives)、及び理由付け（justification）が含まれるものとし、非熟議型エピソードとはこれらの特徴が含まれないものとしている。言い換えると、相手の考え方に何らかの影響を与えたことが明確なものを熟議型とみなしているといえるだろう。これを受けて本研究では、一方が単に相手の言ったことを繰り返したり、わずかにパラフレーズしたりしているだけの CE や、相手の意見にうなずいているだけの CE は非熟議型とコーディングした。また、単なるプロンプトの確認をしている CE や、お互い疑問を提示し合っている CE、お互いの意見を述べ合っているだけの CE、プロンプトと関係のない話に脱線していった CE 及びお互いの話がかみ合っていない CE についても非熟議型とした。こうした非熟議型の CE とは対照的に、相手の考えに影響を与え合うような CE を熟議型と判定した。ここには、相手の発話によって自分の意見が変容したものに加えて、相手が悩み探している考えを発見して提示するようなものや、もともと相手と同じ意見であっても、それぞれの言葉でパラフレーズし合いながらコンセプトとしてまとめていくようなものなども相手の考えに影響を与えていることを考慮し、熟議型と分類した。

さらに、これらのエピソードで議論された対象についても分析のためにコーディングを行った。Newmann and McDonough （2015）では内容（content）に関わるものと文章構成（organisation）に関わるものに二分する方法がとられていたが、本研究では、構成を意識した内容（organisational content：以下 OC）という項目を加えた。これは Newmann and McDonough

（2015）の Study 1 の研究結果を受けて、構成を意識した PWD になりやすいよう学習者に明示的な指導を行い、ワークシートを活用しながらの PWD を行わせた結果、ライティングに入れるべき内容について話し合う際にもその話題が全体のどの部分に位置付けられているのかを意識したエピソードが多く見られたことによるものである。具体的には、CE の冒頭で、どちらかが「じゃぁ反対意見には何がある？」などのような明示的な発話をしているものを OC と判定した。ワークシートの使い方および、ある内容について否定側・肯定側・現状分析などのうちどの項目に振り分けるべきかなどの議論、ある内容についての立論の根拠やサポートとしての妥当性の吟味などについては、構成として分類した。加えて、本研究では学習者の母語による PWD、目標言語による PWD、またトランス・ランゲージングによる PWD という条件による違いを見るため、語彙に関わる確認をするエピソード（Language:以下 L）及び、プロンプトとは直接関係のないエピソード（Communication:以下 COM）についても判定した。L と COM については性質上[21]すべて非熟議型のエピソードとなった。したがって、PWD の分析については、内容エピソードごとに以下の８種類に分類することになる（表 5-3）。

表 5-3
PWD で表出される内容エピソードの分類

	非熟議型	**熟議型**
内容	NR-C	R-C
構成	NR-O	R-O
構成的内容	NR-OC	R-OC
言語	L	
コミュニケーション	COM	

[21] 語彙の確認については、お互いの意見を出し合って結論を導く熟議型があり得ないわけではないが、本研究の PWD においては辞書使用を認めているため、熟議が必要な場合、つまり意見が分かれるような場合はすぐに辞書による確認に移行している。そのため、本研究の語彙確認に関わるエピソードはすべて非熟議型となった。

以下にそれぞれのタイプのエピソード例を提示する。

表 5-4

R-C の例 【グループ② PWD-J （Age Limit）：エピソード 6・R-C】

ターン	ID	発話内容
1	2-2	まぁふつうに、あれだよね、あと、JR とか電車の売り上げにつながる（笑）
2	2-1	あぁ、たしかにね！うん、いいんじゃない？実際。
3	2-2	売り上げにつながる
4	2-1	いいんじゃない？それ。
5	2-2	健康・・（先に話し合った内容について書きながら）
6	2-1	あ、それ結構大事じゃない？（売り上げのことを指して）わかんないけど
7	2-2	公共交通機関の売り上げ？売り上げ（書きながら）
8	2-1	維持・・できる（書きながら）keep
9	2-2	公共交通機関の経済が回る。経済発展？
10	2-1	あとなんだっけ？経済　そうだね　公共交通（書きながら）
11	2-2	機関の経済が発展する…
12	2-1	そうだね、これ結構大事じゃない？
13	2-2	まぁ確かに結構赤字じゃん　JR とか
14	2-1	うん　（書きながら）増えて…売上 UP（書きながら）
15	2-2	うーん

注：タイトル中のカッコ内はライティング課題の内容を示す。エピソード番号は通し番号で何番目のエピソードであるかを示す。IDは表5-1のIDに対応。以下同様。

この例では、ターン１で新しい内容を提示した時点では、自分の発言に笑っていることから、2-2は自分の思い付きがある意味突飛なものかもしれないと思っているようである。しかし、それに対し2-1がターン2、4、6と肯定的に評価しそれを受けて2-2はターン7でそのコンセプトを「公共交通機関の売り上げ」といったんまとめたのち、「売り上げ」を「経済発展」と言い換えるべきか考えているところにターン10で2-1がさらにそれに同意し、ターン10と11では二人で一つの文を完成させるに至る。ターン13の発話からは2-2が当初は自信が持てなかった自分の思い付きを肯定的に評価しなおしている様子が見て取れる。この対話なしには、2-2は自分の発想を作文に使用できるようなコンセプトまで昇華できなかったかもしれない。また、2-1にとってはこのコンセプトは相手の指摘なしには思いつかなかったものであることから、このエピソードは両者にとって自分の考察を深める働きをしているものとなっている。このようなエピソードを熟議型と捉え、また、その内容が作文に書くべき内容に関わるものの場合R-Cと分類する。

表5-5
NR-Cの例 【グループ⑨ PWD-J （Chinese）：エピソード8・NR-C】

ターン	ID	発話内容
1	9-1	ま、中国語やることでなんか中国の文化に触れて、その理解が深まるとかね。
2	9-2	うーん。
3	9-1	その、関係－中国に対するイメージがもしかしたらよくなるかもしれないね、悪いイメージ持ってる人もいるから。
4	9-2	そうですよね。（沈黙）

R-C の例とは異なり、こちらは、9-1 の提示した内容について、9-2 は同意を示すものの、特に新たな情報を付け加えたり、深める視点を提示するなどのコメントを返したりはしていない。こうしたエピソードを NR-C と分類する。

表5-6
R-OCの例 【グループ① PWD-J （Age Limit）：エピソード6・R-OC】

ターン	ID	発話内容
1	1-2	反対意見なことをいうと、
2	1-1	うん
3	1-2	免許…まぁ、上限つけると、
4	1-1	うん
5	1-2	田舎だと交通網すごい少ないっていうのあるよね。
6	1-1	あー、なるほど？
7	1-2	都会はいいかもしんないけど。
8	1-1	あー
9	1-2	田舎になると…一日に…ほんとに五本指で数えれるくらい　本数しかないところ　ほんとにそういうところあるしょ。
10	1-1	あー便数とかがってこと？
11	1-2	うん
12	1-1	なに、つまり、交通機関がないために必要になるってこと？
13	1-2	少ないっていうか、だから、それで車が必要になるっていう…
14	1-1	あー、交通機関（書きながら）うん。間違えた。あれ、あってんのかな？交通機関…（書きながら）
15	1-2	少ないの（書きながら）
16	1-1	少なさ？少なさ。まぁ、減少だね。
17	1-2	うん。

この例は、ターン 1 で 1-2 がこれが反対意見について考えてみるためのエピソードであることを明確に提示し、1-1 がそれに同意した形で始まる。このように、与えられた課題の賛否両論を吟味する上で、どの部分についての議論なのかを明確に意識しているエピソードを OC と分類する。加えて、このエピソードでは新しい話題を 1-2 が提示する。ターン 3、5、7、9 にかけては 1-2 が主導的に自分の考えを説明しているが、ターン 10、12 では 1-1 が「交通機関」という言葉を提示しながらコンセプトとしてまとめ始め、ターン 16 で「減少」という言葉をさらに提示している。このように協働的な議論を通じて一つのコンセプトが

作られていくエピソードを R-OC と分類する。

表 5-7
NR-OC の例 【グループ⑩ PWD-J （Age Limit）: エピソード 14・NR-OC】

ターン	ID	発話内容
1	10-2	反対派があんまり出てこないな
2	10-1	緊急以外さ、
3	10-2	うん
4	10-1	あんま必要ないと思うんだよね
5	10-2	確かに。
6	10-1	緊急と孫の送り迎え。ほか必要？
7	10-2	うーん。（沈黙）わかんない。
8	10-1	必要性ない。

この例では、ターン 1 で明示されているように、反対意見を出す必要がある点について意識されているため、OC と分類する。しかし、そもそも反対意見が見当たらない、という 10-1 の主張について、10-2 は明確な意見を提示することができず、結果として議論は深まっていない。こうしたエピソードを NR-OC と分類する。

表 5-8
R-O の例 【グループ② PWD-J （Age Limit）: エピソード 10・R-O】

ターン	ID	発話内容
1	2-2	運ぶ、じゃない？（書きながら） これを、はん 潰すのは・・
2	2-1	うーん
3	2-2	XXXX（判別不能）
4	2-1	あとなんだ？
5	2-2	これなんかある？
6	2-1	うん
7	2-2	重いもの運ぶ、の反対
8	2-1	これ、何にした？
9	2-2	え？
10	2-1	これ何？公共交通機関？
11	2-2	対抗するのは・・・若い人に手伝ってもらう（笑）
12	2-1	（笑）
13	2-2	それ言い出したらもう終わりだよね
14	2-1	（笑）それ・・・
15	2-2	重いもの運ぶ、の反対ねー
16	2-1	それなんだ？それじゃ別にアタックしなくていいんじゃない？あえて出さなくて。ライティングの時これだけ出せばいいしょ。

この例は、高齢者の運転免許に年齢制限を設ける、という議題への反論として、「重いものを運ぶ場合に困る」という意見を出したのち、それをどのように反駁できるか考えているエピソードである。反駁として 2-2 が考え付いたのは「若い人に手伝ってもらえばよい」という、簡単な解決策の提示である（ターン 11）が、彼自身その反駁が有効とは思っていな

い様子がターン 13 から読み取れる。それに対し 2-1 はターン 16 で、そもそもその意見に反駁しなければよい、という解決策を提示している。このように、ある意見の反対意見や、予想される反対意見への反駁などについて吟味するエピソードは構成に関わるものとする。さらに、この例のように、二人の学習者が意見を出し合っているものを熟議型とする。

表 5-9
NR-O の例 【グループ④ PWD-J （Age Limit）：エピソード 6・NR-O】

ターン	ID	発話内容
1	4-1	ま、でも「操作ミス」も―、「反応が遅くなる」もー、
2	4-2	うん
3	4-1	要するに事故でしょ？事故。だから、agree の、そうするとこれ全部一個の理由じゃない？
4	4-2	うーん。
5	4-1	これ？Agree の主な理由が、ま、じゃ、だから事故だね。事故につながりやすい。で、その事故につながりやすい原因として、操作ミスとか、あー、とっ 急な反応ができなくなる。が、遅れる。「事故が起きやすい」（書きながら）。

このエピソードは、それまでの議論で挙げられたいくつかの項目が実はひとつの項目の別な側面に過ぎなかったことに気づき、まとめる必要性を指摘したものであるので、構成に関わるエピソードであるといえる。しかし、4-1 が一方的に話し、4-2 はそれに対して納得したともしていないとも言えないようなあいまいな反応をするのみである。こうしたエピソードを NR-O とコーディングした。

表 5-10
L の例 【グループ⑥ PWD-TL （Holidays）：エピソード 11・L】

ターン	ID	発話内容
1	6-1	we waste tuition
2	6-2	Tuition?
3	6-1	Tuition 学費。
4	6-2	あー。

このエピソードでは、6-1 のターン 1 における tuition という単語について 6-2 が理解できない、というキューを出したのに応え、6-1 がすぐに日本語を提示している。PWD-TL の条件でなくても、いわばルール破りの形で PWD-E の中でもこうしたエピソードは起きている。また、PWD-E において英語で説明をしているエピソードや、まれに、ワークシートに日本語で記入しようとして漢字を教えてもらおうとするエピソードなども L としてコーディングした。

表 5-11
COM の例 【グループ⑦ PWD-J （Age Limit）：エピソード 6・COM】

ターン	ID	発話内容
1	7-2	えー、どうなんだろう。めっちゃむずい。こういうのね、決めらんない、あんまり。
2	7-1	（笑）レストラン行ってメニュー決めらんない人？
3	7-2	そう、めっちゃ遅いよ（笑）
4	7-1	（笑）
5	7-2	めっちゃ考えてから、決断だしちゃう、いっつも。（沈黙）

COM と分類されたのは、いわゆる雑談に相当するような、本題とは特に関係ない話題について話しているエピソードである。お互いのコミュニケーションを取り合う中でこうしたエピソードは一定以上存在するのが自然であるが、中には、かなり長い間こうした雑談を続ける場合もある。

これらのコーディングについては、内容エピソードへの切片化のあと、著者がすべてのコーディングを行ったのとは別に、日本語を母語とし、英語教育研究に携わっている研究協力者にそれぞれの条件下の PWD10 本のうち 2 本ずつを分析してもらった。熟議型か非熟議型かについての判定に関する評価者間信頼度（Cohen's coefficient agreement）は、$\kappa = 0.698$、議論の内容についての判定に関する評価者間信頼度（Cohen's coefficient agreement）は、$\kappa = 0.903$ だった。これをうけて PWD の CE に関するコーディングについてはある程度の信頼性が担保できたものとし、以下の分析では著者のコーディングに基づいた計算を行った。これらのエピソードは、5 秒以上の沈黙部分を省いたうえ、秒数でカウントした。

5.2.3.2 研究課題 2 に関わる分析

RQ2: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も学習者の L2 作文に活用されるのか。

プレライティング・ディスカッションがどれほどその後産出された作文に活用されたか、という検討は実際のところ極めて難しい。PWD で表出した言葉をそのまま作文に使用することのみがプレライティング・ディスカッションの作文への活用ではないからだ。最も妥当な検証法としては、研究 1 で行ったような、PWD 後の作文を書き終わった直後に、再びその録音を聞いてもらい、学習者自らが PWD に基づいて産出したテクストの部分を特定する方法であると考えられる。しかし、本研究では一定程度の参加人数を確保するために研究参加者の負担を軽減する必要もあり、この手法を採用することはできなかった。代替手段として用いたのが、佐野・増谷・阿部（2018）で採用した、学習者以外のものによる判定である。以下にその分析方法について詳述する。

まず、PWD で話された内容との関連を分析するにあたり意味的なコンセプトごとの単位が必要になるため、それぞれの条件下で産出された作文をアイディア・ユニット（IU）に分割した。IU とは Kroll （1977) によって話し言葉の分析のために開発された談話分析の単位で、 一つの述語 （relation) と一つ以上の変項 （argument) からなるユニットである。このユニットは佐野・増谷・阿部（2018）でも使用したもので、特に問題が生じていないため本研究でも踏襲することとした。IU の具体的な定義は、原則として Carrel（1982）に従い、副詞節や関係詞節を含む主節および従属節などの主語と述語動詞よりなる節、不定詞句、動名詞句、重要な前置詞句などを一つの IU として数え、埋め込み文・会話文の中も同様にカウントする。「重要な前置詞句」の中には、コンマで区切られているもの、文の構成に関わるディスコースマーカー、分詞を含む句を含めた。IU ごとに区切った文章を以下に例示する。

①According to Facebook on June 2017,/②there are about 2 billion Facebook users in the world./③I suppose /④that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./
⑤There are two reasons for supporting this./⑥First,/⑦people use much time for SNS instead of their life time. /⑧For example, /⑨using SNS till the midnight, /⑩such people can’t sleep well. /

【6-1-E:SNS より抜粋】

注：6-1 は作文を書いた学習者の ID, E は PWD-E の条件で書かれたものであることを示す。
SNS はその課題のテーマを示す。以下同様。

この例では、一般的な節に加え、①と⑧はコンマで区切られる前置詞句、⑥は文の構成に関わるディスコースマーカー、⑨が分詞を含む句ということで独立した IU としてカウントされている。

IU の区切りに関しては、極めて機械的に行いうるため、3 名の評価者で確認した前研究（佐野・増谷・阿部, 2018）においてもほとんどずれがなく極めて高い一致度を見たことをうけ、著者が一人で行った。

そのうえで、それぞれの IU が PWD に基づいて産出されたものと明確に認定できるかどうかについて判定した。コーディングにあたって使用した判断基準は以下の通りである。

1. 基本的にその IU の核となる内容語が PWD で話し合われた内容の場合、その IU は PWD に基づいて産出されたもの（以下、PWD based）とみなす。
2. イントロ部分及び結論にある定型型の自分の意見の表明についてはカウントしない。ただし、本文に述べられた自分の意見を強く反映したり、まとめたりしているようなものについてはカウントの対象とする。
3. ディスコースマーカーや、/I think/のような内容の薄い IU については、その関連する IU が PWD based の場合はカウントに含める。

この判定については、筆者がすべての分析を行ったのとは別個に、前述の研究協力者にそれぞれの条件下の PWD の 2 割にあたる 2 本ずつ（作文はそれぞれ 4 本ずつ）の分析を依頼した。評価者間信頼度（Cohen's coefficient agreement）は κ＝0.737 だったため、一定の信頼性が担保されたものとし、以下の分析は筆者のコーディングに基づいて行った。

5.2.3.3　研究課題 3 に関わる分析

RQ3: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も優れた L2 作文につながるか。

この課題に応えるため、4 つの条件下で書かれた意見文 80 本の質を評価する。評価のためのルブリックとしては、当初プロンプトの形式が近い IELTS のライティングセクションの評価に用いられるものを参考にしようとした。しかし、IELTS で評価対象とされている Task Achievement、Coherence and Cohesion、 Lexical Resource、と Grammatical Range and Accuracy のうち語彙及び文法の誤用については本研究の目的の範囲外になるため検討しない、という方針に従えば、評価の精度が低くなりすぎることが懸念された。そこで、本研究で得られた作文の特徴をよりつかみやすいルブリックを新たに設定することにした。その設定においては、広く用いられているテストを参考にしたいと考えたが、CEFR のルブリックはジャンル別になっていないため、また、TOEFL のような general score だけのルブリックは項目別になっていないため、本研究においてはあまり参考にならない。そこで、2010 年にアメリカで発表された CCSS（Common Core State Standards : 各州共通基礎スタンダード）を参考にすることとした。CCSS の G11-12（大学入学前の学年相当）のライティングセクションでは、argument, informative/explanatory texts と narratives という 3 つのジャンルに対するライティング教育の目標とその評価が提示されている。本研究ではこのうち argument の評価を参考とした。

CCSS は argument の評価項目として以下の 5 点を挙げている。

> CCSS.ELA-LITERACY.WHST.11-12.1.A
> Introduce precise, knowledgeable claim(s), establish the significance of the claim(s), distinguish the claim(s) from alternate or opposing claims, and create an organization that logically sequences the claim(s), counterclaims, reasons, and evidence.
>
> CCSS.ELA-LITERACY.WHST.11-12.1.B
> Develop claim(s) and counterclaims fairly and thoroughly, supplying the most relevant data and evidence for each while pointing out the strengths and limitations of both claim(s) and counterclaims in a discipline-appropriate form that anticipates the audience's knowledge

level, concerns, values, and possible biases.

CCSS.ELA-LITERACY.WHST.11-12.1.C
Use words, phrases, and clauses as well as varied syntax to link the major sections of the text, create cohesion, and clarify the relationships between claim(s) and reasons, between reasons and evidence, and between claim(s) and counterclaims.

CCSS.ELA-LITERACY.WHST.11-12.1.D
Establish and maintain a formal style and objective tone while attending to the norms and conventions of the discipline in which they are writing.

CCSS.ELA-LITERACY.WHST.11-12.1.E
Provide a concluding statement or section that follows from or supports the argument presented.

© Copyright 2010. National Governors Association Center for Best Practices and Council of Chief State School Officers. All rights reserved.

こうした到達目標を念頭に、データ収集前の Phase２で行った復習の内容が反映されるように配慮しつつ、introduction, coherent claim, support, balanced argument, および organisation の５つの項目からなるルブリックの表を作成した（表 5-12）。

各項目は emerging, developing, proficient および advanced の４つのレベルで評価することとし、とくに developing と proficient のレベルの判定は、読んで直接理解できるものを proficient とし、ある程度の inference を必要とするものについては developing とすることにした。評定は筆者に加え、日本の大学でアカデミック・ライティングの指導を経験したことのある英語母語話者の教員に研究協力者として参加してもらい、すべての作文について二人で判定した。評価者間信頼度（Cohen’s coefficient agreement）は Introduction については κ＝0.736、Coherent Claim については κ＝0.808、Support については κ＝0.661、Balanced Argument については κ＝0.807、Organisation については κ＝0.956 であった。すべての作文について二人で判定してあるため、以下の分析では二人の評価者の合計点を得点として使用した。

表 5-12
本研究で作文の評価に使用したルブリック

Criteria	3: Advanced	2: Proficient	1: Developing	0: Emerging
Introduction	The essay has an effective introduction that states the agenda clearly with some explanation about the background of that topic.	The essay has an introduction that states the agenda clearly without much explanation about the background of that topic.	The essay has an introduction that states the agenda but only by using the words and phrases given in the prompt and does not provide any background information related to the given topic.	The essay does not maintain focus on purpose or task.
Coherent Claim	The essay states the writer's claim clearly and maintains the claim coherently. The claim stated in the introduction is clearly stated again in the conclusion, but in different expressions.	The essay states the writer's claim clearly and maintains the claim coherently. The claim stated in the introduction is clearly stated again in the conclusion, but the expressions are repeated.	The essay states the writer's claim but it is vaguely stated, or suffers from incoherence.	The essay does not clearly make a claim, or the claim does not maintain coherence.
Support	The writer's claim is logically supported by enough evidence or explanations.	The writer's claim is logically supported by some evidence or explanations, but the amount of evidence is somewhat scarce.	The essay uses some evidence but may not precisely explain how it supports the claim, or the supports are vague and general.	The essay does not use clear or relevant evidence or reasoning to support the claim
Balanced argument	The essay examines the topic from balanced point of view and examines the both sides of the argument thoroughly, with a clear refutation of the opposing view of the writer.	Counterclaims are acknowledged but may be only generally explained and/or distinguished from the essay's central claim.	Counterclaims are acknowledged but in a confusing manner.	The essay does not address counterclaims.
Organisation	The essay is organized in a logical manner with the use of effective transitional words and phrases that enhances the relationships between and among ideas.	The essay is organized with use of transitional manners, but not in the most logical/effective order. Or, the essay may be organized in a logical manner but only through the use of highly formulaic transitional words (e.g. first, second).	The essay uses a basic organizational structure but relationships between and among ideas may not be consistently clear.	The essay does not have a clear organizational structure and may simply offer a series of ideas without any clear transitions or connections.

作文の評価にあたっては、量的な指標とルブリック評価による質的な指標の両方を組み合わせるのが妥当であるということを Sano, Nakajima, Thomson, Fukukawa, Ikuta, and Nakano（2014）で示した。この研究では、総語数、語彙の多様性、構文の多様性（並列節及び従属節の割合）、及び誤用（語彙、文法及び表記）について、検討しているが、ここでは構文の多様性と誤用については研究の対象外とした。これは、研究 1 で観察したプレライティング・ディスカッションにおいては、学習者たちが PWD 内で構文の多様性や誤用について話

し合う場面が見られなかったためである。これらの項目は、文章産出前に話し合われることはまれで、どちらかというとピア・レビューのような、文章産出後の活動内で話し合われることが自然な流れのようである。そこで、本研究では、主に構成や論理の展開に関わる文章技術についてはルブリック評価で判定し、作文の内容の広がりや深まりについては語彙の多様性の指標を用いることとした。総語数を異なり語数の 2 倍の平方根で割った値、として求められる語彙の多様性の指標は、単純な総語数における異なり語数の率（type-token ratio）とは異なり、産出された総語数も反映されるため第二言語作文の発達の指標としての使用に耐えるとされ（Wolfe-Quintero, Inagaki and Kim, 1998）、Sano et al.（2014）でもその有用性が確認された指標である。従って、本研究では、1）総語数、2）語彙の多様性、そして 3）ルブリックによる質的評価得点の 3 項目によって作文の評価を行う。

5.2.3.4　研究課題 4 に関わる分析

RQ4: PWD における熟議型エピソードの多少は、学習者による L2 作文への PWD の反映に影響するか。また、産出された L2 作文の質に影響するか。

RQ1 でカウントした熟議型エピソードについて、その合計を算出し、全体の平均値よりも多く熟議型エピソードを産出したペアにいた学生を High-reflector 群、そうでない学生を Low-reflector 群として二群にわけ、この二つの群で PWD-based IU 率及び作文評価に差があるか確認した。

5.2.3.5　研究課題 5 に関わる分析

RQ5: 学習者の協働的な学びに対する態度及び英語の運用能力は RQ1～3 の結果にどのように影響するか。

学習者の協働的な学びに対する態度については、アンケートによって調査し、協働的な学習の意義を認める学習者と個人学習を好む学習者に二分し、この両者の間に作文への PWD の活用度及び産出された作文の質における差が見られるか検討する。

また、英語のスピーキング及びライティング力が PWD における熟議型エピソードの表出やその作文への活用、及び産出された作文の質に与える影響については、0 点から 200 点の間の 10 点刻みで提示される TOEIC S & W テストのスピーキング及びライティングスコアとこれらの数値の相関係数を確認する。英語の運用能力の指標として TOEIC の S & W テストを利用したのは、データ収集上の利便性に関わる制約のためである。参加者全員に受験してもらうためには、参加者の都合に合わせて試験日を設定できるタイプの試験であることが必要であったため、IELTS や TOEFL など、より大学生活に近い場面での英語運用能力を

図るテストは利用できなかった。ただし、TOEIC の S & W テストは、4 技能大学入試にも活用できることを想定して開発されており、ETS 公式サイトによれば、特殊なビジネス英語や特定の業界、分野の知識を必要としたり、特定の国の歴史や文化に関連する固有の事象がわからなければ解答できない問題などを含まない、という。この点で、大学生の speaking 力及び writing 力を測定するには問題がないと判断した。加えて、Speaking のテストが約 20 分間、Writing のテストが約 60 分間であって、本研究の構成と大きく変わらないことからも、TOEIC の S & W テストはこの課題の検討における妥当な指標と判断した。

5.3　研究の結果

ここから、研究２で得られた結果について、研究課題ごとに提示する。

5.3.1　研究課題１に関わる結果：PWD のタイプ

研究課題１では、まず熟議型・非熟議型のエピソードがどのタイプの PWD で多く表出されるか検討するため、すべての PWD を書き起こしてコーディングし、そのエピソードの秒数を数えた。グループ④の二人の学習者が英語を用いて産出した PWD を内容エピソードごとに切片化し、熟議型―非熟議型のいずれか、及びその内容についてコーディングした結果を、その概要とともに表 5-13 に例示する（トランスクリプトの例は付録５を参照。また、すべてのグループの PWD につき、その CE の内容及びコーディングとその長さ（秒数）を表にまとめたものを付録６に提示してある）。

表 5-13
英語による PWD で表出されたエピソードの概要、種類及びその長さ（グループ④）

PWD-E ④	熟議型・非熟議型の別	エピソードのタイプ	秒数
いじめ	R	OC	146
スペリング力の低下	R	OC	43
個人情報の漏洩	R	OC	65
「情報の漏洩」	NR	L	17
コミュニケーション上の利便性	NR	OC	199
寂しくない	NR	OC	47
SNS を使わない理由	NR	C	179
否定立論の流れ確認	R	O	98
個人情報漏洩にかんする反駁	R	O	82
いじめに関する反駁	R	O	37
全体像の確認	NR	O	16
議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	25
全体像の再確認	R	O	67
言葉探し	NR	L	90

注：C=内容に関わるエピソード
O=構成に関わるエピソード
OC=構成を意識しつつ内容を検討しているエピソード
L=単語や文法の確認など、言語に関わる検討をしているエピソード
COM=トピックの内容に関係のない、コミュニケーションをとるためのエピソード
R=熟議型エピソード
NR=非熟議型エピソード

この例では熟議型エピ―ソードは合わせて 538 秒､非熟議型エピソードが 573 秒あった。熟議型の内訳は、C は 0 秒、OC が 254 秒、O が 284 秒であり、非熟議型の内訳は C が 179 秒、OC が 246 秒、O が 16 秒、L が 107 秒、COM が 25 秒であった。すべての PWD についてこれらの内容エピソードの長さ（秒数）を種類別に合計した結果を表 5-14 に示す。

表 5-14
PWD で表出されたエピソードの種類とその長さ

	熟議型エピソード				非熟議型エピソード					
	R-C	R-OC	R-O	計	NR-C	NR-OC	NR-O	L	COM	計
1-J	87	286	0	373	109	223	0	0	47	379
1-E	209	0	121	330	109	224	34	94	2	463
1-TL	301	0	0	301	449	0	0	0	49	498
2-J	0	229	71	300	89	56	59	380	0	584
2-E	47	87	0	134	719	25	84	62	46	936
2-TL	356	0	0	356	437	48	0	0	36	521
3-J	373	36	16	425	260	120	40	0	0	420
3-E	82	0	0	82	555	0	0	0	65	620
3-TL	529	86	72	687	415	0	0	8	0	423
4-J	160	438	281	879	37	0	34	0	9	80
4-E	0	254	284	538	179	246	16	107	25	573
4-TL	357	161	0	518	333	173	35	0	31	572
5-J	265	65	0	330	220	190	5	0	5	420
5-E	86	0	0	86	634	0	0	45	0	679
5-TL	696	145	14	855	55	156	49	32	0	292
6-J	296	73	102	471	182	149	68	0	81	480
6-E	147	55	52	254	159	169	9	35	16	388
6-TL	151	0	0	151	505	0	27	122	285	939
7-J	122	171	179	472	235	59	24	8	31	357
7-E	362	0	66	428	194	172	23	0	0	389
7-TL	337	0	328	665	100	173	147	12	32	464
9-J	593	24	0	617	273	14	51	0	14	352
9-E	290	0	0	290	452	139	32	0	0	623
9-TL	307	144	86	537	332	46	128	0	0	506
10-J	310	0	0	310	269	102	9	0	0	380
10-E	336	0	0	336	321	125	0	24	0	470
10-TL	162	0	0	162	425	51	0	33	298	807
11-J	243	147	235	625	109	19	13	0	0	141
11-E	0	0	0	0	191	172	12	21	1	397
11-TL	0	215	0	215	0	249	0	3	0	252

5.3.1.1　それぞれの条件下における熟議型エピソードおよび非熟議型エピソードの長さ

課題１に答えるため、それぞれの条件下における PWD の内容エピソードを大きく熟議型と非熟議型の２つに分類し、その平均を求めた（表 5-15）。

表 5-15
それぞれの条件下で表出された熟議型エピソードの長さの平均

	熟議型		非熟議型	
	M	SD	*M*	SD
PWD-J	480.20	176.937	359.30	144.720
PWD-E	247.80	165.773	553.80	167.267
PWD-TL	444.70	237.739	527.40	204.436

熟議型のエピソードの平均が最も高かったのは PWD-J で、PWD-TL がすぐそれに続き、PWD-E は PWD-J のおよそ半分程度であった。非熟議型エピソードの長さは、PWD-E の時が最も長く、PWD-TL が最も短かった。こうした差について、統計的に有意なレベルであるか検討した。まず、シャピロ・ウイルク検定によって正規性の検定を行ったところ、p=.108 となり、正規分布に従うと判定できたため、一元分散分析を行った。その結果は、$F(2, 57) = 8.156, p = .001$ となり、異なる条件下で行われたプレライティング・ディスカッションにおける熟議型エピソードの差は有意であると認められた。さらに、Tukey 法による多重比較の結果、PWD-J と PWD-E の間及び PWD-TL と PWD-E の間でその差は有意であった（有意確率は順に $p = .001$, $p = .007$）。

非熟議型エピソードは、シャピロ・ウィルクス検定によって正規分布に従わないと判定された（$p = .005$）ため、条件間の差の検定にはクラスカル・ウォリス検定を用いた。その結果、$\chi^2(2, N=60) = 14.006, p = .001$ で、異なる条件下で産出された非熟議型エピソードの長さの差は有意であった。また、すべてのペアごとに事後検定を行った結果、PWD-TL と PWD-J の間の調整済み有意確率が $p = .020$, PWD-J と PWD-E では $p = 0.003$ だったが、PWD-E と PWD-TL の間には有意差は認められなかった。

5.3.1.2　それぞれの条件下で産出されたエピソードの種類

さらに、これらの PWD において産出されたエピソードは、内容にかかわるものや文章の構成に関わるものなど、どのようなタイプのものが多く見られるか確認するため、各条件下の各タイプのエピソードの平均値を求めた（表 5-16）。

いずれの条件下においても、内容に関するエピソード（PWD-C）の平均値が最も長く、次いで構成を意識しながら内容を検討したエピソード（PWD-OC）、そして構成を吟味するエピソード（PWD-O）の順になっている。そのほか、PWD-Cの十分の一以下のごく短

い時間で、文法や語彙について検討するエピソード（PWD-L）と、ごく短い時間、トピックと直接関係のない話をするエピソード（PWD-COM）が見られる。PWD-TLではPWD-COMが他の二つの条件に比して長くなっている。ただしこれはグループ６とグループ10が突出して長くPWD-COMに該当するエピソードを展開していることによるもので、全体的な傾向というわけではない。

表5-16
それぞれの条件下における各種エピソードの平均発話時間（秒）

		PWD-C	PWD-OC	PWD-O	PWD-COM	PWD-L
PWD-J	Mean	423.20	240.10	118.70	18.70	38.80
(*N*=10)	SD	228.292	140.157	108.910	26.230	116.714
PWD-E	Mean	507.20	166.80	73.30	15.50	38.80
(*N*=10)	SD	227.813	137.185	91.859	22.535	37.475
PWD-TL	Mean	624.70	164.70	88.60	73.10	21.00
(*N*=10)	SD	250.112	153.733	146.549	113.451	36.712

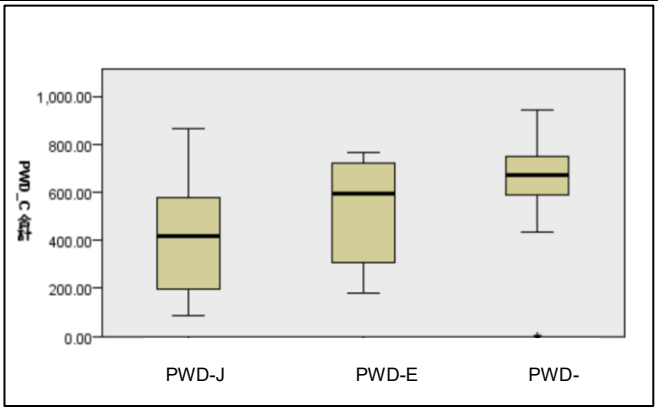


図5-2 各条件下で産出されたPWD-Cの長さ（秒）

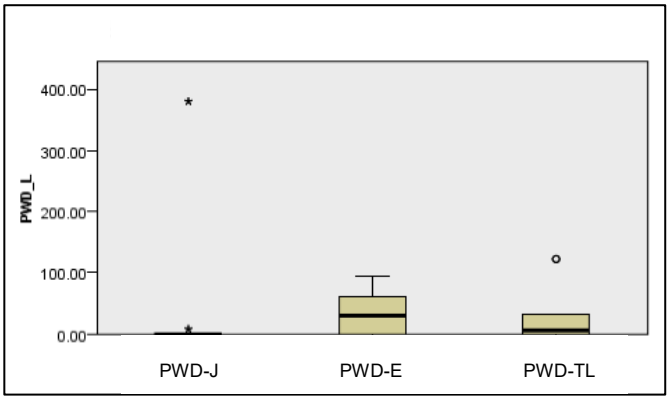


図5-3 各条件下で産出されたPWD-Lの長さ（秒）

こうした差について、統計的に有意なレベルであるかクラスカル・ウォリス検定によって検討した。その結果、PWD-Cはχ^2 (2, *N*=30) = 8.542、*p* = .014, PWD-OCはχ^2 (2, *N*=30) = 3.796, p = .150、PWD-Oはχ^2 (2, *N*=30) = 2.939, *p* = .230、PWD-COMはχ^2 (2, *N*=30) = 2.004, *p* = .367、PWD-Lはχ^2 (2, *N*=30) = 10.512, *p* = .005でPWD-C及びPWD-Lの差のみが有意であった。またすべてのペアごとに事後検定を行った結果、PWD-CではPWD-JとPWD-TLの間の差の有意確率は*p* = 0.021でPWD-TLで産出された内容に関わるエピソードの長さの平均値はPWD-Jに比べて統計的に有意なレベルで長かった。

また、PWD-L では、PWD-J と PWD-E の間の有意確率が $p = 0.007$ だったが、そのほかの組み合わせでは有意差は認められなかった。つまり、言語に関わるエピソードの長さの平均は PWD-J より PWD-E の方が統計的に有意なレベルで長かった。（図 5-2、及び 5-3 にその結果を提示）。

5.3.2 研究課題２に関わる結果：産出された作文へのPWDの活用度

次に、研究課題２に応えるため、学習者が L2 作文にあたり最も反映させるのは PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD か検討するため、各条件下で産出された作文の IU 総数とそのうち PWD に基づいて産出されたとみなし得るもの（PWD based IU）を数えた。IU 総数、PWD based IU 数及び、IU 総数に対する PWD based IU の割合（PWD based IU 率）を比較検討し結果を表 5-17 に示す（産出されたすべての作文を IU ごとに区切り、PWD based か否か判定した結果を付録７にまとめてある）。

この表でみると、1-1 のようにすべての条件下での PWD based IU 率が一貫して低めのものや、7-2 のように一貫して高めの学習者もいるが、そのほかはおおむね条件ごとに PWD based IU 率にはかなりのばらつきがある。従って、この違いは、PWD で話された事柄を活用するのが得意な学生とそうでない学生の差によって生まれているのではないといえよう。

表 5-17
PWD で表出された IU 総数、PWD based IU 数、及び PWD based IU 率

	No－PWD	**PWD-J**			**PWD-E**			**PWD-TL**		
ID	IU	IU	PWD based IU	PWD based IU 率	IU	PWD based IU	PWD based IU 率	IU	PWD based IU	PWD based IU 率
1-1	27	21	6	28.6	22	7	31.8	20	4	20.0
1-2	29	31	13	41.9	23	7	30.4	23	7	30.4
2-1	41	50	31	62.0	54	31	57.4	66	41	62.1
2-2	41	37	25	67.6	34	17	50.0	46	35	76.1
3-1	30	44	18	40.9	34	13	38.2	56	41	73.2
3-2	17	20	15	75.0	19	3	15.8	31	17	54.8
4-1	49	56	49	87.5	69	45	65.2	60	45	75.0
4-2	73	72	49	68.1	82	36	43.9	76	46	60.5
5-1	47	46	30	65.2	44	11	25.0	27	20	74.1
5-2	51	54	36	66.7	38	15	39.5	51	18	35.3
6-1	54	40	25	62.5	42	36	85.7	32	23	71.9
6-2	11	26	12	46.2	24	13	54.2	21	14	66.7
7-1	88	82	65	79.3	100	43	43.0	78	52	66.7
7-2	31	34	26	76.5	52	38	73.1	53	39	73.6
9-1	22	32	30	92.8	39	21	53.8	40	24	60.0
9-2	34	42	32	76.2	45	25	55.6	39	18	46.2
10-1	35	38	18	47.4	39	24	61.5	42	16	38.1
10-2	21	78	32	41.0	45	29	64.4	74	27	36.5
11-1	47	51	29	56.9	59	29	49.2	57	22	38.6
11-2	37	41	31	75.6	45	26	57.8	36	21	58.3

そこで、いずれか特定の言語で行った PWD が学習者にとって活用しやすいのかどうかを検討するため、各条件下における IU 総数、PWD based IU 数及び IU 総数における PWD based IU 数の割合の平均に統計的な差が見られるか検討した。各条件下の平均値を表 5-18 に示す。これらの数はそれぞれの条件において大きな差が見られず、クラスカル・ウォリス検定及び一元分散分析の結果、有意差は認められなかった（シャピロ・ウィルクス検定の結果、PWD based IU 数及びその率は正規分布に従うことが示されたため一元分散分析を採用した。IU 数については正規分布が仮定できなかったためクラスカル・ウォリス検定を用いた。有意確率は IU 総数、PWD based IU 数、PWD based IU 率の順に $p = .009$, $p = .335$, $p = .473$）。検定結果は、IU 数が $\chi^2(3, N=80) = 2.124$, $p = .547$、PWD based IU 数は、$F(2, 57) = .750$, $p = .477$、PWD based IU 率は $F(2, 57) = 2.933$, $p = .061$ である。

表 5-18
各条件下で表出された IU 総数、PWD based IU 数及び PWD based IU 率の平均の比較

		No-PWD ($N = 20$)	PWD-J ($N = 20$)	PWD-E ($N = 20$)	PWD-TL ($N = 20$)
IU 数	Mean	39.25	44.75	45.45	46.40
	SD	18.462	17.262	20.255	18.366
PWD based IU 数	Mean	-	28.60	23.45	26.50
	SD	-	13.998	12.467	13.613
PWD based IU 率	Mean	-	62.931	49.778	55.902
	SD	-	17.3214	16.8642	17.3756

5.3.3 研究課題３に関わる結果：産出された作文

続いて、研究課題３に答え、PWD-E、PWD-N、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も優れた L2 作文につながるか検討するために、それぞれの条件下で産出された作文の語数・語彙の多様性・および導入、主張、論拠、議論のバランス及び構成という 5 つの観点から評価した質的評価得点をまとめ、その結果を表 5-19 に示す。（実際の作文については付録 7 を参照）。

表 5-19

産出された作文の総語数・語彙の多様性と質的評価得点

条件	ID	語数	語彙の多様性	導入	主張	論拠	議論のバランス	構成	合計
PWDなし	1-1	139	4.08	2	3	1	0	2	8
	1-2	168	4.96	1	2	2	0	2	7
	2-1	210	4.68	0	5	4	4	4	17
	2-2	239	5.03	3	6	4	4	4	21
	3-1	192	4.44	3	4	4	1	2	14
	3-2	122	3.97	1	2	3	0	0	6
	4-1	258	5.15	4	6	6	4	4	24
	4-2	388	5.78	6	6	6	2	4	24
	5-1	270	5.55	5	4	3	2	4	18
	5-2	304	6.04	6	4	4	2	2	18
	6-1	299	5.81	4	4	5	2	4	19
	6-2	59	4.05	2	2	2	0	2	8
	7-1	533	5.33	6	6	4	4	4	24
	7-2	229	5.70	6	4	2	2	0	14
	9-1	146	5.38	2	2	4	2	2	12
	9-2	209	4.06	2	4	4	4	4	18
	10-1	201	5.34	4	2	5	0	4	15
	10-2	133	5.46	2	0	0	0	0	2
	11-1	313	5.08	4	6	5	4	4	23
	11-2	252	4.86	2	4	4	4	4	18

表 5-19（続き）

産出された作文の総語数・語彙の多様性と質的評価得点

条件	ID	語数	語彙の多様性	導入	主張	論拠	議論のバランス	構成	合計
PWD－J	1-1	173	4.84	2	4	2	0	2	10
	1-2	183	5.07	2	2	2	0	0	6
	2-1	235	4.98	6	4	5	4	4	23
	2-2	245	4.74	4	4	5	4	4	21
	3-1	227	4.22	2	5	4	0	4	15
	3-2	165	3.58	2	2	2	0	0	6
	4-1	312	5.76	4	6	6	5	4	25
	4-2	402	5.75	5	5	6	6	4	26
	5-1	231	4.93	2	3	4	4	2	15
	5-2	321	5.88	2	4	2	0	4	12
	6-1	255	5.49	4	4	4	4	4	20
	6-2	151	4.14	3	4	4	0	2	13
	7-1	508	5.52	6	6	6	6	4	28
	7-2	203	5.61	5	4	4	4	4	21
	9-1	185	5.09	4	4	4	4	2	18
	9-2	271	4.77	2	6	5	5	6	24
	10-1	204	5.50	2	6	4	0	4	16
	10-2	456	6.39	2	4	5	2	4	17
	11-1	282	5.35	4	6	5	5	4	24
	11-2	216	4.81	2	4	4	4	4	18
PWD－E	1-1	132	4.68	2	4	4	0	4	14
	1-2	131	5.19	1	2	2	0	0	5
	2-1	254	5.19	4	6	6	6	4	26
	2-2	199	4.96	2	2	4	2	2	12
	3-1	192	4.08	2	2	4	0	4	12
	3-2	127	3.70	1	2	2	0	0	5
	4-1	410	5.83	6	6	6	4	4	26
	4-2	429	6.01	5	4	6	4	4	23
	5-1	248	5.48	2	4	5	3	4	18
	5-2	209	6.21	2	2	4	2	2	12
	6-1	245	6.14	3	4	4	4	4	19
	6-2	145	5.17	2	3	4	0	2	11
	7-1	621	6.61	6	6	6	5	6	29
	7-2	291	5.80	4	4	4	4	4	20
	9-1	231	5.07	4	4	4	4	4	20
	9-2	249	4.17	2	4	3	4	4	17
	10-1	198	6.33	2	4	4	2	4	16
	10-2	227	6.10	2	3	4	1	4	14
	11-1	316	5.93	3	6	6	5	4	24
	11-2	261	5.34	2	2	4	2	4	14

注：質的評価の点数は 2 人の評価者による評価の合計

表 5-19（続き）

産出された作文の総語数・語彙の多様性と質的評価得点

条件	ID	語数	語彙の多様性	導入	主張	論拠	議論のバランス	構成	合計
PWD | TL	1-1	114	4.17	2	2	1	0	3	8
	1-2	122	4.74	0	1	2	0	0	3
	2-1	357	5.01	4	6	6	6	6	28
	2-2	225	4.57	2	2	4	2	3	13
	3-1	285	5.28	2	5	4	2	4	17
	3-2	187	5.12	2	2	2	2	0	8
	4-1	286	5.23	2	4	4	0	4	14
	4-2	396	5.44	2	6	4	0	4	16
	5-1	162	5.56	2	2	4	2	0	10
	5-2	304	6.45	2	2	4	0	2	10
	6-1	182	5.50	4	4	4	4	4	20
	6-2	137	4.29	4	4	2	0	2	12
	7-1	436	5.55	4	6	5	5	4	24
	7-2	340	6.02	4	4	5	3	2	18
	9-1	228	5.10	4	4	4	3	2	17
	9-2	248	4.58	2	4	4	4	4	18
	10-1	224	5.34	2	4	4	0	4	14
	10-2	453	6.21	2	3	4	0	2	11
	11-1	298	4.30	4	6	6	4	4	24
	11-2	194	4.67	2	4	4	2	4	16

注：質的評価の点数は 2 人の評価者による評価の合計

どの条件で行った PWD がより評価の高い作文の産出につながったのかを検討するため、各条件下における総語数、語彙の多様性、質的評価の各項目及び合計得点の平均を求め、そこに統計的な差が見られるか検討した。各条件下の平均値を表 5-20 に示す。さらにそれぞれの項目について、グループ間の差が統計的に有意な水準であるか確認するため検定を行った。検定に先立ち、シャピロ・ウィルクス検定によって正規性を検定した結果、語彙の多様性と質的評価点（合計）の二項目は正規分布に従うことが判明した（語彙の多様性：p =.508, 質的評価合計：p =.291）。そのため、これらに二項目については以下の検定には一元配置分散分析を使用し、そのほかの項目は正規分布に従わないため、クラスカル・ウォリス検定を使用した。これらの数はそれぞれの条件において大きな差が見られず、一元分散分析及びクラスカル・ウォリス検定の結果、有意差は認められなかった。

表 5-20

各条件下で産出された語数、語彙の多様性と質的評価の点数の平均値及び標準偏差

		No-PWD (N = 20)	PWD-J (N = 20)	PWD-E (N = 20)	PWD-TL (N = 20)
総語数	Mean	233.20	261.25	255.75	258.90
	SD	104.947	96.855	118.389	100.456
語彙の多様性	Mean	5.0375	5.1210	5.3995	5.1565
	SD	0.64283	0.66387	0.79927	0.63532
質的評価得点（合計）	Mean	15.50	17.90	16.85	15.05
	SD	6.557	6.357	6.651	6.100
質的評価得点（導入）	Mean	3.250	3.250	2.850	2.600
	SD	1.8602	1.4464	1.4965	1.1425
質的評価得点（主張）	Mean	3.800	4.350	3.700	3.750
	SD	1.7351	1.2258	1.4546	1.5517
質的評価得点（論拠）	Mean	3.600	4.150	4.300	3.850
	SD	1.5694	1.3089	1.2183	1.2680
質的評価得点	Mean	2.050	2.850	2.600	1.950
（バランス）	SD	1.6694	2.3005	1.9574	1.9324
質的評価得点（構成）	Mean	2.800	3.300	3.400	2.900
	SD	1.5079	1.4903	1.4654	1.6190

5.3.4 研究課題４に関わる結果：PWDの質とPWD活用度及び作文の質

ここでは研究課題４に関わる結果を提示する。まず、熟議型エピソードの長さとPWDの作文への活用度及び産出された作文の質の関係について、明らかになったことを提示する。その後、熟議型エピソードの中のどのようなタイプのエピソードが最も作文に活用されたのか、また、質の高い作文の産出に貢献したのか、という点についての分析結果を提示する。

5.3.4.1 熟議型エピソードの長さとPWD活用度及び作文の質

RQ1 でカウントした熟議型エピソードについて、その秒数の合計を算出し、全体の平均値よりも多く熟議型エピソードを産出したペアにいた学生を High-reflector 群、そうでない学生を Low-reflector 群として二群にわけ、総語数、語彙の多様性、質的評価得点、PWD based IU 数、及び PWD-based IU 率について平均を求め（表 5-21）、その差が統計的に有意なレベルか検定した。

表 5-21

High-reflectors 及び Low-reflectors が表出した作文の質的評価得点、語彙の多様性、PWD-based IU 数、及び PWD-based IU 率の平均値

	High-reflectors (N=28)		Low-reflectors(N=32)	
	Mean	SD	Mean	SD
総語数	280.32	110.453	239.66	95.461
語彙の多様性	5.4629	0.60020	5.0181	0.72778
作文の質的評価得点（合計）	17.89	5.915	15.47	6.638
PWD based IU 数	30.86	12.892	22.09	12.483
PWD based IU 率	62.144	16.3214	51.006	17.5318

これらの項目についてシャピロ・ウィルクス検定によって正規性を確認したところ、総語数を除きすべて正規分布に従っていることが示された（有意確率は順に p =.000, p =.759, p =.473, p =.335, p =.473）ため、総語数はマン・ホイットニーの U 検定、そのほかは t 検定によって High-reflectors 群と Low-reflectors 群で差が見られるか確認した。その結果、総語数では U =337.000, p =.100 で有意差は認められなかった。語彙の多様性では、t(58)=2.560, p =.013、PWD based IU 数では、t(58)=2.672, p =.010、PWD based IU 率では t(58)=2.535, p =.014 でいずれも 5%水準（両側）で High-reflectors 群の方が有意に高いことが示された。しかし、作文の評価得点（合計）については、t(58)=1.484, p =.143 と、その差は有意とは認められなかった。

5.3.4.2 PWD における各種エピソードの長さと作文の評価及び作文における PWD の活用度

熟議型エピソードの中でも特にどのタイプのエピソードが作文の総語数、語彙の多様性及び質的評価得点と関連しているのか、また、どのタイプのエピソードと PWD の活用度は関係しているのか見るためにこれらの項目と各種エピソードの長さの相関を計算した（表 5-22）。

その結果、質的評価得点は R-OC と弱い相関、R-O と中程度の相関関係にあるが、語彙の多様性はどのタイプとも特に相関しないことが明らかになった。加えて、PWD based IU 数は R-OC と弱い相関、R-O と中程度の相関関係にあり、PWD based IU 率でみると R-O と弱い相関関係にあることが示された。

表 5-22
総語数、語彙の多様性、質的評価得点、PWD-based IU 数、及び PWD-based IU 率と各種エピソードの長さとの相関係数 r (p)

	R-C	R-OC	R-O
総語数	-.012	.182	.378**
	(.925)	(.163)	(.003)
語彙の多様性	.079	.059	.244
	(.547)	(.654)	(.061)
質的評価得点	-.172	.279*	.444**
	(.188)	(.031)	(.000)
PWD based IU 数	.082	.302*	.482**
	(.532)	(.019)	(.000)
PWD based IU 率	.247	.211	.291*
	(.057)	(.105)	(.024)

注：$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

5.3.5 研究課題５に関わる結果：学習者要因

ここからは、研究課題５に関わる結果を報告する。まず、学習者の英語のライティング力及びさスピーキング力がそれぞれのタイプのプレライティング・ディスカッションにおける熟議型エピソードの産出に影響を与えるのか、また、その PWD の作文への活用度や作文自体に影響を与えるのか、分析した結果を報告する。さらに、それぞれの学習者の協働的な学びに対する志向性が熟議型エピソードの産出、PWD の作文への活用度に影響を与えるのか、分析した結果を報告する。

5.3.5.1 学習者の英語運用能力と熟議型エピソードの長さ

産出された熟議型エピソードの長さは学習者の英語運用能力によって影響を受けているのか確認するために、ライティングのスコア及びスピーキングのスコアとの相関係数を計算した。その結果を表 5-23・5-24 に示す。

表 5-23
各条件下の PWD で表出された各種エピソードの長さとライティングスコアの相関係数

Writing score との相関係数 r (p)	全体 (N=60)	PWD-J (N=20)	PWD-E (N=20)	PWD-TL (N=20)
PWD-R	.144	.281	.251	.020
	(p =.272)	(p =.229)	(p =.286)	(p =.933)
PWD-NR	-.101	-.313	.037	-.097
	(p =.443)	(p =.180)	(p =.878)	(p =.683)

注：$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

表 5-23 から明らかなように、ライティングスコアと各種エピソードの長さには全体でも、各条件下でも、統計的に有意なレベルでの相関は見られなかった。スピーキングとの相関で見ると（表 5-24）全体では熟議型エピソードの長さとは r =.319 (p =.013)と、弱い相関がみ

られ、PWD のタイプ別にみてみると、PWD-E においては表出された熟議型エピソードの長さとスピーキングスコアは高い相関関係にあることが示された。

表 5-24
各条件下の PWD で表出された各種エピソードの長さとスピーキングスコアの相関係数

Speaking score との相関係数 r (p)	全体 (N=60)	PWD-J (N=20)	PWD-E (N=20)	PWD-TL (N=20)
PWD-R	.319*	.284	.683**	.207
	(p =.013)	(p =.225)	(p =.001)	(p =.381)
PWD-NR	.021	-.209	-.118	.305
	(p =.872)	(p =.377)	(p =.620)	(p =.191)

注：* $p < .05$, ** $p < .01$

5.3.5.2 学習者の英語運用能力とPWD活用度

次に、学習者の英語のライティング力及びスピーキング力がそれぞれの条件下の PWD の作文産出における活用の度合いに及ぼしうる影響について検討するため、IU 数、PWD based IU 数、及び PWD based IU 率と TOEIC におけるライティングおよびスピーキングのスコアの相関係数を計算した。その結果は表 5-25 及び表 5-26 に示す。

表 5-25
各条件下で表出された PWD based IU 数及び PWD based IU 率とライティングスコアとの相関係数

Writing との相関 r	全体 (N = 60)	PWD-J (N = 20)	PWD-E (N = 20)	PWD-TL (N = 20)
PWD based IU 数	.588**	.645**	.729**	.426
	(p =.000)	(p =.002)	(p = .000)	(p =.061)
PWD based IU 率	.322*	.468*	.524*	.029
	(p = .012)	(p =.038)	(p =.018)	(p =.904)

注：* p < .05, ** p < .01

表 5-26
各条件下で表出された PWD based IU 数及び PWD based IU 率とスピーキングスコアとの相関係数

Speaking との相関 r	全体 (N = 60)	PWD-J (N = 20)	PWD-E (N = 20)	PWD-TL (N = 20)
PWD based IU 数	.574**	.632**	.672**	.443*
	(p = .000)	(p =.003)	(p =.001)	(p =.050)
PWD based IU 率	.399**	.449*	.532*	.241
	(p =.002)	(p =.047)	(p =.016)	(p =.306)

注：* $p < .05$, ** $p < .01$

表 5-25 および 5-26 から読み取れるように、全体として PWD based IU の数はライティング及びスピーキングのスコアと中程度の相関関係にあり、その率は低度の相関関係を示し

ている。PWD の条件別に詳しくみると、PWD based IU 数及びその率は、PWD-J および PWD-E の条件下ではライティングスコアと中程度から高めの相関を見せるのに対し、PWD-TL の条件下においては PWD based IU 数及び PWD based IU 率とライティングのスコアとの相関関係は認められない。この傾向はスピーキングのスコアとの相関においてもほぼ同様で、唯一異なる点は PWD-TL の条件下における PWD based IU 数とスピーキングの相関が中程度見られるという点である。しかし、PWD based IU 率になるとこの相関はライティングスコア同様、統計的に有意なレベルではなくなる。

5.3.5.3　学習者の英語運用能力と産出された作文

学習者の英語のライティング力及びスピーキング力がそれぞれの条件下で産出された作文の評価に及ぼしうる影響について検討するため、総語数、語彙の多様性及び質的評価得点と TOEIC におけるライティング及びスピーキングのスコアの相関係数を計算した。その結果を表 5-27 及び表 5-28 に示す。

表 5-27

各条件下で表出された総語数、語彙の多様性、及び質的評価得点とライティングスコアとの相関係数

Writing との相関 *r*	全体 (*N* = 80)	No-PWD (*N* = 20)	PWD-J (*N* = 20)	PWD-E (*N* = 20)	PWD-TL (*N* = 20)
総語数	.578** (*p* =.000)	.602** (*p* =.005)	.558** (*p* =.011)	.580** (*p* =.007)	.591** (*p* =.006)
語彙の多様性	.578** (*p* =.000)	.664** (*p* =.001)	.737** (*p* =.000)	.574** (*p* =.008)	.391 (*p* =.088)
質的評価得点（合計）	.616** (*p* = .000)	.570** (*p* =.009)	.720** (*p* =.000)	.662** (*p* =.001)	.549** (*p* =.012)

注：* $p < .05$,　** $p < .01$

表 5-28

各条件下で表出された総語数、語彙の多様性、及び質的評価得点とスピーキングスコアとの相関係数

Speaking との相関 *r*	全体 (*N* = 80)	No-PWD (*N* = 20)	PWD-J (*N* = 20)	PWD-E (*N* = 20)	PWD-TL (*N* = 20)
総語数	.476** (*p* =.000)	.355 (*p* =.125)	.515* (*p* =.020)	.539* (*p* =.014)	.507* (*p* =.022)
語彙の多様性	.613** (*p* =.000)	.618** (*p* =.001)	.670** (*p* =.001)	.553** (*p* =.011)	.687** (*p* =.001)
質的評価得点（合計）	.327** (*p* = .003)	.211 (*p* =.372)	.445* (*p* =.049)	.491* (*p* =.028)	.172 (*p* =.469)

注：* $p < .05$,　** $p < .01$

作文データ全体としては総語数、語彙の多様性、そして質的評価得点もともに TOEIC のライティングスコアと中程度の相関を見せ、スピーキングスコアとも、低〜中程度の相関を

見せた。しかしこうした相関は、各条件下において、異なったパターンを見せる。総語数は常にライティングのスコアと中程度の相関を示す。語彙の多様性についてみると、ライティングスコアともっとも高い相関を示しているのは PWD-J の作文で、PWD-TL の条件下で産出された作文については相関関係が見られない。この傾向は質的な評価得点でも似通っていて、ライティングスコアとの相関は PWD-J の条件下で最も高く、PWD-TL では PWD なしの条件よりもさらに低く、最低になっている。スピーキングスコアとの関連で言えば、語彙の多様性はどの条件でも中程度以上の相関を見せるが、PWD なしの状態では総語数及び質的評価得点とスピーキングのスコアの間に相関関係は認められない。また、PWD-TL の状態でも質的評価得点との相関は見られず、PWD-J と PWD-E において中程度の相関が確認された。

5.3.5.4　協働学習への志向性と熟議型エピソードの長さ及び PWD 活用度

それぞれの学習者の協働的な学びに対する志向性が熟議型エピソードの産出、PWD の作文への活用度に影響を与えるのか検討するため、アンケート調査の結果から、協働的な学習に対して肯定的な学生とそうでない学生の 2 群にわけた。協働的な学習よりも個人学習を好むとしたものは 5 名のみ（ID3-1, 5-1, 5-2, 7-1, 及び 9-2）で、残り 15 名は協働的な学習にを好むと回答した。それぞれの表出した熟議型エピソードの長さ及び PWD の作文への活用度に差があるかを検討するため、平均値を比較した（表 5-29）。

表 5-29
協働学習を好む学習者と個人学習を好む学習者が表出した熟議型エピソードの長さと PWD-basedIU 及び PWD-based IU 率の平均値と標準偏差

	協働学習を好むもの		個人学習を好むもの	
	Mean	SD	Mean	SD
熟議型エピソードの長さ（秒）	371.31	203.737	449.67	256.670
非熟議型エピソードの長さ（秒）	486.09	209.035	462.40	130.949
PWD based IU 数	25.20	12.460	29.13	15.720
PWD based IU 率	56.607	17.9662	54.995	17.6104

シャピロ-ウィルク検定の結果、熟議型エピソードの秒数、PWD based IU 数、及び PWD based IU 率はすべて正規分布を仮定できることが示されたため、*t* 検定を行った。その結果、熟議型エピソードについては、$t(58)= 1.207, p =.232$、PWD based IU 数については $t(58)= .990, p =.326$、PWD based IU 率については $t(58)= -.302, p =.763$ と、いずれも有意差は認められなかった。また、正規分布が仮定できなかった非熟議型のエピソードの長さに対してはマン・ホイットニーの *U* 検定を行った。その結果は、$U = 359.500, p =.707$ で、ここでも有意差は見られなかった。

5.4　結果の考察

ここからは、5.3 に提示された結果をもとに、研究課題に対する考察を行う。

5.4.1　研究課題１に関わる考察：PWD のタイプ

RQ1: 英語による PWD（PWD-E)、学生の母語である日本語による PWD（PWD-J)、TL 状況下における PWD（PWD-TL)のどの条件における PWD がもっとも多く熟議型エピソードを引き出しうるか。またこれらの PWD で熟議型エピソードが見られるとするならば、内容に関わるものと文章の構成に関わるもののどちらが多く見られるか。

この項では、上に再掲した RQ1 に対する考察を行う。まず、5.4.1.1 において課題の前段、すなわちそれぞれの条件下における熟議的エピソード及び非熟議的エピソードの長さについて考察し、続く 5.4.1.2 において課題の後段、すなわちそれぞれの条件下で産出されたエピソードの種類について考察する。

5.4.1.1　それぞれの条件下における熟議型エピソードおよび非熟議型エピソードの長さ

5.3.1.1 に示したように、PWD-J で行われたプレライティング・ディスカッションは PWD-E に比べ、そして PWD-TL も PWD-E に比べ、熟議型エピソードが長く、その差は統計的に有意なレベルであった。このことから、学習者の母語である日本語での PWD は、学習者の目標言語である英語での PWD に比べ熟議型エピソードを産出しやすく、反対に英語での PWD は、母語での PWD や、困ったときには母語に頼ることのできるトランス・ランゲージングでの PWD に比べて熟議型エピソードを産出しにくいことが見て取れる。実際の PWD で見られたエピソードを以下に提示し、考察する。

5.4.1.1.1　PWD-J における熟議型エピソード

母語によるプレライティング・ディスカッションでは、熟議型エピソードが多くなる傾向にあった。本研究では、どちらか一方が議論を主導し、それに他方が同意を加えていくだけでなく、二人のやりとりの中で考えが明確化・抽象化されていくようなエピソードを熟議型と定義しているが、次に例示するエピソードはその典型例というべきものである。

表5-30

PWD抜粋1 【グループ⑦　PWD-J （Age Limit）：エピソード16・R-OC】

ターン	ID	発話内容
1	7-1	後も一個くらいほしいね、なんかある？
2	7-2	反対の？サポートとして？
3	7-1	反対、うん。
4	7-2	でも、そのもし、年齢を、決めるってなった時にさ、その、なんていうの。
5	7-1	何歳を基準にするっていうこと？
6	7-2	そう。それむずかしいよね。そのさぁ、人によってそれこそ。ほんと判断力とかさぁ、その、病気の・・・その、に認知症とかさぁ、
7	7-1	うん、
8	7-2	全然、年に関わらずさ、いるわけでさ、
9	7-1	個体差によりけりだから、一概に年では
10	7-2	うん、うん
11	7-1	くくれないってことですかね。
12	7-2	うん。
13	7-1	OK.じゃぁ、正確な年齢を決められないってこと？
14	7-2	そう。（沈黙）
15	7-1	まぁね、70 歳だからって言ったってなんかひふみんみたいなやつもいるしね。
16	7-2	（笑）たしかに！もう、頭めっちゃいい、みたいな（笑）
17	7-1	（笑）（沈黙）

注：タイトル中のカッコ内はライティング課題の内容を示す。エピソード番号は通し番号で何番目のエピソードであるかを示す。IDは表1のIDに対応。以下同様。

このエピソードは、ある年齢に達した高齢者に対しては一律に運転免許証の返納を義務付けるべきだ、という議論への反論の根拠をもう一つ提示しよう、という、議論全体の構成を意識した7-1の発話から始まる。それを受けた7-2が、高齢者の判断力の衰えは個人差が大きく、年齢で決めるのは難しい、という指摘をするのであるが、それは最初から明確な形になっていたわけではなく、7-1とのやり取りの中で明確化していくことがここから見て取れる。ターン４で、「なんていうの。」と7-1に明確化・抽象化のための助けを求め、その後さらにやり取りをしたうえで、ターン9及び11で7-1が「個体差に寄りけりだから、一概に年ではくくれない」という形にまとめ上げる。そのまとめ方に7-2は納得し、同意する。7-1もその後、20秒間の沈黙の間にもう一度自分がまとめ上げた点について考えたうえで、ターン15で同意を示し、「まあね。」という発話して、さらにその主張を裏付ける具体例を提示しており、協働して議論を構築していく様を見て取ることができる。

PWD-Jには数多くこうしたエピソードが見られている。具体例や、明確な形になっていないアイディアを抽象化し、コンセプト化する、という作業は的確な語彙を必要とするため、母語活用のメリットが出やすい部分だと考えられる。

アンケートの回答でも、「どのPWDが最も有効だったか」、という問いに対し、７名のものがPWD-Jを挙げ、その理由として議論の深さや効率の良さを指摘している。次の2-1のコメントは、母語を活用することで内容ばかりでなく文の構成などについても議論できたこ

とを指摘しており、PWD-TLよりもより深く、効率よく議論できたことについて述べている点で興味深いものである。

> 母語でのPWDだと、論題に対してより深いところまでパートナーと議論ができた。内容もそうだが、文の構成などにも、PWDの時に話し合えて、実際にwritingに入るときに、すらすらと書けた。トランス・ランゲージングでも内容については議論できたが、PWDとしては、不十分なままライティングにはいってしまった。

2-1とPWDを行った2-2も、PWD-Jが最も有効なPWDであるとしたうえでその理由を「自分の意見を伝えるときに考える必要がなく、その分内容の議論に時間を多く費やすことができたため。」と提示し、PWD-Jの有効性を強調している。このような、議論を深めるための母語の活用は、多くのバイリンガル教育研究においても指摘されているものである。

5.4.1.1.2 PWD-Eにおける非熟議型エピソード

PWD-J の例とは対照的に、PWD-E では目標言語のみでディスカッションするという条件に縛られ、議論を深められないエピソードが見られた。次のエピソードはその好例である。

表5-31
PWD抜粋2 【グループ① PWD-E （SNS）：エピソード2・NR-OC】

ターン	ID	発話内容
1	1-2	And negative effect…hummm negative effect…（笑） たん、たんごがでてこない あーあーあー んーんーんー単語が出てこない
2	1-1	the lower of…the lower of…あー the lower of academic ability
3	1-2	あーlawyer?
4	1-1	lowers. lower means あー
5	1-2	politic…?
6	1-1	lower means 下がる
7	1-2	Ahh oh...
8	1-1	Lower of academic ability. Academic ability means…
9	1-2	Ummm I think so too.
10	1-1	あーこれどっちだ、まいいや、書くか。

ターン１で1-2が苦しみながら思わず日本語で発話していることにも明らかなように、随意に使えるわけではない目標言語でのディスカッションを強いられた場合、語彙の限界によってディスカッションが制限されてしまう。さらに、このエピソードでは、発音上の問題による誤解も生じ、さらに混乱が進む。ターン2で1-1が言おうとしているのは、SNSを使いすぎることによる学力の低下、という問題であるが、lower というべきところで、ほとんど lawyer に近い発音をしているため、1-1はその論点を理解できない。1-2がこの単語を lawyer と聞き間違ったのはターン５でその意味を「政治的な？」と確認しようとしているところか

らも推測できる。弁護士はもちろん政治家とは異なるが、限られた語彙の中で少しでも近いものを選んだものと考えられるからだ。話がかみ合っていないことを感じた1-1は、本来PWD-Eでは禁じられているにも関わらず、いわば強硬手段としてターン6でTLに踏み切って、自分の発話の意図をなんとか相手に伝えている。ただし、やはりここではあくまでも緊急避難的に使った日本語であるという意識があるためか、この後日本語を活用して議論を深めることはなく、結果として非熟議型のままこのエピソードは終了する。

このPWDに基づき産出された作文では、このエピソードに関係する部分としては1-1はわずか数フレーズ、“First, People suffer from a smartphone dependency, and scholastic ability decline.[sic]” という一文の中で触れただけにとどまり、1-2は言及すらしていない。1-1及び1-2のスピーキングのスコアはそれぞれ50及び70と、本研究の参加者の中では低いほうに位置する。PWD抜粋２の例に端的に示されるように、特にスピーキング力が低い学生は英語のみの使用を強制された場合、熟議型エピソードの産出は減少してしまうことが確認できたといえるだろう。

実際、多くの参加者がアンケートの自由記述に同様の点を指摘している。5-2 は、英語の作文産出に有効ではなかったPWDとしてPWD-Eを上げ、その理由を次のように述べている。

> **自分がもっている意思・考えのすべてをペアと共有するのが難しく、細かな部分の意思疎通がうまく取れなかったがためにライティングにおいて内容の薄いエッセイになってしまったという印象を受ける。「相互理解」という面で非常に苦労した。**

ここにはお互いがもつ言語資源を活用しきれないもどかしさがよく表れているといえるだろう。そうした制限の中で行われたプレライティング・ディスカッションが「内容の薄い」作文の産出につながってしまうという指摘は、目標言語のみで教育しようとする手法に対する警告と捉えることができるだろう。

5.4.1.1.3 PWD-TL における熟議型エピソード（１）・目標言語では深められない議論を深めるための TL

学習者の目標言語のみ、という制限を外し、必要に応じて母語を活用できるPWD-TLでは、運用能力に制約を受けずに議論を深められるため、PWD-Eに比べて熟議型エピソードがでやすくなることが本研究では明らかにされた。PWD抜粋２で議論を深めることに失敗しているグループ①は、PWD-TLでは以下のような熟議型エピソードを展開できている。

表5-32

PWD抜粋3 【グループ① PWD-TL （Holidays）: エピソード7・R-C】

ターン	ID	発話内容
1	1-2	Umm European people, for あ people get, longer vacation, but, because, family spend vacation. So, as a country, maybe European country has a longer vacation, so students only get longer vacation.
2	1-1	うん
3	1-2	umm それだけじゃあんまり意味がない
4	1-1	European country, spending family,
5	1-2	うん
6	1-1	is important.
7	1-2	うん。
8	1-1	So European culture, European vacation is so long.
9	1-2	うん。
10	1-1	But in Japan case, あぁ あまりないと思う。
11	1-2	うん
12	1-1	I think 文化的影響もあると思う。
13	1-2	そう
14	1-1	習慣というか
15	1-2	European people think ah なんだっけ、仕事は悪だ、みたいな。仕事をすることは、やむを得ずやってるっていう理由でやってるだけで…
16	1-1	あぁぁ
17	1-2	日本人は、仕事が大好きっていう…だって。
18	1-1	あぁなるほど。仕事をとるか、家族をとるかってこと？
19	1-2	日本人は貧乏根性が抜けずってことだって（笑）。
20	1-1	あぁーなるほどね。これ、異文化理解で取り上げたほうがいいんじゃないか？
21	1-2	うーん。
22	1-1	これ、フランスすごいね。これフランス、あり得ねぇな、これ。有給休暇 5 週間ってとり放題やん。
23	1-2	5 週間ね。1 か月ちょっと。うーん。たぶん。
24	1-1	えー。
25	1-2	so I think Japanese culture mismatch, so many あ longer holidays
26	1-1	hummm so disagree
27	1-2	でもどうなんだろうなこれ、考えたことない。
28	1-1	Different of culture.
29	1-2	うーん
30	1-1	こういう文化的違い
31	1-2	うん
32	1-1	なんだっけ、cultural difference か。
33	1-2	けど、たぶん、休みすぎると、逆に心配するんじゃない？Worry
34	1-1	あぁ
35	1-2	I don't working, I am OK?みたいな
36	1-1	XXXX （判別不能）
37	1-2	うん
38	1-1	Japanese people's working job is so important
39	1-2	うん
40	1-1	比較的違いはあるかも。

ターン	ID	発話内容（続き）
41	1-2	まぁ過ごし方も違うだろうし…
42	1-1	custom and culture
43	1-1	絶対反対する。

持続時間4分17秒に及ぶ、かなり長いこのエピソードでは、ターン 1 で1-2がかなりまとまった考えを英語で述べ、それに対する反応があまりなかったことから補足説明の必要性を感じたのかターン3ですぐトランス・ランゲージングをしている。それを受けてターン4で今度は1-1が相手の言ったことを再度英語でまとめ直すような発話をし、その後ターン12ではさらにそれを深めるような補足的意見を付け加えていく。新たに加えられた側面に1-1がまた反応し、ターン15ではさらに具体的な説明を補足する、という形で、次々と相手の意見に重ね合わせるようにしてお互いの理解を深め合っていくエピソードになっている。この中で注目すべきは、このグループは、教員からの指示になるべく忠実であろうとしているのか、日本語を活用して議論を深めつつも、なるべく英語でまとめようまとめようという意識が働いている点である。これはどちらか一方のみに見られるのではなく、1-2はターン15や25で、あえて英語での発話を試みているし、1-1もターン32や38など、相手の日本語の発話を受けつつ英語でまとめようとしている。けれどもPWD-Eの時とは異なり、日本語を活用することが認められ、奨励されているPWD-TLの条件下では、存分に日本語を活用しながらお互いの理解を深め合っていく姿がこのエピソードにはよく表れているといえるだろう。

ただし、PWD-TLの場合は、なるべく目標言語を使ってディスカッションしながら、必要に応じて母語を活用することを学習者に求めているため、その母語活用の必要性の判断は実質的に学習者自身に委ねられている。そのため、日本語の使用率がかなり高くなるエピソードもある。次の抜粋にその顕著な例を見ることができる。

表 5-33

PWD 抜粋 5 【グループ⑪　PWD-TL （Holidays）: エピソード 8・R-OC】

ターン	ID	発話内容
1	11-2	うーん
2	11-1	んと、アドバンテージ、で、えーと、if students まぁ　うちらみたいに大学、3 年とかだと、they they get opportunities to internship
3	11-2	うん
4	11-1	and はーん、なんつーんだ？えーと、行けて、なんか仕事の、仕方とかを、勉強する、いい機会になる。
5	11-2	うん
6	11-1	かな？
7	11-2	あ、いろんな
8	11-1	そう、いろんな企業
9	11-2	なんか、経験を、長いほうが
10	11-1	そうそうそう

ターン	ID	発話内容（続き）
11	11-2	よりできる、的な？
12	11-1	したら、自分の適、「あ、これ自分あってるんだ！」みたいな。
13	11-2	うんうんうん
14	11-1	のも、短いとやっぱ、one とか two くらいしか行けないけど、長かったら、
15	11-2	うんうんうんうんうん
16	11-1	XX（判別不能）行けるから、なん、なんつーんだろ、
17	11-2	将来のことを
18	11-1	そうそう、よく
19	11-2	よく考えられる。
20	11-1	Thinking できる。
21	11-2	うんうんうん　thinking 確かに。うん、なんか（つぶやく）（しばらく書く）

このエピソードでは、ターン２で 11-１が英語での議論を展開しようと若干試みたのち、論点が自分自身のスピーキング力の範囲を超えていると判断したためかターン４で日本語に切り替え、それ以降ほとんどの発話が日本語で展開されている。ターン 7 から 21 まではほとんど相手の発話が終わる前に自分の発話を始めるという形で、勢いよく相手の意見に自分の意見を加えたり、同意したりして進められている。このやり取りを通して 11-2 は当初自分の中になかった「長期休暇を活用してインターンシップなどを通じ自分の将来をよく考えることができる」という視点を内在化していく。結果として 11-2 はその作文に 以下のようなパラグラフを書き、インターンシップに参加できるというメリットについても論じている（下線部②）。

> To begin with, students can have many experiences. For example, students can get more many opportunities to meet people at the first time and they can know by themselves well what they didn’t know by meeting people.① Also, students can think their future more deeply like by taking part in many kinds of internship② [sic].
>
> 【11-2-TL: Holidays より抜粋　強調筆者】

11-2 のこのパラグラフの前段、下線部①はもう一つ PWD 抜粋５に続く次のエピソードに由来していると考えられる。

表 5-34

PWD 抜粋 6 【グループ⑪　PWD-TL （Holidays）：エピソード 9・R-OC】

ターン	ID	発話内容
1	11-2	あ、アドバンテージで、なんか　うーん、students can go many place?
2	11-1	うん
3	11-2	and meet many people
4	11-1	あー！
5	11-2	うーん more many people than shorter holiday, so students can なんだろう？なんか、thinking なんか、自分　自分自身についてっていうか
6	11-1	あー
7	11-2	なん　なんていうか　they they think あ、they think by themselves and んー social skill up.
8	11-1	あぁー、おー　確かに（つぶやく）あ、どうか、あれか、人が普段しゃべらない人ともしゃべる機会が増えるから、
9	11-2	うん
10	11-1	自分が気づけなかったことに気づける
11	11-2	うん
12	11-1	機会にもなる
13	11-2	そそそそそ
14	11-1	あぁ、うん
15	11-2	なんか、新しいひと、と、なんかいっぱい
16	11-1	うんうんうん
17	11-2	会う機会が増える
18	11-1	うん
19	11-2	って感じ。（しばらく書く）

このエピソードで興味深いのは、長期休暇のメリットとして「新しい人に出会って視野を広げる機会をもつことができる」点について最初に指摘しているのは11-2でありながら、英語での発話だったためにまとめきれなかったその萌芽的なアイディアを11-1が日本語でまとめ上げている点である。ここでの重要な語に、ターン12で11-1が提示する「機会」という言葉がある。ターン12をうけて11-2は「そそそそそ」と強く同意し、ターン17では自らその語を活用している。ここでの議論は日本語でなされているのだが、前掲の実際の作文を見ると下線部①に、ターン8、10、12で11-1が展開した議論がそのまま反映されているのだ。ここに、プレライティング・ディスカッションにおけるトランス・ランゲージングの利点が凝縮されているとみることができる。

5.4.1.1.4　PWD-TL における熟議型エピソード（２）・議論を整理し明確化するための TL

トランス・ランゲージングの条件下におけるプレライティング・ディスカッションで、熟議型とされたエピソードのもう一つのタイプとして挙げられるのが、議論のポイントを整理し、明確化するために母語を使用しているタイプの TL 実践であった。次の例は、全体的に 9-2 は聞き手に回っているため、一見、非熟議型のような印象を受けるが、ターン 6 では

相手の探している言葉を的確に提示していることから熟議型と判定されている。ターン５で 9-1 は自らのそれまでの発話を再度提示しながらさらに日本語でも簡潔にまとめることでより英文を明確化しようとしているようだ。

表 5-35
PWD 抜粋 5 【グループ⑨　PWD-TL （SNS）：エピソード 4・R-OC】

ターン	ID	発話内容
1	9-1	うーん So positive effects, positive thing of SNS is, we can catch the easily news
2	9-2	at first
3	9-1	うん　but of course there is a fake news on the internet, so, this is a bad negative effect, almost the many news is useful for me
4	9-2	hummm
5	9-1	useful of the internet ah information. だから、沢山ニュース正しいのあるけどその中にちょっと混じってるから、それを見極める力が必要　positive は “You can get any kind of information”.　negative effect… there are some…
6	9-2	some fake news,
7	9-1	yes

SNS は様々な情報を入手する上で有効なツールである反面、入手できる情報は玉石混交であるため、情報を受ける側のリテラシーが求められる、というこの部分の議論は、産出された作文にも明確に反映されている。9-1 の書いた以下の作文の下線部には、この点についての内容がほぼそもままの形でまとめられている。

> [W]e can get many kind of things easily to use SNS. Especially, we can know information, opinions and thinking of people who live all over the world. We try to make use of lot of information to develop our live. And we can communicate with people living all over the world. It effects very much for today’s society. It is important for our lives to connect people and countries nowadays. Probably, Japan cannot survive without connecting other countries. Of cause SNS has some negative effects for us. For example, there are some fake news in the sns. We have to find out the truth by ourselves [sic].
>
> 【9-1-TL: SNS より抜粋・強調筆者】

また、取り上げ方は小さいながら 9-2 も次のようにこの部分を反映した作文を書いた。ここで興味深いのは、9-1 ほど直接的に PWD の内容をなぞる表現を用いているわけではなく、9-1 の発話を受けて彼なりに咀嚼した上でのまとめとみられる意見、すなわち、「SNS の正しい使い方を知らなければ、（SNS の）利点は欠点に変わってしまう」というやや抽象化した議論が提示されている点である。

Actually, SNS causes good effects in our life such as getting information faster or taking communication with many people. But, if user don't know how to use SNS correctly, all of positive effects change negative effects. And I also think people who don't know how to use SNS correctly is increasing because nobody teaches the way to use SNS [sic].

【9-2-TL: SNSs より抜粋・強調筆者】

この例は、García and Kano（2014）で描写されている TL の拡張的な使い方（Emergent bilinguals translanguaging for expansion: pp. 269-270）を思い起こさせるものである。García and Kano（2014）の例では、英単語の類義語を提示する、という課題に際し、日本語を介在させながら英語の類義語を見つけ出す学習者が描写されている。PWD 抜粋５に示された例では、自らの英語の発話をいったん日本語にすることで整理しなおし、もう一度英語に戻すにあたってはよりコンセプトとして昇華された表現にすることができており、拡張的な TL の活用の一例とみることができるだろう。

次に、非熟議型エピソードの長さについてみると、PWD-J と PWD-TL 及び PWD-J と PWD-E の間には統計的に有意なレベルの差があり、ここから、学生の母語を用いた PWD-J の条件下では、非熟議型のエピソードが産出されにくいことが見て取れる。PWD-E で多く見られる非熟議型エピソードについては、すでに 5.4.1.1.2 で詳しく見たため、次の項では PWD-TL に見られる非熟議型エピソードについて考察する。

5.4.1.1.5 PWD-TL における非熟議型エピソード・コミュニケーションを成立させるための TL

PWD-TL で産出された非熟議型エピソードの長さは、PWD-J よりも統計的に有意なレベルで長く、PWD-E での非熟議型エピソードの長さとは統計的に有意なレベルの差が見られなかった。このことから、PWD-TL の中の英語を用いたディスカッションの部分には、日本語に切り替えるまでもないため英語のままで行ったものの、母語によるプレライティング・ディスカッションと同じようには深められない場合も少なくないことが推測される。あまり随意に使えるとまでは言えない第二言語でのディスカッションでは、コミュニケーションとして成立しただけで満足してしまうのかもしれない。たとえば、次の例では、ターン 3 で TL をすることによって相手の理解を得ることはできたが、それだけで終わり、議論は深められないまま終わっている。

表 5-36

PWD 抜粋 6 【グループ⑩　PWD-TL （Holidays）: エピソード 12・NR-OC】

ターン	ID	発話内容
1	10-2	ummmm one more disadvantage is that
2	10-1	uh hum
3	10-2	Ahhh many people ahhh go back to their hometown so you can't see them. Easily. 実家に帰る人多いから
4	10-1	うん
5	10-2	友達と　そんなにあえなくなるよねっていう話。
6	10-1	Ahh, OK OK OK
7	10-2	（笑）
8	10-1	I understand (書き留める)（沈黙）

最も有効ではなかった PWD として PWD-TL を挙げた 7-1 の事後アンケートの自由記述にも、議論を深めきれないままの PWD-TL のデメリットが挙げられている（強調筆者）。

> **文を書くにあたり、最も苦労したのは、英語で自分の考えを表現することですが、TL の場合、考えを深めるための母語ではなく、英語で表現できない際の母語という性質が強かった。そのため、実際に書く際にどう英語で表現しようかを考えなければいけないため、二度手間になってしまう。さらに「英語でなんて言えばいいの？」となる場合は、議論自体も停滞してしまう場合があり、比較的に議論の活発性も欠けるものがあった。**

PWD-TL の有効性を疑問視したのは、7-1 以外にももう 2 名いた。これらの二名は、日本語に頼り過ぎになる点や、ディスカッションの際に英語にできなくて日本語に頼った場合、英語での作文をする際にまた同様の困難に直面する点などを指摘しているが、7-1 のこのコメントは、PWD-TL 自体の限界を示すものとして示唆に富むものである。PWD-TL の条件下で非熟議型エピソードが表出される場合、そのエピソードは、7-1 が指摘するような、議論の活発性に欠けるものになっていることが考えられる。

作文の産出を準備するうえで、ぼんやりとしたアイディアから、明確なコンセプトへと昇華させていく過程では、自らの意味することを明確化・精緻化させる必要がある。認知発達は元来社会的であり、それが次第に個人的なものに内化されていく、とする Vygotsky 的認識に立てば、言語はコミュニケーションの手段としての社会的な機能ばかりでなく、人間の高度な認知活動における極めて重要な媒体（道具）であるとされる。Swain, Kinnear and Steinman（2011）は、こうした理解に立って、Swain（2006）で “the process of meaning-making and shaping knowledge and experience through language (p.98)” と定義した Languaging の概念について以下のように詳しく説明している。

> The concept of languaging is based on Vygotsky's claim that language is one of the most important symbolic systems we have at our disposal in the development and mediation of voluntary actions. Languaging is one of the mechanisms of internalization. But languaging is also a means of externalization: it completes our thought (cognition, ideas) and transforms them into artifacts that allow for further contemplation, which, in turn, transforms thought.（中略）As language is internalized, it provides the means to be free of the immediate present, to master one's problems, to impede impulsive behaviour, to plan, to focus attention, in sum, to master one's own behaviour. Languaging mediates these cognitive (intellectual, higher mental) processes (p.43).

ここに指摘されるように、内化と外化、両方の性質をもつ Languaging に含まれる概念として Swain ら（2011）は collaborative dialogue と private speech について検討している。そのうち特に前者の collaborative dialogue は、 "Dialogue that is knowledge-building. Collaborative dialogue involves at least two persons who co-construct knowledge that may be new for one or both of them (p.150)" と定義されており、本研究の熟議型エピソードと重なる概念である。Swain ら（2011）はこの、collaborative dialogue は、第二言語習得論で言われる negotiation for meaning のための対話とは質的に異なる点を強調し以下のように指摘している。

> During collaborative dialogue（中略）the issue is NOT one of making a message more comprehensible, but rather of building, and building on, what each interlocutor has said to create new knowledge and solve problems. The issue is of "growing the meaning"（p.41・強調は原文のまま）.

さらに Swain ら（2011）はすべてのアウトプット活動が languaging とみなし得るわけではない、という点について、次のように述べる。

> It is important to understand that not all speaking or writing can be considered languaging. Speaking and writing that is routine, that has the special function of passing along a simple message, of being friendly, of showing support, and so on, is not languaging because that language is not being used as a cognitive tool to mediate thinking (pp.43-44).

作文の構想を練ることを目的とした場合、こうした協働的な知の創出の場としてのやり取りを最も効果的に行いうるのは学習者の母語を使用した場合であることが明らかにされた。また、必要に応じて母語を用いるトランス・ランゲージングの条件では、こうした熟議型のエピソードになる場合もあれば非熟議型になる場合もあることが示された。非熟議

型になっているエピソードでは、表面的なコミュニケーションにおける語彙の確認などでとどまっているものが確認されたが、こうしたエピソードはまさにSwainらの指摘する、思考を媒介するための認知的道具としての働きを持たないものであるといえるだろう。

以上、RQ1に対する考察をまとめると、英語によるPWDは日本語によるPWD及びトランス・ランゲージングによるPWDに比べて熟議型エピソードの産出という点で劣ることが明らかになった。目標言語として学習する対象となっている言語は、定義上確実に母語よりも制約される言語である。運用能力の低い学習者にとっては、目標言語によるプレライティング・ディスカッションは制約が大きすぎて、非熟議的エピソードとなってしまうことが少なくないことが確認された。

反対に、必要に応じて母語の活用が許されるトランス・ランゲージングや母語を活用したプレライティング・ディスカッションでは熟議的エピソードが多く産出されることが提示された。とりわけトランス・ランゲージングでのプレライティング・ディスカッションに焦点を当ててみた結果、熟議的エピソードの中には、目標言語では深められない議論を深めるためのTLの例や、議論を整理し明確化するためのTLの例がある一方で、コミュニケーションを成立させるために行われるTLでは非熟議型のエピソードとなりやすいことが示された。学習者自身のコメントからも、これらの結論は裏打ちされていることが示された。

5.4.1.2　それぞれの条件下で産出されたエピソードの種類

次に、RQ1の後段の課題、すなわち、PWD-J, PWD-E, およびPWD-TLそれぞれの条件下で産出されたエピソードの種類について6.1.2で提示された結果について考察する。

ここで検討したエピソードの種類には、内容に関するもの（PWD-C）、構成を意識しながら内容を検討したもの（PWD-OC）、構成を吟味するもの（PWD-O）、文法や語彙について検討するもの（PWD-L）及び、トピックとは直接関係のない話に興じているもの（PWD-COM）の５つがあった。

5.3.1.2に提示されたように、すべての条件下において、もっとも平均値が長かったのはCタイプのエピソードで、OCがそれに続き、3つ目がOタイプだった。PWD-JとPWD-EではLタイプがそれに続き、COMは最も少なかったが、PWD-TLではLタイプよりCOMの方が長かった。PWDの目的を考えれば、内容や構成に関わるエピソードが大半を占め、COMやLのようなタイプのエピソードはごく短い時間であったのは当然の結果であるといえる。Cタイプのエピソードが最も多いという結果については、先行研究のNewmann and McDonough（2015）の結論と重なる部分である。Newmann and McDonough（2015）ではエピソードの数量化にあたり、それぞれのエピソードの秒数で測った長さではなくその数で数えている点、また、本研究では構成を意識しつつ内容を吟味するエピソード（OCタイプ）を新たに設けている点で、分析の手法が異なりはするが、結論の方向性は同様で、彼らの研究のStudy 1では構成に関わるエピソードは産出されず、それを踏まえてより構造化した教

育的介入を行った Study 2 でも圧倒的に内容に関わるエピソードが多い結果になっている。ここからも、学習者同士の PWD においては、構成に関わる議論の産出は内容に関わる議論よりも難しいということが考えられる。

それぞれのタイプのエピソードの長さに関して、条件ごとの差があるか検定したところ、C タイプおよび L タイプのエピソードについて、有意差が認められた。事後検定の結果から、PWD-TL の条件下で産出された C タイプのエピソードは PWD-J で産出されたものに比べて統計的に有意なレベルで長かった。PWD-J における C タイプのエピソードの短さは、OC タイプ（構成を意識しつつ内容を吟味するエピソード）が多かったことに起因していることが考えられる。統計的に有意な差ではなかったが、OC タイプのエピソードは PWD-J で最も長かったためである。また、これも統計的に有意なレベルには達していないが、O タイプのエピソードについても PWD-J で産出されたものが最も多かった。従って、PWD-J の条件下では他の条件に比べ、構成について意識したエピソードが多い傾向にあったということができるだろう。

もうひとつ統計的に有意な差が検出されたのは L タイプのエピソードの長さであった。事後検定より、PWD-J と PWD-E の間に有意差が見られ、PWD-E では PWD-J に比べて言語に関わる発話が多いことが明らかにされた。目標言語である英語だけを使うという制限がある場合、語彙や文法などの確認が必要になる場面が多いのはある意味当然のことであるといえるだろう。ただ、PWD-J において言語に関わるエピソードがあまり出てこないのは、母語でのプレライティング・ディスカッションでは内容や構成に集中することで、言語的な面については意識されていないということを意味するともいえる。内容や構成についての吟味が深まることはディスカッションの質を高めることに寄与する一方で、言語的な面に関する検討がなされない、という点は、PWD の実際の作文への活用度という観点からは負の影響を与える部分もありうる。この点について、次項で検討する。

5.4.2　研究課題２に対する考察：産出された作文への PWD の活用度

前項では、研究課題１に対する考察として、それぞれの条件下において行われたプレライティング・ディスカッションの特徴を概観した。目標言語を使用するPWDでは非熟議型エピソードが多くなり、反対に母語で行う場合や、必要に応じて母語を活用できるトランス・ランゲージングの条件下では熟議型エピソードが多くなることを確認し、特にトランス・ランゲージングのPWDにみられた特徴的な機能について報告した。また、母語によるPWDでは、言語に関するエピソードは少なく、トランス・ランゲージングや英語によるPWDに比べてより構成を意識した議論が多くなる傾向にあることが見出された。

以下に再掲する研究課題の２は、PWDの内容がどれほど産出された作文に反映されているか検討するものである。第二言語作文のプレライティング活動としてのディスカッションについて検討するにあたっては、研究課題１で着目した、そのディスカッション自体の質ばかりでなく、そのディスカッションをどのように目標言語での作文に活用できるの

か、という点も重要になってくる。PWDは、その議論自体がどれほど質の高いものであろうと、作文に活用されなければ価値はないためである。

RQ2: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も学習者の L2 作文に活用されるのか。

この項では、RQ2の研究課題に応えるため5.3.2に提示された結果について考察する。5.3.2では、各条件下で産出された作文のIU総数、そのうちPWDに基づいて産出されたと判定されたIU（PWD-based IU）とその全体における率の平均値を比較したが、全体としては統計的に有意な差は認められなかった。従って、PWD-J、PWD-E、PWD-TLのいずれかが一律にどんな場合でも作文に活用されやすい、ということはないと結論付けられた。

ただし、アンケート調査の結果には、母語によるPWDをもとに英語での作文をするにあたっては、PWD中に言語的な課題に意識を向けていないことから難しさがあった、と述べる学習者も存在した。例えば、最も有効ではないPWDとしてPWD-Jを挙げた11-1は次のようにその理由を説明している。

> **日本語⇒英語の翻訳が大変だから。ライティングの時間に単語を調べたりしないといけないので、ライティングに苦手意識がある人にとっては時間に手間取ってしまう可能性があるかなと思ったから。**

反対に11-1はPWD-TLを最も有効なPWDとして、その理由については次のように述べる。

> **日本語だけだとライティングをするときに英語に翻訳するのが大変。英語だけだと自分の思いをうまく伝えられずディスカッションに息詰まると感じた。トランス・ランゲージングを使うことでスムーズにディスカッションを進められるし、ライティングの構成もしやすいかなと思った。**

PWD-TLの場合は基本的に英語でのディスカッションをするため、実際に作文にするにあたって効率が良いという点でこれを評価する学習者も多く、PWD-TLが最も効果的であるとした学習者11名のうち５名がこの点を指摘している。特に上のコメントはPWD-Jの難しさとPWD-TLの有効性を端的に示したものといえるだろう。

5.4.3 研究課題３に対する考察：産出された作文

前項では、研究課題の２について検討し、PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件のプレライティング・ディスカッションが英語の作文産出に最も活用されるか、という点についての考察を行った。量的な分析からはどの条件もほぼ変わらないことが示されたが、

アンケートの自由記述の回答からはPWD-Jの条件で行ったPWDを英語にする際難しいと感じる学習者も少なくないことを読み取ることができた。

下に再掲する研究課題３では、これらのPWDを経て産出された英語の作文の評価に注目して考察する。

RQ3: PWD-E、PWD-J、PWD-TLのうちどの条件のPWDが最も優れたL2作文につながるか。

本研究では作文の評価を、総語数、語彙の多様性及びルブリックによる質的評価の３つの観点で分析した。ルブリック評価では、１）効果的な導入、２）主張の明確さ、３）その主張を導く説得力のある論拠、４）想定され得る反論に対する反駁、及び５）明確な構成、という5項目について評価し、その合計点を質的評価得点とした。

5.3.3に示したように、これら３つの項目について各PWDの条件ごとに平均の差が見られるか検定したところ、いずれの場合も有意差は見られず、PWD-J、PWD-E、PWD-TLのいずれかが一律にどんな場合でもよい作文の産出につながる、ということはないと結論付けられた。この結果は、PWDをどの言語で行うか、という要因が直接的にそれによって産出される作文の質を決定するわけではないということを示している。しかし、研究課題１に対する検討で見たように、母語でのプレライティング・ディスカッションや、必要に応じて母語を活用したプレライティング・ディスカッションは、目標言語のみの使用に限定されたプレライティング・ディスカッションよりも熟議型エピソードを多く産出できることが示されている。これを受け、次の項では熟議型エピソードの多少がPWD活用度及び産出された作文の質とどのような関係があるか検討し、PWDを行う言語が、PWD活用度や産出される作文の質にどのように間接的に関係するか考察する。

5.4.4 研究課題４に対する考察：熟議型エピソードの長さとPWD活用度及び作文の質

ここまで、PWD-J、PWD-E、 PWD-TLそれぞれの条件のプレライティング・ディスカッションが、①より熟議型エピソードを出しやすいのか（RQ1)、②よりその後産出される作文に活用されるのか（RQ2)、③より評価の高い作文の産出につながるのか（RQ3）ということを個別に検討してきた。その結果、目標言語でのPWDよりも母語でのPWDや必要に応じて母語を使用できる条件での PWD のほうが熟議型エピソードにつながりやすいことが明らかとなったが、作文の活用及びより優れた作文の産出、という点については直接的に特定のPWDの方が有効であることを示す結果は導かれなかった。以下に再掲する研究課題４では、熟議型エピソードが多いプレライティング・ディスカッションがより作文に活用されやすいのか、また、より優れた作文につながるのか検討する。

RQ4: PWD における熟議型エピソードの多少は、学習者による L2 作文への PWD の反映に影響するか。また、産出された L2 作文の質に影響するか。

5.3.4.1 に示したように、熟議型エピソードの長さが平均以上であるものを High-reflectors、そうでないものを Low-reflectors とした場合、PWD-based IU 数及び PWD-based IU 率については High-reflectors 群の方が高いことが示された。この結果は、High-reflectors の方がより PWD を活用して作文を産出できていたことを示唆しており、熟議型エピソードを多く表出できるタイプの PWD、すなわち PWD-J 及び PWD-TL の有用性を間接的に示しているといえるだろう。

産出された作文の語彙の多様性についても High-reflectors のほうが有意に多く産出していることが確認できた。これは PWD-based IU の数及び割合が高かったことと関連していると考えられる。熟議型エピソードで議論した内容は作文に活用したいと思うほど有意義な内容になることが多く、その結果、産出された作文はより多くのコンセプトが含まれることになり、結果として語彙の多様性が高くなった、と考えられるからだ。

その一方で、総語数、及びルブリックを用いて評価された作文の質的評価点については、High-reflectors と Low-reflectors で有意な差は認められず、熟議型エピソードを表出できることがすなわちより長い作文の産出や、導入・主張・論拠・議論のバランス及び構成という５つの観点で判定した際に質が高いと認められる作文の産出に直結するわけではないという結果になった。

また、熟議型エピソードのうち、内容に関わるもの（R-C）、構成に関わるもの（R-O）及び、構成を意識しつつ内容を吟味するもの（R-OC）どのタイプの熟議型エピソードが総語数、語彙の多様性、質的評価点、及び PWD-based IU 数とその率と関連が深いのか見たところ、R-O のタイプのエピソードが質的評価得点及び PWD-based IU 数と中程度の相関関係にあることが示された。5.3.1.2 で見たように、そもそも R-O タイプのエピソードは、どのタイプの PWD にあっても R-C や R-OC よりも短かったことを合わせて考慮すると、より構成に意識を向けさせることがよりよい作文の産出や PWD の活用度を上げることにつながるのかもしれない。

5.4.5 研究課題５に対する考察：学習者要因

前項まで、PWD-J、PWD-E、及び PWD-TL の各条件でのプレライティング・ディスカッションにおける熟議的エピソードの長さと、その作文への活用度及び産出された作文の質に違いがあるか（研究課題１-３）、また熟議的エピソードの長さが PWD の作文での活用度及び産出された作文の質にどのように関係しているのか（研究課題４）についてみてきた。ここまでの議論は、研究に参加した学習者をひとくくりにしてみてきたものであるが、以下に再掲する研究課題５では、学習者の違いによって、これらの PWD の質及び作文での活用度並びに産出された作文に違いがあるのか考察する。

RQ5: 学習者の英語の運用能力及び協働的な学びに対する態度はRQ1〜4の結果にどのように影響するか。

以下、本項では先に学習者の英語の運用能力が諸項目に与える影響について考察し、その後協働的な学びに対して肯定的か否定的かという態度の違いが与える影響について考察する。

5.4.5.1 学習者の英語運用能力と熟議型エピソードの長さ

まず、研究課題1で検討した、各PWDにおいて表出された熟議型エピソードの長さについて学習者の英語運用能力の視点から再検討する。5.3.5.1に示されたように、学習者のライティングの運用能力は、PWDにおける熟議型エピソードの多少に関係していない。これは、当然の結果であるようでいて、実は重要な意味を持つ。もし仮に、学習者のライティング力と熟議型エピソードの長さに相関が認められたとするならば、熟議型エピソードを産出するような力は個々人のもつ知能一般によるものであって、その力が熟議型エピソード産出とライティング力双方に影響を与えていることが考えられるからだ。そうではなかったことから、本研究で論じてきた熟議型エピソードは、あくまでも学習者二人の協働的な学び合いによって生み出されたものであることを確認できるのである。

熟議型エピソードの長さは、全体としては学習者のスピーキングの運用力と弱い相関関係にあった。さらに、条件別にこの相関をみたところ、PWD-Eの条件下ではスピーキングの運用能力と熟議型エピソードの長さに強い相関関係があることが示されている。このことから、PWDを行うにあたり、目標言語のみの使用を強制した場合、運用能力が低い学習者にはその効果が低減することが確認できたといえるだろう。

研究課題4の考察で示した、熟議型エピソードの多少が作文への活用の度合い及び語彙の多様性という側面における作文の質に関係しているという結果と合わせてこの結果を考慮すれば、その重要性はさらに高まる。PWDを目標言語のみで行うよう制限した場合、それはPWDの質の低下のみならず、作文への活用度合い及び作文の質の低下につながることが考えられるからだ。

学習者自身も、目標言語のみの使用に限定されたPWDの有効性に疑問を呈している。本研究に参加した20名の学習者のうち、12名が最も有効とは思えないプレライティング・ディスカッションとしてPWD-Eを挙げ（3名は複数回答）、そのすべてがその理由に自らの英語の運用能力の低さを挙げている。9-2の次のコメントは、その代表的なものである。

> **英語で話そうとするとき日本語で考えてから英語に変えようとするため話し出すのに時間がかかり自分の言いたいことが言えなくなる。意見のシェアが難しくなりディスカッションの内容は深いものではないと感じた。**

様々な運用能力の学習者がいる教室内で、作文指導のためのプレライティング・ディスカッションのあり方を検討するうえでこの結果は重要な示唆に富むといえるだろう。

5.4.5.2 学習者の英語運用能力と PWD 活用度

次に作文への PWD の活用度と学習者の英語運用能力の関係について検討する。5.3.5.2 に示したように、全体としては PWD based IU 数は学習者の英語ライティング力及びスピーキング力と中程度の相関を見せている。つまり、学習者の英語運用能力が高ければ高いほど PWD を作文に活用できたことになる。

しかし、個々の PWD タイプ別にみると、興味深い結果が見出された。PWD-E では PWD-based IU 数及びその率は学習者のライティングスコアと中程度から高い相関を見せ、PWD-J でも PWD-based IU 数は高めの相関をみせるのに対し、PWD-TL ではそうした相関は認められないことである。PWD-based IU 率に限って言えば、同様の結果がスピーキングのスコアとの相関においても確認された。言い換えると、PWD-J や PWD-E の条件にあっては、そもそも英語の運用能力が高い学習者は PWD で話された事柄を作文に活用できるが、PWD-TL の条件ではその活用度は英語の運用能力とは関係がないということである。

例えば、グループ 3 は二人とも英語の運用能力が高くない学習者で、スピーキングスコアもライティングスコアもかなり低いペアである。しかし、以下に提示する通り、3-1 が PWD-TL を受けて産出した作文のある段落には、PWD で行われたディスカッションのうち 3 つものエピソードが活用されていることが見て取れる。

> The third effect is that you connect in the word by using Facebook. The line is only Japan. China or America don't use this tool.① Then Facebook is useful. Many people use Facebook. So When You push the Friend butane, you will increase to a friend.② Sure, SNS is a danger. If you put on the picture, this picture remains to SNS forever ③ [sic].
>
> 【3-1-TL: SNS より抜粋】

下線部①の部分に貢献したと考えられる PWD のエピソードを PWD 抜粋 7 に示す。このエピソードは全体的に 3-1 の発話量が圧倒的に多い。それでもこれが熟議型であると判定されたのは、受け身の聞き手に回っているようでありながら、3-2 はターン 24 で 3-1 が探している語彙を提示するなど、能動的な役割を演じているためである。日本でよく使われる LINE（文中では line と小文字表記になっていることに留意）は他国では使用されていないことから、Facebook の有用性を論じられるという発想に先に至ったのは 3-1 だったが、そこ説明において重要な役割を果たす tool という語彙を提示したのは 3-2 だった。それをうけて、3-1 はその作文でその語彙を活用しているのである。

表 5-37

PWD 抜粋 7 【グループ③　PWD-TL （SNS）：エピソード 10・R-C】

ターン	ID	発話内容
1	3-1	そう　Maybe so many of people
2	3-2	うん
3	3-1	use for SNS, SNS?
4	3-2	um huh
5	3-1	うーん LINE is mail. Instagram is
6	3-2	自慢
7	3-1	自慢大会（笑）
8	3-2	（笑）うん
9	3-1	フフフ、自慢大会なんだ、Facebook is ah connect in the world,
10	3-2	Ah huh
11	3-1	positive effect..
12	3-2	うん
13	3-1	so American people don't use LINE
14	3-2	hum
15	3-1	maybe
16	3-2	うん
17	3-1	だから so Facebook
18	3-2	うん
19	3-1	use many of country
20	3-2	うん
21	3-1	people　あ so contact…communication
22	3-2	hum
23	3-1	this is so communication of なんだろう　system?
24	3-2	ツールじゃね？
25	3-1	tool. そうそうそう。かなー？

さらに、3-1 は下線部②で、PWD 抜粋８に提示するエピソードで話し合った、ワンクリックで友達申請ができるという Facebook の便利さについても言及する（文中では button のスペリングが butane とされていることに留意）。ここでは 3-2 が相手の発言に一定程度の疑義を示し、3-1 がそれに応じるやり取りが含まれている。

表 5-38

PWD 抜粋 8 【グループ③　PWD-TL （SNS）：エピソード 18・R-C】

ターン	ID	発話内容
1	3-1	いや、no, no, no, Facebook is so easy for to connect but so mail I get so mail address?
2	3-2	うん
3	3-1	so Facebook is one click!
4	3-2	ふふふふふ。いや、わかるよ、言いたいことは。
5	3-1	yeah? One click. one click! "Friend" button.
6	3-2	（笑）
7	3-1	（笑）
8	3-2	まぁそうとは限んないからね。
9	3-1	yeah
10	3-2	one click して友達になる？
11	3-1	いや、そうじゃない？
12	3-2	そうなの？知らんけど。
13	3-1	Facebook or…
14	3-2	Facebook 使わないもん

さらに、下線部③については、次に提示するまた別のエピソードから発想を得たことが見て取れる。

表 5-39

PWD 抜粋 9 【グループ③　PWD-TL （SNS）：エピソード 13・R-C】

ターン	ID	発話内容
1	3-2	もうめんどう
2	3-1	早く。Please tell me.　Your opinion. いや。
3	3-2	humm ahhh, コミュニケーションでしょ？（自分に）
4	3-1	communication, or and あ　いいや　あれ、うーんとね、
5	3-2	受信・・・ｘｘｘ（判別不能）
6	3-1	うんちょっと待って、あれ、あれ　just wait, 写真だ、picture
7	3-2	(笑)
8	3-1	so ummm maybe so when I まぁなんていうの？Sent
9	3-2	うん
10	3-1	うーん　so picture
11	3-2	ya?
12	3-1	for the Twitter
13	3-2	うん
14	3-1	so なんつーの　「残る」
15	3-2	うん
16	3-1	internet is so use on the internet あーなんつーの　picture is so
17	3-2	うんまあ　言いたいことはわかる
18	3-1	わかる？ちょっと待って　「残る」　だよ「残る」から、あ、
19	3-2	うん
20	3-1	for example so this picture is so ahh
21	3-2	「悪用」ってことを言いたいの？

ターン	ID	発話内容（続き）
22	3-1	yeah 「悪用」もあるけど　this picture is so… for example so…picture is so Seven Elven picture とか（笑）あるじゃん（笑）
23	3-2	著作権？
24	3-1	著作権。著作権。著作権。そうそうそうそうそう。
25	3-2	あー　何、肖像権の話してんの？
26	3-1	いや、それはちょっと言い過ぎじゃない？
27	3-2	え、だって、人の写真をのっけて誰かが使ったら肖像権違反じゃん。
28	3-1	あぁ。
29	3-2	え、それをいいたいんじゃない？
30	3-1	違う。
31	3-2	（笑）違ったの。
32	3-1	すごく違う。たぶん。
33	3-2	深読みをしてしまった（笑）
34	3-1	インターネットに、
35	3-2	うん
36	3-1	ほら、例えば、一回上げたもの、残るじゃん。
37	3-2	うん。
38	3-1	っていうことを言いたい。
39	3-2	あー。よくも悪くも？
40	3-1	安易なもの
41	3-2	いい写真でも悪い写真でも？
42	3-1	うん、例えば、いや、so I take I take so picture
43	3-2	うん
44	3-1	now
45	3-2	うん
46	3-1	you
47	3-2	うん
48	3-1	so and so I get いや get ではないな
49	3-2	あげるのね
50	3-1	あげてー、so 載せる
51	3-2	うん
52	3-1	so my twitter
53	3-2	うん
54	3-1	so したら、and then, so your this picture, on there 残る
55	3-2	うん
56	3-1	for the internet. じゃない？

このエピソードでは、3-1 が日本語でも英語でもどのように表現すべきかあまりはっきりできていない内容について、若干深読みしながらも 3-2 が様々な語彙を提示しながら明確化していくプロセスが見て取れる。最終的にこの時点で 3-1 は「残る」という日本語を何という英語にすべきか未決のままではあるが、ほぼ英文を完成させるに至っている。

この例は、英語の運用能力が低い学習者であっても TL を活用しながら熟議型エピソードを表出し、それをライティング力の限界はありながらも実際の作文に反映させることができることを端的に示している。PWD のディスカッションで話し合った項目を順に羅列する

のではなく、自分の論理展開に合うように順番を組み替えながらまとめ上げて一つの段落を構成できている点からも、これらのエピソードが意味のあるディスカッションとして深いレベルでこの学習者の思考に影響を与えたことが見て取れる。

反対に、英語の運用能力が高い学習者の中には PWD-based IU 率が低いものも散見する。特にライティング力が高めの学習者は、PWD で話されたことについて、自分なりに言葉を加えてさらに深めながら書くため、結果としては PWD-based IU 率が下がる傾向にある。例えば、11-2 は PWD-TL のあとその作文の中で次のようなパラグラフを書いた。

> Secondly, students can get much money. If students have longer holiday, they can get times to work much longer and can earn much money. Money that they earn use many kinds things such as travel, buying texts and books. It is useful for students' future to get money [sic].
>
> 【11-2-TL:Holidays より抜粋】

これは、次の二つのエピソードを元に書かれた部分だと考えられる。

表5-40
PWD 抜粋 10 【グループ⑪ PWD-TL （Holidays）: エピソード 4・NR-C】

ターン	ID	発話内容
1	11-1	これいいのかな、ちょっとアドバンテージ、で、ん〜と、many students have ちゃう、have, wor, part time job. So if they get long holidays, he ちゃう they can 稼ぐ many much money （笑）
2	11-2	あー（笑）たしかに。

表 5-41
PWD 抜粋 11 【グループ⑪ PWD-TL （Holidays）: エピソード 5・L】

ターン	ID	発話内容
1	11-1	稼ぐってなんていうんだ？（つぶやき）
2	11-2	earn earn みたいな。(しばらく書く）

しかし、11-2はライティング力の高さもあってか、下線部で示された、PWDで直接話した事柄に加えて、なぜ学生にとってお金が重要なのか、という説明を足している。このため、この部分についていえば、全体としては９つあるIUのうち、厳密にPWDに基づいて書かれたIUは５つであって、自分で補足した部分が多くなればなるほどPWD based IU率は下がる。PWD-TLの条件下で書かれた作文のPWD based IU率が、学習者のライティングやスピーキングのスコアと相関関係になかったのは、以上のような様々な活用の方法がPWD-

TLにはあったためと考えられる。

学習者のアンケートの回答にも、それぞれの PWD に対する評価をする上で、自らの英語の運用能力に触れて説明しているものが見られた。例えば、今回の参加者の中で最も運用能力が高いグループに属している 7-1 は、最も有効だった PWD として PWD-J を挙げ、その理由を次のように説明している（強調筆者）。

> PWD を行う時とエッセイを書く時では頭の切り替えが違うから PWD は母語の方が楽。英語で PWD をするとできないこともないけど母語の方が多くの意見が出てくるためエッセイを書きやすい。英語で PWD をしても結局は出てきたフレーズをそのまま使うことも少ないし、母語ほどアイディアも出てこないので、PWD では多くの量のアイディアが欲しいため母語の方がよい。その後、母語の意見をエッセイで英語に訳すことはスムーズにできるから母語が良い。

同時に 7-1 は、有効ではなかった PWD に PWD-E と PWD-TL の両方を挙げて、その理由について次のように述べている（強調筆者）。

> 個人的にライティングは得意だから、エッセイを書くときに苦労はない。ゆえに PWD では多くのアイディアがほしいからスムーズに話が進む母語の PWD の方がよい。英語でも悪くはないが、日本語の PWD には劣る。TL は、切り替えが難しく、あまり役に立ったとは感じなかった。質より量のある PWD がしたいから TL と英語では量を稼げないから、あまり役に立たなかった。

この二つのコメントには、「母語で PWD を行っても、それを英語にする上では困難を感じない」ことが担保されているからこそ、PWD の評価をするにあたり、アイディアがたくさん出せるかという点のみによって判断できる、という自分自身についての理解が表現されている。

反対に、自分の英語能力に自信を持たない 3-2 は、PWD-E と PWD-J の両方を有効でなかったと評価し、その理由についてこう述べた（強調筆者）。

> まず自分は英語能力が低いので英語のみディスカッションでは話し合いにならない。母語だけでやると英語に変換しなくてはいけないのでトランス・ランゲージングの PWD の方がよい。

このコメントは、英語の運用能力が低い学習者にとって、トランス・ランゲージングの PWD が有効である理由を端的に示したものである。PWD-E では主にスピーキング力の制約によって質の高いディスカッションができないことと、PWD-J では主にライティング力の

制約によって、せっかくのディスカッションをうまく作文に反映させられないこと、その二つの課題に応え得るもうひとつのアプローチとして英語運用能力の低い学習者はトランス・ランゲージングを評価している。

5.4.5.3　学習者の英語運用能力と産出された作文

次に、それぞれの条件下で産出された作文の質と学習者の運用能力について検討する。本研究では、総語数、語彙の多様性、及び質的評価得点の３つの観点で作文の質をとらえているが、6.5.1.3に示したように、いずれも全体としては学習者のライティング力と中程度の相関を見せている。これは、ある意味当然のことであって、本研究で参加者のライティング力を測定するために使用したTOEIC S & W testがその目的に照らして妥当なものであったことを示すとともに、本研究のために開発したルブリックや語彙の多様性の指標などが妥当なものだったことを示しているにすぎない。また、そもそもライティングのスコアとスピーキングのスコアはある程度相関する（本研究の参加者においては$N = 20$, $r = .574$, $p = .008$）ため、スピーキングのスコアとも低度～中程度の相関を見せていることも想定される通りである。

しかし、注目すべきは、PWD-TLの条件下では語彙の多様性とライティングのスコアは相関関係にないことである。これはPWD-TLの条件下では、ライティングスコアが低い学習者であっても母語の活用を認められた状態でのPWDを活用できた場合には多様な語彙を使用した作文を産出できたことを示すと考えられる。

また、質的評価得点でみると、No-PWD 及び PWD-TL の条件下ではスピーキング力との相関は見られない。No-PWD ではそもそも PWD を行っていないので、これは特に驚くべき点ではないが、PWD-TL で相関が見られなかった点については、この条件下では語彙の多様性の例と同様、母語も交えて自在に行う PWD がスピーキングスコアの低い学生にも良い効果をもたらしたと推測することができるだろう。

この好例を 2-1 の PWD-TL の条件下で産出された作文に見ることができる。

> In many countries students have much longer holidays than the ones students in Japan get. I think Japanese students should get longer holidays. There are two reasons for that.
>
> First, students are able to do anything what they want to do if students get longer holidays. 【CE3, 12】 For example, if students want to go to many countries, they can do that because they have a lot of time to do what they want to do. 【CE3, 8】 It is not only fun, but also it might be good experience for university students. In university life, students always worry about their future and thinking of job, 【CE8】so touching and getting to know about new culture or countries give university students some hint for future. In addition, if they have long vacation, of course they can study abroad. 【CE1】 It also causes good experience to students. In my experience, I

have experienced studying abroad for one month. 【CE10】My listening skill was improved well, but if I could stay there more longer, 【CE10】 my English skills will more improve. This is one of reasons that students should get longer holidays.

Secondly, if students get longer holidays, they can get more money with part-time job. 【CE15】 Some students pay their tuition by themselves, 【CE15】 so the money will not only consume for playing or hanging out, some students pay their tuition to earn a lot of money while vacation. 【CE15】 Then, they don't need to worry about tuition and concentrate on their study. It is second reason that students need to get longer vacation.

In other hand, some people say if the holiday is for two or three month, students will don't study and scholar will get worse. However, it is easy to solve. If professor give a lot of homework to students, students have to study if they don't want to study. 【CE2】

In short, if students get longer holidays, they can travel many countries and study abroad for long span.【CE1, 8】 In addition, they earn the money to pay their tuition. 【CE15】 Then they will be able to concentrate on their study. That's is why I think students should get longer holidays like other countries [sic].

【2-1-TL: holidays】

注）下線部は PWD-based IU の部分、【　】内の数字は対応する PWD のエピソードの通し番号を示す。

2-1 の TOEIC のスピーキングのスコアは 200 点満点中 90 点で、20 名の参加者の中で 11 番目の成績だったため、スピーキングの成績が特に良い学習者ではない。しかし、ここに見られるように、62.1%に上る IU が PWD-based となるほど PWD の内容を十分に活用することで合計 26 点（満点は 30 点）という高い質的評価得点を得ている（内訳は、導入 4 点、主題 6 点、論拠 6 点、バランス 6 点、構成 4 点）。また、多くのエピソードを活用することによって幅広い話題をカバーし、語彙の多様性も向上していると考えられる。実際ここで活用されたエピソードはすべて、多少の英語の単語が用いられているもののほとんど日本語で行われたもので、TL の条件を最大限に活用した例とみることができる。繰り返し活用されているエピソード 15 を以下に例示する。

表 5-42

PWD 抜粋 12 【グループ② PWD-TL （Holidays）：エピソード 15・R-C】

ターン	ID	発話内容
1	2-1	うん part time job とか。
2	2-2	できる？
3	2-1	うん。
4	2-2	あーそだね、お金稼げるからね。
5	2-1	あぁ、いいじゃん。
6	2-2	まぁ平日に行きたくない・・
7	2-1	明日 だから、うん、
8	2-2	（笑）
9	2-1	So if students pay 学費
10	2-2	うーん
11	2-1	by themselves
12	2-2	なるほどね
13	2-1	That's not part time job

このエピソードに至るまでにこの二人は、現状の休暇でも十分に長いことや、長い休暇を有意義に活用できるか否かは人による、という点を指摘し、日本の大学でももっと長い休暇を与えるべきである、という論題に対して否定的な見方を提示している。その反対側の意見、すなわち肯定的な視点としては留学や旅行に行きやすくなるメリットを挙げたのち、他に何かないか考えながら二人ともアイディアが出ないまま 45 秒沈黙している。その沈黙を経て、2-1 がアルバイトの可能性に思い当たり、ターン 1 で発話するが、そこに 2-2 はすぐに反応して「できる？」と 2-1 の発話を完成させる形で同意を示す。ターン 5 で 2-1 がそもそも自分で思いついた点であったにも関わらず「あぁ、いいじゃん」と同意しているのは、この論点の明確化が二人の協働作業によって作り上げられていったことを示していると考えられるだろう。ターン 6 で 2-2 は、長期休暇でなくてもアルバイトはできる、という想定される反論に対してのディフェンスも提示し、二人が納得したところで、2-1 がアルバイトの意義を強めるために、これが学費という、重要な目的のためにされることがある点を追加するのである。この流れからすればターン 13 の 2-1 の発話は、おそらくは学費目的のために行うアルバイトは一般的に学生が行う遊ぶお金を手に入れるためのアルバイトとは一線を画していることを指していると考えられる（産出された作文にも “Some students pay their tuition by themselves, so the money will not only consume for playing or hanging out, some students pay their tuition to earn a lot of money while vacation.”とあることからも推測できる：強調筆者）。

このエピソードでは、二人がアイディアを出し合ってまとめ上げていく様子を見ることができ、まさに熟議型エピソードの典型例であるといえるが、ここでは、その発話のほとんどが日本語で行われている。

このように、英語のスピーキング力があまり高くない学習者にとっても、活用しうる熟議型エピソードが表出できれば良い作文を書く助けになるのが、PWD-TL だとみることができる。

5.4.5.4　協働学習への志向性と熟議型エピソードの長さ及び PWD の活用度

前項では、学習者の英語運用能力が、PWD における熟議型エピソードの長さ、PWD の活用度、及び産出された作文の評価とどのような関係にあったかを検討した。PWD-E では学習者の英語スピーキングのスコアと熟議型エピソードの長さには高い相関関係が見られ、そもそもスピーキング力の高い学生に資するものであることが示唆された。また、PWD-J 及び PWD-E ではライティングのスコアが高い学生が PWD を作文に活用しやすいことが示され多一方で、PWD-TL ではライティング及びスピーキングのスコアと PWD 活用度に相関関係は認められず、様々なレベルの学習者に資するものであることが示唆された。

実際に産出された作文の評価との関係についてみると、PWD-TL に限って言えば、学習者のライティングスコア及びスピーキングスコアとこの研究で産出された作文の質には相関関係は見られず、ライティングが苦手な学生であっても質の高い作文を産出できたことが示された。

この項では、学習者が協働的な学習を好むか、それとも個人で勉強するほうを好むか、それによって熟議型エピソードの産出や PWD の活用の仕方に差はあるのか、検討する。これは、先行研究の Newmann and McDonough（2015）で、協働的な学びに対する志向性の差が PWD への積極的な参加に影響を及ぼした可能性が指摘されていることを受けたものである。

しかし、5.3.5.4 に示した通り、本研究に参加した学習者は、協働的な学習を好むか否かという学習スタイルの差によって熟議型のエピソードの多少や PWD の作文への活用度に影響があるということはなかった。

ただし、本研究の参加者は自発的な意思をもってこの研究に参加した者たちであり、この結果についてはあくまでも全員が積極的にこうした課題に取り組むという、ある意味例外的な環境でのことであることに留意する必要がある。学習者によっては協働的な学びのスタイルに抵抗感をもつものもいることは忘れてはならない。多様な学習者がいる中で行われる教育実践の場においては、Storch（2005）の取り組みのように、学習者に協働的な学びに参加するか個別で課題に取り組むか選択の余地を残すことが考慮されるべきである。

5.5　研究２のまとめ

本章では 20 名の学習者を対象に、母語による PWD、目標言語による PWD、及びトランス・ランゲージングによる PWD を行ったうえで英語の作文を産出した場合、１）どのタイプの PWD が質の高い議論につながるのか、２）どのタイプの PWD がもっとも作文に活用されるのか、そして３）どのタイプの PWD が最も質の高い作文の産出につながるのか検討するため行った研究２について報告した。研究２で検討した課題は次の５つである。

RQ1: 英語による PWD（PWD-E）、学生の母語である日本語による PWD（PWD-J）、TL 状況下における PWD（PWD-TL)のどの条件における PWD がもっとも多く熟議型エピソードを引き出しうるか。またこれらの PWD で熟議型エピソードが見られると

するならば、内容に関わるものと文章の構成に関わるもののどちらが多く見られるか。

RQ2: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も学習者の L2 作文に活用されるのか。

RQ3: PWD-E、PWD-J、PWD-TL のうちどの条件の PWD が最も優れた L2 作文につながるか。

RQ4: PWD における熟議型エピソードの多少は、学習者による L2 作文への PWD の反映に影響するか。また、産出された L2 作文の質に影響するか。

RQ5: 学習者の協働的な学びに対する態度及び英語の運用能力は RQ1～3 の結果にどのように影響するか。

課題１については、PWD-E において表出された熟議的エピソードは PWD-J 及び PWD-TL よりも短かったことなどから、質の高いプレライティング・ディスカッションにおける母語の重要性が提示された。さらに質的な分析の結果、PWD-TL でのプレライティング・ディスカッションの中には、目標言語では深められない議論を深めるための TL や議論を整理し明確化するための TL が見られ、エピソードが熟議的なものになるための貢献を果たしている一方で、非熟議的エピソードの中には単にコミュニケーションを成立させるための TL が見られるなど、多様なものが存在することも提示されている。加えて、エピソードの中の３つのタイプ、すなわち内容に関わるエピソード、構成に関わるエピソード、構成を意識しつつ内容を吟味するエピソード、言語に関するエピソード及びコミュニケーションのためのエピソードがそれぞれのタイプの PWD にどのように表れるか分析した結果からは、構成に関わるエピソードは PWD-J に多い傾向が見られ、言語に関するエピソードは PWD-E に多いことが報告された。

課題２及び課題３については、どの言語で PWD を行ったか、ということは、PWD の作文への活用度や、産出された作文の評価に直接的な影響を与えていないことが明らかになった。しかし、課題４で、熟議型エピソードの多いプレライティング・ディスカッションは、１）PWD の作文への活用度が高いこと、２）語彙の多様性という側面からみる作文の評価は高いことが明らかにされた。その一方で、３）熟議型エピソード全体の量と作文の質的評価得点との間には特に関係は見られなかった。ただし、４）熟議型エピソードのうち、特に構成に関わるものの長さと PWD 活用度及び産出された作文の質的評価得点には中程度の相関関係があることが示され、構成に関わる熟議型エピソードが含まれるタイプのプレライティング・ディスカッションは作文産出に貢献していることが示された。

課題５については、学習者の英語運用能力が、PWD における熟議型エピソードの長さ、PWD の活用度、及び産出された作文の評価とどのような関係にあったかを検討した。その結果１）学習者の英語ライティングのスコアは、全体としては熟議型エピソードの多少には影響しない、２）学習者の英語スピーキングのスコアは、全体としては熟議型エピソードの多少と弱い相関関係がある、ただし３）PWD タイプ別に確認した場合、PWD-E ではスピーキングスコアの高いほうが熟議型エピソードを産出するが PWD-J 及び PWD-TL ではそうした関係は認められないことが提示された。

PWD の作文への活用度に関してみると、４）学習者の英語ライティングのスコアは、全体として PWD への活用度に中程度の相関を見せる、５）とりわけ、PWD-J 及び PWD-E では高めの相関を見せるが PWD-TL においてはそうした相関はみられないこと、６）PWD-based IU の率に関して言えば学習者のスピーキングのスコアも同様の傾向を見せることが提示された。

実際に産出された作文の評価との関係についてみると、７）当然ながら学習者のライティングのスコアは産出された作文の評価と中程度以上の相関を見せるものの、８）PWD タイプ別にみた場合、PWD-TL で産出された作文の語彙の多様性は、学習者のライティングスコアとの相関をみせないこと、また、１０）そもそもスピーキング力とライティング力がある程度相関するため、学習者のスピーキングスコアと産出された作文の評価もある程度の相関関係を示すが、１１）PWD タイプ別にみた場合、PWD-TL で産出された作文質的評価得点は、学習者のスピーキングスコアとの相関をみせないことが提示されている。

また、学習者が協働的な学習を好むか、それとも個人で勉強するほうを好むか、という協働学習への志向性については、熟議型のエピソードの多少や PWD の作文への活用度に影響していなかった。

第６章　総合考察

6.1　本研究の要約

ここまで、第二言語としての英語作文にあたり日本語を母語とする学習者がどのように母語によるプレライティング・ディスカッション、目標言語によるプレライティング・ディスカッション、そしてトランス・ランゲージングによるプレライティング・ディスカッションを行うのか（研究１）観察し、さらにそうしたプレライティング・ディスカッションにはどのような特徴があるのか、どのように作文に活用されるのか、そしてそれによって産出された作文の質はどのようなものであるのか（研究２）検討してきた。これらの研究課題の考察の中で明らかになった点をまとめると、以下の５点に総括できる。

１）母語によるプレライティング・ディスカッション及び必要に応じて母語を活用する形のプレライティング・ディスカッションでは、目標言語の使用のみに限定されている場合に比べ熟議型エピソードの表出が多かったことから、質の高いプレライティング・ディスカッションにおける母語の重要性が提示された。

２）トランス・ランゲージングでのプレライティング・ディスカッションに見られた熟議的エピソードの中には、L2 語彙の探索に資するエピソード、L2 語彙を探さず L1 語彙で代替することで議論を進めるエピソード、メタ言語的ディスコースをライティング課題のトピックから切り離すためのエピソード、目標言語では深められない議論を深めるための TL や議論を整理し明確化するためのエピソードなどが見られ、これらのエピソードが熟議的なものになるために貢献している一方で、非熟議的エピソードの中には単にコミュニケーションを成立させるためのトランス・ランゲージングが見られるなど、トランス・ランゲージングの多様な機能が確認された。

３）プレライティング・ディスカッションの実際の作文への反映及び産出された作文の評価という観点から見た場合、PWD をどの言語で行ったかによる差はみられなかった。したがって、PWD をどの言語で行うかということが直接的に PWD の活用度や作文の質に影響を与えるわけではないことが示された。

４）熟議型エピソードを多く表出する学習者はプレライティング・ディスカッションを作文に積極的に活用すると同時に、また産出された作文の語彙の多様性が高く、また、特に構成に関わる熟議型エピソードの長さは産出された作文の質的評価得点に貢献していることが明らかになった。言い換えれば、熟議型エピソードが産出されにくい PWD-E の非有効性が間接的に示され、反対に PWD-J 及び PWD-TL の有効性が間接的に示されると同時に、熟議型エピソードの中でもとりわけ構成に関わるものの重要性

が浮き彫りとなった。

5）PWD-E ではスピーキングスコアの高い学習者のほうがより長い熟議型エピソードを産出するが PWD-J 及び PWD-TL ではそうした関係は認められなかった。また、PWD-J 及び PWD-E ではスピーキング及びライティングスコアの高い学習者のほうが PWD を作文に反映させられているが PWD-TL においてはそうした相関はみられなかった。さらに、産出された作文についても、PWD-TL を経て産出された作文の語彙の多様性は学習者のライティングスコアと相関せず、また質的評価得点とスピーキングの間の相関関係もみられなかった。こうした結果から、トランス・ランゲージングによるプレライティング・ディスカッションは、もともとライティング力・スピーキング力の高い学習者の英語作文課題に貢献するだけでなく様々なレベルの学習者に資する可能性があることが示唆された。

本研究で明らかになったこれら５点について、それがどのような教育的、及び理論上の意義を持ちうるのか、次項で考察し、本研究のまとめとする。

6.2　考察

本研究は、バイリンガル研究でその有効性が議論されている教育手法としてのトランス・ランゲージングを、外国語教育としての英語教育、とりわけその作文の指導への応用の有効性の観点より議論することを目的としていた。2.8 に提示した通り、ここには日本における英語教育の中でどのように効果的にライティング指導をするべきか、という教育実践上の課題に応える目的と、これまで主に第二言語環境での学習について用いられてきた概念を、外国語学習環境に応用することで、トランス・ランゲージングの概念そのものの有効性とその限界をより明確化する、という理論上の目的が含まれる。ここからは、２つの研究から得られた結果を総合的に考察し、本研究の２つの課題に応えたい。

6.2.1　日本の英語教育におけるライティング指導への示唆

本研究ではまず、熟議型エピソードを多く含む PWD は、より良い作文産出にとって有効であり得ることを確認した。この点は、母語による作文教育の文脈や第二言語環境での関連する先行研究の成果を確認し、さらに裏付けることができたといえる。

また、第二言語による作文を産出するにあたり有効なプレライティング活動とされる PWD を、学習者の母語で行うべきか、目標言語で行うべきか、という議論は、学習者の目標言語におけるライティング力及びスピーキング力によって結論が変わり得る点について確認した。この点についても、先行研究ですでに指摘されてきた点である。しかし、本研究は、先行研究で明らかになっていた点に加え、新たにトランス・ランゲージングというアプローチを試みた。その結果、スピーキング力が高い学生のほうがより熟議型エピソードを産

出しやすい PWD-E や、そもそも英語運用能力が高い学習者のほうが PWD を作文に反映させられ、より質の高い作文を産出できる PWD-E 及び PWD-J と異なり、PWD-TL においては熟議型エピソードの表出、作文への活用及び産出される作文の質と学習者の持つ英語運用能力は関係しないことが示された。これは、多様なレベルの学習者が存在しうる今日の教育コンテクストでは極めて重要な意義を持つと考えられる。PWD-TL における母語活用の割合は、学習者自身の調整によるものであり、柔軟に行いうる点においても、PWD-TL の教育実践上の価値は高い。学習者の英語運用能力は日々変化・発達していくものであり、また、どの時点までは母語を活用した PWD を行うべきで、どの時点からは目標言語による PWD を行うべきかというカッティングポイントを見出すことも困難であることを鑑みれば、学習者が自分自身で調整するトランス・ランゲージングの手法は今後ますます活用されていくべきアプローチであるといえよう。

6.2.2　トランス・ランゲージングの活用の場の拡張

学習者の言語資源を最大限に活用する、というトランス・ランゲージングの考え方はこれまで、日常的に二言語を使用する学習者が多く存在するバイリンガル教育の文脈で語られてきた。しかし、国際化が進み、人材の流動化が高まる今日の教育現場においては、第二言語学習環境と外国語学習環境を厳密に区別する意義は薄まっている。むしろ、すべての学習者を、極めて萌芽的な段階にあるものも含め、多様な言語資源を持つバイリンガル・マルチリンガルな学習者として扱う柔軟な姿勢こそが求められていると言えよう。教育的手法としてのトランス・ランゲージングを運用能力の低い学習者も少なくない学習環境に導入した場合の有効性を検証したことが本研究の最大の意義であると考える。加速度的にグローバル化する今日の社会においては、従来独立した文脈で語られてきた第二言語習得研究とバイリンガル教育研究の知見を総体的にとらえ、その接点を考える始点として本研究の意義はある。

6.3　本研究の限界と今後の課題

前項では本研究の目的に立ち返って、本研究の教育実践上の意義及び理論上の意義についてのべた。ただし、本研究には研究の計画上やむを得なかったものの、数多くの限界があった。そうした限界についてここで振り返り、今後の課題を提示する。

まず、データ収集にあたり、PWD-J、PWD-E、及び PWD-TL の順番をランダマイズできなかった点が挙げられる。このため、PWD-J よりも PWD-E、そして PWD-E よりも PWD-TL の方が参加者の経験が増えていったという懸念がある。ただし、これらの学習者はすでにこのタイプの作文課題になじんでおり、初回の時点ですでに十分な経験を積んだものであったことで、この懸念はある程度解消されていると考えた。

また、こうした研究では常に悩まされる点であるが、作文課題の難易度が一定であると言い切ることができないことも挙げられる。今回のデータ収集ではその課題を克服するため、

複数の課題の中から書きやすいものを選んでもらう方法をとったが、それでもなお、学生たちの感想からは、「あの課題は難しかった」というようなコメントがいくつも出た。課題の難易度ばかりでなく、学生たちのコンディションやモチベーションが一定であるとは限らない、という問題もある。理想的にはこうした問題の解決のため、それぞれの条件下での作文について、複数の課題に取り組んでもらうことが考えられるが、データ収集の時間的制約上難しいことが予想される。

もう一点、本研究の結果を一般化するうえで留意すべき点がある。それは、本研究の参加者たちが、一般的な教室に見られる学習者たちに比して極めて意欲的に、集中してそれぞれの課題に取り組み、それぞれの持つ力を最大限に発揮しながらプレライティング・ディスカッションと作文を行ったという点である。本研究の参加者たちは、講義の空き時間を利用して、自ら進んで本研究に参加してくれたものたちで、基本的に英語のライティング力を高めたい、という学習意欲の高い学習者たちであった。そのため、トランス・ランゲージングでのプレライティング・ディスカッションにおいても、「できる限り英語で話しつつ、必要に応じて日本語を使用する」という指示に忠実に従い、楽をするために安易に日本語を使用する、という場面はみられなかったし、雑談に相当するようなエピソードもほとんど見られなかった。しかし、一般的な学習環境ではそのように理想的な学習者のみがそろっているとは限らない。理想的な学習者ばかりがいるわけではないコンテクストではトランス・ランゲージングの持つ力は低く出る可能性もあるし、熟議型エピソードの割合が本研究に比べて低くなることもありうるだろう。この点は、本研究の中では浮上してこなかった、トランス・ランゲージングを外国語教育に応用するうえでの課題と考えることができる。「必要に応じて母語を活用する」というような、学習者の自律性を尊重する教育的アプローチにおいて、どの程度まで教員が介入できるのか、またすべきなのか、今後考察を深める必要があるだろう。

本研究では、トランス・ランゲージングの条件下のプレライティング・ディスカッションが、熟議的エピソードを産出しやすくまた、その活用においても学習者の英語の運用能力を前提としないことから、教育的な意義が高い取り組みであることが示された。しかし同時に、PWD-TL に特有にみられるタイプの非熟議型エピソードもみられるなど、単に学習者の母語の活用を許容するだけで PWD の質が向上し、より質の高い作文の産出につながるわけではないことも明らかになっている。今後の研究では、どのようなトランス・ランゲージングが PWD の質の向上、ひいてはより質の高い作文の産出につながるのか検討したい。

大きな手掛かりとなるのは、熟議型エピソードの中でもとりわけ構成に関わる議論の重要性が示唆された点である。先行研究の Higgins et al.（1992） および Shi（1998）や Newmann and McDonough（2015）でも、構成に関わる議論は内容にかかわる議論に比べ圧倒的に少ないことから、これについては特別な介入が必要であることが考えられる。従って、今後の研究では、プレライティング・ディスカッションにおいて、どのように構成に関わるエピソードを増やしていくか、トランス・ランゲージングがどのような機能を果たし、より質の高い

L2 作文の産出に貢献するのか、そして効果的なトランス・ランゲージングの活用法を明示的に指導することは可能なのか、可能であるとすればどのようなアプローチが効果的なのか、という点について考察を深めていきたい。

この点について、今回の研究の中でそのヒントになりそうな発見があった。それは、熟議型エピソードの中でも秀逸なものの一つとして着目した次のエピソードである。

【グループ④　PWD-J （Age Limit）：エピソード15・R-O】

ターン	ID	発話内容
1	4-2	なんだろなぁ、ふと…
2	4-1	これ、もしくはさ、運転免許更新ってあるでしょ、わかんないけど…
3	4-2	あぁ、今おんなじことふと思ってた
4	4-1	それを、もっと厳しくする
5	4-2	そう、年齢制限じゃなくて、なんだろう、テストとかを、
6	4-1	うん
7	4-2	もっと厳密というか難しくしちゃえば、
8	4-1	うん
9	4-2	わかるわけだから…disagree にして
10	4-1	うん
11	4-2	年齢制限作るよりか、だって同じ 60 歳でもさ、まだまだいけますよって人と、もう危ないからって人がいるわけじゃない
12	4-1	じゃぁこれ、No の方がいいんじゃない？
13	4-2	うんなんか No の方が…
14	4-1	No にする？
15	4-2	うん、No にしよう。

このエピソードの直前まで、この二人の学習者は高齢者の運転免許に年齢制限を設けることに賛成の立場で議論を進めてきていた。しかしこのエピソードを経て、二人はともに反対の立場の方が論拠を提示しやすいことに気が付き、それまでの議論をすべてひっくり返してライティングプランを作り替えたのである。その際、それまで議論してきたことを白紙にするのではなく、反駁すべき意見として活用していった点がとても見事で、作文終了後に本人たちに話を聞いた。そこで彼らは、ディベートの授業で学んだ、予想される反対意見への反駁について意識しながらこの課題に取り組んでいたことを筆者に明かした。今後、ディベートの授業とライティングの授業を融合させた形の教育的介入を行いながら、その中で効果的なトランス・ランゲージングの在り方を模索してみたいと考えている。

謝辞

本論文の執筆にあたりまして、多くの方々にご支援とご指導をいただきました。ここに記して心からの感謝を申し上げます。

博士課程在籍の長い間、本論文に関わる研究だけでなく、他の多くの研究を含め、常に温かく、辛抱強く支えてくださった指導教官の河合靖先生には、言葉に尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。研究が立ち止まった様々な局面で、先生がそっとかけてくださる言葉に励まされてここまでの道のりを歩んでこられたと思います。研究者として、また教育者として、これからも先生の背中を追いかけながら進んでいきたいと思います。本当にありがとうございました。

また、お忙しい中、副指導教員及び副査をお引き受け下さった鈴木志のぶ先生、山田智久先生にも、研究上の手法についてたくさんのアドバイスをいただくと同時に、なかなか進まない私の研究をいつも応援して下さったこと、本当にありがたく心から御礼を申し上げたいと思います。そのほか、北海道大学国際広報メディア研究学院の多くの先生方から、温かい励ましの言葉をかけ続けていただきましたことも、長きにわたる博士論文執筆の日々の大きな支えとなりました。

My gratitude is extended to those who participated in my study, too. I was very grateful at the time when so many of you voluntarily signed up for my study, but I became even more grateful while I was analysing the data, because all of the discussions and essays showed that you tried your very best. I feel extremely fortunate and honoured to have met such bright and enthusiastic students in my teaching, and I thank you deeply.

また、この博士論文を書き上げるにあたりまして、これまで研究を共にしてくださった多くの研究者の皆様にも心より御礼を申し上げたいと思います。中でも、本論文の予備論文の共同研究者であるトロント大学名誉教授の中島和子先生、元中部大学准教授の生田裕子先生、北星学園大学准教授の Haidee Thomson 先生、ブルックリン日本語学園名誉学園長の中野友子先生、元トロント補習授業校教諭の福川美沙先生にはここに記してお礼を申し上げます。

I owe special thanks to the three friends/ colleagues amongst many others, Ms. Sarah Richmond, Dr. Makoto Mitsugi, and Ms. Mizuho Tanaka, who not only helped me analyse the data with me but also cheered me up when I had unbearably and selfishly devoted myself to my study.

最後に、父と母にも心からの感謝を述べたいと思います。カナダの地で修士論文を書き始めたときからずっと、この博士論文を書き上げるこの日まで、研究する私のことを励まし、支え、およそ考えうるすべてのやり方で支えてくれたことに、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。私の研究の源は、多くの教え子たちに慕われ、尊敬された父の教育観と、愛情深く育ててくれた母の教育観にあるものです。敬愛する父と母にこの論文を捧げ、言葉にあらわすことのできない謝意を伝えたいと思います。

I will conclude this acknowledgement with one last message dedicated to my son. It was my decision to translanguage in the acknowledgement of my dissertation to experiment how one can explore the concept of translanguaging in prose (at least) with a specific audience in mind. In each of the previous paragraphs I chose to write in the language that I usually used to communicate with those particular people – so when I thanked my students, I wrote in English. I am writing my last paragraph in English to present yet another function of intentional translanguaging; to say something I would be too embarrassed to say straight out in Japanese, especially to my teenage son, or maybe it is simply easier to quote what I am going to quote.

Thank you, Hayato, for being the source of my inspiration and motivation. In my MA thesis, I said you were the best thing that had happened in my life. After all these years of my writing this dissertation, you still are, and I know you will always be.

参考文献

Allard, K., & Pichler, D. C. (2018). Multi-modal visually-oriented translanguaging among Deaf signer. *Translation and Translanguaging in Multilingual Contexts, 4*(3), 383-404.

Anton, M., & DiCamilla, F. (1998). Socio-cognitive functions of LI collaborative interaction in the L2 classroom. *Canadian Modern Language Review, 54*(3), 314-342.

Armengol-Castells, L. (2001). Text generating strategies of three multilingual writers: A protocol-based study. *Language Awareness, 10*(2-3), 91-106.

Baker, C. (2001). *Foundations of bilingual education and bilingualism.* 3rd Edition. Bristorl, UK: Multilingual Matters.

Baker, C., & Wright, W. E. (2017). *Foundations of bilingual education and bilingualism. 6th Edition.* Bristorl, UK: Multilingual Matters.

Bialystok, E. (2007). Acquisition of literacy in bilingual children: A framework for research. *Language Learning, 57*(s1), 45-77.

Bialystok, E. (2013). The impact of bilingualism on language and literacy development. In T. K. Bhatia and W. C. Ritchie (Eds.), *The handbook of bilingualism and multilingualism* (pp. 624-648). Chichester, UK: Blackwell Publishing. doi:10.1002/9781118332382.ch25

Blackledge, A., & Creese, A. (2017). Translanguaging in mobility. In S. Canagarajah (Ed.), *The Routledge handbook of migration and language* (pp.31-46). New York: Routledge.

Brooks, F. B., & Donato, R. (1994). Vygotskyan approaches to understanding foreign language learner discourse during communicative tasks. *Hispania, 77*(2), 262-274.

Brooks, F. B., Donato, R., & McGlone, J. V. (1997). When are they going to say “It” right? Understanding learner talk during pair-work activity. *Foreign Language Annals, 30*(4), 524–541.

Byrnes, H. (2011). Beyond writing as language learning or content learning: Construing foreign language writing as meaning-making. In R. Manchón (Ed.), *Learning-to-write and writing-to-learn in an additional language*: *Language Learning & Language Teaching Volume 31*(pp. 133-157). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Canagarajah, S. (2011). Codemeshing in academic writing: Identifying teachable strategies of translanguaging. *The Modern Language Journal, 95*(3), 401-417.

Celic, C., & Seltzer, K. (2013). Translanguaging: A CUNY-NYSIEB guide for educators. New York: CUNY-NYSIEB. （https://www.cuny-nysieb.org/wp-content/uploads/2016/04/Translanguaging-Guide-March-2013.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

Cooper, M. (1986). The ecology of writing. *College Writing, 48*(4), 364-375.

Creese, A., & Blackledge, A. (2010). Translanguaging in the bilingual classroom: A pedagogy for learning and teaching?. *The Modern Language Journal, 94*(1), 103-115.

Cumming, A. (1989). Writing expertise and second-language proficiency. *Language Learning, 39*(1), 81-135.

Cumming, A. (1990). Metalinguistic and ideational thinking in second language composing. *Written Communication, 7*(4), 482-511.

Cummins, J. (1981). The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (Ed.), *Schooling and language minority students: A theoretical framework.* (pp. 3-49). Los Angeles: Evaluation, Dissemination and Assessment Center California State University.

Cummins, J. (2007). Rethinking monolingual instructional strategies in multilingual classrooms. *Canadian Journal of Applied Linguistics/Revue canadienne de linguistique appliquée, 10*(2), 221-240.

Cummins J. (2008) Teaching for transfer: Challenging the two solitudes assumption in bilingual education. In Hornberger, N.,H. (Eds.), *Encyclopedia of language and education* (pp. 1528-1538). Boston, MA: Springer.

Cummins, J., Swain, M., Nakajima, K., Handscombe, J., Green, D., & Tran, C.(1984). Lingutistic interdependence among Japanese and Vietnamese immigrant students. In C. Rivera (Ed.), *Communicative competence approaches to language proficiency assessment: Research and application* (pp. 60-81). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

de Guerrero, M., C., & Villamil, O. S. (2000). Activating the ZPD: Mutual scaffolding in L2 peer revision. *The Modern Language Journal, 84*(1)*,* 51-68.

DiCamilla, F. J., & Anton, M. (1997). Repetition in the collaborative discourse of L2 learners: A Vygotskian perspective. *Canadian Modern Language Review, 53*(4), 609-633.

Dobao, A. F. (2012). Collaborative writing tasks in the L2 classroom: Comparing group, pair, and individual work. *Journal of Second Language Writing, 21*(1), 40-58.

Donato, R. (1994). Collective scaffolding in second language learning. In J. P. Lantolf, & G. Appel (Eds.), *Vygotskian approaches to second language research* (pp. 33–56). Norwood, NJ: Ablex.

Edwards, V. (2017). Literacy in bilingual and multilingual education. In W. E. Wright, S. Boun, & O. García (Eds.), *The handbook of bilingual and multilingual education* (pp. 75-91). Hoboken, NJ: Wiley Balckwell.

Elola, I., & Oskoz, A. (2010). Collaborative writing: Fostering foreign language and writing conventions development. *Language Learning & Technology, 14*(3), 51-71.

Emig, J. (1971). *The composing processes of twelfth graders.* Urbana, IL: National Council of Teachers of English.

Ferris, D. (2003). *Response to student writing: Implications for second language students.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Ferris, D. R., & Hedgcock, J. S. (2005). Teaching ESL composition: Purpose, process, and practice. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Freedman, A., Pringle, I., & Yalden, J. (1996). *Learning to write: First language/second language.* London: Longman.

Freeman, D., & Freeman, Y. (2001). *Between worlds: Access to second language acquisition.* Portsmouth, NH: Heinemann.

Friedlander, A. (1990). Composing in English: Effects of a first language on writing in English as a second language. In B. Kroll (Ed.), *Second language writing: Research insights for the classroom*, (pp.109-125). Cambridge: Cambridge University Press.

García, O. (2009). *Bilingual education in the 21st century: A global perspective.* Malden, MA: Wiley/Blackwell.

García, O., & Kano, N. (2014). Translanguaging as process and pedagogy: Developing the English writing of Japanese students in the US. In J. Conteh, & G. Meier (Eds.). *The multilingual turn in languages education: Benefits for individuals and societies* (pp. 258-277). Bristol, UK: Multilingual Maters.

García, O., & Li Wei. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education.* New York, NY: Palgrave Macmillan.

Grosjean, F. (1989). Neurolinguists, beware! The bilingual is not two monolinguals in one person. *Brain and language, 36*(1), 3-15.

Gutiérrez, K. D. (2008). Developing a sociocritical literacy in the third space. *Reading Research Quarterly, 43*(2), 148-164.

Higgins, L., Flower, L., & Petraglia, J. (1992). Planning text together: The role of critical reflection in student collaboration. *Written Communication, 9*(1), 48-84.

Hirose, K., & Sasaki, M. (1994). Explanatory variables for Japanese students' expository writing in English: An exploratory study. *Journal of Second Language Writing, 3*(3), 203-229.

Horner, B., Lu, M.-Z., Royster, J. J., & Trimbur, J. (2011). Language difference in writing: Toward a translingual approach. *College English, 73*(3), 303-321.

IELTS Partners (2019). Academic writing sample task 2A. （https://www.ielts.org/-/media/pdfs/120430_academic_writing_task_2a.ashx?la=en, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

International Baccalaureate Organization. (2017).「国際バカロレア（IB）の教育とは？」（https://www.ibo.org/contentassets/76d2b6d4731f44ff800d0d06d371a892/what-is-an-ib-education-2017-ja.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

Jones, S., & Tetroe, J. (1987). Composing in a second language. In A. Matsuhashi (Ed.), *Writing in real time* (pp. 34-57). Norwood, NJ: Ablex.

Kagan, S. (1995). Group grades miss the mark. *Educational Leadership, 52*(8), 68-71.

King, S. (2000). *On writing.* New York: Scribner.

Kobayakawa, M. (2011). Analyzing writing tasks in Japanese high school English textbooks: English I, II, and writing. *JALT Journal, 33*(1), 27-48.

Kobayashi, H., & Rinnert, C. (1992). Effects of first language on second language writing: Translation versus direct composition. *Language Learning, 42*(2), 183–215.

Kowal, M., & Swain, M. (1994). Using collaborative language production tasks to promote students' language awareness. *Language Awareness, 3*(2), 73-93.

Krashen, S. D. (2004). *Power of reading: Insights from the research (2nd ed.).* Portsmouth, NH: Henemann.

Krashen, S. D. (2006). Developing academic language: Early L1 reading and later L2 reading. *International Journal of the Sociology of Language, 2002*(155-156), 143-151.

Kuiken, F., & Vedder, I. (2002). Collaborative writing in L2: The effect of group interaction on text quality. In S. Ransdell, & M. L. Barbier (Eds.), *New directions for research in L2 writing* (pp. 169-188). Dordrecht, the Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

Kuiken, F., & Vedder, I. (2005). Noticing and the role of interaction in promoting language learning. In A. Housen, & M. Pierrard (Eds.), *Investigations in instructed second language acquisition*, (pp.327-356). Boston: Mouton De Gruyter.

Lewis, G., Jones, B., & Baker, C. (2012). Translanguaging: Origins and development from school to street and beyond. *Educational Research and Evaluation, 18*(7), 641-654.

Lockhart, C., & Ng, P. (1995). Analyzing talk in ESL peer response groups: Stances, functions, and content. *Language Learning, 45*(4), 605–655.

Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Richie, and T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of research on language acquisition: Second language acquisition. Vol. 2*(pp.413-468). New York: Academic Press.

Luk, G. N. Y., & Lin, A. M. Y. (2015). L1 as a pedagogical resource in building students' L2 academic literacy: Pedagogical innovation in the science classroom in a Hong Kong school. In J. Cenoz and D. Gorter (Eds.), *Multilingual education: Between language learning and translanguaging.* Cambridge, Cambridge University Press.

Manchón, R. M. (2011). *Learning-to-write and writing-to-learn in an additional language. Language Learning & Language Teaching Volume 31*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Manchón, R. M., de Larios, J. R., & Murphy, L. (2000). An approximation to the study of backtracking in L2 writing. *Learning and Instruction, 10*(1), 13-35.

National Governors Association Center for Best Practices and Council of Chief State School Officers. (n.d.). Common Core State Standards. Retireved January 5, 2019 from http://www.corestandards.org/ELA-Literacy/W/11-12/

Nelson, G. L., & Carson, J. G. (1998). ESL students' perceptions of effectiveness in peer response groups. *Journal of Second Language Writing, 7*(2), 113–131.

Neumann, H., & McDonough, K. (2015). Exploring student interaction during collaborative prewriting discussions and its relationship to L2 writing. *Journal of Second Language Writing, 27*, 84-104.

Perl, S. (1994). *Landmark essays on writing process.* New York: Routledge.

Pica, T. (1996). The essential role of negotiation in the second language classroom. *JALT Journal 78*, 241-268.

Raimes, A. (1987). Language proficiency, writing ability, and composing strategies: A study of ESL college student writers. *Language Learning, 37*(3), 439-468.

Ruíz, R. (1984). Orientations in language planning. *NABE Journal, 8*(2), 15-34.

Sano, A. (2018). The effects of translanguaging in discussion as a pre-writing activity for writing in a second language. *Annual Review of English Language Education in Japan, 29*, 193-208.

Sano, A., Nakajima, K., Thomson, H., Fukukawa, M., Ikuta, Y., & Nakano, T. (2014). Writing abilities of grade 1-9 Japanese-English Bilinguals: Linguistic interdependency and AGE, LOR and AOA. *Studies in Mother Tongue, Heritage Language, and Bilingual Edcation, 10*, 60-90.

Sasaki, M. (2000). Toward an empirical model of EFL writing processes: An exploratory study. *Journal of Second Language Writing, 9*(3), 259-291.

Sasaki, M., & Hirose, K. (1996). Explanatory variables for EFL students' expository writing. *Language Learning, 46*(1), 137-168.

Shi, L. (1998). Effects of prewriting discussions on adult ESL students' compositions. *Journal of Second Language Writing, 7*(3), 319–345.

Storch, N. (2001). How collaborative is pair work? ESL tertiary studenst composing in pairs. *Language Teaching Research, 5*(1), 29-53.

Storch, N. (2002). Patterns of interaction in ESL pair work. *Language Learning, 52*(1), 119–158.

Storch, N. (2003). Relationships formed in dyadic interaction and opportunity for learning. *International Journal of Educational Research, 37*(3/4), 305–322.

Storch, N. (2005). Collaborative writing: Product, process, and students' reflections. *Journal of Second Language Writing, 14*(3), 153-173.

Storch, N., & Wigglesworth, G. (2003). Is there a role for the use of the L1 in an L2 setting?. *TESOL Quarterly, 37*(4), 760-770.

Storch, N., & Wigglesworth, G. (2007). Writing tasks: The effects of collaboration. In García Mayo (Ed.), *Investigating tasks in formal language learning* (pp.157-177). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Strauss, P., & U, A. (2007). Group assessments: dilemmas facing lecturers in multicultural tertiary classrooms. *High Education Research & Development, 26*(2), 147-161.

Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass, & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-256). Rowley, MA: Newbury House.

Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning In G. Cook, & B. Seidlhofer (Eds.), *Applied linguistics. Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford: Oxford University Press.

Swain, M. (2006). Languaging, agency, and collaboration in advanced second language proficiency. In H. Byrnes (Ed.), *Advanced language learning: The contribution of Halliday and Vygotsky* (pp. 95-108). London: Continuum.

Swain, M., & Lapkin, S. (1995). Problems in output and the cognitive processes they generate: A step towards second language learning. *Applied Linguistics, 16*(3), 371-391.

Swain, M., & Lapkin, S. (2000). Task-based second language learning: The uses of the first language. *Language Teaching Research, 4*(3), 251-274.

Swain, M., Kinnear, P., & Steinman, L. (2011). *Sociocultural theory in second language education: An introduction through narratives.* Bristol, UK: Multilingual Matters.

Swanwick, R. (2017). *Languages and languaging in deaf education: A framework for pedagogy.* New York: Oxford University Press.

Sweigart, W. (1991). Classroom talk, knowledge development, and writing. *Research in the Teaching of English, 25*(4), 469-496.

Tompkins, G. E. (2001). *Literacy for the 21st century: A balanced approach.* Columbus, OH: Merrill Prentice Hall.

Velasco, P., & García, O. (2014). Translanguaging and the writing of bilingual learners. *Bilingual Research Journal, 37*(1), 6-23.

Villamil, O. S., & de Guerrero, M. C. M. (1996). Peer revision in the L2 classroom: social-cognitive activities, mediating strategies, and aspects of social behavior. *Journal of Second Language Writing, 5*(1), 51–75.

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Wang, L. (2003). Switching to first language among writers with differing second-language proficiency. *Journal of Second Language Writing, 12*(4), 347-375.

Wang, W., & Wen, Q. (2002). L1 use in the L2 composing process: An exploratory study of 16 Chinese EFL writers. *Journal of Second Language Writing, 11*(3). 225-246.

Watanabe, Y. (2008). Peer-peer interaction between L2 learners of different proficiency levels: Their ineractions and reflections. *The Canadian Modern Language Review, 64*(4), 605-635.

Weissberg, B. (1994). Speaking of writing: Some functions of talk in the ESL composition class. *Journal of Second Language Writing, 3*(2), 121-139.

Wigglesworth, G., & Storch, N. (2009). Pair versus individual writing: Effects on fluency, complexity and accuracy. *Language Testing, 26*(3), 445-466.

Wigglesworth, G., & Storch, N. (2012). What role for collaboration in writing and writing feedback. *Journal of Second Language Writing, 21*(4), 364-374.

Wolfersberger, M. (2003). L1 to L2 writing process and strategy transfer: A look at lower proficiency writers. *TESL-EJ: Teaching English as a Second or Foreign Language, 7*(2), 1–15.

Wolfe-Quintero, K., Inagaki, S., & Kim, H. Y. (1998). *Second language development in writing: Measures of fluency, accuracy, & complexity.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Zamel, V. (1982). Writing: The process of discovering meaning. *TESOL Quarterly, 16*(2), 195-209.

Zamel, V. (1983). The composing processes of advanced ESL students: Six case studies. *TESOL Quarterly, 17*(2), 165-188.

薄井道正（2015）「初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果: パラグラフ・ライティングと論証を柱に」『京都大学高等教育研究』 *21*, 15-25.（https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/210138/1/R.H.E_021_015.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

大津由紀雄（2009）『危機に立つ日本の英語教育』慶応義塾大学出版会

大津由紀雄（2013）「英語教育政策はなぜ間違うのか一認知科学・学習化学の視点から」大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子著『英語教育、迫り来る破綻』（pp. 51-81）ひつじ書房

オストハイダ, テーヤ（2017）「日本の多言語社会とコミュニケーションー意識・政策・実態」宮崎里司・杉野俊子編著『グローバル化と言語政策ーサスティナブルな共生社会・言語教育の構築に向けて』（pp. 116-131）明石書店

加納なおみ（2016）「トランス・ランゲージングを考えるー多言語使用の実態に根差した教授法の確率のためにー」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究　12 号』1-22.

カミンズ, ジム著　中島和子訳著（2011）『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会

木村晴美（2011）『日本手話と日本語対応手話（手指日本語）ー間にある深い谷』生活書院

国立教育政策研究所（2010）『生きるための知識と技能 4　OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2009 年調査国際結果報告書』, 明石書店.

佐久間孝正（2015）『多国籍化する日本の学校ー教育グローバル化の衝撃』勁草書房

佐々木倫子（2008）「日本におけるバイリンガルろう教育－何を、どう、すすめるべきか」全国ろう児をもつ親の会 編『バイリンガルでろう児は育つ』（pp.134-170）生活書院

佐々木倫子（2017）「日本手話とろう教育－危機的な時代の第三の道－」杉野俊子監修 田中富士美・波多野一真編著『言語と教育－多様化する社会の中で新たな言語教育のあり方を探る－』（pp.10-27）明石書店

佐野愛子・田中瑞穂（2019）「バイリンガルろう教育における教育手法としてのトランス・ランゲージング－授業分析スキーム BOLT の開発－」『母語・継承語・バイリンガル教育研究　15 号』55-75.

佐野愛子・増谷梓・阿部ゆかり（2018）「ろう児の日本語作文指導における日本手話の活用」『母語・継承語・バイリンガル教育研究　14 号』47-68.

玉田さとみ（2012）「ろう児をもつ親たちの道のり」佐々木倫子編『ろう者から見た「多文化共生」もう一つの言語的マイノリティ』（pp. 46-77）ココ出版

中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第 197 号）」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

内閣官房（2006）「『生活者としての外国人』に関する総合的対応策」（https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gaikokujin/honbun2.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

日本学術会議（2017）「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」（http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t247-9.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

日本再興戦略―JAPAN is BACK―（2013 年 6 月　閣議決定）（https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

日本再生戦略～フロンティアを拓き、「共創の国」へ～（2012 年 7 月　閣議決定）（https://www.cas.go.jp/jp/tpp/pdf/2012/2/10.20120918_5.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

ベネッセ教育総合研究所（2016）「中高の英語指導に関する実態調査 2015」
（https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4776, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

真嶋潤子（2019）『母語をなくさない日本語教育は可能かー定住二世児の二言語能力ー』
大阪大学出版会

文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領」
（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2016）「平成 27 年度　英語教育改善のための英語力調査事業（高等学校）報告書」
（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2016/12/16/1375533_1.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2017）「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（平成 28 年度）の結果について」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2018a）「高等学校学習指導要領」
（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2018b）「（総則編）高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）解説」
（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_01_1_1.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2018c）「（国語編）高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）解説」
（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_02_1_1.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2018d）「（外国語編　英語編）高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）解説」
（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_09_1_1.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

文部科学省（2019）「各資格・検定試験と CEFR との対照表」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/__icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

山本麻子（2010）『書く力が身につくイギリスの教育』岩波書店

山本麻子（2012）『ことばを鍛えるイギリスの学校―国語教育で何ができるか岩波現代文庫　岩波書店

渡辺雅子（2007）「日・英・仏の国語教育を読み解く－「読み書き」の歴史社会学的考察」『日本研究 35 号』573-619.
（https://nagoya.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=21150&item_no=1&page_id=28&block_id=27, 2019 年 7 月 31 日閲覧）

付録１　研究１に関する転載許可

令和 元　年　７月１８日

札幌国際大学
佐野愛子 様

全国英語教育学会紀要編集委員会事務局
片桐　徳昭

貴台より令和元年７月１７日に申請頂きました以下の ARELE 第２９号掲載論文を転載することを許可いたします。但し、公開の際には「本論文の著作権は全国英語教育学会に属する」ことを明記すること、「著者の了解を得る」ことを条件とします。

掲載誌：ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan) 第２９号 (193-208)
タイトル：The Effects of Translanguaging in Discussion as a Prewriting Activity for Writing in a Second Language
執筆者： Aiko SANO

以上

付録 2　承諾書

学校法人　鶴岡学園　北海道文教大学
〒061-1449 恵庭市黄金中央 5 丁目 196 番地
―1
Tel: 81-123-34-0299
Fax: 81-123-34-0057

平成 30 年　月　日

研究参加者各位

北海道文教大学
外国語学部　国際言語学科
准教授　佐野　愛子
e-mail: aikosano@do-bunkyodai.ac.jp

第二言語作文における母語の活用の有効性に関わる調査についてのお願い

このたび、第二言語における母語の活用の有効性について検証するための研究を行うことになりました。本研究は様々なレベルのバイリンガルが弱いほうの言語で作文を産出する際にどのように強いほうの言語を使用することが有効であるかを検証する研究の一部として、第二言語として英語を学ぶ学習者が英語の作文を産出する際にどのように母語を活用できるか観察するものです。具体的には 7 日間の日程で、4 つの作文を英語で産出していただき、その準備及び産出過程を記録・観察しながら同時に作文過程におけるディスカッションの効果についてどのように考えているか記述するというものです。

この研究で分析の対象とするのは作文の前に行うディスカッションとその後に書かれた英語での作文及び、自由記述を含むアンケート調査です。また、研究に際し、TOEIC S&W テストを受験していただき、そのスコアも分析の対象とさせていただきます。この受験料（9050 円）は当方で負担することとします。

研究に際しましては、研究者が所属する北海道文教大学の倫理委員会の審査を経ることとします。研究で得られたデータは厳重に管理することとし、研究成果の発表においては個人が特定されることのないように配慮します。また、この研究に参加するか否かを含め、参加予定者が在籍する大学において成績その他の不利益を被ることはなく、研究の途中で参加の意思を撤回されることも可能です。

以上

承諾書

2018 年　　月　　日

私＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿は、北海道文教大学　外国語学部国際言語学科　准教授　佐野愛子氏の研究　“The roles of L1 in prewriting discussions for writing in a second language”（第二言語作文のためのプレライティング活動としてのディスカッションにおける母語の役割）に参加し、7 日間の調査期間に産出する作文及びその準備過程の撮影を許可し、産出された作文を供出すること及びアンケート調査に応じることに同意します。また、研究上の必要によって行われる TOEIC S & W テストを受験し、そのスコアを供出することを承諾します。ただし、この受験料については研究者が負担することとします。

ただし、この研究に参加するかしないかの判断によって私にいかなる不利益も生じないこと、また、本研究の参加を取りやめたいという意思は研究のいかなる時点においても尊重されることを確認します。併せてこの研究で産出される作文その他のデータは私の所属する大学における成績評価に影響を与えるものではないことも確認します。

また、この研究で得られたデータについては、研究者が私の個人データとして特定されることのないよう最大限の注意を払うことを求め、データの管理が適切になされることを求めます。

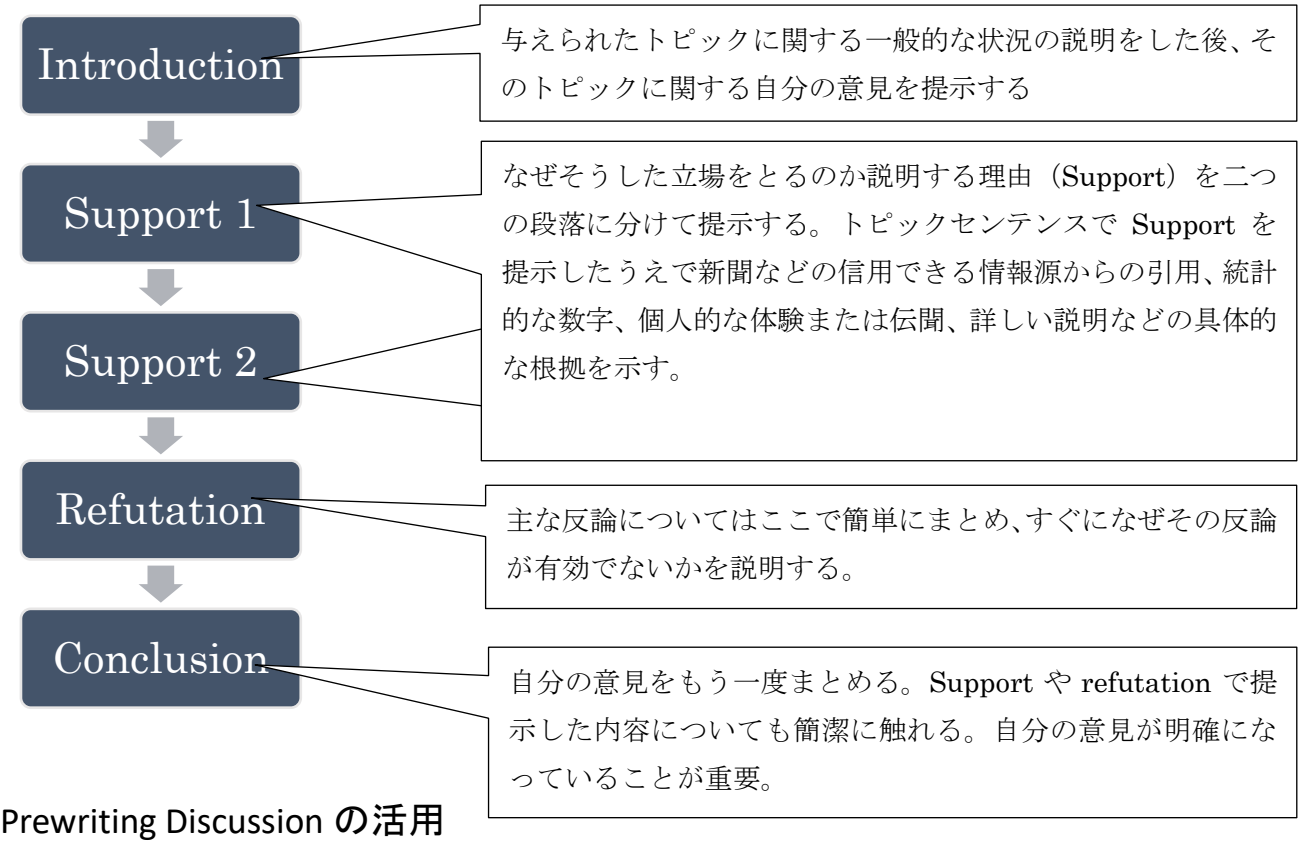
署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

付録３　意見文の構成に関わる共通理解を図るために使用したワークシート

Argumentative Essays を書く上のポイント

- 最初に自分の立場を明確にする
- 自分の意見の正しさを示す理由を提示する
- 提示した理由に具体的な根拠を示す

Argumentative Essays の構成



Prewriting Discussion の活用

最初は肯定か否定か決める必要はない。

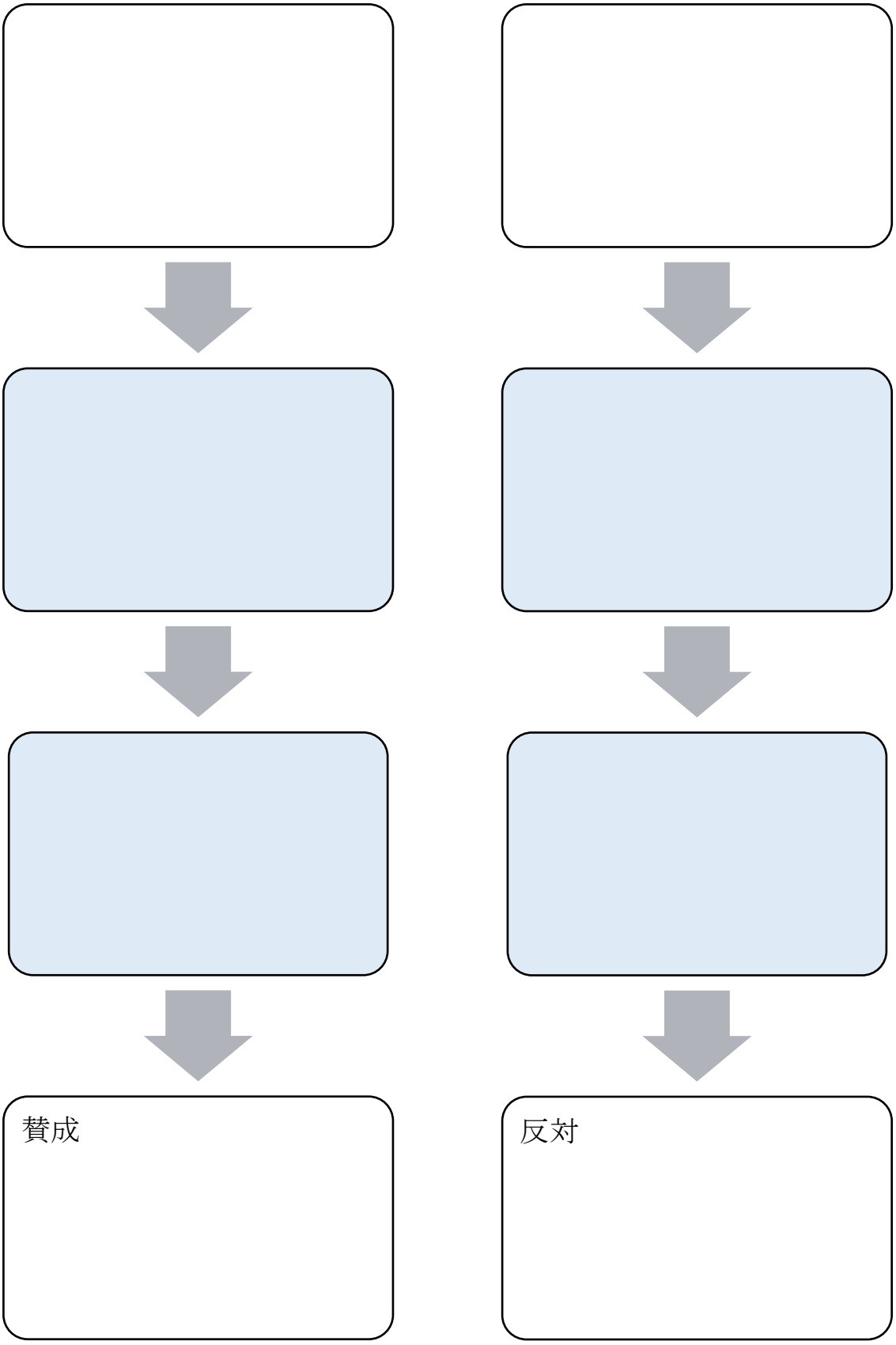
まず 4 つの色のついている部分に入れるべき Support を二人で話しながら出していく。たくさん挙げられた場合は取捨選択して一番強力なもの（より多くの読者にとって説得力のあるもの）を提示する。その際、具体的な根拠などについても知恵を出し合いながらメモしていくとよい。使いたい語句などについて確認してもよい。

話し合いを通じて自分の意見を確定したら、自分と反対の意見の support のうち、どちらを refutation の段落で取り上げるか考える。反駁の方法についてもプレライティング・ディスカッションで話し合っておくと書きやすい。

自分の意見が決まったら賛成または反対どちらかの introduction に書くべき内容を考える。この部分についても PWD で助け合い情報を共有し合うとよい。Conclusion で書こうと思う内容などについても PWD の相手の意見を求めるとよいアドバイスがもらえるかもしれない。できる限り PWD を最大限に活用してみてください。

賛成

反対



賛成

反対

付録４　アンケート調査に使用した質問紙

第二言語作文のためのプレライティング・ディスカッション
に関する学習者の認識に関わるアンケート調査

このアンケートは、すでにご協力いただいている研究「第二言語作文のためのプレライティング活動としてのディスカッションにおける母語の役割」の分析のために行うもので、プレライティング・ディスカッション（PWD）に対するみなさんの評価についてお尋ねするものです。PWD 及び作文との関係性について分析する必要上、記名での回答をお願いいたしますが、論文その他の形式での発表に際しては皆さんのお名前が特定されることのないよう最大限の配慮をいたします。また、この回答が、みなさんの本学科における評価に影響することはありません。

この冊子は，調査の説明と質問項目（5 枚）の合計6 ページから構成されています。質問紙に落丁がないか確認してください。

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

調査者：佐野愛子
aikosano@do-bunkyodai.ac.jp

質問の１～５では**日本語でのプレライティング・ディスカッション**について、１（全く役に立たなかった）から９（とても役に立った）までの９段階での評価をお尋ねします。数字を一つ選んで○を付けてください。数字と数字の間のハイフンには○をつけないでください。

質問１：提示された論題を理解するにあたり、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ １−２−３−４−５−６−７−８−９ ］とても役に立った

質問２：提示された論題で意見文を書くにあたり、メインの主張に関わる部分に関わるブレーンストーミングとして、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ １−２−３−４−５−６−７−８−９ ］とても役に立った

質問３：提示された論題で意見文を書くにあたり、メインの主張をサポートする部分に関わるブレーンストーミングとして、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ １−２−３−４−５−６−７−８−９ ］とても役に立った

質問４：提示された論題で意見文を書くにあたり、文章に取り入れるべき内容を吟味するうえでペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ １−２−３−４−５−６−７−８−９ ］とても役に立った

質問５：提示された論題で意見文を書くにあたり、文章の構成を考えるうえでペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ １−２−３−４−５−６−７−８−９ ］とても役に立った

質問の 6～10 では**英語でのプレライティング・ディスカッション**について、1（全く役に立たなかった）から 9（とても役に立った）までの 9 段階での評価をお尋ねします。数字を一つ選んで○を付けてください。数字と数字の間のハイフンには○をつけないでください。

質問 6：提示された論題を理解するにあたり、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 7：提示された論題で意見文を書くにあたり、メインの主張に関わる部分に関わるブレーンストーミングとして、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 8：提示された論題で意見文を書くにあたり、メインの主張をサポートする部分に関わるブレーンストーミングとして、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 9：提示された論題で意見文を書くにあたり、文章に取り入れるべき内容を吟味するうえでペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 10：提示された論題で意見文を書くにあたり、文章の構成を考えるうえでペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問の 11～15 では**トランス・ランゲージングでのプレライティング・ディスカッション**について、１（全く役に立たなかった）から９（とても役に立った）までの 9 段階での評価をお尋ねします。数字を一つ選んで○を付けてください。数字と数字の間のハイフンには○をつけないでください。

質問 11：提示された論題を理解するにあたり、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 12：提示された論題で意見文を書くにあたり、メインの主張に関わる部分に関わるブレーンストーミングとして、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 13：提示された論題で意見文を書くにあたり、メインの主張をサポートする部分に関わるブレーンストーミングとして、ペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 14：提示された論題で意見文を書くにあたり、文章に取り入れるべき内容を吟味するうえでペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

質問 15：提示された論題で意見文を書くにあたり、文章の構成を考えるうえでペアでのディスカッションはどのくらい役立ちましたか？数字に○をつけて下さい。

全く役に立たなかった［ 1－2－3－4－5－6－7－8－9 ］とても役に立った

以下の質問では、当てはまるものに〇をつけたのち、その理由については自由記述で回答をお願いしています。なるべく詳しく答えてください。

質問 16：今回の調査におけるプレライティング・ディスカッションのうち、英語の作文産出において最も有益だったのはどの PWD ですか？当てはまるものに〇をつけてください。

英語の PWD　・　母語の PWD　・　トランス・ランゲージングの PWD

それはなぜですか？

質問 17：今回の調査におけるプレライティング・ディスカッションのうち、英語の作文産出において有効ではないと思うのはどの PWD ですか？当てはまるものに〇をつけてください（複数回答可）。

英語の PWD　・　母語の PWD　・　トランス・ランゲージングの PWD

それはなぜですか？

質問 18：あなたは英語の学習において協働的な学習と個人学習のどちらをより好みますか？当てはまる方に〇をつけてください。

協働的な学習　　・　　個人学習

それはなぜですか？

質問は以上です。

この度の研究へのご参加、本当にありがとうございました。

付録５　書き起こしたPWDの発話とそのコーディング結果例

書き起こしたPWDのコーディング例（一部）を以下に示す。例として選んだのは、本文中で言及していないもののうちPWD-J, PWD-E, PWD-TL各ひとつずつで、なるべく多くの種類のエピソードを含むものである。

PWD-J:グループ③

ID	発話内容	ラベル	コーディング
3-2	まあいいや賛成と反対一個ずつ出していけばいいんでしょ	CE1 PWD 方針確認	NR-O
3-1	まず賛成の意見として		
3-2	まぁなんだっけ　これどっちだっけ　したほうがいい		
3-1	したほうが　しなければならないが		
3-2	したほうがいいに賛成		
3-1	だと、あの		
3-2	ふやせばいいってこと		
3-1	だから、まぁ簡単に言えば、まぁ北海道に関わらずさ、今中国人の観光客がいるから、ま　あっちの人も英語もしゃべる、あ、だけどな一　結局英語しゃべれちゃうからな一　別に中国でも対応しなくてもいいけど	CE2 中国人 観光客の 増加	R-C
3-2	まぁでもしゃべれない人もいるからっていうことじゃない？		
3-1	だからその・・結構さ、今さ、第三言語として日本語・英語・中国語って必須になってるじゃん		
3-2	そうだな		
3-1	ってとこあるじゃん		
3-2	え、なくない？だって		
3-1	え、だってさ、狸小路とかいったらさ、結構		
3-2	あ、日本での話ね		
3-1	Chinese		
3-2	はいはい		
3-1	中国語しゃべれるさ、店員さんさ、いるからさ、やっぱり、そういう面で、なんつうの？		
3-2	観光客が多いとかいう意味？		
3-1	そうそうそう		
3-2	え、中国の人が		
3-1	え、結構VIPな人がさ、それ下じゃね？ここじゃね？	CE3 構成確認	NR-O
3-2	あ、そっか。ミスった		
3-1	でしょ、観光客が、ね？まぁ、どんどんふえてますよ、という。まぁ他の地域に比べて、多いです、という。増加している（書きながら）っていうところでしょ。逆にこれを言わしてしまうと、ね中国はさ、まぁ小学校からさ、小学校、確か小学校か中学校からさ、英語をやってるんだよ。	CE4 中国人 観光客の 英語力	R-C
3-2	うん		
3-1	そういう面で別に中国語を、は、しゃべれなくてもいいと思うんだよ、俺も		
3-2	うん		
3-1	反対意見としては、逆に		
3-2	観光業に携わるわけじゃないからいらない、みたいな		
3-1	どういうこと？		
3-2	だってこれ、やっぱり		
3-1	だから、だから中国の観光客		
3-2	でしょ　だから観光に携わるわけじゃないなら中国語必要じゃないってこと		

PWD-J:グループ③（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
3-1	いやだから、ま だから反対的な意見ってすると、まぁなんつーの、英語を必修にしてるわけだからある程度の知識はあるはずだから	CE4（続き）	R-C
3-2	英語だけで充分？		
3-1	じゃないかっていう意見もある		
3-2	そうだね。		
3-1	ただ、		
3-2	あれじゃん、英語を極めればいいってことになる		
3-1	で、他にあるとしたら、え、もちろんこれは、必修にしてるからってできるわけじゃないから、まぁあれだけど、	CE5 ツアー客に対する中国語の必要性	NR-OC
3-2	うーん		
3-1	なんか・・観光客、で、まやっぱりあれだろね、中国人のさ、爆買いとかもあるけどさ、やっぱり団体客で来るじゃん		
3-2	うん		
3-1	だからさ、		
3-2	観光になっちゃうよね		
3-1	そう だから、観光で、俺が見ている限り、単体で来る人は少ないよね		
3-2	うん ツアーとか		
3-1	だからツアーとかで来るから、その中でやっぱり、まぁ中国人団体ってことだから、その、中国語が必要だから、やっぱり、早いうちにね、やっていた方がね、特なんじゃないかって、とは思う		
3-2	まぁ反対意見としては高校卒業したから英語しゃべれるわけじゃないのにそんな中国語加えてまたごっちゃになるだけじゃないの、とは思う。反対意見はね。	CE6 学習者の混乱	NR-OC
3-1	あー、ま、ね。		
3-2	むずかしい		
3-1	増やすってことはまた広くなるってことでしょ。	CE7 学習者の負担増加と効率の悪さ	NR-C
3-2	あ、負担が増える、みたいな		
3-1	あ、そうそうそう だって単語数だってまた別の問題が・・・		
3-2	まぁそれは人のね、やる気にもよるけど。		
3-1	日本人の何パーが話せるかって考えたら、そんなに中国が必要かっていう・・・だったら英語もうちょっとなんか考えろよ、と思う。あと、まぁ負担が増える		
3-2	負担が増える		
3-1	負担がふえる。ね？でさ、あのさ、XXX がいったのもあるけどさ、		
3-2	うん？		
3-1	高校でさ、文法を学んでさ、		
3-2	うん		
3-1	中学校で学んでさ、		
3-2	うん		
3-1	中学校・高校って話だっけ？あってる？		
3-2	あってる。中学校		
3-1	ね？中学高校で、文法学んで、まテストでいい点数とります、それが、実際に、その、会話として、成り立つクオリティになるかっていうと、		
3-2	うん		
3-1	ならないでしょ		
3-2	ならない		
3-1	あ、でもそういう話じゃないか、これ	CE8 構成	R-O
3-2	そういう話じゃ、まぁでも、理由としてつければいいんじゃない？		

PWD-J:グループ③（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
3-1	だから、まぁ、その第二言語を取得するってことはさ、結構難しいことじゃん	CE9 負担増加と効率性の悪さ	R-C
3-2	うん		
3-1	英語をやってるからわかるけど		
3-2	容易じゃない		
3-1	だから、一回に、二つの言語をやってしまうと、		
3-2	うん		
3-1	なんていうんだろ、その効率性が悪くなるよねっていう		
3-2	うん		
3-1	だからその人のやる気にもよるけど		
3-2	うん。それはいっちゃだめでしょ		
3-1	いやそうだけどさ。		
3-2	偏りが出るから。まぁ要するにさ		
3-1	まぁだから		
3-2	ふた・・負担でいいんじゃない、やっぱり。さっき言ったじゃん、負担が多い。		
3-1	ま、効率はね、悪くなるって感じじゃない		
3-2	悪くなる（書きながら）		
3-1	なんかある？	CE10 賛成意見の必要性	R-O
3-2	ちょ賛成意見考えたいよね		
3-1	あとね、その、うーん、賛成意見？まぁ、観光と、増加している、うーんと、まぁ、勉強、その、ね？	CE11 必修科目の増加	NR-OC
3-2	うん		
3-1	なんつーんだろなー。違う言語を勉強してるわけなんだから。言語を勉強しているっていうか、なんだろな、その、教科が増える、教科が増える、やったー		
3-2	（笑）やった、じゃねーだろ		
3-1	やった、じゃない		
3-2	受験でもう一教科増えるんだぞ		
3-1	あれ、けどさ、逆にいうとさ、中国語が増えることによってさ、	CE12 言語学習の文化的側面	R-OC
3-2	うん		
3-1	まぁ、なんていうの？その人がさ、中国語に興味をもったらさ、新たな道が増えるかもしれないしょ。わかる？		
3-2	えー？		
3-1	中国語おもしろい、中国に行こう、そしたら中国に興味をもった、みたいな。新たな視点ができる、とかいうじゃない		
3-2	うん・・・いいんじゃない？ない意見から絞り出して		
3-1	うるさい（笑）		
3-2	学ぶことで新たな発見が生み出される可能性がある（書きながら）		
3-1	あとね・・・うーん、あとね・・・なんだろうな・・・あ、実際さ、中国語をさ、学んでさ、使える幅ってあるの？俺わかんないんだけど、あんま。・・・え、それさ、なんつーの？ほかのさ、国がさ、学んでいる言語とさ、英語が一番学ばれてるかもしれないけどさ、もしかしたら中国語かもしれないじゃん。ないと思うけど。	CE13 中国語の汎用性	R-C
3-2	ちょっと調べよ。		
3-1	何が？		
3-2	学ばれてる言語？		
3-1	だから、ある程度、その、触れている、え、だから、例えばアメリカだったら中国語勉強します、みたいなの		
3-2	ああー、その、国が？		

PWD-J:グループ③（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
3-1	そうそうそう	CE13（続き）	R-C
3-2	その以外の言葉をってこと？		
3-1	そう		
3-2	それはわかんないなー		
3-1	え、なんか		
3-2	えー中国語・・（つぶやき）		
3-1	なんだろな、世界の英語ランキングを調べてみよう。え、だけどさ、やっぱりさ、（調べながら）あれよ・・・		
3-1	まって、意外とね、意外とね、第二言語中国語が多いんだ。		
3-2	ふーん		
3-1	見て。ほら。		
3-2	第二言語中国でもさ、英語使えればええんやないの？ってなっちゃわね？		
3-1	え、speaker が多いからさ		
3-2	いや、そりゃ中国の人口多いからね		
3-1	母語話者じゃなくて　language でしょ（資料を見ながら）あーまぁそうだね、そういうことか・・・		
3-2	スペイン語中国語英語（資料を見ながら）		
3-1	えだけどやっぱりさ		
3-2	人多いからなー（つぶやき）		
3-1	え、だってこうデータで見る限りさ、中国語と英語はさ、他に比べて飛びぬけてさ、第二言語が多いわけじゃない		
3-2	でもそれは第二言語を習得したいっていう人だけでいいんじゃない。中学校からやる必要性は感じられないんじゃない		
3-1	いや、だから・・・うーん悪い意見しか思いつかないんだけど	CE14 立場確認	NR-O
3-2	うん（笑）いらないと思う、俺。		
3-1	いや、だから、やっぱりこう、負担が増えるわけだから、半端になるわけじゃん	CE15 中途半端な中国語教育より英語教育が重要	R-C
3-2	うん、そうだね、したらまた英語もこう半端になって・・・		
3-1	え、だから、結局		
3-2	よりひどくなる		
3-1	ま　できる奴はできるかもしんないけど		
3-2	うん		
3-1	やっぱりさ、そう、みんな能力がさ		
3-2	うん		
3-1	平等にあるわけじゃないから		
3-2	日本だけで行動すればいいっていう人絶対いるからさ		
3-1	今実際さ、そうそうそう　英語でも間に合わない　きついっていう人いるしさ、数学　数学関係ないけど		
3-2	（笑）		
3-1	まぁ全教科きついっていう人もいるから		
3-2	うん		
3-1	結局、人の、首を絞めることにもつながるから		
3-2	うん		
3-1	逆に、その、増やすくらいなら、もっと、英語教育に力入れたほうがいいと思う		
3-2	小学校から導入とか		
3-1	そうそうそう		

PWD-J:グループ③（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
3-2	まぁそりゃ今回関係ないけどね	CE16 論旨逸脱の指摘	NR-O
3-1	（笑）いや、まあね		
3-2	結局、反対意見しか出ないっていう（笑）		
3-1	まぁ、こう、負担をふやすぐらいなら、	CE17 負担の増加	NR-C
3-2	まぁ中国語をやって負担を増やすぐらいなら		
3-1	負担を増やすぐらいなら		
3-2	小学校から英語をやれ		
3-1	いや違うそういうことじゃなくて		
3-2	あれ？（笑）		
3-1	負担を増やすぐらいなら‥		
3-2	中国語･･･？いりますか？中学高校で中国語‥そもそも教員できるの？	CE18 教員確保の可能性	NR-C
3-1	いや、いるでしょそれは。あんなに母語話者いるなら。雇えるしょ。		
3-2	むずかしいなー		
3-1	なんかある？あと？	CE19 付け加えるべき項目の確認	NR-OC
3-2	なくね？		
3-1	あと･･･		
3-2	なかなかないぞ。		
3-1	力を入れるべき（書きながら）いやまぁ‥学ぶことによって、･･･英語を学ぶことによって、なんかあるかな？	CE20 授業の難しさ	NR-C
3-2	どういうこと？		
3-1	ない？よね。いや、増やす意味で知識が増えるくらいでさ、まぁはたから見て学生から見たら余計な教科が増えたって感じだよね。なんか実際学んでて実際さ、実際まぁ今はオールイングリッシュな、さっき XXX も言ってたけどさ、オールイングリッシュが多いナチュラルでさ、それをさ、もしオールチャイニーズでやってみたらさ、とんでもないことになると思うんだよね、俺。		
3-2	うーん。意味が分からなくなるとか。		
3-1	そうそうそう		
3-1	だから、だからまぁ。あとなんかあるかなぁ？		
3-2	高校とかの選択とかでいいんじゃない？やるとしたら。	CE21 選択性の提案	NR-C
3-1	うん？		
3-2	高校とかの選択とかでいいんじゃない？		
3-1	あーいいんじゃない？		
3-2	観光とかやりたい人は、中国語を学べばいい、ただ必修にする必要はない。		
3-1	あーそれいいんじゃない？		
3-2	あーそれどっちの意見だよ？（笑）	CE22 立場の確認	R-O
3-1	反対意見じゃない？		
3-2	反対意見		
3-1	なるほど。別に、必修にしなきゃいいてことでしょ。		
3-2	うん		
3-1	だから、選択、だから今の話　書道とさ、音楽とさ何か選択できる、なかった？	CE23 選択科目化の提案	NR-C
3-2	あー		
3-1	あったしょ？		
3-2	うん		
3-1	だからさ、		
3-2	副教科的なものにして、		
3-1	やりたい人はやれば、その、能力につながる、みたいな。		
3-2	うん。		

PWD-J:グループ③（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
3-1	例で使えばいいのか（書きながら）	CE23（続き）	NR-C
3-1	学びたい人が、学びたい人が（書きながら）学べれば、学べれば（書きながら）いい。だから、必修じゃなくていい。じゃない？		
3-2	うん。・・・反対意見しかでねー（笑）	CE24 賛成意見のサポートの少なさ	NR-O
3-1	俺反対だよ。後、それぐらいかな？ほんとに。		
3-2	反対？賛成って難しいなー		
3-1	うーん。	CE25 日常的に使う頻度の低さ	R-C
3-2	ってそもそも触れてないからね、日常で。		
3-1	まーねー。		
3-2	英語だったらまださ、		
3-1	うん、		
3-2	あるけど。・・・中国語（つぶやき）・・・正直ただ、中国が近いからっていう理由じゃないの？		
3-1	なんか、うん確かに、中国語に触れることってないよね。日常会話でさ、		
3-2	うん		
3-1	いきなり謝謝とかいうわけでないしょ		
3-2	うん		
3-1	今さ、たとえばさ、		
3-2	うん、そういう使い方はない		
3-1	日本人しゃべっててさ、ふとさ、英語がたまに出てくるかもしんないけどさ、そういうもんじゃないしょ。		
3-2	よく、なんか、専門用語とか英語で言うことあるけどね　中国語は使ったことない・・うーん、中国語人口か。中国人・・・（つぶやき）		
3-1	英語の中の	CE26 選択科目にすべき	NR-C
3-2	あーそっかー、就職で有利ってのもあるけど、必修化したら結局みんないけるか・・・		
3-1	いやだから、逆にふやしたらさ、ふやしたらふやしたでさ		
3-2	英語大事		
3-1	いや違う違う違う増やしたらさ、しかも授業数が増えるわけだからさ、時間が長くなるわけだからさ、その、負担も増えるって意味でそうだけど、新たに教育されることも身につけないといけないじゃん		
3-2	必修っていうところをちょっともう一回・・選択とかならまた別の話・・・必修だよね？Should あ、should,入れるべきでしょ（課題を再読しながら）		
3-1	やばい、おわんない、俺はそれくらいかな、もうそれしかない、以上。おわり！たぶん。		

注）学習者の特定につながり得る部分のみ改変（XXX で表示）

PWD-E:グループ④

ID	発話内容	ラベル	コーディング
4-1	reading out Some people believe…."more negative effect"		
4-2	what do you think about it?		
4-1	Ah…At first, let's think about the negative effects.		
4-2	Um		
4-1	of SNS. The development of the SNS…		
4-2	Hum?		
4-1	So why to develop of SNS cause to negative effects against our life.		
4-2	Negative effect?		
4-1	Um.		
4-2	I think bully. Bully.		
4-1	Bully?		
4-2	Um.		
4-1	What do you mean?		
4-2	It is a lot of children have smartphone more,		
4-1	Ah huh		
4-2	internet to use the SNS		
4-1	Hum		
4-2	and there is bullying in the school		
4-1	Ah		
4-2	um, in the SNS		
4-1	Huh		
4-2	for example LINE		
4-1	huh. But I think before the SNS spread,	CE1 いじめ	R-OC
4-2	Ahhh		
4-1	the something bully was already happened.		
4-2	hum		
4-1	the tool will..the tool have been changed, from directly or		
4-2	um		
4-1	some letter to SNS.		
4-2	um		
4-1	I mean the SNS and the bully is not co		
4-2	I think SNS makes makes bully more..		
4-1	umm		
4-2	seriously because if someone bullied directly in the school		
4-1	un		
4-2	am the teacher can realise what happen		
4-1	umm umm		
4-2	but if bully happened in		
4-1	un un un		
4-2	the SNS, teacher can't		
4-1	un		
4-2	realise the bulling		
4-1	un. Yeah, the SNS has changed the style of bully		
4-2	Ahhh		
4-1	more seriously. Yap, it's true, I think so. Okay (taking notes SNS change the)		

PWD-E:グループ④（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング	
4-2	do you have any other other point?			
4-1	Ummm			
4-2	about SNS…			
4-1	Um including me,			
4-2	um			
4-1	today's students can't write			
4-2	kanji?			
4-1	Kanji, Chinese character or	CE2 スペリングカの低下	R-OC	
4-2	un			
4-1	the spell of English as well			
4-2	Ahhh. So smartphone…			
4-1	The writing skill is lacking because of the development of SNS.			
4-2	Um Smartphone can expect what they want to say			
4-1	yes, yes			
4-2	in fact (inaudible)			
4-1	in audible (writing down) lack of writing skill			
4-1	Do you have any idea?			
4-2	ummm, SNS…			
4-1	negative effects..			
4-2	Lots of students enroll SNS like LINE and Instagram,			
4-1	um			
4-2	If they share the picture on SNS			
4-1	um			
4-2	They will also show their address as well			
4-1	humm			
4-2	as well as pictures so			
4-2	maybe it caused some, I don't know, criminal?			CE4 NR--L
4-1	humm please explain criminal			
4-2	like a… I don't know how to say in English. Stalk someone?			
4-1	Ah to use the SNS will..ah can cause to leak some	CE3 個人情報の漏洩	R-OC	
4-2	ah			
4-1	personal information			
4-2	Ah yeah yeah yeah			
4-1	to anyone			
4-2	umm			
4-1	more easily			
4-2	um. … and maybe then			
4-1	(writing down) can leak			
4-2	un			
4-1	near personal…			
4-2	and they they don't care about it			
4-1	ya			
4-2	un			
4-1	they couldn't realise			
4-2	sharing….			
4-1	what their information			

PWD-E:グループ④（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
4-2	the information	CE3 （続き）	R-OC
4-1	is leaking. Is leaked. Hum. (writing down) SNS…		
4-1	On the other hand, how about the positive effects? Or do you have any ideas about negative effect?	CE5 コミュニケーション上の利便性	NR-OC
4-2	umm. Positive..		
4-1	What?		
4-2	Positive point? Ummmm We can communicate more easily.		
4-1	Uh		
4-2	out of school. For example,		
4-1	at the school?!		
4-2	out of school		
4-1	out of school.		
4-2	If we have to any homework with group,		
4-1	um		
4-2	with other people		
4-1	um		
4-2	it is easy to communicate		
4-1	um		
4-2	or share information in the LINE		
4-1	yeah (inaudible 同時)		
4-2	If we don't have the SNS, we have to meet other time		
4-1	umm		
4-2	or yeah		
4-1	or call		
4-2	yes		
4-1	you have to call ね positive…		
4-2	Positive		
4-1	(writing down) we can more あ？We can connect with friend more easily.		
4-2	SNS…	CE6 寂しくない	NR-OC
4-1	Or, positive effects…		
4-2	SNS…		
4-1	ummm…to be kept with, other people,		
4-2	umm		
4-1	especially there are no…reason, to talk or to chat,		
4-2	umm		
4-1	but, if we have the account of the SNS, the list of friend, there are…always they are friend,		
4-2	Ohhh		
4-1	so if you, if we want to contact with other people, there are chances always any time.		
4-2	um		
4-1	but actually I don't use	CE7 SNS を使わない理由	NR-C
4-2	laughter		
4-1	I use Facebook		
4-2	Ah Facebook		
4-1	yeah , but most of all SNS, I don't use		

PWD-E:グループ④（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
4-2	why you don't use SNS		
4-1	ummm		
4-2	noisy or don't use often? Don't need		
4-1	well…How can I say? Hummm I don't want to be kept with,,,be kept friend		
4-2	laughter		
4-1	no I mean, I mean I mean to be friend is		
4-2	um		
4-1	should be…ummmm		
4-2	you don't need, you don't need needless relationship. You want to..		
4-1	Ahhh		
4-2	you want to		
4-1	No, no relationship is important but,…(laughter)		
4-2	(laughter) maybe you want you want to make a good relationship with ..s the people s who have same dream or same target		
4-1	ummm		
4-2	but you don't want to make relationship people with who have ummm other dream or …		
4-1	No no, no, to have another dream is fine		
4-2	um	CE7（続き）	NR-C
4-1	but for example my my friend my elementary school friend		
4-2	umm		
4-1	for example, the life style or the place we lived is		
4-2	um		
4-1	not close.		
4-2	Oh		
4-1	So, I think we don't have to.. Action to connect		
4-2	umm um		
4-1	more positively		
4-2	umm I understand		
4-1	too difficult to explain		
4-2	umm		
4-1	But I think I don't need so much friend		
4-2	um		
4-1	a few friend who can trust or can tell my …anxiety? Is maybe fine.		
4-2	Ahhh like me.		
4-1	I don't know		
4-2	(laughter) Let's talk about the theme		
4-1	so		
4-2	in conclusion		
4-1	yeah, agree or disagree		
4-2	you are disagree. I'm agree		
4-1	um	CE8 否定立論の流れ確認	R-O
4-2	you don't need		
4-1	there are more negative effects than posotive effect		
4-2	um the reason..		
4-1	the specific reason the specific reason reasons are,		
4-2	they		

PWD-E:グループ④（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
4-1	they can more negative effects against bully		
4-2	um		
4-1	the SNS will be more than the SNS will make the bully more seriously		
4-2	umm and the next one is we can't ..		
4-1	And		
4-2	and ahhh SNS makes our writing or spelling skills		
4-1	um		
4-2	down. Declining.	CE8（続き）	R-O
4-1	Um declining		
4-2	um		
4-1	declining. It can be declining because of SNS		
4-2	And third one is…		
4-1	The third is can leak our personal information easily.		
4-2	easily		
4-1	um more easily. And we, and and to realise it, is difficult.		
4-2	unn unn unn		
4-1	はい one, two three		
4-2	And also・・・We have six more minutes. We need so we have to think about Ahhh (inaudible)		
4-1	composition		
4-2	refu…		
4-1	reflection? Ah refutation! Ummmm		
4-2	I think this is easy to get refutation because I think teacher or parent should control the how to use smartphone for children or students	CE9 個人情報の漏洩に関する反駁	R-O
4-1	umm. So, you mean some people who believe, ah, who don't believe this argue		
4-2	um		
4-1	think that that to leak the personal information is easy to solve.		
4-2	yeah		
4-1	But, what?		
4-2	But?あーそっか。。。		
4-1	ummmm ummmm some people say that….		
4-2	What?		
4-1	How do you think about the bully?		
4-2	bully?		
4-1	Some people say that the bully is already happened before the SNS		
4-2	um	CE10 いじめに関する反駁	R-O
4-1	SNS…ah… has spread,		
4-2	um		
4-1	but, but SNS can more seriously.		
4-2	Ah it is the repeat?		
4-1	this refutation is		
4-2	ahhhh that is good refutation I think		

PWD-E:グループ④（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
4-1	ah, OK so that main reason is, lack of writing skill and leaking the personal information, and refutation is, should be about the bully.	CE11 全体像の確認	NR-O
4-2	OK		
4-1	three minutes left	CE12	NR-COM
4-2	hummm		
4-1	think. Think.		
4-2	Think?		
4-1	Think. Thing.		
4-2	わかんね		
4-1	two minutes. Two minutes left		
4-2	you should think. Must		
4-1	laughter no! so we will be … e er agree	CE13 全体像の再確認	R-O
4-2	agree. SNS makes more negative effect because ah for example,		
4-1	lack of writing skills. And		
4-2	SNS make, will make our writing skills or spelling skills getting down…because the smartphone can expect what we want to write or what we want to spelling. And second,…personal information		
4-1	(inaudible: writing) happen before the SNS become become become		
4-2	Hum?		
4-1	become become…how can I say? To spread…everybody can easily use	CE14 言葉探し	NR-L
4-2	SNS?		
4-1	un how can I say?		
4-2	It is to..		
4-1	become, become bullying is already has happened before the SNS become …		
4-2	could you show me?		
4-1	No!		
4-2	え？Bullying is		
4-1	already have happened before SNS become		
4-2	popular		
4-1	popular		
4-2	popular. Or..		
4-1	become…popular…		
4-2	or necessary item for..		
4-1	become necessity?		
4-2	necessity item		
4-1	Necessity. no necessity is noun. Become necessity.		
4-2	Oh sorry, I didn't		

PWD-TL:グループ⑤

ID	発話内容	ラベル	コーディング
5-2	二つの立場からさ、賛成と反対とさ、いろいろなの書いて最終的に賛成か反対か決めるんでない、最初にそのスタンスを決めるんでなく		
5-1	うん		
5-2	Let's get started!	CE1 プロンプトの確認	NR-C
5-1	Let's get started!		
5-2	(reading out the prompt)		
5-1	Negative effect..Actually the case, the case!		
5-2	Yes! (continues to read out the prompt)		
5-1	えー！		
5-2	So, let's focus on the negative effects at first		
5-1	Negative effects?		
5-2	At first, at first. And then		
5-1	Ah hum		
5-2	Let's move on to the next. The opposite side.		
5-1	Ah hum	CE2 PWD の流れの方針確認	NR-O
5-2	Positive effetcs.		
5-1	Ah hum. But agree or disagree?		
5-2	（笑）		
5-1	それ、可もなく不可もなく、で終わるやつじゃないの？いや、んー		
5-2	I am thinking both of the stances.		
5-1	Twiter, Instagram, including the LINE, right?		
5-2	Yes, everything, everything.		
5-1	Em,…. I agree.		
5-2	Yes. Why do you think so?		
5-1	Hummm, from recently, I am never researched about the how many people have the smartphone,		
5-2	Um		
5-1	But I think my image 90%		
5-2	Um		
5-1	or more people have		
5-2	smartphone or PC		
5-1	smartphone and then 90% uploading the some SNS including the Twitter, Instagram, LINE	CE3 コミュニケーションツールとしての SNS の利便性	R-C
5-2	Um		
5-1	as well		
5-2	um		
5-1	and then especially LINE		
5-2	um		
5-1	the sometimes people have the very important things like so "Please come to here on the 4 pm" like this		
5-2	um		
5-1	I think the LINE in is the best, best?		
5-2	Yes, I think so too		
5-1	um		

PWD-TL:グループ⑤（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
5-2	The LINE or Twitter or Cacaotalk et cetra et cetra is the best one	CE3 コミュニケーションツールとしての SNS の利便性（続き）	R-C
5-1	yeah		
5-2	the best application to contact with someone else		
5-1	Ah hum		
5-2	I strongly agree with you		
5-1	Ah hum		
5-2	OK		
5-1	But on the negative side, ah for example, um sometimes happens the trouble like um when we was the high school student, some students send the message to girl, "Hey, how are you?" like this	CE4 SNS 使用法に関する間違いの可能性と責任ある使用の必要性	NR-OC
5-2	Ahhh!		
5-1	Suddenly		
5-2	Um		
5-1	and then the some girls felt like "What was that? Who are you?"		
5-2	Hummm		
5-1	And then the people think about the boy thing is like "He is so crazy, He is talking to the blah blah blah" こうこう		
5-2	um		
5-1	It is actually the negative side, but, people should		
5-2	um		
5-1	have more it's like…責任をもてば		
5-2	um		
5-1	防げることだからー		
5-2	um		
5-1	99% all of SNS says so useful and so many advantage for us		
5-2	um…but it can be a tool of いじめ	CE5 「いじめ」	NR-L
5-1	yeah うん yes, いじめ		
5-2	What is いじめ in Engslih, I don't know.		
5-1	Ah um		
5-2	bury? Bury じゃない？		
5-1	いじめ･･･What kind of いじめ ...on the twitter?	CE6 SNS のいじめの種類	R-C
5-2	um. Right. Whatever. Like am, well,…なんか、なんていう？		
5-1	なんか、実際のところなんか Twitter のいじめってわかんないだよ。何を定義にいじめなのかよくわかんないから。		
5-2	あれじゃない？なんか Twitter 結構個人情報の…あれの..		
5-1	いやなんか、写真なんか		
5-2	LINE とかもさ、あれとかあるじゃん、なんだっけ、あのー		
5-1	うーん？		
5-2	女の子にさ、告白…嘘でしたー、みたいな。		
5-1	うん		
5-2	あれなんていうの？		
5-1	そんなのあんの？		
5-2	知らん？その問題もなんかさ、めっちゃ顕著になってるよ、最近		

PWD-TL:グループ⑤（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
5-1	あとは何だろう	CE6（続き）	R-C
5-2	ネガティブ		
5-1	infrigement of XXXX（判別不能）		
5-2	例えば、		
5-1	例えば	CE7 SNS の長時間使用による身体への悪影響	NR-OC
5-2	people, especially youngers,		
5-1	ah hum		
5-2	all young peoples always use smartphones, and use any some applications like LINE, Instagram, Twitter and et cetra, et cetra so many times, many times		
5-1	um um		
5-2	for a long time		
5-1	um		
5-2	long hours, so… it cause bad effects to our body		
5-1	ah hum		
5-2	like 視力		
5-1	ah hum		
5-2	and ah blind		
5-1	ah hum		
5-2	I don't know exactly, I don't know in detail but		
5-1	Ah hum		
5-2	there are bunch of disadvantage points whe we use smartphones		
5-1	um um um		
5-2	or SNS		
5-1	so, we thought the negative side is like いじめ	CE8 いじめ防止は個人責任	R-C
5-2	いじめ		
5-1	and the … in, especially in Japan, the big problem is いじめ actually		
5-2	um		
5-1	because the so many students argue things like SNS especially Twitter, LINE, and then but, … actually we can prevent prevent		
5-2	um		
5-1	am, it's, we can prevent it if we feel responsible		
5-2	um		
5-1	the using the Twitter,		
5-2	um		
5-1	and LINE,		
5-2	um		
5-1	it's like….これなんだ、閉めますよ絶対（何かを触りながら）		
5-2	でも、it's so difficult to solve this problem, because it's kind of individual problem.		
5-1	うん（笑い）Individual problem…but..		
5-2	It depends on the person just person. Themselves.		
5-1	Um		
5-2	Like, その人次第でしょ、その意識、責任保つ		
5-1	意識		

PWD-TL:グループ⑤（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
5-2	うん、的っていうか、難しいその、全員が全員、言うのは簡単なんだけど、やっぱり、sometimes some people use smartphone, use SNS, 悪いことに。	CE8 いじめ防止は個人責任（続き）	R-C
5-1	うーん		
5-2	使うでしょ？悪用するでしょ？		
5-1	でも、便利なものは必ず、		
5-2	うん		
5-1	裏がある		
5-2	うん		
5-1	それ絶対だから。		
5-2	うん absolutely yes.		
5-1	うんだからまぁ、我々はそれとね、共存していかないといけないです		
5-2	うん		
5-1	確実に。だからそれは、of course people has the both of the side of the … it is normal.		
5-2	Yes, we are able to coexist with SNS.		
5-1	Umm		
5-2	Social Network Services. Twitter and everything.		
5-1	Um.		
5-2	Anything else?	CE9 海外の友人との連絡手段としてのFacebook	R-OC
5-1	SNS… SNS is..		
5-2	positive effects? Is fine.		
5-1	Anything what kind of the SNS do we have LINE, cacaotalk, Twitter, Facebook, …		
5-2	Needless to say, using SNS like LINE,		
5-1	Ah huh,		
5-2	is very super useful to communicate with someone else, and		
5-1	Ah huh,		
5-2	not only domestic people but also		
5-1	yeah!		
5-2	international friends		
5-1	um um		
5-2	any time, any day, wnyehere… so, it's kind of, the, it's one of the advantage point millions.		
5-1	yeah yeah なんかーあの、espeacilly the for exmaple Facebook.		
5-2	hummm		
5-1	Facebook is not used much not much used in Japan, actually, of course Facebook is the very famous application all over the world,		
5-2	that's right		
5-1	but the Japanese people is not used much in Facebook		
5-2	hummm		
5-1	but anyother country people are using Facebook and then we are belonging to the like international department,		
5-2	um		

PWD-TL:グループ⑤（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
5-1	and then we, somepeople go to abroad and then come back to Japan, I wanna connect with my hostfamily, I wanna connect with my friend, foreigner friend,		
5-2	umm		
5-1	Facebook is more… we can relate it with like internationally		
5-2	um	CE9（続き）	R-OC
5-1	it is very useful, if I don't have the Facebook application, 私とても困る。		
5-2	ふふふ（笑）		
5-1	友達と連絡とれなくなる		
5-2	あー確かにね、Messenger だか		
5-1	うん・・of course, いじめが起きるかも、でもとても困る		
5-2	うん there is a tiny difference between adavantage point and disadvanatge point like		
5-1	yeah		
5-2	紙一重？		
5-1	ah		
5-2	隣り合わせでしょー？		
5-1	（笑）そうでしょー？As a result, there are so many advantage,		
5-2	um		
5-1	more than negative side かな		
5-2	うん		
5-1	for me.		
5-2	I agree with you.		
5-1	解決策を考えればいいしね、そのたんびに		
5-2	うんまぁね		
5-1	だって、だってねぇ、いじめ is also not likely to occur freqently でしょ？	CE10 短所より長所の方が多い	
5-2	ん？One more?		
5-1	いじめ is does not occur frequently でしょ。		
5-2	あぁ、うん。		
5-1	で も 、using smarrphone, using LINE, using Twitter Instagram Facebook is everyday.		
5-2	hummm		
5-1	Everyday need.		
5-2	hmmm		
5-1	our life.		
5-2	hummm		
5-1	だから、		
5-2	yeah, surely, there are some dangerous, dangers.		
5-1	yes, yes,		
5-2	but, at the same time there are advantage points, merits, so um, I know, I mean,		
5-1	yeah. Yeah ま、結局、やっぱり僕はメリットたくさん、そしてなきゃ、だめかなぁ？		
5-2	うーん。		

PWD-TL:グループ⑤（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング	
5-1	まぁ、メール交換しかなかったらしょうがないけど。までも、メールってSNS じゃないの？			
5-2	うーん？			
5-1	メールって SNS?	CE11 メールは SNS に含まれるか	NR-C	
5-2	違うんじゃないか？			
5-1	違うよね？Socal…あ、でもつながんないか？			
5-2	Social?			
5-1	知らない、と。検索機能とかないもんね。			
5-2	うーん。			
5-1	まぁ、僕は agree ですね。Agree じゃねぇな、Disagree だ。	CE12 SNS の長所を認めるという意見は否定か肯定かの確認	R-O	
5-2	うん			
5-1	まって、そうだよね？Reading out the prompt again			
5-2	Disagree だよ			
5-1	うん、Disagree かな			
5-2	うん。…じゃ、仮に、ソーシャルネットワークサービスがなかった、と仮定して、			
5-1	うん、			
5-2	I think, about the society, ソーシャルネットワークサービスがなかった時の、社会、を考えたときに、			
5-1	だから、それはそれで、全然いいと思うよ、だって、だって、I didn't know about the it's like the world's SNS, the when we were was junior high school students, it's a people were using mainly application is only mail.			
5-2	hummm			
5-1	Or なんちゅうの、これもないか、メール？Just only nowadays there are so many SNS application, it's just only more useful.			
5-2	hummm			
5-1	でも、困らないよ、メールだけでも。			
5-2	まぁね	CE13 SNS は必要不可欠というわけではない	R-C	
5-1	もっとあれ、あれ、その、In my case だって Instagram the people, um I don't know the purpose of that posted on the Instagram, some people think about "I want to see my Instagram picture the その人の pourpose, actually my poupose is just like なんか my daily life, daily 日記.			
5-2	dairy?			CE14 NR-L
5-1	ああ daily(笑）			
5-2	日常？			
5-1	yeah yeah yeah, あのー1 年後とかに見返して「あーこんなだったー」			
5-2	あー			
5-1	見てもらうというよりかは、あの SNS 上に載せて、かつなんか見たほうがなんか俺は楽しい。			
5-2	んー。			
5-1	っていう purpose もあるし、純粋に good!が欲しい人もいるし。それはわかんないけど。でもそれがなかったら別にその困るってことでもないけどやっぱその、前よりも便利なのはかわらない			
5-2	まぁね。あれだよね、			

PWD-TL:グループ⑤（続き）

ID	発話内容	ラベル	コーディング
5-2	でも、these days um, I often see that like 三歳児とか		
5-1	うん		
5-2	すごいちっちゃい子		
5-1	うん		
5-2	が、なんか usually use parents' smartphone or tablets, I usually I often see the situation during my work		
5-1	yeah		
5-2	during working		
5-1	yes		
5-2	so, mmm		
5-1	まぁ		
5-2	I have a fear. I have a fear.		
5-1	まぁ、あれだよね、years,		
5-2	but what do you think about it?	CE15 幼い子にスマホを使わせることの問題・視力	R-C
5-1	Yeah, I also sometimes I also I have been watching I have been seeing the is like the three years old are using the cell phones,		
5-2	umm		
5-1	os iPad,		
5-2	んーん。		
5-1	I… I didn't worry too much about it's like SNS or いじめ、but I… I did worry about eyesite.		
5-2	視力？うん。		
5-1	Yeah, I thought definitely he will put on the glass or contact lens		
5-2	yes, some little girl or boy		
5-1	yeah		
5-2	wearing wearing a glass		
5-1	yeah		
5-2	or whatever…the number of such a person, such a people, is gradually increasing than before.		
5-1	yes.		
5-2	It's kind of a terrible fact.		
5-1	yes, yes.		
5-2	あ、もう 17 分や！		
5-1	うん、終わりだ終わり		
5-2	stop する？		

付録６　各 PWD のエピソード内容、種類、及びその秒数

PWD-J:グループ①

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	40
2	意見表明	NR	C	47
3	認知力の低下	NR	OC	55
4	認知力の低下以外の要因	NR	OC	30
5	肉体的な衰え	R	C	43
6	反対意見：田舎の交通網の少なさ	R	OC	73
7	認知力低下についての無自覚性	NR	OC	60
8	反対意見：返納後のサポートの少なさ	R	C	40
9	生活の不便さ	NR	OC	36
10	反対意見：車好きの人への対応	R	OC	24
11	賛成意見：認知症	R	C	44
12	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	10
13	反対意見：引きこもり	NR	OC	42
14	反対意見：自動車税の税収源	R	OC	149
15	マニュアルからオートマへの転換	NR	C	22
16	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	37

PWD-J:グループ②

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	高齢者による事故	NR	C	45
2	車がないと不便・自転車を使うと危険	NR	C	44
3	反対意見を書く場所	NR	O	11
4	反応の鈍化	NR	OC	32
5	健康によい	R	OC	45
6	公共交通機関の売り上げ増加	R	OC	59
7	田舎の不便性	R	OC	56
8	重いものの運搬の難しさ	R	OC	24
9	特殊車両に関する吟味	NR	OC	24
10	反論の必要性	R	O	41

PWD-J:グループ②（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
11	項目の確認	R	O	30
12	英単語の確認（多数）	NR	L	261
13	イントロに書くべき内容	R	OC	45
14	語彙確認（多数）	NR	L	58
15	構成の確認	NR	O	48
16	「低下する」	NR	L	61

PWD-J:グループ③

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	PWD 方針確認	NR	O	15
2	中国人観光客の増加	R	C	53
3	構成確認	NR	O	5
4	中国人観光客の英語力	R	C	63
5	ツアー客に対する中国語の必要性	NR	OC	54
6	学習者の混乱	NR	OC	14
7	学習者の負担増加と効率の悪さ	NR	C	70
8	構成―サポートとして利用	R	O	5
9	負担増加と効率性の悪さ	R	C	36
10	賛成意見の必要性	R	O	4
11	必修科目の増加	NR	OC	47
12	言語学習の文化的側面	R	OC	36
13	中国語の汎用性	R	C	116
14	立場の確認	NR	O	9
15	中途半端な中国語教育より英語教育が重要	R	C	46
16	論旨逸脱の指摘	NR	O	6
17	負担の増加	NR	C	9
18	教育確保の可能性	NR	C	16
19	付け加えるべき項目の確認	NR	OC	5
20	授業の難しさ	NR	C	54
21	選択性の提案	NR	C	14
22	立場の確認	R	O	7
23	選択科目化の提案	NR	C	32

PWD-J:グループ③（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
24	賛成意見のサポートの少なさ	NR	O	10
25	日常的に中国を使う頻度の低さ	R	C	59
26	選択科目にすべき	NR	C	60

PWD-J:グループ④

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプト立論の確認	R	C	63
2	操作ミス	R	OC	64
3	反応の遅延	R	C	18
4	若い人の運転の危険性	R	C	18
5	意見の確認	NR	C	17
6	賛成側のまとめ	NR	O	32
7	地域創生の可能性	R	OC	112
8	事故の危険性というコンストラクトの弱さ	R	O	65
9	お年寄りが運転する理由	NR	C	20
10	PWD の時間配分	NR	O	2
11	若い人の方が事故は多い	R	OC	70
12	事故の危険性の確認	R	OC	24
13	誤作動防止システム	R	OC	25
14	肯定立論の構成	R	O	108
15	否定側立論の可能性	R	O	34
16	テストの厳格化	R	OC	49
17	否定側のもう一つの理由・不便性	R	OC	28
18	否定側に想定される反論とその反駁	R	OC	66
19	否定側の構成確認	R	O	74
20	テストの厳格化の方法	R	C	61
21	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	9

PWD-J:グループ⑤

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	14
2	英語教育すら不充分なのに無理	R	C	66
3	中国人の英語力	R	C	54
4	他国の状況	NR	C	29
5	日本で中国語を学ぶ意義	NR	C	62
6	必修で学ばされた中国語の意義	NR	C	31
7	中途半端な語彙学習	R	C	35
8	PWD の残り時間確認	NR	O	5
9	効率の悪さ	NR	C	3
10	教員確保の難しさ	R	C	110
11	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	5
12	選択にした方がよい・中途半端になる	NR	C	19
13	中国語と英語の文法の類似性	NR	C	23
14	第 3 言語を学ばせている学校の実例	NR	OC	190
15	フランス語やドイツ語を学ぶ意義	NR	C	25
16	提携校の存在	NR	C	14
17	その言語を学ぶ意義と必修化の必然性	R	OC	65

PWD-J:グループ⑥

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	反対の理由：検査の充実	NR	OC	39
2	賛成の理由：返納後の返金	NR	OC	24
3	賛成の理由：事故が多い	NR	OC	15
4	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	20
5	返納後の特典	NR	C	16
6	不便性	NR	C	7
7	「事故が多い」はイントロか理由の一つか	R	O	84
8	「身分証」は賛成の理由になるか	NR	O	39
9	健康維持	NR	OC	24
10	「公共交通機関の欠如」は賛成か反対か	R	O	18
11	加齢による事故の増加	NR	C	21
12	公共交通機関の利用増加	R	C	129

PWD-J:グループ⑥（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
13	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	14
14	廃止路線の減少	NR	C	45
15	高齢者講習の進歩	NR	OC	47
16	認知症検査の向上	R	C	91
17	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	32
18	移動手段と家族の負担の増加	R	OC	73
19	「移動手段」に関わる個人的体験	NR	C	41
20	外出機会の減少	R	C	25
21	外出時の家族の負担増	R	C	51
22	現状の確認	NR	O	29
23	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	15
24	現状確認のデータ	NR	C	52

PWD-J:グループ⑦

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	結論から話すか内容から話すか	R	O	49
2	現状の把握：高齢者講習及びテストについて	NR	C	38
3	イントロに入れるべき情報：20 代の方が事故が多い	R	OC	53
4	制限年齢を設定することの困難さ	NR	C	8
5	イントロの内容＆立場の確定	NR	OC	12
6	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	15
7	高齢者の事故は実は少ない―割合はどうか？	R	C	65
8	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	13
9	高齢者の自転車の事故は多い	R	C	57
10	年齢ではなく認知力のレベルで区別すべき	NR	OC	47
11	若くても認知力の低い人は運転すべきでない	NR	C	14
12	20 代の事故が多いことはサポートになり得るか	R	O	21
13	「規制」	NR	L	8
14	年齢でなく判断力を基準とすべき	NR	C	40
15	マニュアルを運転させるべき	NR	C	15
16	年齢を決めるのは難しい	R	OC	49
17	田舎の人は困る	NR	C	38

PWD-J:グループ⑦（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
18	実数ではなく率も検証すべき―不可能	R	OC	42
19	高齢者の判断力低下の反駁―個人差	R	OC	27
20	信号無視も多い	NR	C	3
21	高齢者は自分の運転に自信を持っている	NR	C	24
22	3 人に 1 人は危険な目に遭っている	NR	C	20
23	立場の確認	NR	O	13
24	高齢者の運転に関する自信	NR	C	19
25	身体的な衰え	NR	C	16
26	「高齢者の自信」という反駁の強さ	NR	O	11
27	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	3
28	反駁しやすい項目の吟味	R	O	109

PWD-J:グループ⑨

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	中国経済の規模拡大	NR	OC	14
2	英語に加えて学ぶのは時間的に厳しい	R	OC	24
3	学習者のキャパシティー的にも難しい	R	C	32
4	教員がいない―地元の例の紹介	NR	C	33
5	道徳の時間などを使うのは現在では無理	NR	C	45
6	雇用の拡大の可能性	R	C	71
7	PWD の流れの方針決め	NR	O	40
8	中国文化への親近感	NR	C	13
9	英語を話せる中国人	NR	C	12
10	日本と中国の外国語学習法の違い	NR	C	5
11	日本語を学ぶ外国人の少なさ	NR	C	41
12	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	14
13	プロンプトの再確認	NR	O	11
14	言語を 3 つ修得することの可能性	R	C	49
15	言語だけ習得しても話す中身がなければ意味がない	R	C	79
16	大学から始めることが多い ―もっと早くから始めるメリットはある	NR	C	124
17	日中の貿易規模のデータ確認	R	C	205
18	英語を話せる中国人の割合の確認	R	C	157

PWD-J:グループ⑩

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	110
2	認知症の可能性	NR	C	30
3	車がないと困る人もいるータクシーや救急車で対応	R	C	104
4	車がないと困る人もいる（別事例）徒歩で対応	R	C	77
5	事故を起こしやすい	NR	C	39
6	議論の整理	NR	O	9
7	運転が体に及ぼす悪影響	NR	OC	39
8	強盗に襲われる危険性	NR	C	13
9	山火事の際の避難手段	NR	C	17
10	お年寄りが車を必要とする理由	R	C	45
11	お年寄りが車を必要とする場面	R	C	84
12	定年後の移動手段の確保	NR	OC	30
13	祖父母と子どもの家庭での車の必要性	NR	C	53
14	反対側の論拠	NR	OC	12
15	サポートとして使えるデータ	NR	OC	21
16	高齢者の事故の多さ	NR	C	7

PWD-J:グループ⑪

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	内容の確認：難しいという感想の共有	NR	C	40
2	何歳でも運転できることの問題性	NR	C	17
3	認知力の低下は人による	NR	C	8
4	賛成の立場確認	NR	O	13
5	安全性の向上とそれに対する反論	R	C	24
6	田舎は不便	R	C	52
7	高齢者は自分の運転に自信を持っている	R	C	167
8	プロンプトの確認	NR	C	6
9	免許保有者の増加	NR	C	24
10	高齢者の事故の多さ	NR	C	14
11	賛成と反対の意見の整理	R	O	235
12	賛成理由：健康によい	R	OC	97
13	賛成理由：ヒヤリハット経験	NR	OC	19
14	賛成理由：家族の不安軽減	R	OC	50

PWD-E:グループ①

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	サイド決め	NR	C	41
2	学力の低下	NR	OC	85
3	海外の人とコミュニケーションが取れる	R	C	38
4	個人情報漏洩の危険性	R	C	32
5	「特定される」	NR	L	20
6	否定側は SNS のアドバンテージを示す必要あり	R	O	48
7	海外と情報交換できることは否定側か肯定側か	NR	O	18
8	いじめは否定のサポートか肯定のサポートか	R	O	73
9	様々なデバイスで使える	NR	C	50
10	利便性	NR	OC	57
11	世界中に友達が作れる	NR	C	18
12	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	2
13	犯罪	R	C	117
14	「炎上」	NR	L	30
15	本音と陰口	NR	OC	32
16	「本音」と「陰口」	NR	L	38
17	スマホ依存	R	C	22
18	「スマホ依存」	NR	L	6
19	スマホ依存は否定か肯定か	NR	O	16
20	広告	NR	OC	50

PWD-E:グループ②

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	41
2	否定側：危険性	NR	OC	25
3	プロンプトの読み返し	NR	C	31
4	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	40
5	立場の確認	NR	O	4
6	SNS の種類	NR	C	20
7	「live」の発音	NR	L	4
8	友達を簡単に作ることができる	NR	C	15
9	フェイクニュース	NR	C	7

PWD-E:グループ②（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
10	最新の情報を簡単に得ることができる	NR	C	39
11	子どものコミュニケーション力の低下	R	OC	87
12	プロンプトの理解	NR	C	44
13	詐称の危険性	NR	C	71
14	「嘘をつく」	NR	L	4
15	プロンプトの理解	NR	C	92
16	子どものコミュニケーション力の低下	NR	C	68
17	SNS の中毒性	NR	C	94
18	前置詞の使い方	NR	L	4
19	「集中」	NR	L	11
20	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	2
21	立場の確認	NR	O	10
22	シートの使い方	NR	O	2
23	SNS の利点:友達を作りやすい	NR	O	22
24	SNS の利点:最新の情報を得やすい	NR	O	24
25	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	4
26	友達を作ることは大切だ	NR	O	3
27	「学力」	NR	L	14
28	否定と肯定のサポート振り分け（内言）	NR	O	19
29	プロンプトの確認	NR	C	124
30	SNS の危険性に関する内容確認	NR	C	33
31	「友達を作りやすい」の再確認	NR	C	6
32	「最新の情報を得やすい」の再確認	NR	C	4
33	非常事態の連絡手段	R	C	47
34	「年齢詐称」	NR	L	25
35	事件の可能性	NR	C	13
36	集中力の低下	NR	C	17

PWD-E:グループ③

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	短すぎて何もできない	NR	C	67
2	長ければもっと勉強できる	NR	C	90

PWD-E:グループ③（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
3	日本の休暇の長さの確認	NR	C	27
4	留学の可能性	NR	C	81
5	TOEIC のための勉強ができる	NR	C	29
6	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	65
7	3 か月という期間の評価 （たいしてかわらない vs　旅行ができる）	R	C	82
8	長すぎると英語を忘れる	NR	C	261

PWD-E:グループ④

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	いじめ	R	OC	146
2	スペリング力の低下	R	OC	43
3	個人情報の漏洩	R	OC	65
4	「情報の漏洩」	NR	L	17
5	コミュニケーション上の利便性	NR	OC	199
6	寂しくない	NR	OC	47
7	SNS を使わない理由	NR	C	179
8	否定立論の流れ確認	R	O	98
9	個人情報漏洩に関する反駁	R	O	82
10	いじめに関する反駁	R	O	37
11	全体像の確認	NR	O	16
12	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	25
13	全体像の再確認	R	O	67
14	言葉探し	NR	L	90

PWD-E:グループ⑤

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	個人的な学習の時間が確保できる	NR	C	131
2	留学は 1 ヶ月だけだと短すぎる	NR	C	42
3	関心のあることについて学びを深める機会になる	NR	C	40
4	学習以外のことについて幅広く経験する機会になる	NR	C	44
5	他の国の休暇の長さ	NR	C	17

PWD-E:グループ⑤（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
6	2 か月あれば十分	NR	C	62
7	卒論を書くなら 2 か月でも短いが書かないなら不要	NR	C	209
8	「卒論」	NR	L	45
9	休暇が長すぎると怠惰になる	NR	C	30
10	海外から見た日本人学生	NR	C	34
11	休暇が長ければもっと楽しめて英語も上達する	NR	C	25
12	大学院進学の準備をしたい学生にとっては短すぎる	R	C	86

PWD-E:グループ⑥

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	使いすぎは不眠・勉強不足につながる	NR	C	63
2	スマホに頼り家族内コミュニケーションが減少	R	C	62
3	SNS によるコミュニケーションの限界	NR	C	29
4	若者言葉の蔓延	NR	C	85
5	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	16
6	最新情報が入手できる	R	OC	55
7	「政府」	NR	L	15
8	海外の人と友達になれる	NR	OC	62
9	自然災害時に連絡がつけられる	NR	OC	25
10	「自然災害」	NR	L	9
11	よい点が多い	NR	O	9
12	SNS の悪い点を指摘するのは肯定側	R	O	52
13	誤った情報を信じる危険性	NR	OC	35
14	漢字などが書けなくなる	NR	OC	47
15	「一日中」	NR	L	4
16	日本語のみの現象か確認	NR	C	8
17	「either」	NR	L	7
18	現状に関わる情報の共有	NR	C	59

PWD-E:グループ⑦

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	個人的には問題ないが一般的にはあるはず	R	C	125
2	SNS に関わる問題に関する情報の共有	NR	C	64
3	SNS の利点：情報の入手しやすさ（就活）	NR	OC	56
4	SNS の利用頻度	NR	C	45
5	SNS を便利だと思う瞬間	R	C	53
6	SNS の利点（情報・交流）の整理	R	O	66
7	SNS の危険性とそれを回避するための親の役割	NR	OC	116
8	最大の危険としての出会い系サイトとその危険回避法	NR	C	85
9	他の人の意見に対する推測：子供に危険性を教えるべき	R	C	111
10	携帯を初めて持つ時期・人による	R	C	73
11	イントロの内容：問題はあるが利点が多い	NR	O	23

PWD-E:グループ⑨

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	立場の確認	NR	C	36
2	PWD の流れについて確認	NR	O	32
3	留学の可能性	NR	OC	92
4	ボランティアなどの経験の可能性の有無	R	C	183
5	意欲的に活動する学生の少なさ	NR	OC	47
6	夏休み明けの学習意欲の減退	R	C	107
7	夏休み中に自分がしたこととしたかったこと	NR	C	156
8	もし長い休みがあったらできたかもしれないこと	NR	C	135
9	日本の夏休みの長さの確認	NR	C	125

PWD-E:グループ⑩

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	書かなくなるので漢字などを忘れる	NR	OC	19
2	ブルーライトのせいで不眠になる	NR	C	21
3	歩きながらスマホ利用し危険	R	C	54
4	実体験：Twitter での悪口と表現の自由	R	C	282
5	出会い系サイトの危険性	NR	C	22
6	詐欺の危険性	NR	OC	27

PWD-E:グループ⑩（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
7	「詐欺」	NR	L	15
8	個人情報の流出	NR	C	18
9	世界とのつながり	NR	OC	31
10	時間がわかる（意味不明）	NR	C	13
11	情報の発信・広告	NR	C	30
12	旅行者に役立つ情報	NR	C	22
13	落ち込んでいる人を励ます	NR	OC	48
14	地震などの際の安否確認	NR	C	24
15	「確認する」	NR	L	9
16	語学学習のツールとしての SNS	NR	C	21
17	学びに貢献する SNS	NR	C	64
18	シャイな人も胸の内を明かせるメディア	NR	C	21
19	Twitter の拡散可能性とそれに伴う責任	NR	C	65

PWD-E:グループ⑪

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	SNS のやりすぎで勉強の時間がなくなる	NR	C	68
2	実際のコミュニケーションが減る	NR	OC	57
3	「in people/in person」	NR	L	4
4	利便性	NR	OC	6
5	調べものに有利	NR	OC	4
6	他国の人とのつながり易さ	NR	OC	10
7	個人情報の漏洩	NR	OC	16
8	「漏洩」	NR	L	2
9	誹謗中傷	NR	OC	48
10	「悪口」	NR	L	3
11	「誹謗中傷」	NR	L	12
12	誹謗中傷による精神的ダメージ	NR	C	51
13	スクリーンの見過ぎによる目への悪影響	NR	OC	31
14	インスタグラムの投稿を見ることで感じる孤独感	NR	C	72
15	どちらに書くべきかの確認	NR	O	7
16	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	1
17	アドバンテージの少なさ	NR	O	5

PWD-TL:グループ①

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	留学の可能性	NR	C	36
2	学習したことを忘れる危険性	NR	C	70
3	格差の増大	NR	C	49
4	学校以外の学びの機会（海外の事例）	NR	C	57
5	外部試験受験	NR	C	15
6	怠け	NR	C	28
7	仕事と休みに対する意識上の文化的差異	R	C	257
8	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	49
9	日本人が働かざるを得ない理由	NR	C	31
10	勉強の目的	NR	C	23
11	教育制度の差	NR	C	57
12	信仰	NR	C	6
13	学ぶ科目数の差	NR	C	61
14	夏休みと学力の関係	R	C	44
15	宗教	NR	C	16

PWD-TL:グループ②

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	留学の可能性	NR	C	12
2	学力の低下の可能性と宿題による改善	CR	C	213
3	やりたいことができる	NR	OC	48
4	学費削減の可能性	NR	C	17
5	学費削減の可能性	NR	C	44
6	長い休暇のメリットは人による	NR	C	107
7	現在でもかなり長い	NR	C	36
8	旅行・留学の可能性とそれに対する反論	R	C	60
9	現時点でも十分	NR	C	4
10	全体の長さでなく夏休みのみ長くすることの是非	NR	C	166
11	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	36
12	したいことができる時間	NR	C	5
13	大学生の学習意欲	R	C	38
14	多様な価値観	NR	C	21

PWD-TL:グループ②（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
15	アルバイトの可能性	R	C	45
16	学費削減の可能性	NR	C	25

PWD-TL:グループ③

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	R	C	71
2	睡眠時間の減少	NR	C	76
3	賛成側の意見であることの確認	R	O	30
4	デマ情報の危険性	NR	C	50
5	「デマ」	NR	L	8
6	情報源としての SNS	NR	C	58
7	便利な連絡手段としての SNS	NR	C	36
8	インスタグラムの不必要性	NR	C	14
9	SNS の種類	NR	C	36
10	世界につながるコミュニケーションツールとしての Facebook	R	C	65
11	SNS としてのカテゴリー化	R	C	15
12	便利さゆえの危険性（デマ）	NR	C	106
13	情報消去の不可能性	R	C	180
14	賛成・反対どちらのサポートかの確認	R	O	16
15	SNS がなくてもメールで連絡はできる	R	OC	86
16	CE15 の内容の確認	NR	C	39
17	DA ではなく反駁としての CE16	R	O	26
18	Facebook でのコミュニケーションの手軽さ	R	C	48
19	コンタクト流出危険性	R	C	150

PWD-TL:グループ④

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	73
2	二か月は十分長い	R	C	177
3	日本と海外の大学の学びの質の差異	R	C	104
4	長い休みの間にできること（旅行・普段できない勉強）	NR	OC	123

PWD-TL:グループ④（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
5	バイトによる学習意欲の低下（休みの長さと関係なし）	R	OC	161
6	休みが長くなることの弊害―怠惰になる	NR	OC	50
7	シートの使い方の確認	NR	O	35
8	講義が短くなるため学費不払いの可能性	NR	C	260
9	日本人学生の学習意欲の低さ	R	C	76
10	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	31

PWD-TL:グループ⑤

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	41
2	PWD の流れの方針確認	NR	O	49
3	コミュニケーションツールとしての SNS の利便性	R	C	83
4	SNS 使用法に関する間違いの可能性と責任ある使用法の必要性	NR	OC	83
5	「いじめ」	NR	L	23
6	SNS のいじめの種類	R	C	64
7	SNS の長時間使用による身体への悪影響	NR	OC	73
8	いじめの防止は個人責任	R	C	149
9	海外の友人との連絡手段としての Facebook	R	OC	145
10	短所より長所が多い	R	C	135
11	メールは SNS に含まれるか	NR	C	14
12	SNS の長所を認めるという意見は肯定か否定か	R	O	14
13	SNS は必要不可欠というわけではない	R	C	146
14	「日記」	NR	L	9
15	幼い子にスマホを使わせることの問題点	R	C	119

PWD-TL:グループ⑥

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	学費の無駄	NR	C	46
2	「もったいない」	NR	L	67
3	することがない	NR	C	50
4	バイトも思うようにはできない	R	C	61

PWD-TL:グループ⑥（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
5	「一方で」	NR	L	9
6	旅行の可能性	NR	C	17
7	「ひま」	NR	L	22
8	現状で十分長い	NR	C	67
9	これまでの議論の整理	R	O	50
10	長く帰省できる	NR	C	36
11	「学費」	NR	L	10
12	否定側の理由：「学費の無駄」以外ない	NR	C	29
13	現状に入れるべき内容	NR	C	25
14	平日のバイトのいやすさ。	NR	C	44
15	国内合宿などの可能性	NR	C	134
16	「合宿」	NR	L	14
17	高校での勉強合宿の例	R	C	90
18	長期留学のしやすさ	NR	C	57
19	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	76
20	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	56
21	反駁内容	NR	O	27
22	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	153

PWD-TL:グループ⑦

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	2 か月以上あると怠惰になる	NR	C	42
2	怠惰になるかどうかは人による	R	C	83
3	日本人の学力低下の回復のための学習の必要性	R	C	99
4	サポート 1：すでに十分	NR	OC	63
5	留学する場合は 2 か月は短い	NR	C	58
6	サポート 2：怠惰になり得る	NR	OC	24
7	一般論：長期休暇にすること（旅行・勉強・バイト）	R	C	72
8	アルバイトの是非	R	C	83
9	想定されるアタック（人による）への反駁の難しさ	NR	OC	44
10	想定されるアタック（学習時間が長くても日本は効果なし）への反駁の難しさ	R	O	105
11	「関係する」	NR	L	12

PWD-TL:グループ⑦（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
12	否定側立論のサポート	NR	OC	42
13	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	11
14	2 か月で充分という意見の立論の弱さ	NR	O	36
15	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	21
16	これまでの議論の総括と振り分け	R	O	112
17	自分たちの立論の弱さ	NR	O	70
18	否定側立論の流れの再確認	R	O	111
19	怠惰になり得るという根拠の弱さ	NR	O	41

PWD-TL:グループ⑨

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	プロンプトの確認	NR	C	28
2	目に対する悪影響	NR	OC	46
3	fake news とそれを見極める力を育てることの重要性	R	C	95
4	論点の整理	R	O	86
5	海外の人との情報共有	R	OC	77
6	時間の浪費につながる―人による	R	OC	67
7	コミュニケーション能力の低下	R	C	150
8	SNS に依存し過ぎて自分の考えがもてなくなる	NR	C	90
9	SNS の目的及び使い方	NR	C	42
10	立論の強さの吟味 NEG は自分でどうにかできる・AFF は経験がないと無理	NR	O	128
11	親が子どもに正しい SNS の使い方を教えるべき	NR	C	73
12	乗っ取りなどの事件に会う危険性	NR	C	99
13	利便性と危険性は常に表裏一体	R	C	62

PWD-TL:グループ⑩

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	24
2	長期休暇にすること：趣味のダンス	NR	C	53
3	長期休暇にすること一般論：留学	NR	C	64
4	長期休暇にすること一般論：アルバイト	NR	C	5

PWD-TL:グループ⑩（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
5	長期休暇にすること一般論：帰省	NR	C	6
6	「実家」	NR	L	21
7	長期休暇にすること一般論：免許取得	NR	C	10
8	休みが長いと学んだことを忘れてしまう	R	C	49
9	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	12
10	生活習慣の乱れ	NR	OC	20
11	「Disturb」	NR	L	5
12	帰省している友達に会えない	NR	OC	31
13	プロンプトの確認	NR	C	63
14	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	20
15	学びにつながる旅行や留学	NR	C	29
16	「Individual」	NR	L	7
17	学びにつながるかどうかはその人次第	NR	C	6
18	好きな勉強ができる	NR	C	29
19	リラックスできる	NR	C	33
20	恋人ができない	NR	C	38
21	学習習慣を取り戻すのに時間がかかる	R	C	113
22	生活習慣の乱れ	NR	C	10
23	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	44
24	3 か月あったらしたいこと	NR	C	40
25	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	26
26	長期休暇にしたいこと	NR	C	39
27	議題と関係のないコミュニケーション	NR	COM	172

PWD-TL:グループ⑪

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
1	学習意欲が減退する	R	OC	42
2	自分のやりたい勉強ができる	NR	OC	67
3	長く旅行に行ける	NR	OC	34
4	アルバイトができる	NR	OC	34
5	「稼ぐ」	NR	L	3
6	怠惰になる	NR	OC	31

PWD-TL:グループ⑪（続き）

番号	エピソードの内容	C/NR の別	CE の種類	秒数
7	ゆとりをもって免許をとれる	NR	OC	83
8	インターンシップに参加する機会が増える	R	OC	83
9	新しい人に出会う機会が増える	R	OC	90

付録７　産出された作文

以下に産出された作文（全部）について、アイディア・ユニットの切れ目（ / で表示）と PWD に基づいて産出された部分（下線部で表示）を示したものを提示する。誤用についてはそのまま表示してあるが、本人特定につながる部分のみ改変し XXXXX で表示している。

それぞれの冒頭の【　】内に、作文のタイプと ID 及びそのプロンプトを示してある。ID は表 5-1 に対応している。

【No-PWD 1-1: Chinese】

I agree /that some people argue/ that Chinese should be included /in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject, /as well as English. /I have a reason. /

The reason is that/ Asian country's standard of English is too low. /At present, /TV programs is broadcast /and magazines is written by English./ English is used on a daily basis./ Also, /most companies should be necessary English of ability./ Doing job-hunting of Chinese/ should aim for too high English of ability. /One of the biggest association is used English by official language. /Especially,/ aiming at foreign-affiliated company of Chinese /should do their best./

So,/ I agree that /some people argue that /Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject, /as well as English./

【No-PWD 1-2: Chinese】

Chinese should be included in the curriculum of junior high school and high school. /Because japan import KANJI from china. /People remember/ some words and KANJI is/ Japanese means and Chinese mean almost same mean. /It just wrong pronunciation. /
But Japanese Relation Kanji than alphabet./ Japanese starting to study kanji in elementary school./ Junior high school starting to study English. /And Japanese books was used HIRAGANA, KATAKANA and KANJI./ Japan most translation English to KATAKANA./
Tourist visit japan/ that most foreigners are Chinese./ And tourist of Hokkaido is Chinese. /They said/ need Chinese speakers guide. /Most guide is Chinese./ So japan most study Chinese/ and more increase Japanese guide and company needs Chinese speakers /and Finding employment is advantageous./
Japan focus to tourism now. /Because Chinese shopping spree in japan /and many goods

were bought. /Chinese tourist consume many monies in japan. /So Japanese economy profited shopping spree. /Japan begin Tokyo Olympic in 2020. /Japan near china/ that many tourists come japan. /
Japan must education more foreign language. /

【No-PWD 2-1: Chinese】

In the world,/ especially Asia,/ they have a big issue about education of English recently. /In Chinese,/ English is not included in the curriculum of junior high school and high school /as a required subject. /However,/ I think/ English should be included /as a required subject in China./

First,/ English skills will be certainly improved./ In China,/ students are taught 1800 English words until junior high school. /It is almost same as much as/ students learn until high school. /So,/ if Chinese continue to teach English /as a required subject,/ English skills will be great more than before. /

In addition,/ to improve English skills/ is good for Chinese economy./ The number of people /who can communicate with English/ will increase. /English is used all over the world./ So,/ Chinese will be able to connect with a lot of country /and economy will grow up./

Some people say /Chinese education of English is already enough /because Chinese can speak English better that other countries in Asia./ However,/ the skills are worse than English native countries./ Unless the country is English native, /education of English is never enough./

If Chinese include English in the curriculum/ as a required subject,/ English skills will be improved /and that improving is related to economy's growing./

【No-PWD 2-2: Chinese】

In Japan,/ some people argue /that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject,/ as well as English. /But I disagree this opinion, /and I have mainly 2 reasons for my opinion./

First,/ English is a universal language./ We can use it in anywhere, every country. /But how about Chinese? /It's only main language in China, /not a universal language. /So studying Chinese is not more important than studying English./

Secondly,/ their opinion has the problem at English skill of children./
Needless to say,/ junior high school students and high school students are beginner of English speaker. /In addition, /they have many things to study,/ such as Japanese, mathematics and more. /If they will study Chinese, /they will be confused and /lazy to

study other subjects./

Recently,/ many Chinese people come to Japan and sightseeing now, /and some people say /Chinese is essential for tourists./ But It's wrong opinion. /Surely,/ if all people in Japan can speak Chinese, /it's useful and good for tourism in Japan./ But not all tourists are Chinese people./ People from many countries come to Japan, /and they can speak English./

Now,/ Japanese should improve our English skill, /and Chinese people should understand English to travel abroad. /When junior high school students and high school students want to study Chinese, /they can go to special class for Chinese,/ not in the school./

【No-PWD 3-1: Age Limit】

Elderly people have low judgement and lack of attention./ So track accident is increase. /Elderly people over a certain age are not allowed to drive /that good idea. /I think that agree. /

According to website elderly people have low judgement and lack of attention. /Track accident fatalities is half of 4000 people over 65 years old. /Elderly people is mistake that accelerator or brake pedal. /They make fie mistake like it./

On the other hand/ police held Elderly person training and dementia test. /I think that/ this test and training is good idea. /But this is easy test./ Because training and test is good result/ but they are old people. /Suddenly they may become dementia./ If elderly people become dementia,/ you may drive opposite road. /So I think/ clever thinking/ that elderly people over a certain age are not allowed to drive./

Elderly people higher traffic accident than young people./ And traffic accident was easy mistake./ For example is mistake to acccel pedal. /In other words/ elderly people is low judgement and lack of attention./ Police check training or test, /but real situation is unpredictable./ So I should limit age drive license./

【No-PWD 3-2: Age Limit】

Today we are look about news of the traffic accident by elderly people./ But I look up the traffic accident, /I cannot say categorically/that it is wrong. /So I disagree it./ According to Hokkaido Shinbun,/ the traffic accidents is a high proportion from the top 20 years old, 40years old, 30years old and 80 years old./ Certainly,/ today a small proportion of driving elderly people /but if elderly driver take driving test and senile dementia test every year,/ I believe that /we can reduce the traffic accidents./I suggest that /elderly people more than 75 years old should take some of test./So traffic accident is not many elderly people, /and

if elderly people take test every year, /it is safety./

【No-PWD 4-1: Chinese】

Today,/ some people say /that it is common/ to be able to speak English as a second language, /so people who can speak Chinese as well/ will be needed./

However,/ I disagree with /that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject.

At first,/ in Japan,/ the Chinese education system does not spread,/ so it is difficult /to prepare some staff /who can teach Chinese./ In addition,/ if a municipality try to hire them, /it would be expensive. /A large city might be able to hire,/ but small one won't. /it can be said /that the economical gap generates to educational gap./

Secondly,/ in Japan,/ it has taken about a decade /since Japan introduce English education. /However,/ Japan have not created effective language education. /There are a lot of people /who have learned English for many years,/ but can't communicate enough./ Due to the fallowing reason, /it will be difficult /to make good result from the Chinese education./

Some people say /that, in Japan,/ the number of students who came from China /is increasing, /so it is better /to became Chinese speaker as well. /I think /they are coming to Japan /to learn Japanese, /so we should communicate with them in Japanese more positively. /

From the two points that to include Chinese would be expensive, /and language education system in Japan have many problems,/ I disagree with /that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject./

【No-PWD 4-2: Chinese】

Recently,/ English has been learning as one of the important subjects in Japan. /And then,/ Japanese government focus on the English Education /to improve Japanese English skills/ for growing into global country. /On the other hands,/ some people argue /that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject/ as well as English./

I agree this idea. /I think /that Japanese government should include Chinese into the curriculum. /I have 2 reasons for support my opinion./

At first,/ nowadays,/ the new word was born./ It is "Inbound Economy"./ It means /lots of visitors is visiting to Japan from other countries recently, /and then they spend lots of money in japan for sightseeing, foods, souvenirs and so on./ It leads Japanese economy better. /That is, /lots of visitors support our country's economy. /By the way,/

the quarter of visitors is Chinese approximately. /In fact,/ I often see Chinese visitors in my home town /which nearby new Chitose Airport./ It means/ we have much more chance /to speak and listen Chinese for support them. /So,/ I think/ we should learn Chinese in junior high or high school./

Second reason is the rate of speakers. /Lots of people think/ the most important language /which is spoken all over the world /is English. /however,/ it is not true./ Actually,/ once look at the rate of native speaker, /according to data /English native speaker is 330 million people /and Chinese native speaker is 890 million people. /There are much more Chinese native speaker than English native speaker /because of Chinese population problem and economy development. /Until a few years ago, /we thought English is the most popular public language,/ but it changed. /Because of economy development,/ Chinese population is growing up /and then it leads to development of the late of native speaker./ So,/ in the future,/ Chinese will become public language in the world/ as well as English./ So,/ I don't think /Japanese students focus only English, /they should learn Chinese as well./

In conclusion, /these 2 reason are my reason for support my opinion./ If we studied only English,/ we wouldn't follow the world. /So,/ we have to do it /as soon as possible for our future. /We should include Chinese in our curriculum /as one of the important subjects./

【No-PWD 5-1: Age Limit】

I think/ people over the age of 65 should return their driver's license. /There are two reasons. /Recently I often see in the news /that provincial areas are not able to go shopping /without buses and trains and no cars when going shopping./ But in the provincial areas in the country /now public transportation means such as buses and trains are gone. /So,/ there are a lot of opinions /that it is troubled /if there is no car license./ But I think/ there are many reasons to return a license./

The first point of view in Japan cases, /according to "NHK"/ they did a questionnaire to people/ aged 20 to 70. /Are the contents of the question is /do you have a confident /about your driving technic./ The over the age of 65 to 70 will be confident /said /that we have a confident /about driving technic of the 50% answers./ There are also many accidents /for drivers aged 65 to 70 as much as that./

The second reason is my real experience. /When I was a high school student/ I was in a traffic accident. /I had two operations /and had a hard time that moment/ so I can understand about /scary of traffic accident. /If we happen the traffic accident, /victims will feel so hard even though perpetrators./ And also,/ both of families. /That's why /traffic

accidents must be reduced. /

In conclusion,/ provincial areas should have plans/ to increase more public transport./ Through my experience, /traffic accidents make everyone feel painful./ So that to reduce traffic accidents,/ elderly people should elderly people should return their driving license./

【No-PWD 5-2: Age Limit】

The theme is /whether age limit should be set /so that elderly people over a certain age /are not allowed to drive. /I take a stance of strongly agree. /Recently,/ there is a clear fact/ that terrible tragedies caused by a car /that elderly people drive, /and plenty of people are sacrificed /by the car accidents. /I want to state /why I am taking a stance /that age limit of driving license should be set from the second paragraph. /

The point of view is the danger /caused by getting old. /In fact,/ it is clearly proved /that a human function can be getting decline/ because of aging. /In spite of what a function of quick judge, /appropriate recognition are completely significant for driving,/ these abilities are gradually getting decline /without our consciousness. /It goes without saying/ that it cannot be avoided by people's effort./ Furthermore,/ plenty of car accidents caused by elderly drivers /who is mostly over 65 years old /are being happened these days./ As an example of such a tragedy, /I have ever heard /that a car that elderly driver is driving /tackles against the wall, convenience store or something /because of carelessness driving and and an operation error. /Because of such a tragedy,/ plenty of innocent people are unfortunately died, /and at the same time,/ a victim's family have to become/ carry a sadness on their back for good. /

As a measure to solve it,/ the government set an inspection or lecture for all elderly drivers in each area, prefecture,/ but unfortunately,/ the number of car accidents triggered by such a driver/ are not completely disappeared in real society./ That's why/ I personally think /that the government should set age limit /due to a measure /not to cause such tragedy,/ and it is an extremely significant thing for this society. /

【No-PWD 6-1: Chinese】

Chinese has the biggest number of speaker /who use Chinese as mother language./ Population is over about 1,200,000,000. /Also there are about 200,000,000 people /who speak Chinese /as the 2nd language in the world. /I suppose /that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject, /as well as English./

There are two reason /for supporting this./ First,/ economy of China grows

dramatically./ According to OECD, /GDP of China was bigger than Japan's GDP /and became the 2nd place in 2016. /China has kept the place since then./ Furthermore,/ Japan's company like uniqro and mujirushi-ryohin advanced there./ So,/ the opportunity that Japanese go to China /increase./ Second,/ Chinese visit to Japan. /Recently,/ I often hear Chinese /and see them at my part-time job. /I treat them in easy English/ but there are Chinese /who doesn't speak English in them. /Particularly,/ they are elderly. /I thought /that I wish /I could speak English every time./

There are some people/ who say /that we don't have to learn Chinese/ because Chinese has 7 dialects. /Even there are Chinese/ who can't understand other dialects./ However now Chinses is one of the United Nation official languages. /We need to learn Chinese as same as English, Spanish or French./

To sum up, /the world has lots of Chinese speaker not only native but also bilingual speaker. /Now a day,/ importance of Chinese became higher and higher /because that country has been developing day and day. /In addition, /it is the period for Chinese to visit to foreign countries. /That's why/ I believe /Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject, /as well as English/

【No-PWD 6-2: Chinese】

I agree/ some people argue/ that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject, /as well as English./
I have two objects./
First,/ there is a lot of the language of native Chinese country in the world./ And Today,/ Chinese tourists visit to Hokkaido /and are increasing every year./

【No-PWD 7-1: Chinese】

These days,/ everyone thinks/ that Chinese finance goes up every year /then some people say /that we should learn Chinese at junior high and high school /and also they think /If we do that, /it makes us get big chance all over the world. /But actually I don't think so./ I think/ we have a lot of things to do /before we start learning Chinese./

First of all,/ as we know/ Japanese ranking of English skill is the worst among Asia./ Now a lot of country focus on getting good English skill/ to get a big chance over the world,/ because USA is the center of the world./ USA is the No,1 country./ This is fact./ Nobody say no./ That is why/ we have to master English at first,/ but we can't make it now./ How come we can start Chinese in this situation?/ How can we master one more language/ even we can't English?/ I want to say /that is students don't have enough

capacity /to get any other language,/ because they can't master only one language./

Second,/ actually the problem is not only students/ but also teachers are problem./ It means/ that we don't have enough teachers at elementary school and junior high in Japan./ Because these days there are a lot of problem among teachers./ For example,/ government doesn't pay enough salary to teachers./ If teachers work after finishing time,/ government doesn't pay for over work./ Actually they work for very longtime like from AM 8 to PM 8,/ nevertheless they don't get enough pay./ So the number of people who want to become teacher/ decrease year by year./ In this case,/ who can teach Chinese to students?/ Which school get teacher of Chinese?/ For now we don't have enough teachers/ and also enough youth who want to become teacher./

I know /some people would say /that if we can speak Chinese,/ we will get more chance/ or these day China is the center of world finance. /Actually it is true./ I don't plan to deny this fact./ However,/ what can we do over the world with Chinese skill?/ It is helpful/ only when we do business with Chinese/ isn't it?/ Does Chinese effect any other country?/ I don't think so./ Always all things start from./ If USA start new technology,/ other countries follow that./ If USA make new car or system or device,/ we follow that/ after USA made them like iPhone or Windows./ But for now,/ even USA doesn't start teaching Chinese at elementary or junior high./ We don't need to do that./ If USA do that,/ we may have to do that like a chaser,/ but it is not time now./

Finally,/ I know many people think/ Chinese is need for us this era./ I kind of understand their opinion,/ but when I watch out whole of problem,/ we have a lot of things to do/ before learning Chinese/ and USA doesn't start it,/ we don't have to start it first./ If USA starts it,/ we will have to think of that carefully,/ but it is not time now./

【No-PWD 7-2: Chinese】

Chinese is the most widely spoken as a first language in the world,/ and also people speak Chinese as a second language behind English./ Recently some people argue/ that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject,/ as well as English./I agree with that statement./

There is a huge demand for Chinese in the world./ It can be because of population of Chinese and economic growth./ Then Chinese is already a compulsory subject in some countries such as U.K./ I think/ we need to start soon as much as possible following the trend. /Programming is decided to become compulsory subject for elementary school since 2020 in Japan./ But it is said/ that we are too late to start/ because there is less programming engineer now/ when IT is growing rapidly./ Many developed countries have started that education several years ago,/ and people who have had that class/ will

contribute to IT growth soon/ or already they are doing./ As you know,/ education takes long time to be efficient at least 6 to 10 years,/ so if some skill is needed for future,/ we should just do it as soon as possible/ to be country/ having required skill for the trend./

On the other hand,/ some people say/ population of Chine is decreasing,/ so demand for Chinese will also decrease./

【No-PWD 9-1: Age Limit】

The elder people cause many car accidents these days./ I hear that news everyday on TV./ My opinion is/ the elder people should return them driver license./ If they do that,/ they will spend enjoying life after retirement./ The number of returning driver license increase ten times in ten years./ Many people have same opinion./

Everyone decline body functions because of age./ It is natural/ to cause a car accident for the elder people./ Even if the elder person took a class for elder driver/ she caused car accident./ However,/ people who live in country side need a car to buy food, daily things and go hospital./ Also retiring age is up,/ working people need car too./ I think/ government and company try to set the environment/ if people don't have driver license in country side./ For example,/ set enough public traffic and deliverly system./

【No-PWD 9-2: Age Limit】

I agree /with limit should be set /so that elderly people over a certain age are not allowed to drive /because it can decrease number of car accident by elderly driver./

In my opinion,/ the reason why elderly drivers cause car accident is/ declining physical abilities and attention./ According to Metropolitan Police Department,/ percentage of elderly people in car accident is 13.5%. /Also,/ this number is increasing now./ In addition,/ number of car accident by elderly people is 8.9 per 100 thousand./ It is the biggest number in this survey. /And Metropolitan Police Department says/ that the biggest reason of car accident by elderly people is mistaking accelerator and brake./ So,/ I think/ mistaking accelerator and brake means /declining of physical abilities and attention./

Some people says/ that making safety car is better /that setting age are not allowed drive by elderly people./ But,/ it can't say/ that elderly people certainly get a new a safety car/ because elderly people can't earn enough money/ to buy new car./

In conclusion,/ I think/ age limit should be set/ so that elderly people who is over 65 years old/ to decrease number of car accident by elderly people/ because physical abilities and attention of elderly people decline./

【No-PWD 10-1: Chinese】

Nowadays,/ China keeps developing economic growth,/ and GDP in China is 2nd in the world./ I thought /that Chinese become language /that is needed by the world /as well as English, /and agree with this resolution /Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject,/ as well as English for two reasons./

The biggest reason that /people who can speak Chinese/ can find employment easily./ According to list25.com,/ Chinese is the one of languages/ that have the most power of influence next to English./ Additionally,/ According to Japan National Tourism Organization,/ tourist from China increased about 5,000 in 2015 to 6,373 people in 2016./ Recently,/ it become the world/ that speaking English is normal in the world,/ and company need people/ who can speak Chinese as same as English./

Another reason is/ that it is easy for Japanese to learn Chinese./ Chinese is used Chinese character/ which is also used in Japan,/ and there are no tense and conjugated form./ In present situation,/ people can access to inter net easily,/ so we have an ideal environment learning Chinese./

In conclusion,/ Japanese junior high school student should study about Chinese./

【No-PWD 10-2: Chinese】

Good after noon./ My name is XXXXX from XXXXX./ Today I'm going to talk about the topic/ "some people argue/ Chinese should be included in the curriculum of junior high school and high school /as a required subject, /as well as English." /I disagree with this topic./ I have a reason and article about curriculum difference in Japan and China./

One of my reason is /that the rules has already made in China./ In addition,/ how they learn,/ which sections the students learn/ are different too./ One of the most different thing is/ education in China doesn't have club activities such as sports or instrument or something like that./ This is because/ school want students to ONLY think about studying./ Teachers think/ they don't need other thinking./

注）本人の特定につながる情報の部分のみ改変（XXXXX で表示）

【No-PWD 11-1: Chinese】

Today,/ there are many foreign people to work,/ trip,/ or study abroad./ One of the countries which people come to Japan/ is China./ I agree/ that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject,/ as well

as English./ There are two reasons for this./

First,/ there are many Chinese tourists in Japan./ According to Nihon Keizai Newspaper on May 18,/ 2,900,700 people came to Japan last month./ Also,/ about 690,000 Chinese people came to Japan last month./ I work at souvenir shop in Sapporo,/ and I always see foreign people from China./ I think/ there are many Chinese people year by year./ It is necessary to speak Chinese at tourist facilities such as hotel, airport and leisure places./

Second,/ there are over 6,000 companies from Japan to China./ Every companies need to hire employees./ If a Japanese company want to advance to China,/ employees have to speak Chinese to communicate./ Chinese is one of important languages for businesses./

However,/ there are many worldwide companies in China./ All of these companies are not from Japan./ Some companies are from other countries like America and Africa./ Chinese is not worldwide common language,/ so some people think/ English is more important than Chinese./ I think English is also important language for the world,/ but some people think China will be the world's largest economic country for the future./ If this is happened,/ Chinese is more important than now./ People should learn Chinese thinking for the future./

For these reasons,/ I agree/ Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject./ For the future,/ Japan will be one of global countries./ Now,/ we have to think about the future not only Japan but also all over the world,/ and pioneer various things like languages./

【No-PWD 11-2: Chinese】

Some people argue/ that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject,/ as well as English./ I don't agree about this topic./ There are two reasons./

Firstly,/ to be included in the curriculum of/ Chinese will be burdened highly on junior high school and high school students./ Even now,/ Junior high school and high school students have to learn a lot of subjects./ Most students join the club activities/ and manage to be successful in both study and club activities./ Although,/ if the item they learn increased,/ it would be hard more for students/ who join the club activity/ to be successful at both of them/ and some students might be not able to follow the class/ and get the lousy result./

Secondly,/ it is a problem about cost./ If Chinese was included in the curriculum,/ school have to hire teachers/ who can teach Chinese for each school of all Japan./ It will cost so much./

Some people think/ in some foreign countries,/ junior high school and high school

students have been learning several foreign languages for a long time./ So, they might feel/ Chinese should be included in the curriculum of the junior high school and high school in Japan, too./

However,/ I think/ this active is unrealistic thinking/ from a burden on students and cost/. So, /I guess/ Chinese don’t need to be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject./

【PWD-J 1-1: Age Limit】

I agree that/ Some people argue/ that age limit should be set / so that elderly people over a certain age are not allowed to drive. / I have a reason./

The reason is a disease. / Old people is possible /to have Alzheimer's disease. /Alzheimer's disease is the highest one of illness of rate of crisis in dementia. / /Especially,/ showing symptoms of Alzheimer's disease of proportion/ is 2 million old people every year. / People in question is not realizing subjective symptoms. /As a result,/ accidents by old people continues occurring in each place of the whole country. /

So,/ I agree /that Some people argue/ that age limit should be set / so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./

【PWD-J 1-2: Age Limit】

Some people argue / that age limit should be set / so that elderly people over a certain age are not allowed to drive. /I disagree it. /Because elderly people needs transportation in the country. /Transportation is developing in country. /So they cannot freely act to shopping and traveling. /Elderly people will go to hospital /when they injurious to health for example knee or waist. /If driver license return to police,/ police give benefit to them./ For example,/ bus, taxy, and JR of discount. /Some service price is discount./ Some prefecture different take a service. /

But you drive car is low cost, / and elderly people needs to family support. /They are increase burden family. /And driver license return to police / after how to deal the car. / Maybe you sell car to car shop. / You take a few monies /than you bought car price. /

They return to it /when they cannot drive on the public road. /Some driver likes driving car /when they return to it /after they never drive car. /

If elderly driver needs car, /I recommend manual type. /Because it doesn't jump start. /

【PWD-J 2-1: Age Limit】

Now a day,/ the number of car accidents caused by elderly people /is increased in Japan/ because elderly people is increasing in Japanese society. /Even if a person is 100 years old, /he she can drive anytime./ Can we say/ it is safe? /So,/ I believe /age limit should be set /so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ There are two reasons for this opinion. /

First,/ if age limit is set, /the number of car accident /caused by elderly people /will be decreased./ According to some research,/ kinetic eyesight is decreasing from people /turn 50 age, /and cognitive function is also decreasing. /We can't stop being old. /In short,/ by setting age limit, /the car accident will decrease in the future. /

In addition,/ to set age limit,/ it is good for public transportation./ If elderly people can't drive /to go somewhere, /they will use public transportation. /Recently,/ a lot of people have cars/ and don't use public transportation frequently./ So,/ the running of transportations is getting hard./ If elderly people use public transportation a lot, /the economy of transportation will develop /and income will increase./

Some people say/ it is convenient /to use car /for elderly people to go somewhere. /Sure,/ it is convenient, /but there is a big risk./The life is more important that convenience./

For this reasons,/ the age limit should be set/……..

【PWD-J 2-2: Age Limit】

Recently,/ the number of the traffic accident by the driving of the elderly people, /and some people argue /that age limit should be set /so that elderly people over a certain age are not allowed to drive, /and I agree with this opinion, /and I have 2 main reason /to support my opinion./

First, /needless to say,/ many people died by traffic accident/ by the driving of the elderly people. /Elderly people's kinetic vision and cognitive function are decreased from young and adult, /so it is too dangerous for elderly people to drive a car./

Secondly,/ health of elderly people. /When they can't drive a car,/ they walk to station, and store. /Walking is very good exercise for elderly people. /

On the other hand,/ there is the opinion of disagree. /When elderly people want to go too far away, /they need a car, /they can't cycle long time,/ and walk long time./ But they can use the public transport such a bus, and train./ In the public transport office,/ there are many good services /like a discounting. /In addition,/ if they use the public transport again and again,/ the economy of the public transport like a JR can develops./

In the summary,/ when the elderly people over a certain age are not allowed,/ not only many traffic accidents are not happened, /and there are many good effects for health of elderly people, and economy. /So the age limit of driving should be set./

【PWD-J 3-1: Chinese】

The topic is that /Some people argue that /Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject, /as well as English./ I think/ that disagree. /I have three reasons./The first is that /if Chinese be included in the curriculum of junior high schools and high school/ then some of students will included burden./ If you have good English skills,/ I think that /no such thing./ But If you do not follow the English class, /I think that /it is difficult./

Secondly government should decide new curriculum in Chinese./ I think that/ government don't have curriculum of Chinese./ So government have to decide from the beginning. /This use long times./ Now in Japan have many problems. /So if government decide curriculum of Chinese, /I think that /government solution another problems./

Thirdly if you teach Chinese /I think that /there are few opportunities to use. /Chinese people come to japan. /But this tour has Chinese guide. /But I will be asked frequently to English./ I think that /education of English is important./ So Board of education should tackle education of english./

Finally,/ is that /if high students learn Chinese/ I think that/ subject have more many of problems than good effect. /I think that /Japan's government cannot solution of problems. /So I think that/ this topic is disagree./

【PWD-J 3-2: Chinese】

I think that /I should not include Chinese in the curriculum of junior high schools and high schools. /Now in Japan came many Chinese tourists. /So we should study Chinese, /but usually we aren't look the Chinese. /In case of English,/ it uses technical jargons. /And Japanese cannot use English. /So now we are should study English perfectly. /If we are including Chinese in the curriculum of junior high schools and high schools, /we will finish incomplete both of English and Chinese. /If people who want study Chinese junior high school and high school /because of want to get the sightseeing a job, /school should can select the Chinese subject for the student. /So Japanese should be talking English perfectly /and if people who study Chinese for junior high school and high school, /the school should can select study Chinese for students. /As a result,/ I think that /I don't need include Chinese in the curriculum of junior high schools and high schools./

【PWD-J 4-1: Age Limit】

I disagree /that age limit should be set /so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./

Today,/ some people say/ that elderly people drive dangerously, /and they can't exactly decide on the spot,/ so they have to quite to drive./ However,/ I think/ we can't distinguish according to the age, /not all of elderly people drive dangerously./

At first,/ if today's driver's license system should be changed, /it must depend on their ability, /not depend on the age. /In fact,/ there are many drivers /who have driven long time,/ and have never occurred a traffic accident. /We have to check their ability with some examination./ In addition,/ the examination should be more vigorous and severely./

Secondly,/ the car is really important means for elderly people /who lives rural

areas. /When it comes to buy something necessity, /they can't buy them nearby /because there are enough store, /so they have to go far away from their house. /If they don't have a car, /to get necessary items/ will be not available./

actually,/ some strange traffic accident was occurred by elderly people./ For example,/ they drive opposite side, /but in the aspect of dangerous driving, /younger people is more /doing such drive. /Serious traffic accident which can be die people /have more been occurred by younger people./ The numbers of drivers who was arrested /by driving with drinking alcohol /is higher than elderly driver's one./

From these point,/ I don't support the idea /that age limit should be set /so that elderly people over a certain age are not allowed to drive. /We can't clarify based on the age /whether the diver have enough skill /to drive safety or not. /Because of young,/ some younger driver does very dangerous driving. /We have to check their skill /depends on the result of driving examination./

【PWD-J 4-2: Age Limit】

Recently,/ lots of people have driving license from young people to elderly people. /And then,/ some traffic accidents were caused by some elderly people. /So,/ the government is thinking about /"the age limit should be set for elderly people"./ I disagree with it. /I have 2 reasons against it./

At first,/ in my opinion,/ it is really difficult for them /to go far place for shopping or sightseeing without cars. /Their abilities for walking or excise are much lower than young people, /so they need useful item. /It is a car. /If they have a car, /they can go to everywhere/ they want to go,/ and then it makes they happy and healthier in their mental. /And also,/ they can keep relationships with friends. /Seeing friends and going sightseeing leads them to outlive. /This is my first opinion./

The second,/ recently media focus traffic accidents /which caused by elderly people. /Most of them caused by their ability /which getting older. /Some of elderly people might be getting down their ability at 60 years old. /However,/ there are lots of elderly people/ who still have good abilities at 60 years old. /That is, /if the government set the age limit, /we could success for preventing traffic accidents rate lower,/ but it will cause /that rob driving opportunities from fine elderly people as well. /For avoiding it,/ I think /Japanese government should set the test for judging /whether they can drive accurately or not. /Nowadays,/ it has already done, /so I think/ the government should revise it stricter. /In addition,/ the government takes place the test every year, /not every 3 years. /If the government done this,/ lots of fine elderly people's driving right would be saved /and they can enjoy driving with family or friends./

Some people who agree with /“setting the age limit” /think elderly people /are dangerous in driving. /I disagree with it/ because there are much more young drivers than them, /and then the rate of traffic accidents which caused by young people /is higher than elderly people /like driving with drinking /or dangerous driving with high speed. /We shouldn’t focus only elderly people./

In conclusion,/ as I wrote before, /I disagree with/ “setting the age limit”. /These opinions which I wrote are reason. /If we set the age limit, /lots of elderly fine people will lose their driving right. /It means /they lost hope or pleasure as well./

【PWD-J 5-1: Chinese】

I disagree this topic. / I have two reasons./ Actually,/ there are so many merits/ to study Chinese. /Because the proportion of foreigners who come to Japan /is China /so if we are able to use the Chinese, /we will definitely connect with Chinese more. /However,/ if the junior high school and high school required /to study Chinese, /students who can’t get the English /this mean/ like they will feel more difficult/ to study English./

The current state of English education in Japan is not good /teach to English./ If teacher teach the Chinese to students, /they will confuse /to study language. /Even now some teachers are only focusing about grammar and vocabulary /when they were teaching English. /They haven’t opportunity /to speak English./ That’s why /when some foreigners ask to Japanese, /They won’t response from question./ This will make it impossible /to speak Chinese /as well as to improve English. /I think that /teaching Chinese /is no meaning as a required subject. /

There are many middle schools and high schools in Japan. /I think that/ there are few teachers /who can teach China /and can speak Japanese as well. /Even if there is such a teacher, /it costs a lot of money /when hiring /so there are lots of merits /but more disadvantage than that. /I don’t think/ teacher shouldn’t teach Chinese as a required./

【PWD-J 5-2: Chinese】

This theme is /“Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools /as a required subject,/ as well as English.” /I have a negative stance about it. /I have a clear reason /why I assume so. /Firstly,/ it is not important much/ to let all students in high schools and junior high schools study the second foreign language /as a required subject./ In Japanese education, /English studies is already being a required subject /as the language is a universal language in the world. /It makes sense/ in terms of why all students have to study or learn English /as a required one in schools./ Nowadays,/ this world is rapidly globalized /as time passed /because of the rapid

development of several things like transportation. /People can move anywhere /by using some ways of transportation like airplanes, shipping and stuff like that. /As the same time,/ opportunities that people use a universal language /to contact with foreigners /are more than before./ However,/ as a big problem, /it is sure /that most of Japanese are not capable of /manipulating English well /when comparing with non-native speakers in other countries. /That's why /I personally assume that/ the level of English education in Japan should be more level-up /than creating the new education system, /in this case,/ setting Chinese language as a required subject. /

As an another reasons,/ there are tons of problems by that in terms of expense./ At first,/ the government have to bring up a human /who can manipulate Chinese well. /Besides,/ they have to change the former education system to the new one/ in order to be accomplished with that. /Needless to say, /it costs much, /and takes long time/ in the case of doing that. /From these my personal opinions, /I disagree with this. /Chinese studies don't have to be set /as a required subject for high school and junior high school students./

【PWD-J 6-1: Age Limit】

Japan has promoting for elderly people to return their driver's license./ I don't think/ that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./

There are two reason for supporting this./ First,/ elderly people over 75 years old must take some lectures and the dementia test/ when they renewal their driver's license./ People who cannot pass the lectures and test/ might be danger driver,/ but people who can pass these one/ have enough skill to drive./ The result of the lectures and the test prove that./ Second,/ it is hard for elderly people to transport to go somewhere./ Also,/ their family's burden become bigger./ In our family case,/ my mother takes more times to care my grandfather /than before he returned his license./ He and my grandmother don't have license,/ so they cannot go to the supermarket./ Because they get tired to walk with heavy shopping bag./

Someone said /that elderly people should not drive /because they cause car accidents. /However,/ as I said,/ when they renewal their driver's license,/ they must take some lectures and the dementia test./ People who pass these one/ are safe./ Everyone don't know/ when elderly people's heart stops,/ not only them but also young people./

To sum up,/ present medical test has high quality./ There are people who concern to care elderly./ That's why/ I don't suppose/ age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./

【PWD-J 6-2: Age Limit】

Today,/ old people receive their license yourself,/ and they are over 75 age./

I agree /some people argue /that age limit should be set /so that elderly people over a certain age aren't allowed to drive./

I have two opinions./

Old people had a slight mishap /because old people have the illness and/ came aging./
I need /age limit should be /so that elderly people over a certain age./

Old people will grow to use public transportation /and will be a stable economy. /Also, /you might prevent the discontinuation of the bus and train route./
Mainitchi Shinbun said/ "Regional Route Distant Spring Continuous Reduction, Revision of Station Abolition Diamond"./

In conclusion,/ you might prevent a mishap and the discontinuation of the bus and train route./
So I agree/ some people argue/ that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age aren't allowed to drive./

【PWD-J 7-1: Age Limit】

Normally many people think/ that elderly people's car accidents happen more than youth's car accident,/ but actually it is misunderstanding./ And as we know/ elderly people need a car to live in country side./ That is why/ I don't think/ that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ I have some reasons./

First,/ as I mentioned in introduction,/ actually elderly people's car accidents happen less than youth's./ I don't think/ many people know about this thing./ Actually elderly people get car accidents often,/ but the reason is not age./ For example,/ many reason of car accidents is shortage of recognition./ This ability depends on people./ There are a lot of people/ who are shortage of recognition/ even they are under 30 years old./ On the other hands,/ there are a lot of people/ who have good recognition or memory or eyesight./ What I want to say/ is age should not be limited,/ but shortage of recognition should be limited./

Second,/ they really need car to live./ If they don't drive cars,/ it means/ they can not go outside by themselves./ Because some elderly people have some problem of

physical, like low back pain, knee pain, difficulty of walking./ For these people a car is really important factor in their life./

If they don't drive,/ only they can do is staying at home./ Who can enjoy a day only at home?/

Who can make friends at home, get communication?/ These things make their life worse./ In country side,/ if they do not drive they cant get even foods./ Who can be alive without foods?/

They really need to drive./

I guess/ some people who agree this topic /may say /that ability of judgment goes down every year./ It means/ generally elderly people don't have enough judgment skill,/ butI have a question for people/ who agree with that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ What age should be limited to drive?/

70 years old?/ 80 years old?/ There are a lot of lively elderly people./ For example,/ as everybody know/ Mr, Hifumin who is shogi player./ He is a legend of shogi world/ and 78 years old./ He will be 80 years old in 2years,/ but he is still lively,/ has good memory ability of judgment./ He is totally better than young bad boys./ Which drive is safer 20 years bad boy or 78 years Hifumin?/ The farmer is more dangerous./ In this aspect,/ judging from age doesn't mean anything./

Finally,/ what I want to say/ is /that age doesn't matter for driving,/ because it depends on people./ Age can not be the strongest reason of shortage of recognition./ In fact,/ young drives get more accident than elderly people./ They really need a car to live in country side. /As I mentioned with example of 20 years bad boy and Mr, Hifumin,/ age isn't most important reason to drive./

【PWD-J 7-2: Age Limit】

Driving is necessary in daily life for all ages people./ Recently car accident caused by elderly people/ is one of problem in Japan./ Then,/ some people argue/ that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ I don't think/ it will influent/ to solve the problem./

The reason that I disagree /is the actual amount of car accidents in a year./ According to a research,/ 20~29 ages people have had car accidents most./ It shows/ that not only elderly people but also young people should be paid attention./

Moreover,/ some elderly people need a car to shop or go to hospital./ If age is limited to drive,/ out of limit ages people who really need/ like living countryside and having difficulties to more urban area/ would be hard to live./

On the other hand,/ it is said/ that elderly people have less judgement/ when they

drive,/ and that is the main reason of their car accidents./ Actually it can be true./ But we need to think about /what age should be limited./ It is different/ depend on the person,/ when they get impaired judgement,/ so we cannot say the exact limit./

【PWD-J 9-1: Chinese】

In recent years,/ China has a huge effect to the world economy./ Should Japanese start to study Chinese same as English/ since we are junior high schools and high schools?/

My opinion is/ we cant study Chinese in a school,/ because we don't have time/ and teacher for including in a curriculum of junior high schools and high schools./ And also,/ I think/ students have to study about contents for talking./ Even if people can speak some languages well,/ it is meaningless/ if people talk little content./ It is important/ what person is talking about./

Of course,/ china is a big country for japan and world./ We depend on Chinese product every day./ It is 20% Japan's trade with china./ However,/ there are a hundred million English speakers in china./ and then we have to deal with other countries./ English is already world language./ Japanese should learn English first./

China is important country for japan,/ so Chinese is useful tool/ for deal with china./ but learning Chinese/ do not have priority than learning English /and we have to study things/ what we talk about./

【PWD-J 9-2: Chinese】

I agree/ with that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject,/ as well as English/ because Chinese become necessary skill for Japan./

In 2017,/ 7350000 tourists of China came to Japan./ This number was the biggest number of all tourists/ came to Japan./ Also,/ Japan has good connection with China for trade/ because Japan export and import around 20% with China./ It is so big percentage./ So,/ now,/ Chinese is more necessary skill in Japan that past./

On the other hand,/ Chinese education is so late in Japan/ because Originally,/ most of student started to study Chinese at university or college./ If students can study Chinese in Junior high or high school,/ they can study more specific Chinese in university./ It connects to keep or improve the relationship with China/ such as that Japanese can provide more comfortable service for Chinese tourists./

But,/ some people worry about the number of teacher /who teach Chinese./ But,/ I think/ it is good chance for Chinese/ who live in Japan/ because number of Job for these

people can increase./ Some Chinese people suffer from less the job./ But,/ if they become Chinese teacher in junior high or high school,/ they don't need to worry about jobs./

In conclusion,/ I think/ that Chinese should be included in the curriculum of junior high schools and high schools/ as a required subject,/ as well as English/ because it causes bright effects for Japan and China/ such as that many Japanese students can learn specific Chinese for good relationship with China/ and Chinese people can get more kind of jobs in Japan./

【PWD-J 10-1: Age Limit】

I agree with the topic/ that Some people argue/ that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ I have two reasons./

To begin with,/ according to the Metropolitan Police Department,/ car accidents by elderly people is increasing annually/ because people is getting weak/ as they get older./ For example,/ kinetic eyesight is decrease explosively while 40~60's,/ and their judgement is also decrease/ when 60s/ people do something at same time simultaneously./ Additionally, /people who use their cars for long time,/ they lack their attention easily./

Secondly,/ using cars is no need for people/ who resign their jobs./ The reason why people use cars/ is to go to their workplace, /to go to supermarkets, or so./ 60s people have to resign from their jobs,/ so they don't need cars./ Recently,/ elderly people can order some commodities on the internet,/ therefore,/ they can get each living necessities form internet./

To sum up,/ to survive,/ it is better/ for elderly people to stop to drive their cars./ In case that elderly people want to go somewhere,/ they should ask their sons/ or use taxi and buses./ Elderly people should be get limit for using cars./

【PWD-J 10-2: Age Limit】

Today, /I'd like to discuss about the topic /about age limit should be set /to elderly people over certain age are not allowed to drive. /I agree with this argumentation./ I have reasons /which are accidents, false confidence and no way to use for them./

Recently or already from the past,/ there are various kinds of accidents by elderly people./ Younger people also make accidents such as hit and run accident but today, /elderly people have made a terrible accidents and mistakes./ For example,/ many news TV program pick it up,/ the one was reverse running at high way road./ Some specialist of the high way said/ that they had misunderstanding the rule of the road /like two lane road by watching the car coming front of the elderly driver./ I won't discriminate them,/ but I think/ that happened because of dementia./

Additionally,/ they've made accidents /such as hit their grandson or wife/ during they are reversing the car,/ hit and run high school students./ Let me give an example in 2016./ From TV Asahi,/ they said this year,/ many people died/ by hit by car/ drove by elderly people/ until going all the way to the new year./ Most of the driver was over 65 years old./ From these news,/ I always see/ that their family were saying them to NOT DRIVE/ but they won't listen/ because they have FALSE confidence by the experience against their age./ Also,/ by the experience at some university,/ there was a result/ of how fast do they avoid/ noticing the danger./ Younger people had 1.9 seconds,/ but elderly people had 1.2 seconds in average./ So that means,/ elderly people can't escape form the danger/ even if they could notice./ However,/ most of elderly people think like/ "I can do it" /or "I'm still young!"/

The last reason I think is/ there's no way to use the car./ I can also say/ the opportunity of using it might decrease./ Some of you will think/ what about when they need it to pick up their grandchildren to he or her school,/ need to go to the supermarket/ to buy ingredients/ or what should they do/ when they have emergency?/ I'll say/ they might have to wait/ until someone find you/ if they need emergency/ like going to the hospital./ Perhaps,/ for other two,/ I can declare/ they'll think about their health/ so they decide to walk,/ have an exercise/ and make foods by themselves/ to keep their health./

From the reasons above,/ I agree with/ the age limit should be set from certain age/ to not make accident again,/ to not increase killing no unguilty people and for elderly people's health./

【PWD-J 11-1: Age Limit】

Recently,/ there are many car accidents in Japan./ Sometimes,/ older people are related to these car accidents./ I think/ age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ There are two reasons for this./

First,/ these car accidents which are related to older people/ will be decrease./ According to the Car-nalism,/ 72% of older people over 80 years old have confidences about driving cars./ In other words,/ they don't know about their shortages of attention./ I think/ that this is one of the cautions about car accidents./ Actually,/ one out of three have an impatient experience/ during they drive./

Second,/ they will be healthy/ if the age limit is set./ When they go somewhere,/ they have to walk/ or riding a bus./ They can also put muscle strength/ using the way to walk./ It is important to walk somewhere /more than relying on the cars./

However,/ some people say/ that if the age limit is set,/ people who live in countryside area /will be inconvenient/ because there is no traffic network,/ so they can't

go shopping in the supermarket./ I think/ Japan should solve these problems as soon as possible./ It isn't difficult to set more buses or traffic networks/ more than decreasing the car accidents./

For these reasons,/ I think/ age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive./ It is necessary/ to find out these solutions/ because now is the time of aging society./ People which drive cars or don't drive cars/ have to think about importance of various car accidents/ and argue or discuss this problem./

【PWD-J 11-2: Age Limit】

I agree with the idea/ that some people argue/ that age limit should be set/ so that elderly people over a certain age are not allowed to drive/, and I have two reasons/ to support my opinion./

To begin with,/ it would keep good health of elderly people./ If age limit was set,/ elderly people have to quit to drive./ Then,/ they walk or ride bicycle/ instead of driving./ I think/ it can be improvement/ or keeping health for elderly people./

Secondly,/ risk of driving by elderly people./ Elderly people don't have driving ability/ as younger people have./ According to Senior guide,/ one of three in elderly people have experiences/ that they were about to happen car accidents/ while driving./ So,/ elderly people have high risk to happen accident/ and it is danger for elderly people to drive./

Some people think/ it would be inconvenient for elderly people/ if age limit was set./ For example,/ in rural area,/ there are few transportations./ So,/ for elderly people who live in rural area,/ they are difficult to go out/ if age limit of driving were set./

However,/ it is more important holding life/ than living hardly./

It is these reasons of my opinion/ that age limit should be set/ for health and living safety of elderly people. /

【PWD-E 1-1: SNS】

I agree that / the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects. /I have two reason. /

First,/ People suffer from a smartphone dependency, /and scholastic ability decline./ SNS use smartphones and computers. /Therefore without spending a day on the use smartphones./ As a result,/ they cause the decrease in sleep /and get out of shape./

Second,/ People write personal information and copyright /and is flooded with SNS. /In late years,/ the case that personal information is contributed to in SNS/ is occurring in succession. /Therefore Act on the Protection of Personal Information is revised, /and severer disposal falls./ It may be rolled up in such a crime./

So,/ I agree that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects. /

【PWD-E 1-2: SNS】

Some people argue that /the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./

I disagree it. /Most people use SNS. /For example, LINE, Facebook, Instagram, twitter. / These are convenience application. /LINE has 2 function. /Call and send E-mail. /Most application is free. /Face book is famous most over the world. /If you use Facebook, /you can through to communication other country people /and share the information. /Real name is opening to public on Facebook. /So you can find out old friend./

Most entertainer is typing twitter/ and submit /took the photo./ People know them about behavior. /So people feel to close them. /

People use to first open the twitter. /So company and manga artist announce on twitter for people. /

You take care of personal information. /

【PWD-E 2-1: SNS】

Now a day,/ the development of SNS is dramatically increasing./ Some people argue /that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects. /I agree this opinion /and there are two reasons for that. /

First,/ it is dangerous for young people. /Minors don't realize /how dangerous SNS is. /For them,/ SNS is just a tool of contact to someone /or to share photos. /On the SNS,/ anyone can make lies, /so some people might be tricked. /So,/ this is a point /that SNS have. /

In addition,/ it is disturbing /to do something./ SNS makes us addict /of using

smartphone. /So,/ in our free time,/ we use SNS a lot/ and we can't concentrate on /what we should do. /So,/ SNS cause bad effect for us./

Some people say /developing SNS /is good /because we can get the latest information. /However,/ I think/ it is too weak. /Sure,/ you can get the latest news all over the world, /but it might be fake news. /On the SNS,/ anyone will be able to write the any information./ So we shouldn't believe that kind of information. /

As I mentioned,/ the development of SNS cause more negative effect than positive effect /because young people can't control themselves/ and there are many dangerous on the SNS. /Then by using SNS, /we will become addiction of smartphone /and we will not able to do /what we should. /That's why/ I believe SNS has more negative points than positive points./

【PWD-E 2-2: SNS】

Some people argue /that the development of SNS has more negative effects in our lives than positive effects, /and I agree this opinion. /There are many accidents related to SNS./ On the SNS,/ anyone can tell a lie/ and misrepresentation of age. /In fact,/ there is an accident /that the old man told a lie /and killed the girl /who is 18 years old. /In addition,/ developing SNS causes young people/ be addict./ In the future of developed SNS, /many children use the smart phone, SNS /and can't study, /and scholarship of Japan will be decreased./ On the other hand, /there is positive effect that if SNS are developed, /people can make a lot of friends easily, /and can get the latest news soon. /But once upon a time, /people can make a lot of friends without SNS, /and there is many fake news on SNS. /I think /the development of science is so good thing,/ but there are a lot of terrible accidents and many fakes on SNS. /SNS is very useful,/ but because of it is too useful,/ people use it bad ways. /Development of SNS has not only good effects,/ there are many bad effects./

【PWD-E 3-1: Holidays】

I have two reasons./ I think that/ Japanese long holidays are short. /I couldn't anything to do./ So I hope long holidays./

The first reasons is that /japan holidays are short /so I couldn't anything to do. /In my school have study abroad program./ I go to Canada for one month. /If I am another country person /I can go to two months program or three month program. /If I go to three months program, /I absent my class and /I should pay school fees. /So I think that/ japan's holidays is short. /

The second reason is that /a lot of people like holidays. /For examples are Family go to park or attraction /and student study. /If Japan's person has short holiday /you will

something to do. /So a lot of Japanese's people need to long holidays. /If you have long holidays /you will go to long trip. /It is good that /more people doing long holidays will do/

Finally I think that /Short holidays can only be limited. /On the other hand,/ long holidays can anything to doing. /And you can find things to do, /I hope long holidays./

【PWD-E 3-2: Holidays】

I think that /I need long holidays same the foreign countries. /Bunkyo University long vacation is about 1 month and half a month./ I want to do something./ For example,/ study abroad, /study some test except for English and hobby. /If I go to study abroad one month, /there are only half a month left before the summer vacation ends. /So if I want to buy about hobby, /I went to study abroad /so I have no money./ But I left only half a month /so If I do the part time job,/ maybe I lack the money. /but if I have two months in summer vacation,/ I make a money and /I buy about hobby. /So I want to need long holidays same the foreign countries./

【PWD-E 4-1: SNS】

Today,/ the SNS has so improved, / and thanks to them,/ we can reach some information /which we want /to know more easily and quickly. /We cannot deny the fact/ that the SNS has made our life more convenience than before. /However,/ I agree /that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./

First of all,/ the most of all SNS can contact with other people from anywhere, /so we will use a language/ to communicate with them. /At that time,/ today's devices can predict /what we want to say, /and they show many words or phrase /which may be used. /This function is useful, /but it can cause to lack of writing skill. /In other words,/ some people who can read sentence /but cannot write correctly /will increase. /

Secondly,/ the one of main purpose of using the SNS is sharing their life events or some small precious matter. /to share their picture,/ even if they are not about one person, /can be dangerous. /So to speak,/ we can't control the information /which once has spread on the Internet. /We can't realize about a person /who see our information. /These situations may cause to some criminal, /and also we can be a victim of them. /In fact,/ in Japan,/ many high school girl students or junior high school one has been in trouble /through using the SNS./

Some people might say /that there is no relationship /with using the SNS and the number of incidents of bury. /So,/ we cannot say /that the SNS effect negatively against student. / However,/ actually it is true /because there was already some problem about

bury /before the SNS become popular,/ but it is also true /that the SNS has make the problem of bury more seriously and indirectly. /We cannot deny the fact /that today's social problem of bury is more serious than before, /and one of the reasons is the development of the SNS./

Although there are some benefits of the SNS, /and our life style has become interesting because of the SNS, /at the same time,/ in the education,/ there are so many students /who cannot express their mind or feeling with handwriting, /and the problem of bury has become seriously, /in addition,/ the SNS can leak our personal information more easily. /From these aspects,/ I agree with that/ the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./

【PWD-E 4-2: SNS】

Nowadays,/ smart phone become more popular for young generation, /and then user have increased year and year. /It makes so much good effects, /for example searching easily, /communicate easily on SNS and so on. /On the other hands,/ it causes also negative effects. /So,/ today I talk /about SNS is good or bad./

Recently,/some people argue/ that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects. /I agree with it /because I have 3 reasons against it./

At first,/ SNS makes our writing and spelling skill decline/ because I think/ that these skills improve /through writing with our hands, /but SNS can expect/ what we want to write and spell/ before we have done to write or spelling. /It robs our chances to hand writing. /Actually,/ lots of people's writing skill and spelling skill in Kanji is getting down recently /because they don't have many opportunities for hand writing /than before developing SNS. /So,/ this is my first view /which is a negative effect for us./

The second,/ we lose our individual information through SNS easily /because young people often share some pictures /with personal information like address./ And then,/ some people /who look it/ can steal their individual information /and cause incidents sometimes./ Nevertheless,/ there are lots of crimes like that, /lots of young people don't care about it seriously. /That is really terrible things. /That is my second reason /that I think /SNS makes negative effect for us./

At third one,/ the bullying which is cause on SNS /have increased exactly. /Before spreading SNS, /bullying happen directly, /so teacher can notice /and solve it easily. /However,/ the bullying on SNS is increasing recently. /If someone bully someone on SNS, /it is difficult /to find out for teacher, /and then it makes bullying more seriously. /Probably,/ some people argue /that if teacher or parents control their smart phone, /we

can prevent it, /but I don't think so /because some people have tried it already, /but bullying which on SNS did not decrease./ I think /this is the third reason./

In conclusion,/ exactly SNS has many good effects for us, /but there more negative effects for us. /In addition,/ SNS often makes us dangerous situation like bullying, crimes and skill down. /If we won't make more safe environment for using SNS,/ much more incidents might be caused than now, /so we have to consider about /how to use SNS collect /and how to prevent us from crimes /which caused by SNS /to save our information, skill and life./

【PWD-E 5-1: Holidays】

Japanese universities should increase more holidays. /There are two reasons. /Some people say /that long holidays is wasted time and meaningless./ So that so many people say/ it is better /to have a short vacation. /However,/ I can't agree with this opinion. /First of all,/ I think /that there are many university students /who want to write academic research papers firmly at university in Japan. /If we want /to write an academic research paper firmly, /we need lots of research time and preparation. /Furthermore,/ some of my friend want to go to graduate school/ after the graduate university/ and also want to get the master degrees and doctor degrees as well. /Academic research is a material /that becomes very important /when going to graduate school. /That's why /students should get longer holidays. /The second reasons are my dream. /I went to Canada /to study abroad last summer. /But I thought that was too short as a study abroad /and I wanted to go to study abroad again. /I've been studying English in private university /so I haven't enough money /to study abroad. /I'm currently planning /to get the scholarship. /There are have a some of exam. /If the period of holiday is long, /I can prepare for scholarship exam /as much as I can tackle until conviction. /I think that /the longer the period of holidays, /the more merit and the student's academic ability will rise. /In conclusion,/ Japanese students should get longer holidays./

【PWD-E 5-2: Holidays】

Today's thesis is /whether students should be gotten more longer holidays or not. / I completely agree with it. /I am going to state /why I am thinking like that from the second paragraph. /

The first point of view is "Importance of Time." /As we know, /Time is Money./ Time is precious and limited./ In the case of us university student,/ we undergraduates need a lot of time /due to doing homework /and studying something, /of course enjoying our campus life as well. /It goes without saying /that it is by far better /to have much longer

time /for doing them. /In my experience,/ I have been to Canada /for my studying abroad last summer vacation, /however,/ I stayed there only for a month /because of we had only one month and a half of a month as summer vacation. /I personally felt /that it was too short for me/ to learn something. /In other words,/ I needed more time/ to find something new discovery for me. /

Certainly,/ I am feeling afraid of /what we students would become a couch potato, /it means "lazy" /as we get much longer time. /Human is not strong. /When people face to comfortable circumstances for people,/ people would rely on its lenient circumstance unconsciously. /

【PWD-E 6-1: SNS】

According to Facebook on June 2017,/ there are about 2 billion Facebook users in the world./ I suppose /that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./

There are two reasons for supporting this./ First,/ people use much time for SNS instead of their life time. /For example,/ using SNS till the midnight,/ such people can't sleep well./ If they use SNS in the dark room,/ their sight will be worse and worse./ Furthermore,/ people don't do anything/ what they must do/ like homework or job./ In case studying,/ we lost writing skill./ I have Chinese character/ which I can read/ but can't write./ Next,/ the communication skill decrease./ We rely on SNS too much,/ we might be not able to take communication well with face to face./ We can't understand real mind on online message./ Even though person send message as good meaning,/ the other person receives as bad meaning./ They might break up./

Some people say/ SNS have more positive effects than negative effects/ because we can get lots of information easily through SNS./ I think so./ But there is wrong information, too./ Recently,/ people including me/ can't judge right or wrong./

To sum up,/ SNS steal our necessary time for sleeping, studying, taking communications./ Also,/ SNS destroy the relationship./ That's why/ I believe/ that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./

【PWD-E 6-2: SNS】

According to Ministry of Internal Affairs and Communications,/ SNS user rate is about 80percent./

I disagree with /some people argue /that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./

I have some opinion./
First,/ you can get information so easy in the word./
People of government is Obama and Trump from *Twitte*r./
And you can get fresh news on society in the world from news account./
Second,/ if you have the natural disaster,/ you can contact with your family./ The fact is /that *Facebook*' tool has a confirmation of safety./
Final,/ you can get easy to communication with people from other country at SNS./
For example,/ *Skype* can call on face to face./ As a result,/ you have environment of studying language./
A conclusion is/ SNS has some good point,/ so you depend on how you use it./

【PWD-E 7-1: SNS】

These days most people think/ that SNS can cause of serious problems or troubles,/ and also it is actually true,/ but I think/ that we can find out positive dimension more than negative one./ Because thanks to SNS,/ our life became richer more than 50 years ago./ The biggest SNS company Facebook is one of the most famous, biggest company all over the world./ What I want to say /is /SNS surely makes us richer./

For example,/ we can a lot of information on SNS with no cost./ We used to pay for mail magazine to get information,/ but nowadays it is not need./ We can know everything all over the world/ once opening SNS./ If you are in Japan or America or China or anything other country,/ you can get same information from anywhere./ Do you know/ how useful is this?/ How useful and helpful is it?/ Now world doesn't stop changing every minutes./ Something which was new yesterday/ is not new anymore today./ It happens all the time./ It means/ sometimes information is more important money./ Getting new information from all over the world/ is bigger thing/ than getting making some troubles./

I have one more specific example./ We can connect our friends/ who live in another country./ For me,/ I got a lot of friends over the word,/ when I went to Canada to study./ Many years ago they exchanged their message by letter./ It took about 1month,/ because ships send your letters from your country to another country./ How slow is it?/ Do you still remind/ what you wrote down your litter/ getting response from your friend/ who lives in overseas?/ But now 21century,/ we can keep in touch with our friends with SNS./ It is much more useful than letters./ It makes us get big relationship./ If you send a message to your friends overseas,/ getting response from him at least tomorrow./ It lets us keep having many friends./ How fantastic is this?/ Not only friend,/ you can also find out people to increase your knowledge./ For example,/ when I was learning English very hard,/ I found the person/ who wants to know/ how to use Japanese on the SNS./ In this

case,/ we can exchange our knowledge with no cost./ What we need/ is only computer and a cup of tea./ How cheap is this?/ It makes me better./ If we use SNS properly,/ we can even learn language from native speaker in your house with tea and no cost./

On the other hand,/ I know some people mention to/ SNS can cause big problems for youth and /also it is true./ The number of criminal because of SNS is increasing year and year./ But is it because of only SNS?/ What about their parents?/ I guess,/ youth just don't know/ how dangerous SNS is./ Then are not enough smart or craver to understand dangerous dimension of SNS./ In this case,/ if their parents teach youth /how dangerous,/ youth can know how to use SNS safely./ If teacher at school mention to some problems of SNS,/ youth can avoid problems./ What I want to say/ is youth has ability to use SNS safely, positively,/ but just don't know/ how dangerous it is./ So if adult care about that very carefully/ youth can get only positive effect from SNS,/

Finally,/ What I want to say/ is anything has positive dimension and negative one./ We can get problem with anything around us not only SNS./ I want you to stop/ focusing on only negative side./ I want to you focus on positive side too./ Then you would find positive side is bigger than negative side./ Please try to find positive dimension not only negative./

【PWD-E 7-2: SNS】

Recently there are some cases /that SNS cause,/ and that is one of the biggest problem./ On the other hand,/ SNS effect positive to make our life useful so much,/ so I think/ SNS has more positive effects than negative effects./

First of all,/ we can get enormous information through SNS,/ such as good restaurant or shop and news./ We used to get some information though TV, newspaper or radio before,/ then it shifts to SNS./ The difference between them is /how much we can get information for one thing/ and how easily we can get them./ We easily search something any time/ we want /and even other thing connected with the thing by SNS. /Moreover,/ there are several cases/that SNS affect/ solving missing person./

Secondly,/ SNS can have positive effects/ to keep in touch with friends from far away from us./ Actually I do it/ and SNS helps me./ I have a lot of abroad friends,/ and I'm used to chatting with them with SNS/ because it is the only way/ to contact them./ We can know their daily life through their posts/ even if we don't chat./ It is quite helpful to me./

However,/ some people think/ SNS have more negative effects than positive /because there are many troubles especially for young people./ But now we can set security for SNS/ to escape dangerous situation./ SNS sometimes can be not good for

that,/ but we can protect ourselves or children/ if we really care of /how to use SNS./

SNS is now necessary and helpful to us. /We need to know /how and what dangerous/ when we use SNS, /then we can enjoy them./ Finally,/ I think/ SNS have positive effects more than negative effects./

【PWD-E 9-1: Holidays】

Japanese students have usually a month for summer vacation./ In many countries students have much longer holidays than the ones/ students in Japan get./ I think/ Japanese students cant have enough time/ that they want to do something./ That time is important for students/ because they will find interesting things and good experiences for them/ and that things make them grow up./

If students have long holidays,/ they can try many things./ For example,/ first,/ they can go study abroad in other countries./ Its really good experience for them./ They will learn/ how to communicate/ and make good relationship with strangers./ Students don't have many opportunities those things in school./ Second,/ they try to join volunteer./ They usually do many things in long holidays/ such as doing many assignments and club activity./ Joining volunteer is good/ for have a contact with other community./ Meeting many kind of people/ is great opportunity for students./ Of course there are some problems/ to get long holidays for students./ I think/ many students don't do anything in long holidays./ It is useless in precious school time./ So teachers will lead effective using time./

Japanese students don't have enough time for themselves./ However,/ students have to have many kind of opportunities/ in addition to study subjects./ It is not just important about studying in school,/ there are also precious things out of school./

【PWD-E 9-2: Holidays】

I agree with/ that Japanese students should get longer holidays as well/ because the students can use holiday/ for things that they want to do/ such as study abroad or joining volunteer activities./

In my opinion,/ Japanese students don't take free time during original long holiday/ because they must do their homework/ or use the time for club activities./ Actually,/ when I was junior high and high school student,/ I couldn't take time for myself./ Also,/ if Japanese students can take longer vacation than now,/ they can use to go study abroad /or to join volunteer activities in other countries/ if they want./

People who have opposite opinion to me/ feel /that if students aren't interesting in study abroad/ or joining volunteer activities/ and students don't want to do anything,/

they may waste a long time./ But,/ I think/ all of students can spend a long time with their family/ to use long holiday./ Also,/ I think/ just spending with family/ is important for student/ because they can learn about importance of family./ So,/ I recommend/ that if the students aren't interesting in study abroad/ or joining volunteer activities/ or don't want to do anything,/ they should spend good time with their family./

In conclusion,/ I agree with/ that Japanese students should get longer holidays as well/ because they can use a long time/ for things that they want do/ and they can take a time for study abroad/ or participating volunteer activities./

【PWD-E 10-1: SNS】

I agree with the idea /that Some people argue /that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./ Do you agree or disagree?/ Use specific reasons and examples/ to support your response./
I have 3 reasons/ to support my opinion./

Firstly,/ people can connect other people connect easily./ Connecting people,/ they can get much information such as grate earth quake, movies, /and also they can advertise about school festival, restaurant, hotel, spots for tourism/ as SNS is spreadable./ Perhaps,/ it has also dangerous./

Second,/ people even the shy can write/ what they feel./ For example,/ you can find out person/ who said/ that his feeling is bad,/ and you can also encourage him./ It can reduce the case of suicide people./ However,/ people who write aggressive message,/ and attack someone,/ so before use SNS,/ teachers or experts should teach the way/ to use truly./

Finally,/ some people can learn something like politics, TOEIC, Chinese language using SNS./ There are many experts and bot on twitter./ For example,/ there are Japanese president on twitter,/ and people can learn about conference./

In conclusion,/ developing SNS has more benefit for getting information, encouraging, learning./

【PWD-E 10-2: SNS】

I think/ development of SNS has more positive effects./ I think like this from connection, information and personality./

First of all,/ using SNS make us our connection easily./ For example,/ LINE, Twitter or Facebook are good ones./ Especially Facebook is the best one./ Using smart phones ore SNS/ doesn't meet each other so,/ it might easier to communicate./ Easy way to express/ is people get more open minded./ People can post or publish/ whatever they

want easily./

Secondly,/ SNS has bunch of information already uncountable number./ So when you search something/ you want to know,/ you can know it very easily/ such as how to read Japanese characters, tourism spot, restaurant, hotel, even other languages./ Also,/ some smart phones have typing with writing,/ so if you use it for searching for Japanese characters,/ it'll be easier and shortcut /than using heavy book dictionary./

Lastly,/ about personality./ Recently,/ SNS is really spreadable./ So you have to be careful/ or need one's responsibility./ As I said at second part,/ there are bunch of information./ Perhaps,/ because of it's also spreadable./ Many people can see your information/ once you publish something in SNS./ You might be become target by stoker of something./

From these reasons,/ I think/ development of SNS has more positive effects./ Perhaps,/ you really have to be careful/ and more responsible to use SNS./

【PWD-E 11-1: SNS】

Recently,/ almost younger people use SNS./ I think/ that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./ There are two reasons for this./

First,/ they don't have enough times to study./ According to Digital Arts Company's survey in 2017,/ the number of high school students/ who have phones is about 99%./ The average time of high school students use smartphones/ is over 6 hours./ They spend much time to use SNS,/ so they don't study much/ excluding at school./ As a result,/ the opportunity for communication with someone is decreasing/ because they can talk each other/ using SNS./

Second,/ the personal information flows out easily./ They can use SNS easily,/ but flowing the personal information is also easy./ SNS like Twitter or Facebook is the things/ that people can tweet everything/ they know./ The words which they tweet/ will be slander problems./ Furthermore,/ someone will feel depression, bullying, loneliness, and they sometimes kill themselves./ SNS is very horrible tools for people./

However,/ some people think/ that they research easily/ when they have some problems./ I think/ it is the good thing/ to research easily/ wherever I am./ But,/ all results which the sites such as Yahoo or Google are not true things./ People who use SNS/ should train themselves/ to find out the true information in their eyes./ Also,/ they should use SNS/ without getting tricked the word "Convenient."/

For these reasons,/ I think the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./ Not having studying time,/ the slander problem,/ and

flowing out their personal information are one of the more important problems in Japan./ In the future,/ these problems will increase than now,/ so people who use SNS now,/ or want to use SNS in the future/ should think these effects and/ if they use,/ be careful about these things./

【PWD-E 11-2: SNS】

I agree with the idea/ that the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive results./ I'll give negative points and positive points in the below./

To begin with,/ I'll give two negative points./ One of the negative aspects is/ a decrease of studying time./ Recently,/ considering the time of students are decreasing,/ and this condition is a problem in Japan./ According to research by Ministry of Internal Affairs and Communications in 2017,/ high school students spend time /for using SNS more than half of the day./ On the other hand,/ studying time is only one hour or no studying in the day./ From this research,/ we can see the lousy damage for students./

Also,/ using SNS sometimes hurt other people/ and kill other people./ For example, /a person who uses Twitter/ write lousy rumor of the person's friend on Twitter./ Then,/ the friend looks at that tweet unexpectedly,/ and after that,/ the friend becomes ill/ because of that tweet/ and kill himself/. This kind of thing can happen./

Next,/ I'll give two positive points./ One of them is/ a connection with other county's people easily./ We can keep in touch with other country's people/ by using SNS./

The other is/ researching become easily./ Thanks to SNS,/ we can study everything/ and can find the answer quickly./

As compared these negative points and positive points,/ negative aspects give lousy damage for people than positive points give./

So,/ in conclusion,/ I think/ SNS has worse and severe effects for people than the sound effects./

【PWD-TL 1-1: Holidays】

I agree that/ in many countries students have much longer holidays than /the ones students in Japan get. /There are two reasons, /

First,/ they can study the qualifying examination./ If purposes are clear, /they can make the plan well./ For example,/ September is one of the month with many examinees of the TOEIC in the year. /And sometimes examinations do not hold in winter./

Second,/ they going to study language increase. /In the Southeastern Asian language school,/ there is a curriculum of one of two months. /in the interval,/ they can study language study well. /

So,/ I agree /that in many countries students have much longer holidays than the ones students in Japan get. /

【PWD-TL 1-2: Holidays】

I think / should no longer holidays. / Because, if students get longer holidays, /they learn about subjects. /So people have to do homework. /And people has longer vacation /after take care of life style habit./ People spend longer holidays/; they became to be agitated./
And people cannot communicate to friends in holidays. /People share to do with friend in school/ after make the good communication./
Students effetely study in school /than students learn to something. /And people has many hobbies/ to need holidays. /But it has not many hobbies, /do homework or preparation and review. /
And japan has many problems./ Japanese debts are high cost /and amount of pension is decrease. /
So students study many subjects /after you can get into good company. /

【PWD-TL 2-1: Holidays】

In many countries students have much longer holidays /than the ones students in Japan get. /I think /Japanese students should get longer holidays./ There are two reasons for that./

First,/ students are able to do anything /what they want to do/ if students get longer holidays. /For example,/ if students want to go to many countries, /they can do that /because they have a lot of time to do /what they want to do. /It is not only fun, /but also it might be good experience for university students. /In university life,/ students always worry about their future /and thinking of job,/so touching and getting to know about new culture or countries /give university students some hint for future. /In addition, /if they have long vacation, /of course they can study abroad./It also causes good experience to

students. /In my experience,/ I have experienced studying abroad for one month./My listening skill was improved well,/ but if I could stay there more longer, / my English skills will more improve. /This is one of reasons /that students should get longer holidays./

Secondly,/ if students get longer holidays, /they can get more money with part-time job./Some students pay their tuition by themselves,/so the money will not only consume/ for playing or hanging out,/ some students pay their tuition /to earn a lot of money while vacation./Then,/ they don't need to worry about tuition /and concentrate on their study. /It is second reason /that students need to get longer vacation./

In other hand,/ some people say/ if the holiday is for two or three month, /students will don't study/ and scholar will get worse./However,/ it is easy to solve./ If professor give a lot of homework to students, /students have to study /if they don't want to study./

In short,/ if students get longer holidays, /they can travel many countries /and study abroad for long span./ In addition,/ they earn the money/ to pay their tuition. /Then they will be able to concentrate on their study. /That's is why/ I think/ students should get longer holidays like other countries./

【PWD-TL 2-2: Holidays】

In many countries students have much longer holidays /than the ones students in Japan get./ Some people say /Japanese students should get longer holidays as well. /I agree this opinion. /Because when we get longer holidays,/ we can do/ what we want to,/like a study abroad,/ travel/ and working at part time job./Students in Japan have a lot of things/ to have to. /But I think/ they should do /what they want to do./ In the future,/ we can't do/ what we want to, /because of own work, family, and more. /In addition,/ there are some students /who work at part time job/ for paying cost of /going to school./ If students get longer holidays, /they can work at part time job,/ and schools in Japan can reduce cost of classes. /Therefore,/ more people will go to university. /Surely,/ many students don't study hard in holidays,/ but I think/ all university students should study/ they are interested in. /University is the place to do that, /so that is no problem. /High school is compulsory education./ High school students must study hard in a class,/ but university is not./ Some students study /and work at part time job, /the other hand,/ some students make a lot of memories with their friends, family, girlfriend. /That's the rule of student, /I think that./

【PWD-TL 3-1: SNS】

I choose to disagree. /Because both effects are good or bad. /But I think/ that /the positive impact is many, /so I choose that disagree. /There are three reasons./

The first reason is that /SNS get the many information. /SNS is twitter, Line or internet. /Many people often use a smartphone, /so they watch smartphone many of time./

Internet will get information. /But you should be careful falsity of the report./Reentry site of J league announced that /J league team get the big star. /But this big star didn't decide contract. /So he was angry. / When someone announced lie information, /some people will sadly./

The second reason that /Line is the excellent effect. /A lot of people use the smartphone. /They often use Line in Japan. /I contact friend soon./ It is useful. /But my partner said/ "Line is the good effect, /but the smartphone has mail appreciation. /XXXXX thinks that/ line doesn't need."/ This opinion is good. /But many people use the line./ If you sent an e-mail, /I would not notice. /If you get a communication tool,/ I recommended using Line./

The third effect is that /you connect in the word by using Facebook. /The line is only Japan./ China or America don't use this tool. /Then Facebook is useful./ Many people use Facebook. /So When You push the Friend butane, /you will increase to a friend. /Sure, SNS is a danger. /If you put on the picture, /this picture remains to SNS forever./

Finally,/ according to usage Become better or worse. /So SNS is useful,/but you don't forget that /SNS is a danger. /I think that/ SNS is the good effect in my life./ So I choose Disagree. /

注）筆者の特定につながる情報（相手の名前）のみ改変（XXXXX）で表示。

【PWD-TL 3-2: SNS】

Some people argue that/ the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects. /I think that /SNS is easy to convenient communication for my friend. /Usually I use LINE, /it application is a communication tool. /Certainly, many of smart phone in the mail. /So LINE is not need but/ LINE is easy to talk my friends unlike Mail. /And I use Twitter, /this tool makes same hobby friends. /If I post about a hobbies photo, /some people sympathize for my hobbies photo. /And people connecting in the world. /My hobby is a grow the reptiles/ but there is no such person around me. /However,/ I know /there are a lot of people like the reptiles /so if I don't use the twitter, /I don't see the same hobbies people./ If people use the SNS /we get the many information /but twitter post the false rumor, /so we are careful it. /Recently, when Kansai happened the earthquake, /on the twitter posted /animal escape from the zoo. /It was taking up the news. /So it cannot true/, but there is exception.

【PWD-TL 4-1: Holidays】

I don't think /Japanese students should get longer holidays./

Today,/ other countries students get the holiday /which is longer than Japanese.

/Then such students can take a trip /or study another subject /which they don't learn at their university. /Such long vacation is used efficiently./

However,/ in Japan,/ most of university have two vacations. /One is on summer,/ the other is on winter. /So,/ Japanese students can get the holiday for four months in total. /I think /that is already enough. /The things which most students do during a vacation /is limited. /For example,/ taking a trip,/ meeting with their friend,/work for part-time job and so on./ They seem /that they tend to waste their time. /Few students can use the vacation more wisely, and efficiently./ Even if a university expand the vacation longer than before, /students would be dull. /Such vacation makes students lazier./

In addition,/ in Japan,/ usual university students don't have much money. /So if they get a big vacation /which last more than three months, /they would think /it is a good opportunity /to earn the money,/ or before the vacation come, /they would work harder /and make much money /so that they could enjoy the big vacation./ It leads to increase students /who work harder /than study /to make money./Even nowadays,/ such tendency is strong. /Many students tend to escape their class, /and tend to take a class /which looks easier comparably. /

University students should study /and learn a various thing as much as possible. /In Japan,/ such students are decreasing./To expand a vacation /which each university has /is doesn't work effectively. /So I don't think /Japanese students should get longer holidays. /

【PWD-TL 4-2: Holidays】

First of all,/ today's topic was/ "In many countries students have much longer holidays /than the ones students in Japan get. /Do you think /Japanese students should get longer holidays as well?"/ We disagree this theme/ because we have 2 reasons against it./

First,/ other countries lessons are stricter than Japanese one. /When I visited NZ's university, /there were poster /which warn to absent class, /and then the content was so much strict for absent class. /I've never seen such a strict warning for absent in Japan. /Through it,/ I think /other country's class stricter Japan. /It means,/ other country's student is much harder school life than us, /so they have longer vacation than us. /Taking long vacation although we don't have strict rules for lesson /is not good./That is,/ this is my first reason /to oppose the topic./

Second,/ second one is little bit similar with first one. /Japanese student spend vacation for hangout mostly, /and then little bit spend it for studying. /It means /they waste time. /In fact,/ vacation is good opportunity /for studying new things /which can't study in University/and doing volunteer etc./ I don't want to say /hangout is bad thing, /but

student should use it beneficially. /If I argue from that point of view, /other country students have stronger will for learning,/ on the other hands,/ Japanese students weaker than others /regard of will for learning. /That is, /if we extend vacation from 2 months to 3 months,/ it will make Japanese students lazier. /In fact,/ around me,/ lots of students are spending time for hangout, /not for learning /because we almost don't have class /because we are 4th grade students. /That is, /if vacation was expanded to longer, /we wouldn't use it beneficially./ This is 2nd reason./

In conclusion,/ the why other country' students have longer vacation than us /is clear. /Our will for learning/ and rules are completely different between they and us, /so they have a right /for taking long vacation /because they overcome strict rules /and study harder. /On the other hands,/ we have not much strict rules /and study harder less than others. /It means, /we don't have the right for getting long vacation./That is, /currently vacation is enough for us./Even if we have longer vacation,/ we can't use it beneficially and effectively./

【PWD-TL 5-1: SNS】

I disagree this topic /because some SNS application is very important things for us. /Especially LINE./ I have never researched about /how many people has the smartphone/ but my image,/ 90% have the smartphone or more over. /Of course,/ there are many negative things /about using the SNS /for example Bullying on SNS is a problem/and then because of that Some students commit suicide. /So that,/ some people argue that /it is not good /to use SNS for that reason. /However,/ we have more advantage./Now we are exchanging all of important contacts on the LINE. / Even our part time job place or connect with teacher in my university. /And I actually do contact with my host family and friends/ who have been connecting on the Facebook /when I went abroad /because I belong to the department of English./So it's very inconvenient /if we run out of such SNS applications /and there are many advantage points than negative points./

【PWD-TL 5-2: SNS】

I have a negative stance with this thesis. /I have some reasons why/ I am thinking like this. /Firstly,/ SNS is extremely useful for all people's life in several things./In my case,/ we usually use social network services like Line, Twitter, Instagram /in order to communicate with someone, /or to post my usual life on it, /and share it with my friends./ By this,/ the relationship between friends is getting more strong and tight. /And also,/ the most useful point is that /people are able to contact with someone /not only a friend living in same country/ but also a friend living far from a place/ where I am living anytime, any

day, and anywhere. /In particular,/ we wouldn't be able to meet with a friend /who living in a far place with ease./ When meeting with such a friend directly, /needless to say, /it costs money/ to get to the place, /and it also takes a time at least. /

Let's focus on the different viewpoint./ When we students want to search something, /and obtain information about something/ that we want to know, /utilizing SNS/ can be the greatest source/ to do that./ On SNS such as Twitter, plenty of information, breaking news are continuously being transmitted from many people and medias on it,/ and we are able to get them very easily, and quickly /by only the action, /scrolling the display. /Recently,/ some TV medias use SNS/ and try to gather many opinions from viewers. /And at the same time,/ TV viewers can join to a TV program on SNS as well./ Thus,/ it is possible/ to utilize SNS in several purposes. /There are some disadvantages,/ concerns that provoked by SNS indeed,/ but from these advantages/ that I picked up,/ I assume /that SNS brings a good effect to our life. /

【PWD-TL 6-1: Holidays】

In Japan,/ most of university has about two months' holiday in summer and spring./ But some country like Canada has longer holiday than Japan. / I disagree /that Japanese students should get longer holidays as well./

I have two reason for supporting this agenda./ First,/ our tuition./ Especially Japan university tuition is expensive./ In XXXXX university students case,/ they pay about a million per year./ If our holiday become longer,/ it could be wasteful of money./ I want to study instead of holiday./ Next,/ free time./ Two month is too long for me./ I don't have anything to kill time./ We don't have class,/ so we don't need to go to the university. /

Someone say/ that you should do part time job./ But students pay attention for maximum time./ Not only student but also everyone,/ we have the lobar standards act./ It says we don't have to work over appointed time./

To sum up,/ it is vain of money and time to have long holiday./ I suppose/ that using time for study is more important than having bored time./

注）筆者の特定につながる情報（大学名）のみ改変（XXXXX）で表示。

【PWD-TL 6-2: Holidays】

Today,/ Students have summer vacation for two months in Japanese./
On the other hand,/ Students have summer vacation for three months the UK, AUS, USA, and Canada./

I disagree /Japanese students should get longer holidays./

Because of waste tuition,/ I think so expensively it in Japan. /
We don't go to college for a long time /and don't to use for tuition./ Even if I do the part-time job,/ we are limited the time of work by Japan of government./ So I can't work much time than now./ As a result,/ Students may live in interest for summer vacation/ and willingness of going to college will increase./
In conclusion,/ Tuition is so expensive in Japan,/ and we limit the time of a part-time job./ So I disagree/ Japanese students should get longer holidays./

【PWD-TL 7-1: Holidays】

In japan,/ university students have almost 2month vacation in summer and spring/ but other countries over the world,/ they have much longer like 3month or 4month./ Some people say/ that we have to have much longer vacation like south America,/ but I don't agree with these opinions./ I have some reasons to disagree./

First one is /that 2month is enough for us./ Because I have had summer vacation and spring vacation for 2month each vacation /and I feel it is just enough./ I haven't complained about length of vacation./ Think about/ what we can do for 2month./ We can go travel over sea,/ study abroad,/ force on working as a part time job something like that./ If we have longer vacation,/ It means/ we lose chance to go to university./ Then we don't get skills knowledge lesson from professor./ What a waste of time./ We pay a lot for university every year/ to take really nice lesson of professor's./ nevertheless,/ how we want to lose this chance?/

Second reason is/ that academic level is going down year by year./ Many years ago Japanese were the smartest among Asia./ But now it changes./ We are not top of Asia anymore./ In this case,/ how can we need more vacation?/ We already have 2month vacation./ Do you want to take more?/ We are going down year and year. How do you ignore this fact?/ We don't have much margin,/ we should not be optimistic./ We have to face with that seriously./

I think/ people who disagree with me/ would say/ that you can work and get a lot of money through part time job./ Actually it is true./ I agree with this,/ but what is our priority during students?/ Which is more important/ to study or to get money?/ After graduation,/ we must work a lot /until we die /even if we don't want./ Despite why we have to work during student? /While we go to university,/ the first priority is not working./ It is studying./ If we have a time to work,/ get money,/ we should have better go to university to know many things/ what we haven't known yet./ It is more precious experience than anything./

Finally,/ what I want to say/ is/ that we have to think about /what first priority is in university./ Think about/ why we go to university,/ the reason to go to university. / The people who want to take longer vacation/ or work more/ should stop going university./ I think/ the people who go to university /should think /what the first priority is for them./

【PWD-TL 7-2: Holidays】

Japanese university student has a shorter vacation than many countries like America. /Some people say/ that we should get longer vacation following some countries/ have more academic skill than Japan./ But does it really affect us?/

There are two reasons /that I disagree./ Here,/ I compare with U.S. as the representative country,/ because they have higher academic level/ even if they have longer vacation./ First reason is deference/ of how to spend a vacation and school life between Japanese and U.S./ American university is famous for strict/ to pass exam and graduate,/ so students have to study quite hard./ Then they spend much time for their skill up in vacation./ There are many ways to get better skill in vacation for them,/ such as internship, research, and having a class./ On the other hand,/ commonly Japanese students are likely to spend a time for part time job /or play with friends./ We have image of vacation for rest,/ not study. / Of course,/ it really depends on person,/ some people do something to skill up./ However,/ we don't have much strict exam and enough homework from university,/ so we can be lazy easily/ compared to American student./

The second reason is that/ the range of vacation is still enough now./ I haven't thought/ that it is short./ I like to travel abroad in long vacation,/ so I have been to many countries as a travel or volunteer/ and I get special experiences though those activities./ Actually it leads to my decision/ that what I want to do in my future/ and how I want to be,/ then I could keep motivates for study./ Though my experience,/ I think it is enough./

Some people argue/ that we can have a good vacation for study like American/ and we can make academic level up/ if we have long vacation./ But actually range of vacation is not really related with academic level./ I think/ it depends on the national trend and national characteristic/ causing social system./

Finally we should not get longer holidays./

【PWD-TL 9-1: SNS】

Some people say/ the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./ I agree/ with SNS has some negative effects./ However,/ SNS has huge positive effects too,/ so I think/ the development of SNS has more positive effects on our lives than the negative effects./

we can get many kind of things easily/ to use SNS./ Especially,/ we can know information, opinions and thinking of people/ who live all over the world./ We try to make use of lot of information /to develop our live./ And we can communicate with people/ living all over the world./ It effects very much for today's society./ It is important for our lives/ to connect people and countries nowadays. /Probably,/ Japan cannot survive/ without connecting other countries./ Of cause SNS has some negative effects for us./ For example,/ there are some fake news in the sns./ We have to find out the truth by ourselves./ In addition,/ people spend too much time for sns./ Parents have to teach/ how to use sns to their child in particular./ I think/ child get easily bad effect from sns./ And also sometime child becomes involved in an incident./

Sns is an indispensable tool for people now./ However,/ we need to know/ there are some negative side on sns./ if we try to use sns rightly,/ we get good life./

【PWD-TL 9-2: SNS】

I agree with/ the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects/ because number of incidents by SNS is increasing./

Nowadays,/ many teenagers and children can use SNS easily by the Development of SNS./ On the other hand,/ according to National Police Agency in Japan,/ Number of Victim under 18 years old to use SNS/ is increasing for 5 years./ Also,/ National Police Agency said/ 1813 was victim of SNS user under 18 years old/ and this number was the highest number for 5 years./

The reason why teenagers and children become victim/ is child pornography./ Some ridiculous adult people use SNS/ to want to connect with teenagers or children/ because they know about increasing of number of young user./ And also,/ Most of SNS site or tool can be used by all of age/ because SNS is rapidly developing now./

Actually,/ SNS causes good effects in our life/ such as getting information faster/ or taking communication with many people./ But,/ if user don't know/ how to use SNS correctly,/ all of positive effects change negative effects./ And I also think/ people who don't know/ how to use SNS correctly/ is increasing/ because nobody teaches the way/ to use SNS./

In conclusion,/ I agree /with the development of SNS has more negative effects on our lives than the positive effects./ The reason is increasing of victim under 18 years old/ by lack of knowledge /about how to use SNS correctly./

【PWD-TL 10-1: Holidays】

I agree with the idea/ that Japanese students should get longer holidays as well./ I have

some reasons/ to support my opinion./
Firstly,/ On the long vacation,/ you can go abroad to study/ if you liked to study in other than your school./ You will be able to use skills of any languages/ that you studied/ before you go overseas,/ so giving students long vacation/ is providing amazing opportunity/ to practice/ using any languages./ Additionally,/ you can learn about not only language but also of field of study abroad destinations like geography, economy, history or so./
Secondly,/ you can get time to work a part time job./ On the long vacation,/ you don't care about a class schedule,/ and you can use much time to work./ However,/ many people got night and days all mixed up,/ so you have to care about your lifestyle./
Finally,/ if you don't have car license,/ you can use time to get car license./ After graduating,/ many people will need car license/ because of job hunting./ Using long vacation,/ and get car license,/ you don't have to care about car license/ when you graduate./
Therefore,/ Japanese student should spend great time/ using long vacation/ because you can do/ whatever you want by your self./ It's up to you/ to be able to have meaningful time./

【PWD-TL 10-2: Holidays】

This time I talked about /should Japanese students have much longer holidays. /I think /Japanese students should have longer holidays /because of they can do /whatever they want/ and might be able to change their personality./

In my opinion,/ holiday is the time/ to do or try many things for/ you can't do during your school life./ We the students taken most of the time to students especially under the university./ Here are the examples/ what you can do during long vacation/ such as lose yourself to hobbies,/ trip,/ study abroad, / make many moneys by part time job,/ go back to your home town/ those of you are stay alone for something,/ get car license/ and get many qualifications./

However,/ it might be a lot for adults /that they have mind of /their children won't study/ so they have to tell them to study./ Perhaps,/ that's not needed./ Because they can learn more important thing during long vacation./ If they go to the trip/ where they go for the first time,/ they use guide book or map apps inside their smartphone./ Even if they can't understand,/ they'll ask the people at the place/ and they learn/ and personality rise up/ such as become more active./ This can be say/ for going study abroad too,/ because if you study abroad/ and jump into the foreign country,/ it's the place that you don't know at all/ and there's no friend around you./ Then you'll ask to the people at their automatically./ Why the people take actions like this/ is because/ it's the thing that they

really want to do./ There are some people might study for their qualification/ to make their future well too./

One more thing that they should have longer vacation/ is that /they need time to relax a lot./ Many people have stress for their life/ of course the writer has stress too./ To release or forget about it,/ they must do something/ what they like/. One of the way for it is lose yourself to your hobbies,/ or go back to your home town./ If you are staying alone for some reason,/ you have to make time/ to see your family sometime./ It might be okay by using cellphone/ and call to hear their voice,/ but see them/ is much better to release you from the stress./ Your family welcome you/ and you can feel very comfortable./ If you have pets such as dogs or cats or others,/ that's the one way to relax too./ Making the time with your family again make your mental health well./

These are the reasons that I agree with/ let Japanese students have longer vacations./

【PWD-TL 11-1: Holidays】

In many countries,/ there are longer holidays for students./ Some of the Japanese schools get longer holidays,/ but not all Japanese schools./ I think/ Japan should get longer holidays/ as well as many other countries./ There are two reasons for this./

First,/ they can spend the time/ to do other things/ which they can't every day./ Students have many homework from schools every day./ They have to do these things as the priority./ However,/ if they get longer holidays,/ they can study other things such as licensing examinations and other languages./ I think/ that these are good opportunities./

Second,/ they can get the opportunity/ to go to other places. / It is difficult for them to travel to other areas/ if they have shorter holidays./ I think/ they want to trip somewhere with their friends,/ but they don't much time to go somewhere/ because they have many things to do./ If they have longer holidays,/ they can be interested in going somewhere./ Also,/ they can spend enjoyable and good holidays./

Some people think/ that if they get longer holidays,/ they don't want to get motivated in studying/ and going to school./ Longer holidays they have,/ lazier they feel./ However,/ I think/ they should have modulations between holidays and go to school./ Also,/ they should think about their sleeping times/ as well as how to use longer holidays./ If they sleep much time more than their usually time/ to get up during longer holidays,/ they feel lazy./

For these reasons,/ I think Japan should get longer holidays/ as well as other countries./ They want to relax for longer holidays,/ but it is important/ to spend much time/ to use validly./ They think/ about spending good holidays,/ and it is important for

them not to make wasted times./

【PWD-TL 11-2: Holidays】

From the topic,/ I think/ Japanese students should get longer holidays/ as well as students in other countries/ who get longer holidays/ than students in Japan get,/ and I have two reasons /to support my opinion./

To begin with,/ students can have many experiences./ For example,/ students can get more many opportunities/ to meet people at the first time/ and they can know by themselves well/ what they didn't know/ by meeting people./ Also,/ students can think their future more deeply/ like by taking part in many kinds of internship./

Secondly,/ students can get much money./ If students have longer holiday,/ they can get times to work much longer/ and can earn much money./ Money that they earn/ use many kinds things such as travel,/ buying texts and books./ It is useful for students' future to get money./

Some people think/ that if students get longer holiday,/ they would be lazy/ and lose passion for study. /

However,/ there are good things for students and their future/ to get longer holiday/ because they can think more deeply about themselves and their future./ So, I think/ Japanese students should get longer holidays for their future./